

寝屋川市

寝屋東遺跡、太秦遺跡・太秦古墳群
大尾遺跡、讃良郡条里遺跡、砂遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

第二京阪道路の建設にともなう調査に本財団が着手してから、早くも10年以上がたちます。北河内を東西に横断する長いトレンチをあけ、地下に眠っていた先人の足跡を掘り起こしてきたこととなります。かつての河内の湖岸、沖積低地、扇状地、段丘上、丘陵上と、人々の生活は場所に応じ、時代に応じて見事な適応を示してくれています。その調査成果は、これまでの多くの報告書に記述されています。北河内の郷土史を塗りかえる豊富な内容があり、ひいては日本の原始・古代史に見直しをせまる内容にもなっています。

今回の報告書は、寝屋川市内の南東部で行ってきた5つの遺跡の調査記録です。調査のたびに新たな発見があります。多くの方に利用していただきたいと願っています。

調査にあたっては、多くの方々や機関から惜しみない協力を得ることができました。国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社関西支社、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会はじめ地元の多くの皆さんに心から感謝をいたします。

平成20年 3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正 好

例 言

1. 本書は第二京阪道路（大阪北道路）予定地のうち、大阪府寝屋川市寝屋地内に所在する寝屋東遺跡、同市太秦高塚町（旧：国守・打上町）地内に所在する太秦遺跡・太秦古墳群、同市高宮あさひ丘（旧：国守町）地内に所在する大尾遺跡、寝屋川市高宮地内に所在する讃良郡条里遺跡、四條畷市砂地内に所在する砂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回報告する発掘調査及びそれに伴う整理事業は全遺跡ともに、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所から委託を受け、西日本高速道路株式会社（旧：日本道路公団）関西支社枚方工事事務所の協力と、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 調査は、平成17年度～19年度に財団法人大阪府文化財センター京阪調査事務所調査第一係が、平成19年4月から組織改変により調査第四係（寝屋川分室）が実施した。

調査名称、受託契約名、受託契約期間、担当者は以下のとおりである。

【平成17年度】

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所所長 山本 彰、主幹 寺川史郎、主査 上野貞子、調査第一係長 宮野 淳一、主査 櫻井久之、主査 大樂康宏、主任技師 市本芳三、技師 井上智博

寝屋東遺跡05－1

受託契約名 : 第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡他遺物整理

受託契約期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日

調査担当者 : 京阪調査事務所調査第一係 主 査 櫻井久之

太秦遺跡・太秦古墳群05－1

受託契約名 : 同 上

受託契約期間：同 上

調査担当者 : 京阪調査事務所調査第一係 主任技師 市本芳三

太秦遺跡・太秦古墳群05－3

受託契約名 : 同 上

受託契約期間：同 上

調査担当者 : 京阪調査事務所調査第一係 主 査 大樂康宏

大尾遺跡05－1

受託契約名 : 同 上

受託契約期間：同 上

調査担当者 : 京阪調査事務所調査第一係 技 師 井上智博

【平成18年度】

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所所長 山本 彰、主査 上野貞子、調査第一係長 藤永正明 主査 大樂康宏、技師 佐伯博光、井上智博、専門調査員 山根航、六辻彩香、和田大作

太秦遺跡・太秦古墳群06-1

受託契約名 : 第二京阪道路(大阪北道路)太秦遺跡他遺物整理

受託契約期間: 平成18年4月1日～平成19年3月31日

調査担当者 : 京阪調査事務所調査第一係 主査 大樂康宏
専門調査員 六辻彩香

太秦遺跡・太秦古墳群06-2

受託契約名 : 同 上

受託契約期間: 同 上

調査担当者 : 京阪調査事務所調査第一係 主査 大樂康宏
専門調査員 山根 航

太秦遺跡・太秦古墳群06-3-1

受託契約名 : 同 上

受託契約期間: 同 上

調査担当者 : 京阪調査事務所調査第一係 係長 藤永正明

讃良郡条里遺跡06-1-1

受託契約名 : 同 上

受託契約期間: 同 上

調査担当者 : 京阪調査事務所調査第一係 技師 井上智博
専門調査員 和田大作

砂遺跡06-1

受託契約名 : 同 上

受託契約期間: 同 上

調査担当者 : 京阪調査事務所調査第一係 技師 佐伯博光
専門調査員 六辻彩香

【平成19年度】

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所所長 山本 彰、主査 上野貞子、調査第四係長 藤永正明、技師 井上智博、専門調査員 山根航、六辻彩香

太秦遺跡・太秦古墳群06-3-2

受託契約名 : 第二京阪道路(大阪北道路)讃良郡条里遺跡他遺物整理(その2)

受託契約期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

調査担当者：京阪調査事務所調査第四係 係長 藤永正明

太秦遺跡・太秦古墳群07-1

受託契約名：同 上

受託契約期間：同 上

調査担当者：京阪調査事務所調査第四係 係長 藤永正明

4. 編集は藤永・六辻が行った。

5. 本書の執筆は主に各調査の担当者が行った。執筆分担は以下のとおりである。

寝屋東遺跡05-1 (櫻井) 太秦遺跡・太秦古墳群05-1 (市本)

太秦遺跡・太秦古墳群05-3 (大楽・藤永) 太秦遺跡・太秦古墳群06-1 (藤永)

太秦遺跡・太秦古墳群06-2 (山根) 太秦遺跡・太秦古墳群06-3 (藤永)

太秦遺跡・太秦古墳群07-1 (藤永) 大尾遺跡05-1 (井上)

讃良郡条里遺跡06-1 (井上) 砂遺跡06-1 (佐伯)

6. 本書では、太秦遺跡・太秦古墳群出土須恵器の蛍光X線分析を株式会社パレオ・ラボに、讃良郡条里遺跡06-1-1の花粉・樹種同定・大型植物遺体同定分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果を第4章第6節および第6章に掲載した。

7. 現地調査、報告書作成にあたり次の緒機関、諸氏の指導と協力を得た。記して謝意を示す。

国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社枚方工事事務所、寝屋川市、四條畷市、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、四條畷市教育委員会、地元各自治会の方々

8. 本調査に係わる出土遺物及び記録類は、当センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図の基準高は東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。
2. 遺構平面図の座標数値は世界測地系（測地成果2000）の座標系第Ⅳ系で表記している。
3. 平面図で示す方位はすべて座標北を示す。
4. 現地調査、整理作業、記録方法は財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年8月）に準拠して行った。
5. 土色の表記は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（第25版2003年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
6. 遺構番号は種類に関わらず検出順に付与し「番号－遺構種類」の記載方法をとる。
例：「1 溝」、「2 土坑」、「3 ピット」
なお、住居跡などの複数遺構の集合体は遺構種類ごと別途に遺構番号を設定し「遺構種類－番号」と記載する。
例：「竪穴住居 1」、「掘立柱建物 1」
7. 遺物実測図の縮尺は土器・土製品が3分の1、石器が3分の2を基本とするが、遺物に即して異なる縮尺を用いており、必ずしもその限りではない。各々の縮尺は図ごとにスケールを明示しているのでそちらを参照されたい。
8. 本書の記述にあたっては、執筆担当者間での文章表現や用語の統一はとくに図っていない。

第1章 調査の経緯と方法

大阪府門真市内の大阪中央環状線（近畿自動車道）から京都府久御山町にいたる国道1号バイパス（第二京阪道路 延長28.3km）の建設が1992年（平成4年）に事業許可され、大阪府域の大阪北道路（延長17.6km 門真市、四條畷市、寝屋川市、交野市、枚方市）について国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所と大阪府教育委員会との間で埋蔵文化財の保存・事前調査に関する協議が行われ、道路予定地での発掘調査を、財団法人大阪府文化財調査研究センター（2002年4月から財団法人大阪府文化財センター）が担当することとなった。発掘調査は、1996年（平成8年）の門真市三ツ島地区での調査を嚆矢として現在も続いている。

本書で報告しているのは、第二京阪道路が東西に貫通する寝屋川市域内の遺跡のうち国道170号線（大阪外環状線）より東の地域で、東から寝屋東遺跡、太秦遺跡、大尾遺跡、讃良郡条里遺跡、砂遺跡の5遺跡である。この内、前4者は平成13および14年度から本調査が行われており、それぞれ複数の報告書がすでに刊行されている。今回は、各遺跡で当初から調査対象としていた範囲内であっても種々の事情で発掘調査ができず、報告から漏れていた場所および、その後の追加的調査が必要となった場所についてまとめて報告するものである。計10件、13ヶ所になる。現地での調査は平成17から19の3年度にわたって断続的に行っている。（表1）

各調査区を原因によって分けると、

1 道路予定地内に残存していた未調査範囲の調査

（太秦05-1、05-3-1、06-1-2、06-2、07-1、讃良郡条里06-1-1）

2 市道拡幅・工事用道路建設・水路整備などの付帯工事に伴う追加的調査

（寝屋東05-1、太秦05-3-2・3、06-1-1、06-3、大尾05-1、砂06-1）

となる。1,000㎡以下の小規模な場所が多く、また、調査の終了した範囲ですでに道路建設工事が始まっている中での調査にならざるをえなかった。このため、事前調査とはいえ大形車輛が走りまわる真ただ中での調査がほとんどであった。したがって通常は、調査に必要な機械設備の確保などは当センターが独自に発注した建設業者を通して行うのであるが、本書の調査では、作業の錯綜や危険の発生を避けるため浪速国道事務所・西日本高速道路株式会社および道路建設の元請業者を通して行った。調査現場での安全性・期間の確保・効率性に関しては特に問題はなかった。ただし工事工程との調整によって調査が散発的になるため、調査人員の確保がむずしくなる局面もあった。

実際の調査にあたっては、隣接調査地との整合および記録取得の効率化をはかるため、原則として国土座標にもとづく地区割を行ったうえで、ヘリコプターまたはクレーンによる空中撮影によって測量・図化をおこなっている。それが困難な場所が2ヶ所あったが（太秦06-1、06-3-2）、その場合でも、国土座標にもとづく実測は行っている。

今回の報告と、これまで公にされた報告分とをあわせると、寝屋東遺跡では約15,000㎡、太秦遺跡で19,000㎡、大尾遺跡で10,000㎡、讃良郡条里遺跡で47,000㎡が報告されたことになる。主な調査はこれで終了するが、前記2のような小規模な追加調査は今後も散発的に発生することが予想される。

調査区を特定するための名称については、かつては調査が始まったまとまり毎に（その1）（その2）と、年度とは無関係に連番を付していた。しかし2004年度（平成16年度）からは、各年度に分けたうえ

表1 既往の調査と本報告書

報告書	調査区	現地調査	面積(m ²)	備考
『寝屋東遺跡』I 2004.12	寝屋東02-1・2・3	H14.10～H15.3	8,064	飛鳥建物
『寝屋東遺跡』II 2005.3	寝屋東03-1・2	H15.5～H16.3	6,694	飛鳥建物
本書	寝屋東05-1	H17.5～H17.6	528	飛鳥建物
計			15,286	
『太秦古墳群』2003.6	太秦01-1	H13.6～H13.11	2,637	古墳(尾支群)
『太秦遺跡・太秦古墳群』I 2005.2	太秦04-2	H16.4～H16.8	1,275	弥生堅穴、古墳
『太秦遺跡・太秦古墳群 大尾遺跡 高宮遺跡』2005.3	太秦04-1	H16.4～H16.8	980	古墳
『太秦遺跡・太秦古墳群』II 2006.3	太秦03-1	H15.5～H16.3	9,710	弥生堅穴、古墳、奈良建物
『太秦遺跡・太秦古墳群』III 2006.3	太秦05-2	H17.7～H17.10	220	弥生堅穴、古墳
本書	太秦05-1	H17.4～H17.5	900	弥生堅穴、古墳
本書	太秦05-3	H18.1～H18.3	1,425	弥生溝、古墳
本書	太秦06-1	H18.7～H18.8	250	古代溝
本書	太秦06-2	H18.11～H19.2	1,100	古墳、溝
本書	太秦06-3	H19.3～H19.7	335	古墳
本書	太秦07-1	H19.8～H19.9	520	弥生堅穴・溝、古墳
計			19,352	
『大尾遺跡』2003.2	大尾01-1	H13.6～H14.3	4,970	弥生木棺墓、飛鳥-奈良建物
『大尾遺跡 II』2005.2	大尾03-1	H15.5～H15.12	4,143	弥生堅穴、飛鳥-奈良建物
『太秦遺跡・太秦古墳群 大尾遺跡 高宮遺跡』2005.3	大尾04-1	H16.5～H16.9	849	弥生木棺墓
本書	大尾05-1	H17.7	226	飛鳥-奈良土器
計			10,188	
『讚良郡条里遺跡(その1)』2004.2	讚良02-1	H14.3～H14.12	2,218	奈良水路・絵馬・人形
『讚良郡条里遺跡(その2)』2003.6	讚良02-2	H14.3～H14.9	544	石器製作跡
『讚良郡条里遺跡(その3)』2004.3	讚良02-3	H14.3～H15.2	1,851	平安建物
『讚良郡条里遺跡 IV』2006.2	讚良03-3	H15.4～H16.9	8,049	奈良建物
『讚良郡条里遺跡 V』2007.3	讚良03-2、05-1	H15.5～H17.4	16,960	飛鳥-奈良建物
『讚良郡条里遺跡 VI』2008.3	讚良03-1、05-2 06-1-2～6、07-1	H15.5～H17.4	16,753	古墳堅穴
本書	讚良06-1-1	H18.10～H19.1	626	奈良水路
計			47,001	
本書	砂06-1	H18.6～H18.8	780	弥生溝

で、年度内で連番を付すことにしている。たとえば「太秦06-3」は、太秦遺跡で2006年度の3番目に始めた調査であることを示している。また、これを小区に分割する場合には、「06-3-2」などと表している。事情によって調査の終了が2007年度になった場合でも、名称は「06-3-2」のままとしている。本書ではこの方法を2004年度以前の調査区にも遡及させている。

第2章 位置と環境

1 地理的位置

第二京阪道路は、寝屋川市域の南部を東西に貫通するもので、本報告はこのうち国道170号線（大阪外環状線）より東部を対象としている。外環状線はT.P.6 m付近を南北に通っており、西側の沖積低地と、東側の扇状地との境目をなしている。

砂遺跡は扇状地上にあって、本書での報告地はその西先端にあっている。讃良郡条里遺跡の範囲は広く、外環状線の西900mの沖積低地から、東400mの扇状地高位部におよぶ。本書での報告地は遺跡内の東の端、扇状地の高位部を南北に延びていた奈良時代の流路（水路）部分である。その東の段丘直下は、周溝墓群のあった小路遺跡があり、段丘上に上がると、大形掘立柱建物群のあった高宮遺跡となる。開析谷をまたいだ東では、急な傾斜をのぼって丘陵地となり、標高45m付近（工事前の地表面 以下同じ）でトップ面となって大尾遺跡になる。ここから東2.5kmの寝屋東遺跡まで、標高40～48mのほぼ平坦なトップの連続であり、各遺跡はトップ面にあって大小の開析谷によって隔てられている。寝屋東遺跡よりさらに東ではゆるやかに下っていき、約1.5km先で交野の天野川氾濫原となる。

太秦遺跡より西側では、開析谷は南方へ下っている。下った先には大小の溜池があり、その先の讃良川を介して現寝屋川へ、さらには旧河内湖に至っている。

太秦遺跡より東側では、開析谷は北へ下る。下った先には寝屋川の上流部がある。寝屋川は丘陵地を西へ下って低地にいたり、淀川の砂堆群に当たって方向を南に変え、ゆったりと流れて旧河内湖に至る。

2 歴史的環境

この地域は讃良郡北西部から茨田郡南東部にかけての地域である。集落の継起についておおまかに記すと、弥生時代には、低地に高宮八丁遺跡（Ⅰ～Ⅱ）、長法寺遺跡（Ⅲ～Ⅴ）、讃良郡条里遺跡（Ⅰ 第二京阪内）、雁屋遺跡（Ⅰ～Ⅴ）があり、扇状地に小路遺跡（Ⅴ）があり、段丘・丘陵上に大尾遺跡（Ⅲ

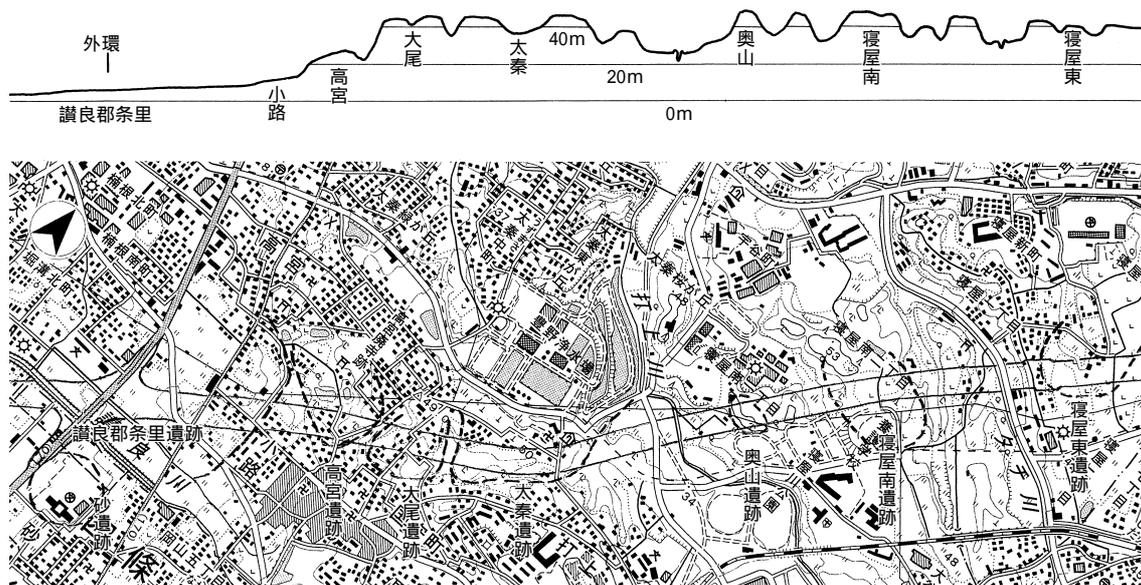


図1 各遺跡の平面および立面位置（国土地理院1：25,000「枚方」平成18年の一部に加筆）

-IV)、太秦遺跡(Ⅲ-V)、太秦中町遺跡(Ⅲ-IV)、打上中道遺跡(V)、池の瀬遺跡(V)がある。丘陵上の遺跡は後期になって分散する傾向がある。

古墳時代には、低地に長法寺遺跡(前-後期)、楠遺跡(中期)、讃良郡条里遺跡(中-後期 第二京阪内)、葺屋北遺跡・神田東後遺跡(中-後期)、高宮八丁遺跡(後期)があり、扇状地に讃良郡条里遺跡(前期 第二京阪内)、讃良川遺跡(後期)、忍ヶ丘駅前遺跡(中-後期)、中野遺跡・奈良井遺跡(中期)があり、段丘・丘陵上には、三味頭遺跡(中期)、太秦遺跡(後期)がある。低地-扇状地に中期・初期須恵器の時代の遺跡が増えている。これらからは木製鞍・U字形土製品の出土や馬の埋葬跡がみられ、渡来系の集団による馬の飼育が想定されている。日本書紀に記される河内馬飼首(継体元年)、沙羅馬飼造・菟野馬飼造(天武十二年十月)の本拠地ではないかとも考えられている。

飛鳥・奈良時代には、低地に讃良郡条里遺跡(奈良 第二京阪内)、長法寺遺跡(奈良)、扇状地に讃良郡条里(飛鳥-奈良 第二京阪内)、段丘・丘陵上に高宮遺跡(奈良)、大尾・太秦・寝屋南・寝屋東遺跡(飛鳥-奈良)、太秦北遺跡(奈良)、打上遺跡(奈良)、国守遺跡・三味頭遺跡(飛鳥-奈良)がある。この時期にも丘陵上に小規模の集落が短期間存在する傾向がある。また白鳳寺院である正法寺跡、讃良寺跡、高宮廃寺および奈良時代の太秦廃寺の周辺にも飛鳥-奈良時代の集落が存在している。

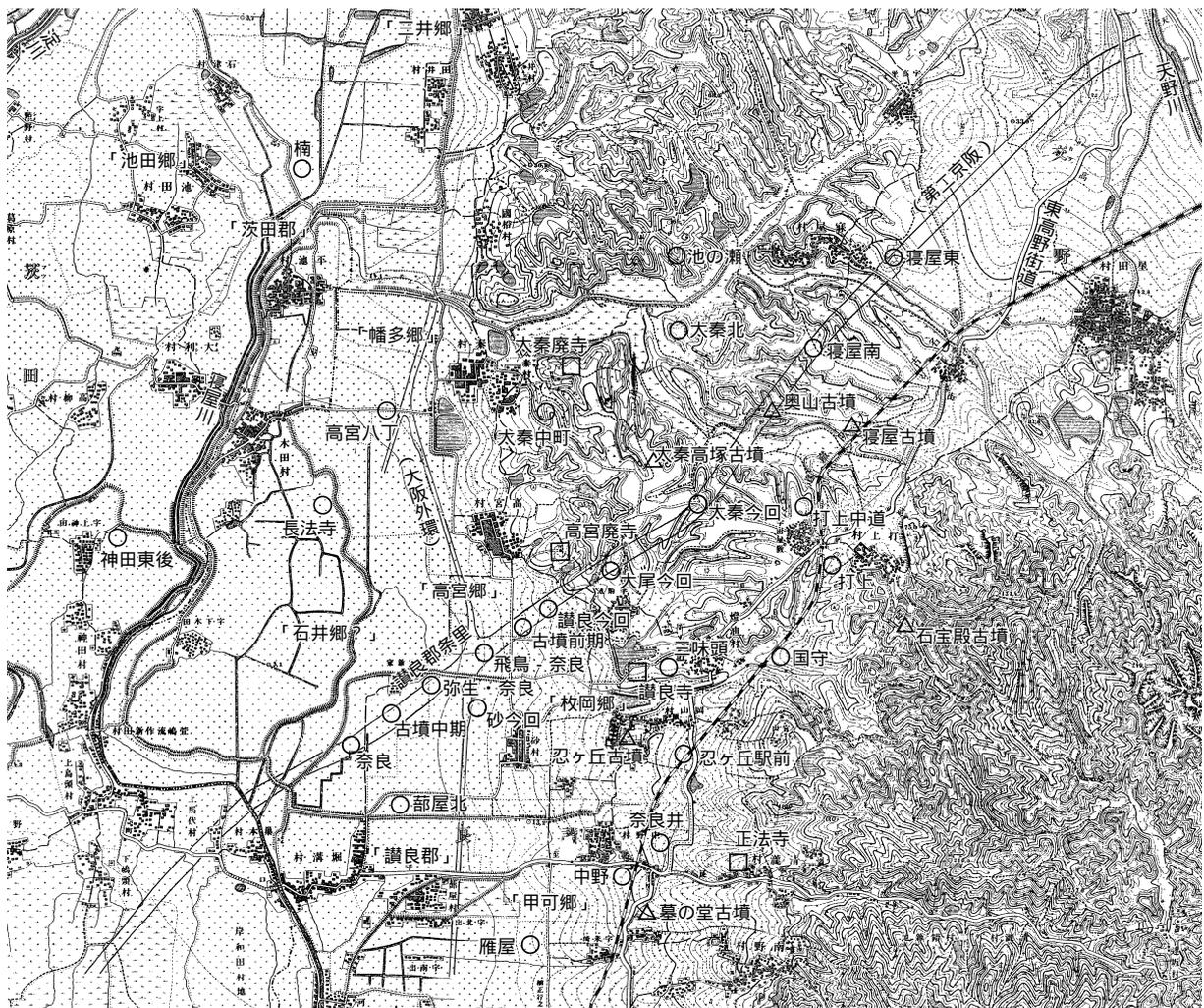


図2 周辺遺跡と旧地形 (明治18-32年陸地測量部 1:20,000「星田」を2分の1に縮小・加筆)

第3章 寝屋東遺跡の調査（05－1）

1 調査概要

寝屋東遺跡は寝屋川市寝屋一帯に所在する。地形的には枚方丘陵の南部にあたり、丘陵上の平坦部と寝屋川の支流北谷川へ向けて開析された谷が幾筋も入り込んだ場所に立地している（図3）。今回調査を行った寝屋東遺跡05－1調査地は、遺跡中央部西寄りにおいて、小規模な開析谷に接する丘陵上の平坦地に位置している。

この調査は、第二京阪道路に取り付く市道寝屋4号線部分の建設工事に伴うもので、平成15年度に、寝屋東遺跡03－2調査の寝屋4号線地区として調査した個所の未調査部分を対象としたものである。先の調査では、飛鳥時代の掘立柱建物が2棟確認され、調査区に南接する谷の肩部も検出された。また、平成14年度に本線地区で行った02－1・2でも、同時代の建物群が見つかっており、今回の調査においても関連する遺構・遺物の検出に期待がかけられた。

調査区は大きく2つに分かれ、寝屋東遺跡03－2の1～3区に沿って南に長く伸びた1区、同調査の4区と5区に挟まれた2区がある。平成17年5月9日に、現地で調査範囲を確認した後、翌日より機械掘削に入った。飛鳥時代のもので推定される掘立柱建物をほぼ1棟分検出するなどの成果があり、6月1日には1・2区の航空測量を実施した。同7日に埋戻し及び撤収を行ない、現場作業を終了した。

2 調査成果

（1）層序（図4）

1区では、調査区の東側5分の4が市道建設工事により地表下70～80cmまで掘削されており、路床材の碎石・真砂の直下に地山である段丘構成層が現れる状況であった。谷地形の影響を受ける西端部には、現代作土下に近世、中世の作土層が残っていた。また、近世に谷部を棚田状に造成した際につくられた50cmほどの段差も見られた。

調査着手前の2区は、大半が平坦地化されていたが、西端の旧里道部分が一段高くなっていた。この段差は、近世段階に高所側を削り込み、その土砂をもって谷部を埋めて水田を造成した際の名残りである。段上には削平を免れた中世の遺物包含層が見られ、谷の斜面側には近世の造成のため残存範囲が限られるものの、古代の遺物包含層が遺存していた。

第1 a層：灰オリーブ色砂礫混じり砂質シルトで、近世の水田作土層である。1区では西端部に、2区では棚田状に造成された平坦部に層厚約10cmで見られる。

第2 a層：1区では2層に細分され、上部が暗灰黄～黄褐色砂混じり砂質シルト、下部がオリーブ褐～暗灰黄色砂礫混じりシルトとなる。前者の下面に13溝が存在する。2区では段上部に分布し、暗灰黄色砂混じりシルトである。量は少ないものの瓦器・土師器が含まれ、中世の作土層と考えられる。13溝や2区にある本層下面の3溝や5溝が近世の水田造成時の削平により破壊されていることから、それ以前のものであることが確かめられる。1区ではその西端で最大約30cmの層厚があり、2区で約10cmの層厚をもつ。

第3 a層：黒褐～黄灰色砂礫混じり粘土質シルトで、2区南東部の谷斜面にのみ確認された。出土遺物から飛鳥時代に形成された土壌と考えられる。最大で約30cmの層厚がある。

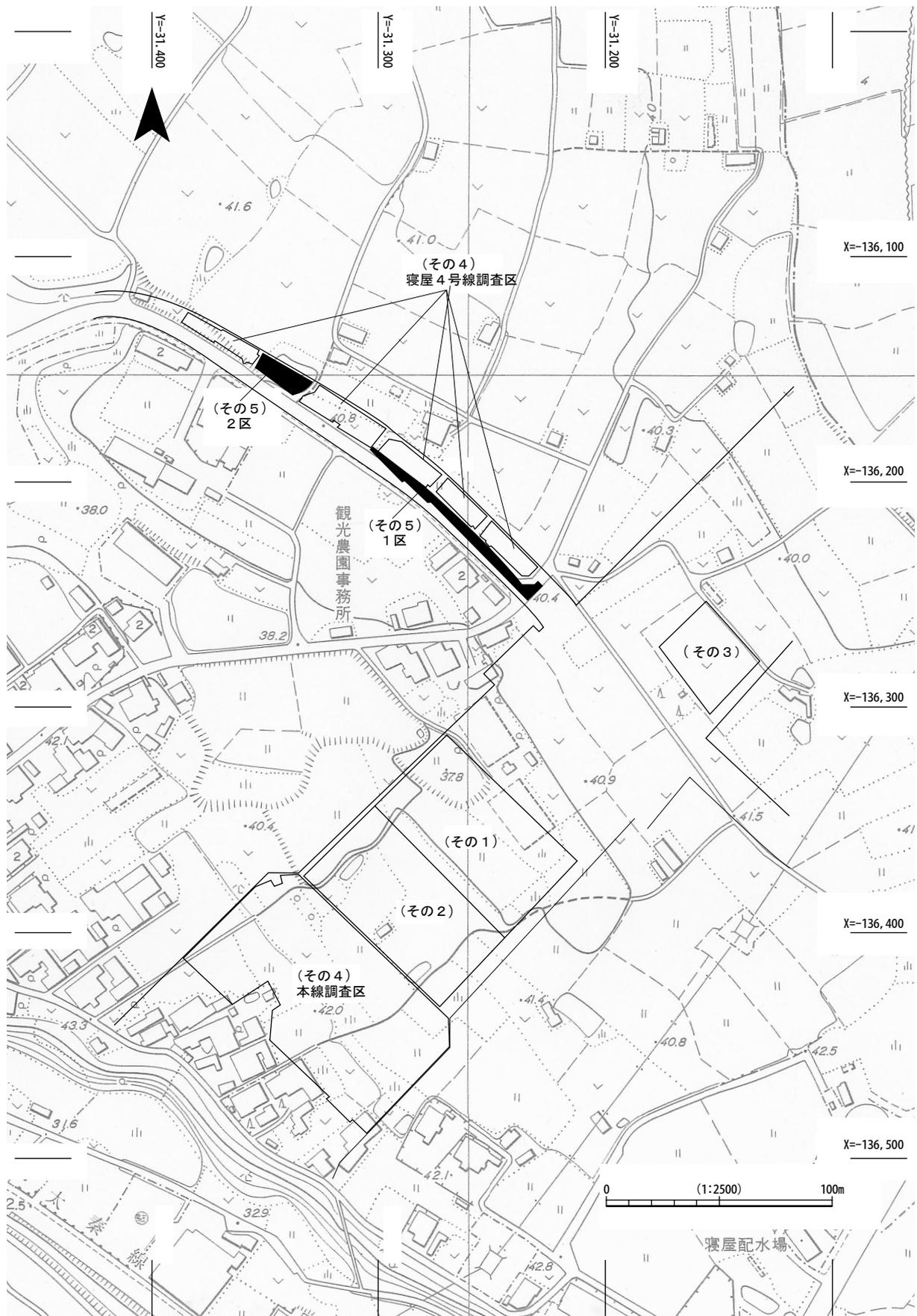
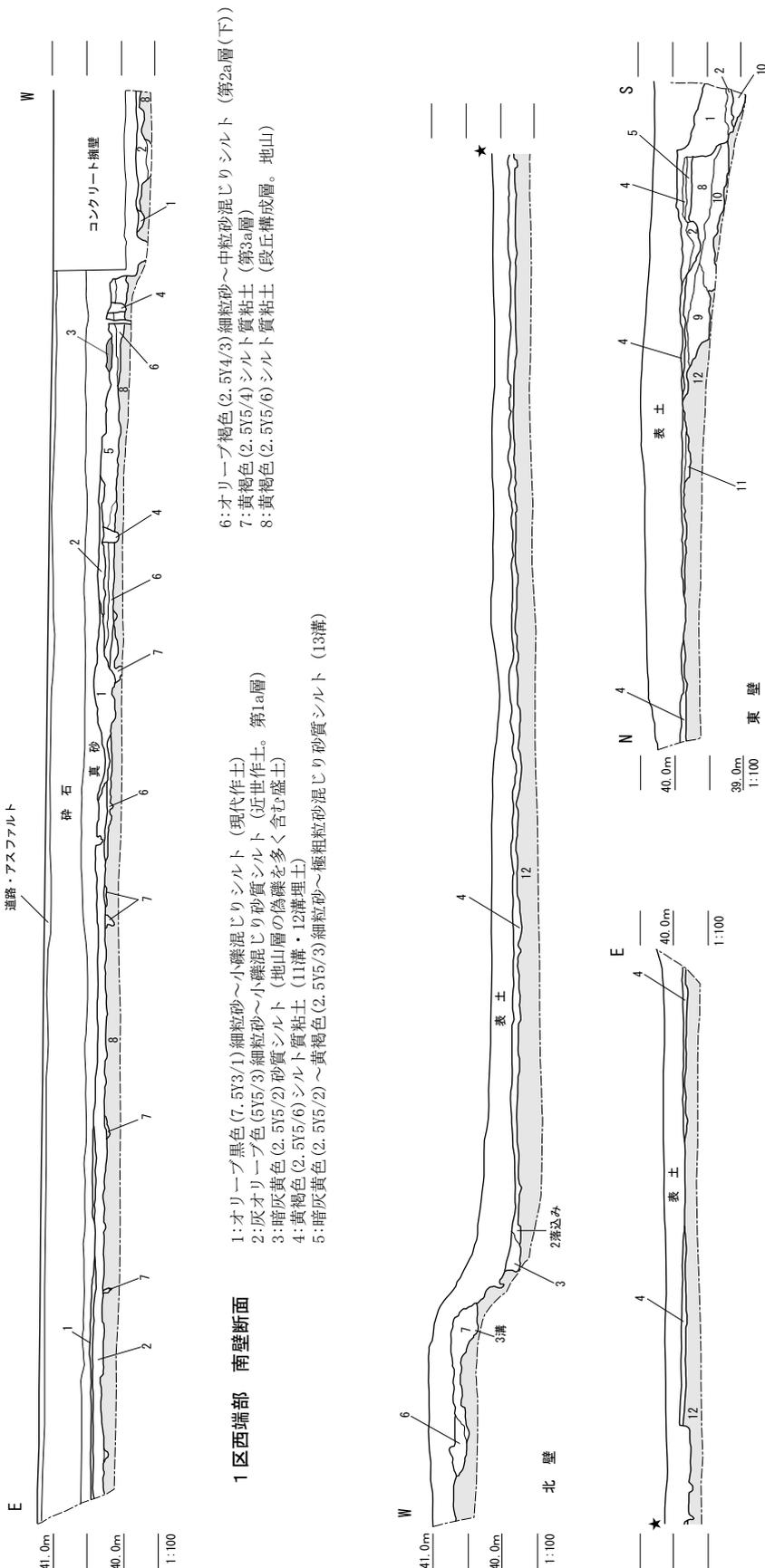


図3 調査区位置図



1: オリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂〜小礫混じりシルト(現代作土)
 2: 灰オリーブ色(5Y5/3)細粒砂〜小礫混じり砂質シルト(近世作土。第1a層)
 3: 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質シルト(地山層の偽礫を多く含む盛土)
 4: 黄褐色(2.5Y5/6)シルト質粘土(11溝・12溝埋土)
 5: 暗灰黄色(2.5Y5/2)〜黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂〜極粗粒砂混じり砂質シルト(13溝)
 6: オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂〜中粒砂混じりシルト(第2a層(下))
 7: 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質粘土(第3a層)
 8: 黄褐色(2.5Y5/6)シルト質粘土(段丘構成層。地山)

1: 灰色(5Y6/1)細粒砂〜中礫混じり砂質シルト(近世各土か)
 2: 灰オリーブ色(5Y6/2)粗粒砂〜中礫混じり細粒砂〜中粒砂〜中粒砂(第1a層下面溝)
 3: 黄灰色(2.5Y6/1)細粒砂〜粗粒砂混じりシルト(地山層の偽礫含む。1溝)
 4: 灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂〜極粗粒砂混じり砂質シルト(第1a層)
 5: にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂〜粗粒砂混じりシルト(地山層の偽礫多く含む)
 6: 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂混じりシルト(4溝)
 7: 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じりシルト(第2a層)
 8: 黒褐色(2.5Y3/2)〜黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂〜小礫混じり粘土質シルト(第3a層)
 9: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂〜小礫混じりシルト(6溝込み上部)
 10: 黄褐色(2.5Y5/4)シルト混じり細粒砂〜中粒砂〜黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂〜中礫多く含む、6溝込み下部)
 11: 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂〜中粒砂混じりシルト(溝か)
 12: 灰白色(10YR8/1)粘土〜にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂〜極粗粒砂(段丘構成層。地山)

図4 調査区断面図

地山層：高位段丘構成層である。1区西端部では黄褐色シルト質粘土、2区では灰白色粘土～にぶい黄色細粒砂～極粗粒砂である。

(2) 遺構・遺物 (図5～10)

遺構検出は、1区西端部では第1a層および第2a層が存在することから、各層の下面で行ったが、他の地点では地山層の直上でのみ行った。

第1a層下面：第1a層が水田作土層と考えられるので、本層下面遺構のほとんどは水田耕作に関わるものと思われる。まず、1区西端部では11・12・14溝などが検出された。11・12溝は幅0.1m、深さ0.2mほどの小溝で、共に黄褐色シルト質粘土を埋土とし、約3mの間隔をおいて併走する。14溝は造成された下段の水田の縁に沿って掘られており、取排水用に掘削されたものと思われる。幅0.7m、深さ0.1mある。埋土には細粒砂～中粒砂が多く含まれていた。一方、上段の水田の肩にあたる場所には、畦の盛土の痕跡が0.5mの幅で帯状に見られた。

2区には1溝・2落込み・7土坑の他に小溝群があった。2落込みは水田造成時、斜面部を掘り込んだ時にできた浅い窪みである。それを埋め、整地した後に1溝、7土坑が掘削されている。1溝は幅0.4～1.0m、深さ0.2mで、黄灰色細粒砂～粗粒砂混じりシルトを埋土とする。7土坑は整った方形プラン(1.5m×1.1m)をもつ。また、埋土が2層に分かれ、下半には自然に流入した砂礫が、上半には人の手によって埋められたことを示す偽礫が多く含まれていた。深さは0.3mある。染付が1点出土した。

第2a層下面：1区では13溝、10・27土坑、小溝群がある。13溝は第2a層上部層下面、その他は同層下部層下面に属す。13溝は北西－南東方向に直線的に掘られており、幅約0.8m、深さ0.2mある。10土坑は平面が比較的整った方形(1.1m×0.9m)を呈し、深さが0.2mある。27土坑は、長軸長0.7m、短軸長0.4mの楕円形で、深さが0.4mある。埋土中に砂粒が流れ込んだことを示す葉理が見られた。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

2区には3～5・9溝がある。このうち3・5溝は直線的に掘削されており、近世(第1a層段階)に行われた水田造成がこれらの溝に接する位置から掘削を行っていることから、両溝は何らかの区画を示すためのもので、第1a層段階までそのラインが意識されていたことが考えられる。3溝は幅0.6m、深さ0.2m、5溝は幅0.4m、深さ0.1mある。5溝より、土師器・須恵器の小片が出土している。4溝は幅0.8m、深さ0.2mで、(その4)調査5区に続いている。9溝は調査区の南にある開析谷に向かって幅と深さを増しており、底付近に砂礫を多く含んでいることから、雨水による浸食痕の可能性はある。

第3a層下面：1区東寄りに、あらたに掘立柱建物を1棟検出した。この建物1は、調査範囲外に続くため厳密な規模・形状は不明だが、方位や柱間隔が近似することから、隣接調査区に見つかっているものと同様な2間×2間の総柱建物と推測される。建物方位はほぼ正方位にとられている。柱穴には柱の抜き取り痕が認められるものと柱痕跡を残すものが見られた。図6に示すA—A'横断図のとおり、今回の調査区は市道工事により前回の調査区よりも0.5mほど削平されているため、各柱穴の遺存状況は良好とはいえない。しかし、抜き取り穴の埋土には丸みを帯びた地山層の偽礫が全体に見られるのに対して、柱掘形内ではその下方に扁平な偽礫が集まる傾向が窺えた。遺物は出土しなかったが、前調査と同じく飛鳥時代に属するものと思われる。最も残りのよかった25ピットでは、南北0.6m、東西0.5m、深さ0.3mの規模があり、直径15cmの柱痕跡が見られた。建物1の北5mには22ピットが確認された。これは前回調査で見つかった建物の南西隅柱のものである。埋土の下方に扁平な偽礫が見られ、これが柱掘形で

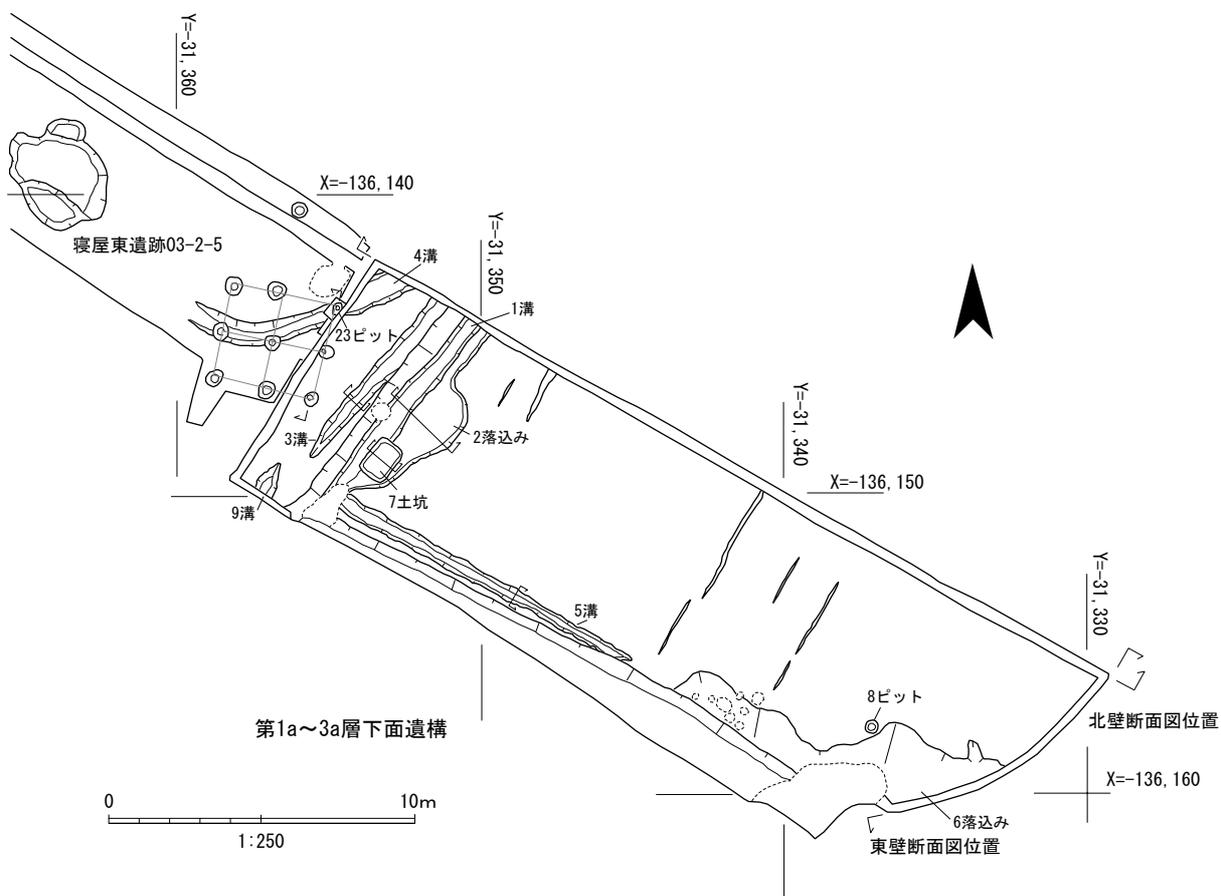
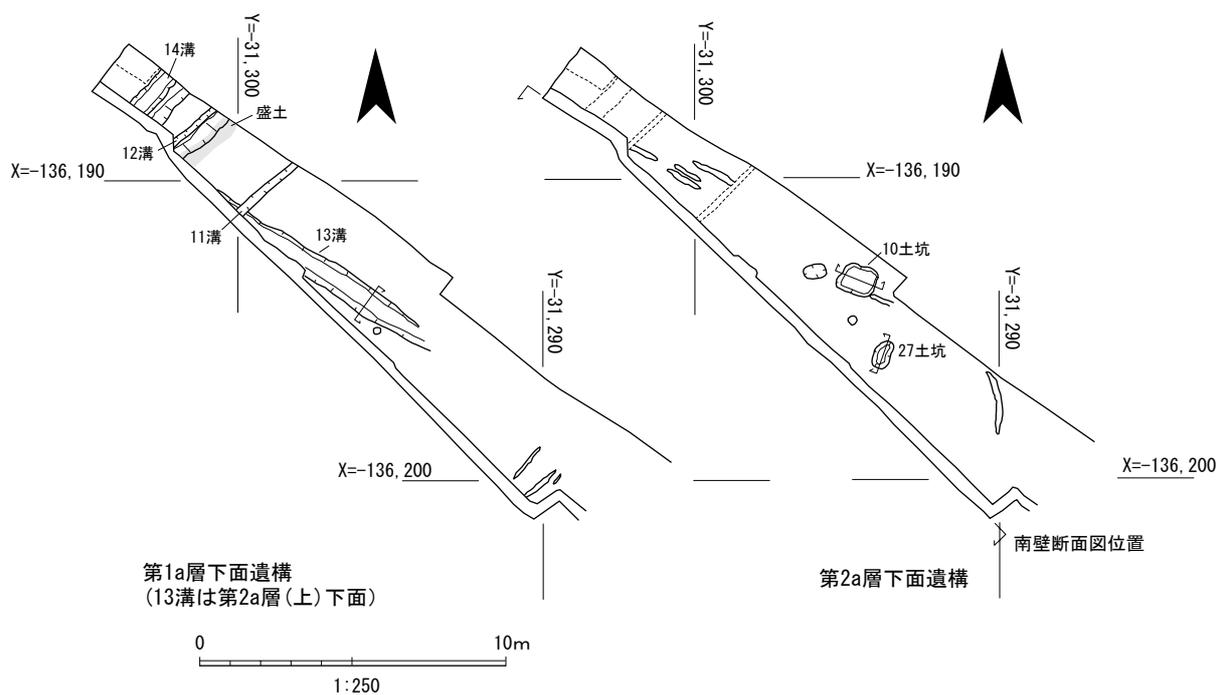


図5 遺構平面図

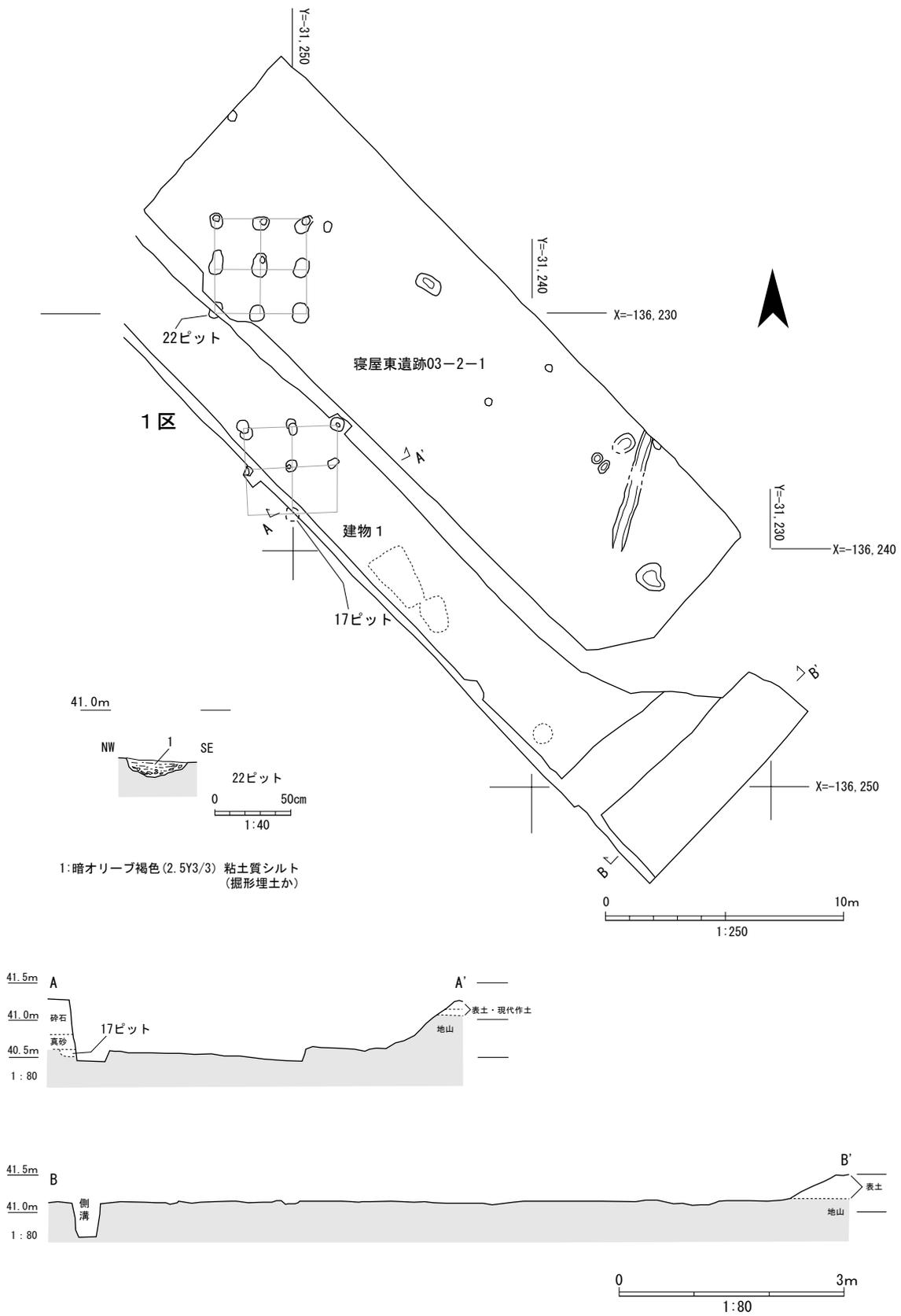


図6 1区東端部の遺構

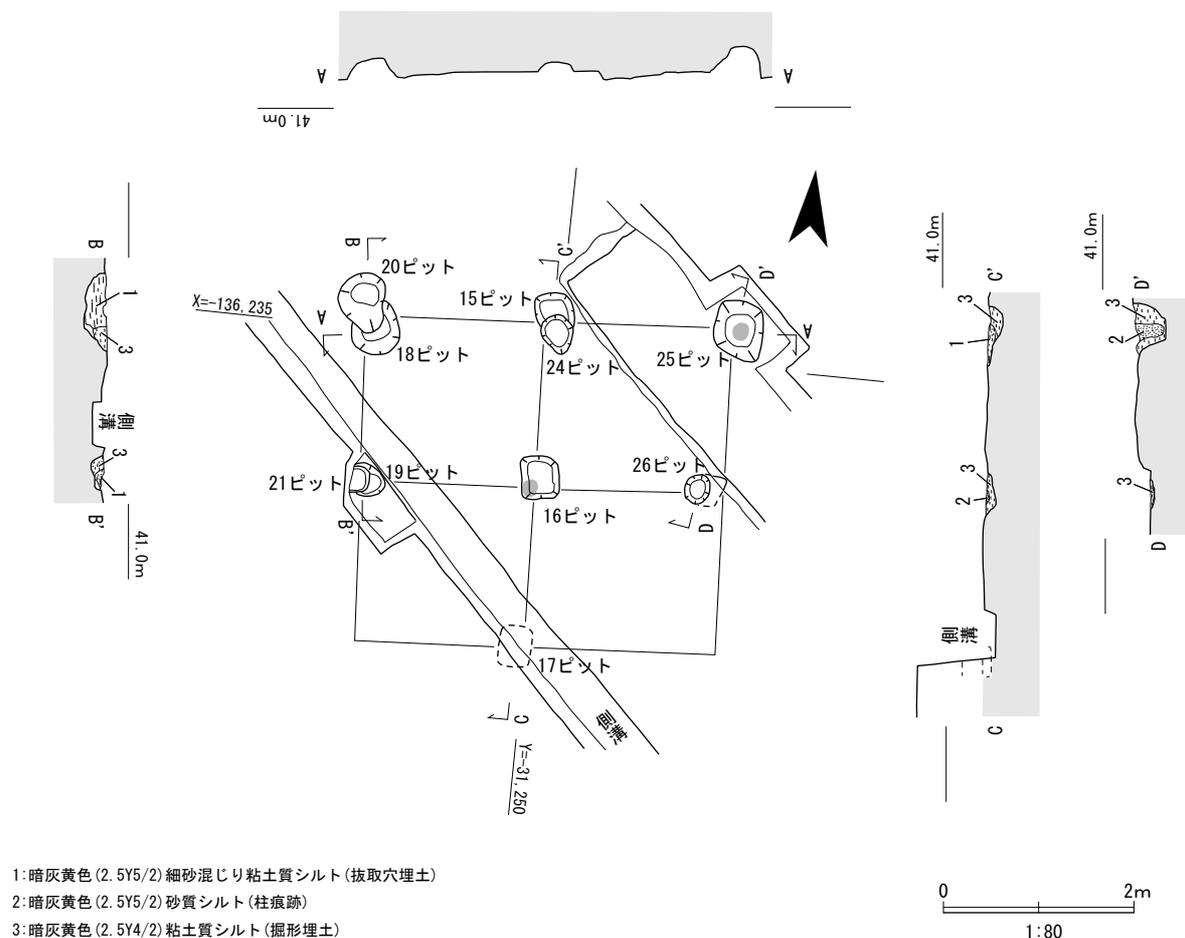


図7 建物1 平面・断面図

あることがわかる。検出した面から0.1mの深さを残していた。

2区には6落込み・8・23ピットがある。6落込みは同区南東部にあり、開析谷斜面部に残された古代の堆積層で埋まる。上方は暗灰黄色砂礫混じりシルトであるが、下方は黄褐色シルト混じり細粒砂～中粒砂・黄灰色砂礫混じりシルトとなり、砂礫が増えると共に、地山層の偽礫も多く含むようになる。これらを覆うより暗色化の進んだ部分（黒褐～黄灰色砂礫混じり粘土質シルト）から須恵器・土師器等が出土した。形のわかるものでは、須恵器蓋杯・平瓶・横瓶・平瓦のほか土師質土錘1点があった。

図10の1～4・7は須恵器で、飛鳥時代後半に属するものである。1はツマミをもたない杯蓋の天井部外縁の破片、2は蓋と身が逆転した後の杯身の底部、3は高台をもつ杯の底部で、高さ0.6cmの高台をもっている。2の復元底部直径は7.7cm、3の高台外周の復元直径は9.0cmである。4は平瓶の頸部から体部にかけての破片で、体部に施されたカキ目より、体部直径が21cmほどであることが推測される。また、天井部内面を見ると、直径7cm程度の円盤によって天井部の閉塞を行っていることがわかる。7は横瓶の体部で、外形から小口寄りの部分と考えられる。外面には格子状のタタキ目、内面には同心円文を残す。その同心円文が途中から重なる向きを変え、ほぼ同じ位置から器壁の厚みも増している。このことから

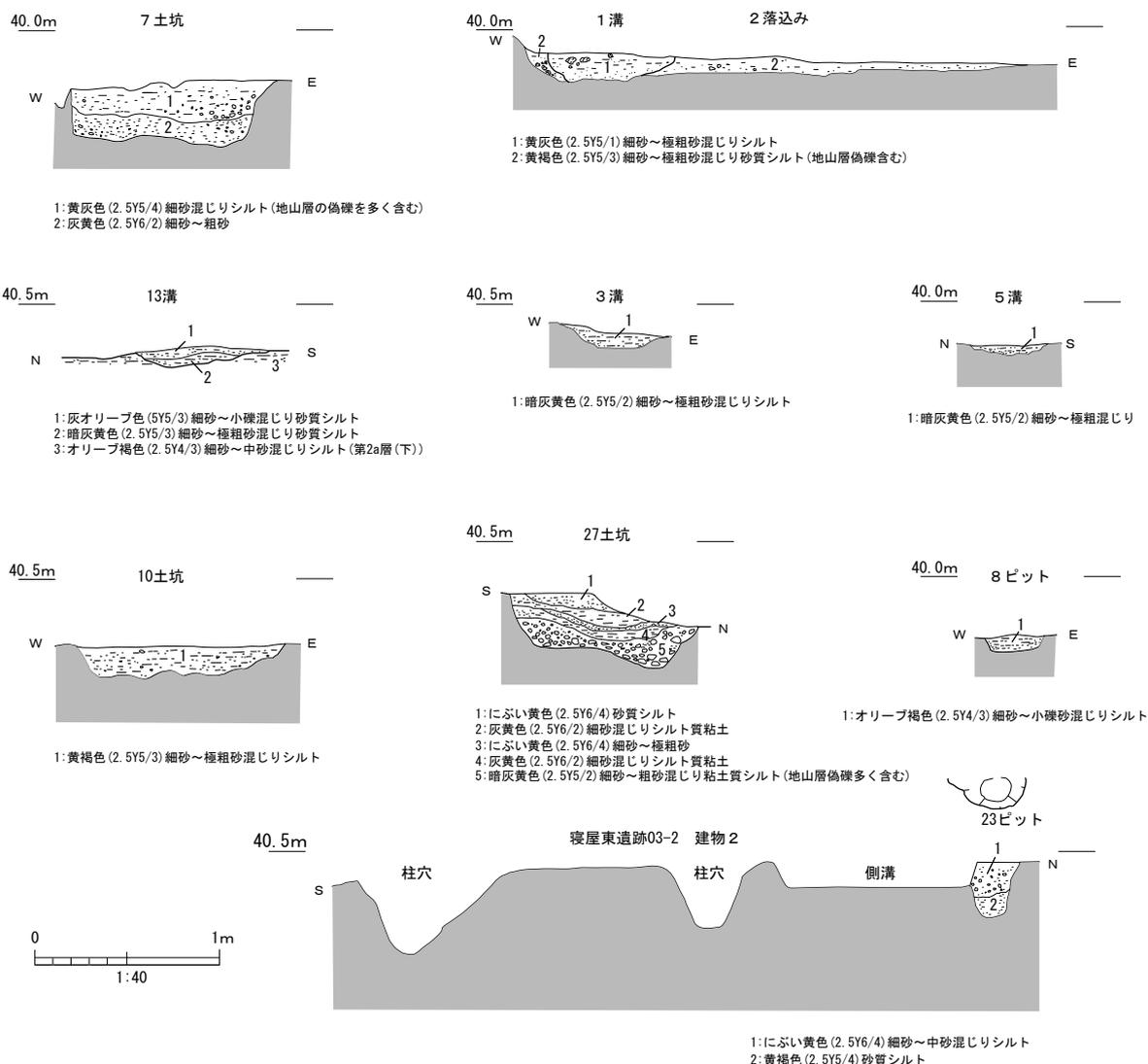


図8 遺構断面図

も体部の閉塞部に近い小口寄りの破片であることがわかる。5は土師質の管状土錘で、縦に2片に割れているものの、完形品である。長さ4.4cm、幅1.3cmあり、直径0.3cmの孔が通る。重さは5.6gある。同様の土錘は03-2区からも3点出土している。また、当遺跡の南東200mにある伝寝屋長者屋敷跡遺跡(寝屋川市1998)からも同形態の土錘が5点見つかっているが、こちらは平安時代以降のもの可能性がある。6は平瓦片で、斜めにヘラ切りされた側縁の一部が残る。全体に磨耗が著しく、凹面に布目圧痕が微かに認められるものの、凸面側の成形痕は確認できない。厚さは1.3cm前後で、須恵質に焼成されている。

8ピットは6落込みの傍らに検出された。直径約30cm、深さ8cmあり、オリーブ褐色砂礫混じりシルトを埋土とする。23ピットは前回調査の5区にあった掘立柱建物の北東隅柱である。南北0.4m、東西0.3mある。柱痕跡は確認できず、柱は抜取られていた可能性が高い。検出面から底までは0.3mの深さがあるが、前回の調査(03-2-5区)で確認していた東柱列のもの比べると浅くなっている。

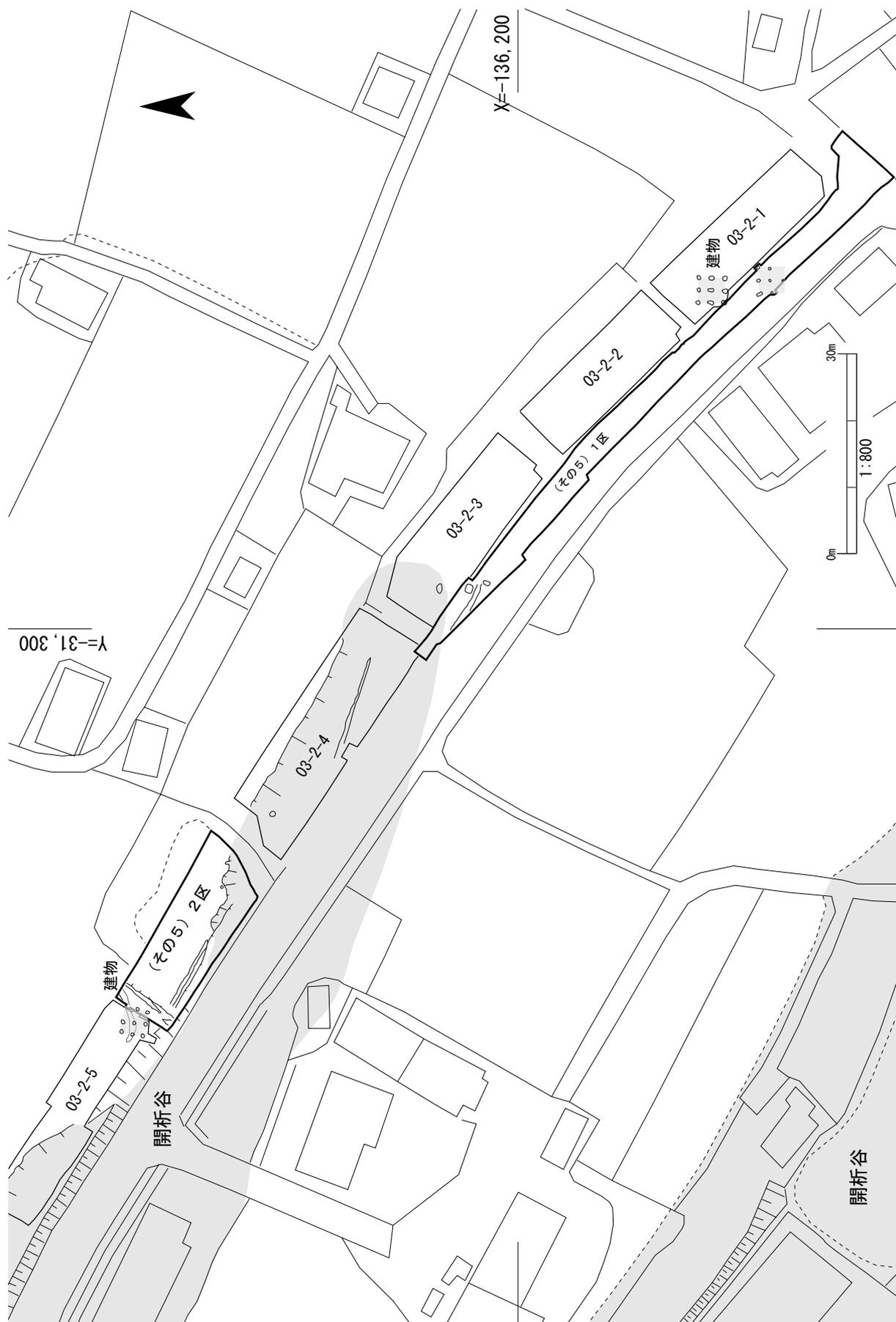


図9 開析谷と飛鳥時代の建物

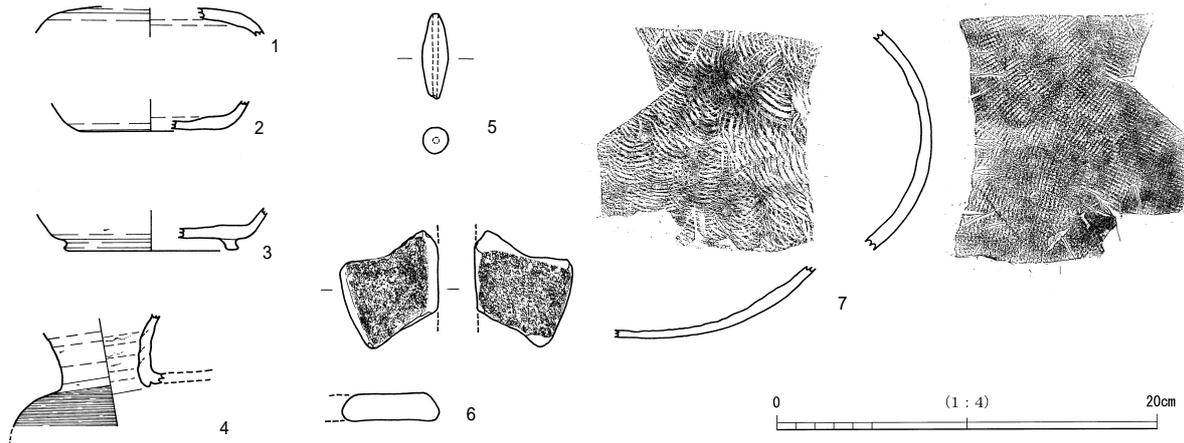


図10 出土遺物

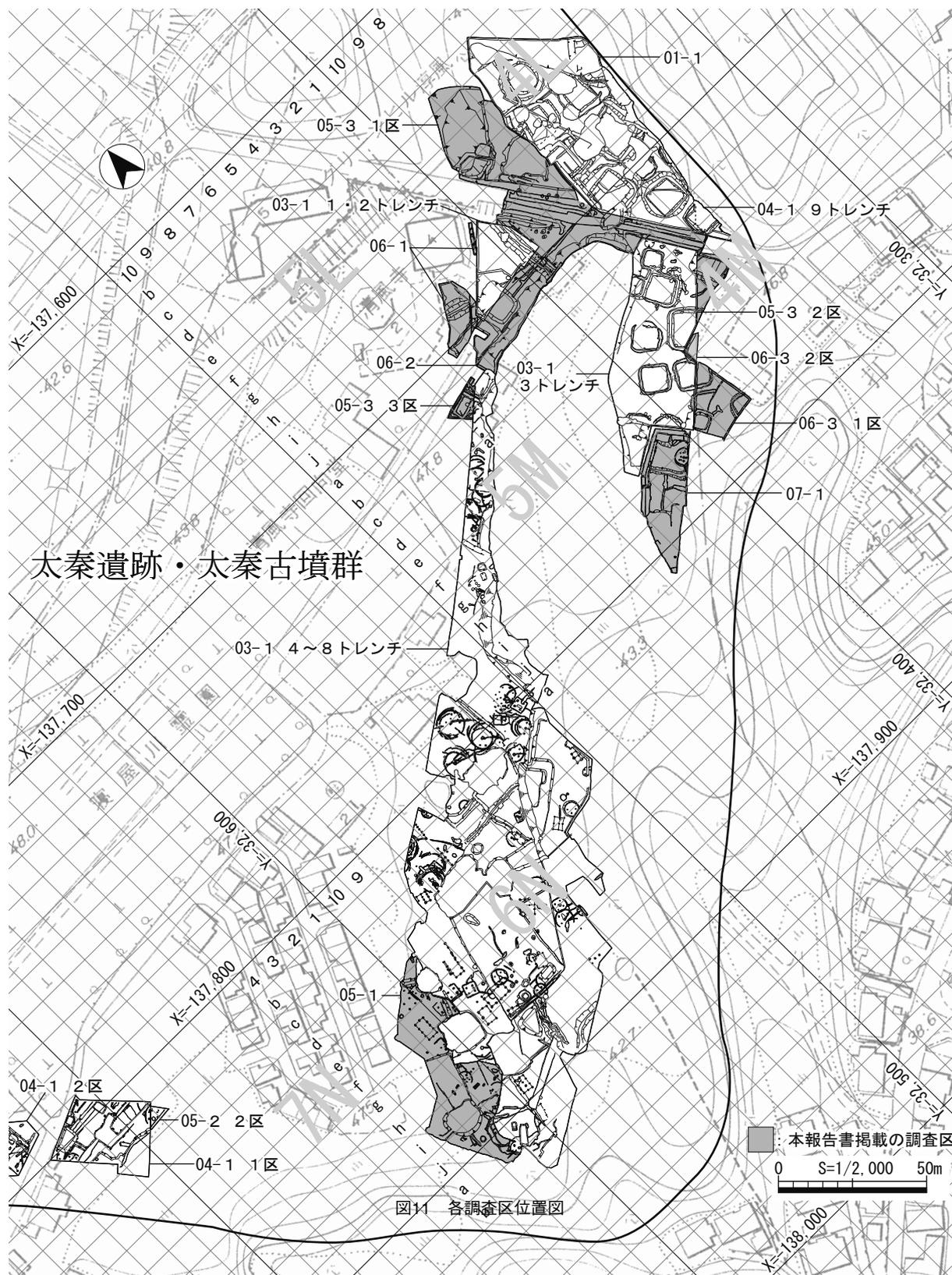
3 まとめ

今回の調査においては、開析谷を利用した近世の水田造成の状況、中世の区画溝の存在などを知ることができたが、何よりも1区において飛鳥時代の掘立柱建物を検出できた点が大きな成果である。市道の建設工事により、かなりの削平を受けていたため、調査開始の直後には遺構の確認は無理かと思われたが、ほぼ1棟分の柱穴を見つけ出すことができた。この建物は北隣の調査で見つかったものと規模・構造・方位において近似することから、ほぼ同時期と推定されるが、並存したかについてはわからない。しかし、削平分を考慮すれば50cm以上の深さをもつ柱掘形であったこと、また、正方形プランの総柱構造であることから、高床式の倉庫であった可能性が考えられる。またさらに、2区側にも同形態の建物があることも注意される。02-1・2で見つかった全建物16棟の中でこうした構造の建物は2棟しかなく、またこの2棟が他の建物とは離れた谷寄りの場所に隣接していた点も注意を引く。これまでの調査により、この遺跡の飛鳥時代の集落は、開析谷によって画されたいくつかの建物群を形成していたと思われるが、そうした中で、建物の種類による配置の特徴が見出せるのかどうか、今後、さらに注意深く周辺遺構の掘がりを追求していくことが必要になってこよう。

参考文献

- 大阪府文化財センター 2004 『寝屋東遺跡』Ⅰ
 2005 『寝屋東遺跡』Ⅱ
 寝屋川市 1998 『寝屋川市史』第1巻

第4章 太秦遺跡・太秦古墳群の調査



太秦遺跡は大阪府寝屋川市太秦高塚町（旧：国守町・打上）に所在する。本センターでは平成13年度以来、本調査を実施してきている。その結果、古墳時代中期の古墳群、弥生時代中期の集落跡、古代の掘立柱建物跡等を検出している。また、遺跡北西側の府道建設予定地でも調査が実施されており（04-1、05-2）、同様な時代の遺構が検出されている。

第1節 05-1

1 調査概要

当調査区は平成15年度の調査時、膨大な盛土の存在が確認され、調査不能であった箇所である。平成15年度の03-1調査区の西側に接しており、弥生時代中期の集落・方形周溝墓、古代の掘立柱建物・竪穴住居等のつづきを確認できることが想定された。国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受けた当センターは大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、平成17年4月から5月までの間、埋蔵文化財の発掘を実施し、その後、整理作業を行った。調査面積は約900㎡である。

調査区は丘陵上に位置しており、西端は谷地形への斜面が認められた。調査前は盛土が約4m存在し、調査対象土層付近まで道路建設の本体工事JVが除去した。

その後、重機によりさらに表土を掘削した後、人力により遺物包含層の掘削、遺構面の精査・遺構の検出および掘削を行った。検出遺構の測量はクレーンによる写真測量を実施し、50分の1スケールで図化を行った。また、必要に応じて、より詳細な平面図・断面図等を作成し、随時、写真撮影を行い記録した。

遺構図の作成、遺物の取り上げは、(財)大阪府文化財センター2003.8『遺跡調査マニュアル【暫定版】』をもととし、世界測地系の国土座標軸を基準とした。区割りは大から小へ6段階で行い、府全域が共通の地区割になっている。ちなみに当調査地は、第I区画-J6、第II区画-4、第III区画-6N・7N・7Lにあたる。

2 調査成果

(1) 概要

03-1調査地に隣接しており、その成果から遺構面の拡がりが見込まれていた。主な遺構として、弥生時代中期の周溝墓、木棺痕跡のある墓壙、竪穴住居跡3棟、古代の掘立柱建物1棟、竪穴住居跡3棟をあげることができ、他に多くの柱穴も検出した(図12、図版5)。

遺構面は部分的に近世から現代に削平を受けていたが、調査区全体に遺構が広がっていることや西側の大尾遺跡と隔てる谷地形の斜面を確認することができた。

(2) 基本層序

調査地は前述したように約4mの盛土が存在し、これを除去することにより明黄褐色粘土或いは黄褐色砂礫を基盤層とする遺構面を検出した。この基盤層上面の大半は大きく削平を受け、後述する検出した弥生時代から古代の遺構に伴う純粋な遺物包含層は存在しなかった。

調査区西半においては近世と考えられる造成の水平面及び段差を検出した。

この基盤層上面を精査した結果、各時代の遺構を同一面で検出した。

調査区は西側の谷へ向かう緩斜面を呈しており、調査区西端のX=-137,880からX=-137,910の間で

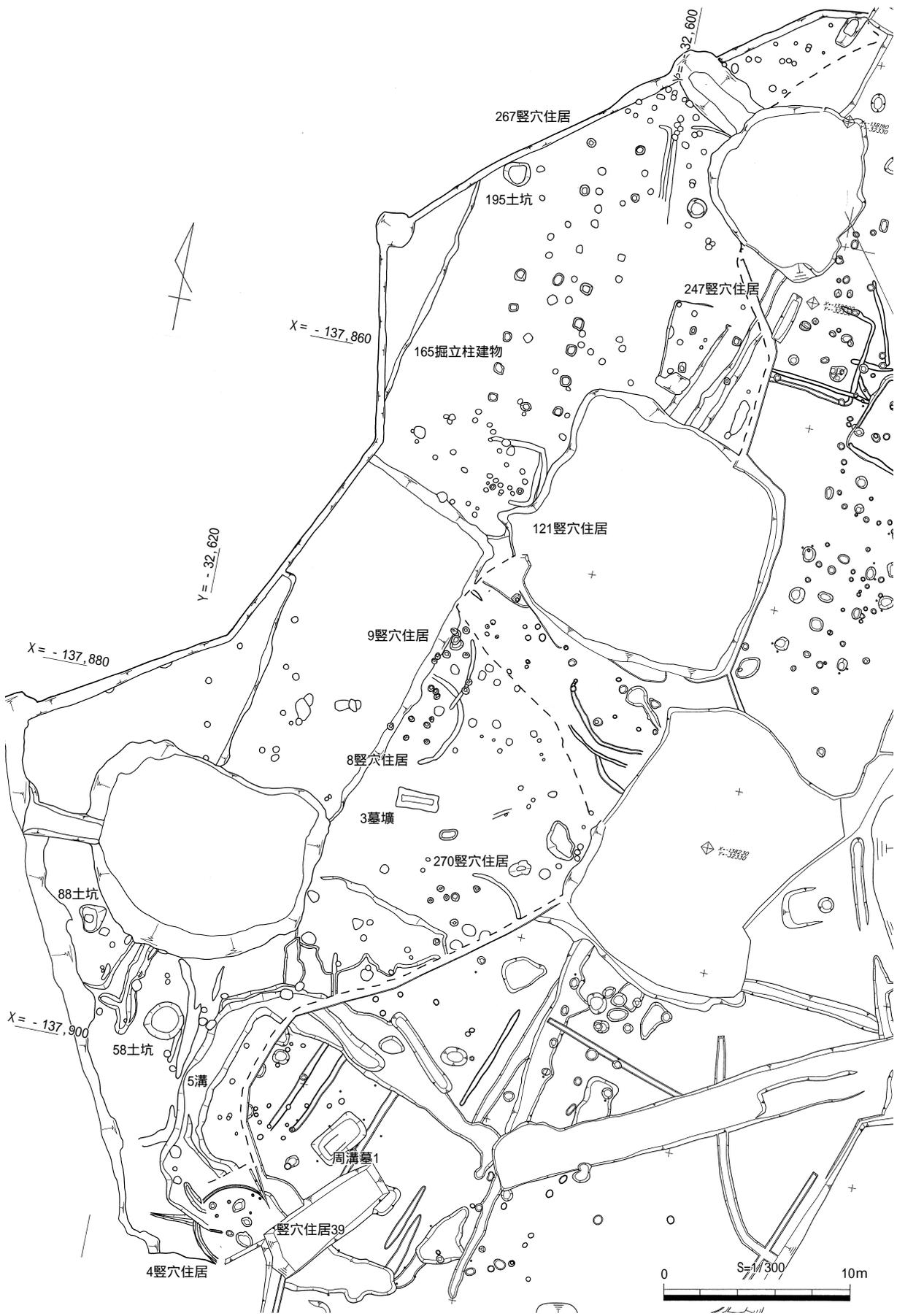


图12 05-1 遺構配置図

谷に向かって急激に落ちる斜面を検出した。遺構面の標高は北東隅でT.P.約44.9m、南隅の4 堅穴住居付近でT.P.約42.7mを測る。

(3) 遺構

弥生時代中期

周溝墓 1 (図13、図版 6・7) 平成15年度調査地において約 4 分の 3 を検出しており、今回の調査により周溝墓の全容が明らかになった。検出した周溝の 5 溝は幅 1.4~3.6m、深さ約 0.5m を測り、既調査地部分より残存状況は良好であった。周溝の南西コーナー、北西コーナーが検出され、周溝墓 1 の平面規模は東西約 16m、南北約 12m を測る長方形であることが明らかになった。北西コーナー部分は直角に折れ曲がり、幅が狭くなっている。5 溝の断面形態は内側が垂直に立ち上がり、その部分の平面形は直線に伸びている。遺物は南西コーナー付近から多量の土器が出土したが、大半は破片である。

3 墓壙 (図14・図版 8~10) 周溝墓 1 の北側に位置する。墓壙は長軸約 2.2m、短軸約 0.8m、深さ約 0.2m を測る。内部からは木棺の痕跡を検出した。上面は削平を受けていたが、側板、小口板、底板の痕跡を確認した。木棺規模は長軸約 1.7m、短軸約 0.4m を測る。墓壙には、にぶい黄褐色粘土のブロックが混じる埋土が観察でき、小口部分には、より大きな粘土ブロックを充填している。遺物は墓壙、木棺内と

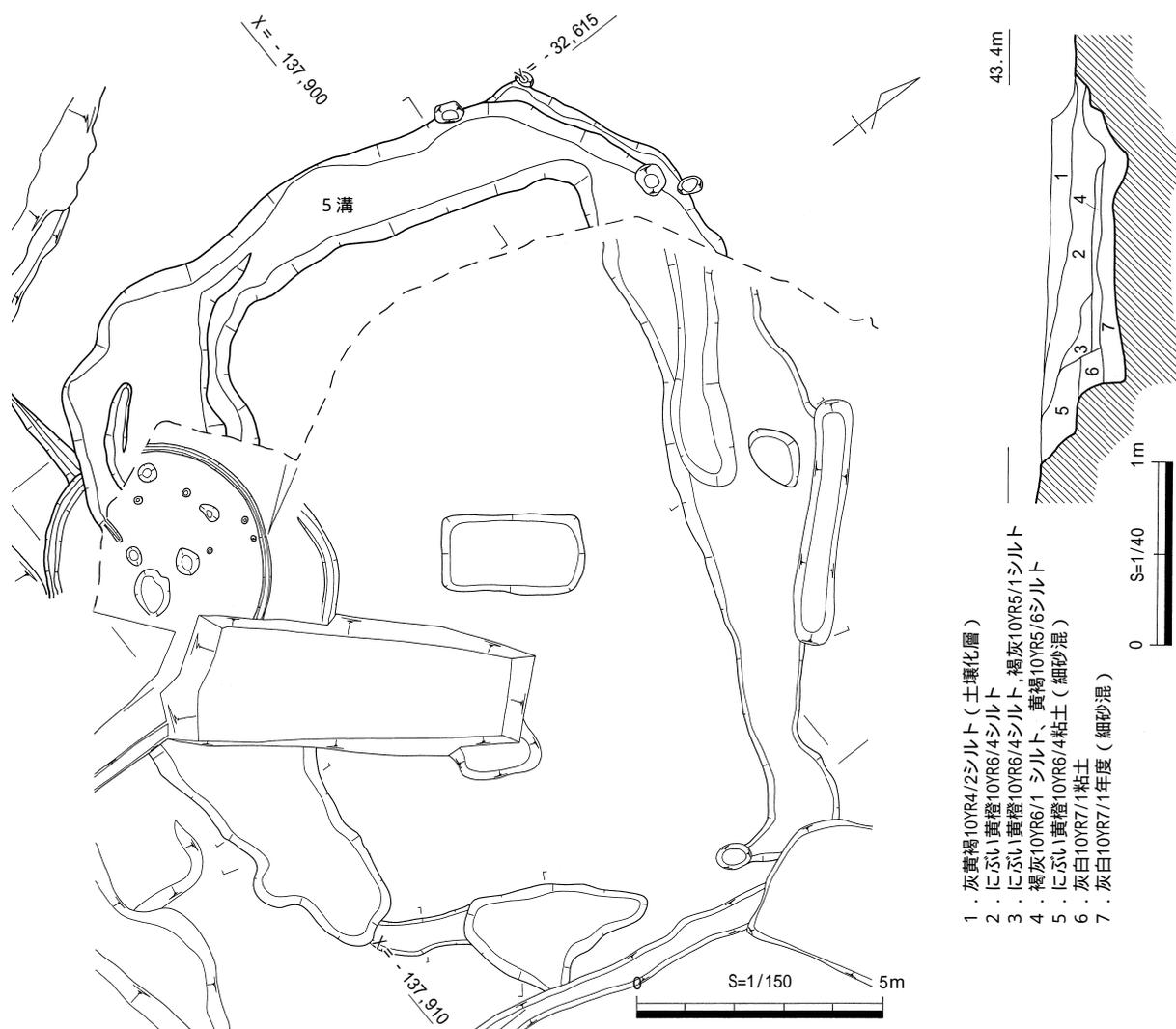


図13 05-1 周溝墓 1

にも出土していないが、周溝墓1と同様に弥生時代に属する遺構と推定できる。

4 竪穴住居 (図15、図版11-2) 周溝墓1の下層において検出した。既調査地の竪穴住居39と同一遺構であり、既に3/4は検出しており、今回の調査により南西側が明らかになった。平面円形を呈し、直径約4.6m、深さ約0.2mを測る。内部からは壁溝と排水溝を検出した。排水溝は西側の谷へ向かって伸び、その上部の埋土は基盤層である地山に近似した明黄褐色粘土であり、下部の排水部分には炭化物を含んでいる。

8・9 竪穴住居 (図15、図版11-1・3) 平面円形を呈し、8 竪穴住居は復元直径約5.5mを測る。い

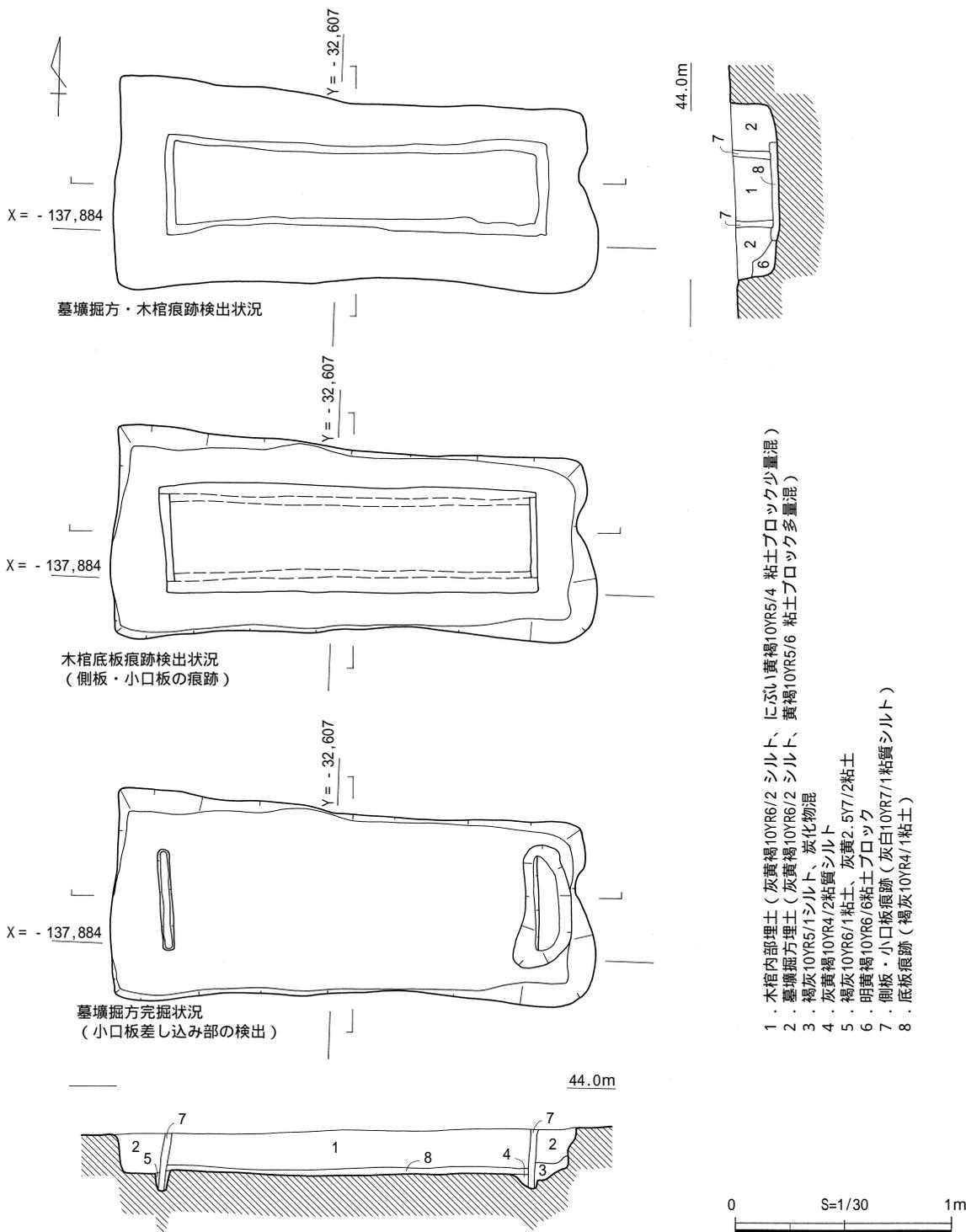
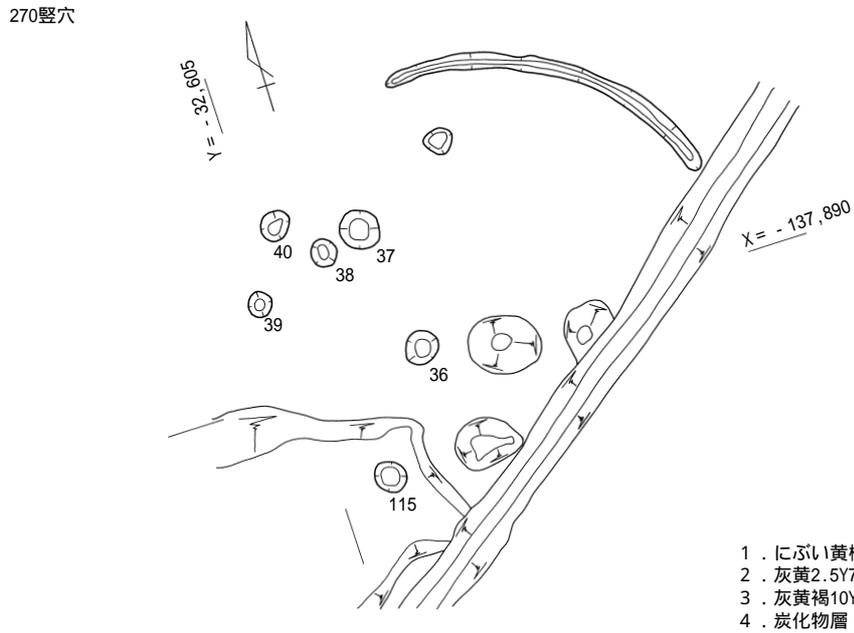
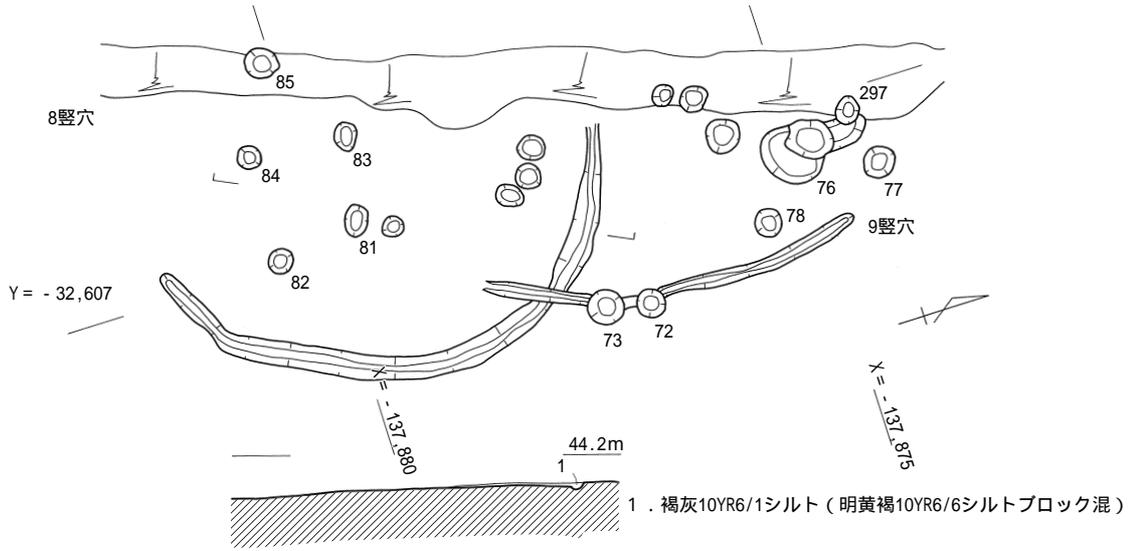


図14 05-1 3 墓壇



- 1 . にぶい黄橙10YR6/4シルト
- 2 . 灰黄2.5Y7/2シルト
- 3 . 灰黄褐10YR6/2シルト
- 4 . 炭化物層

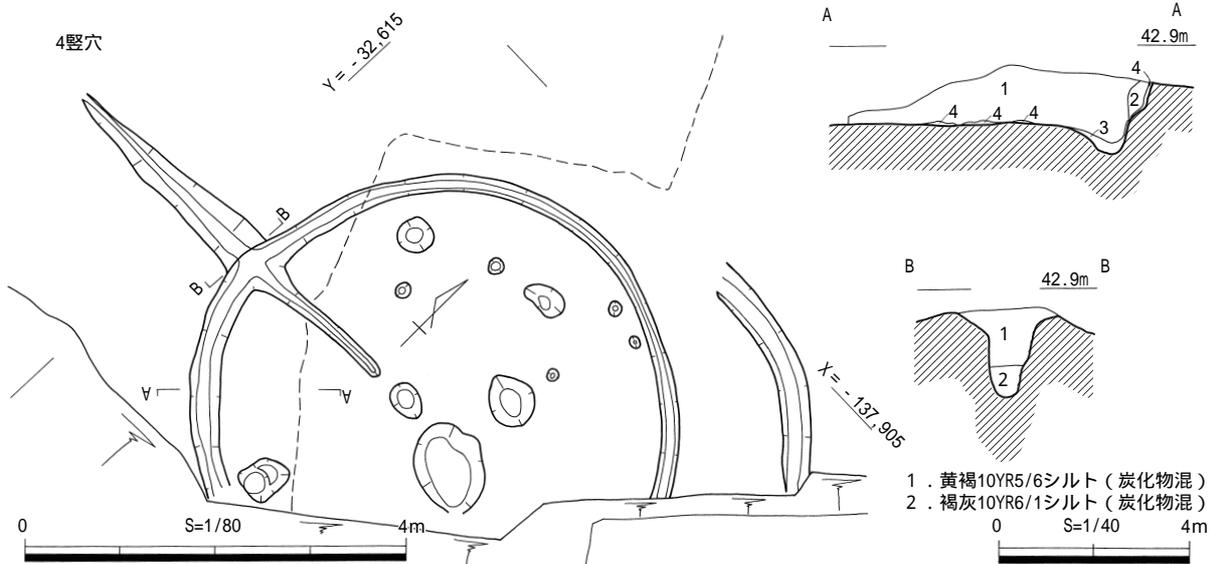
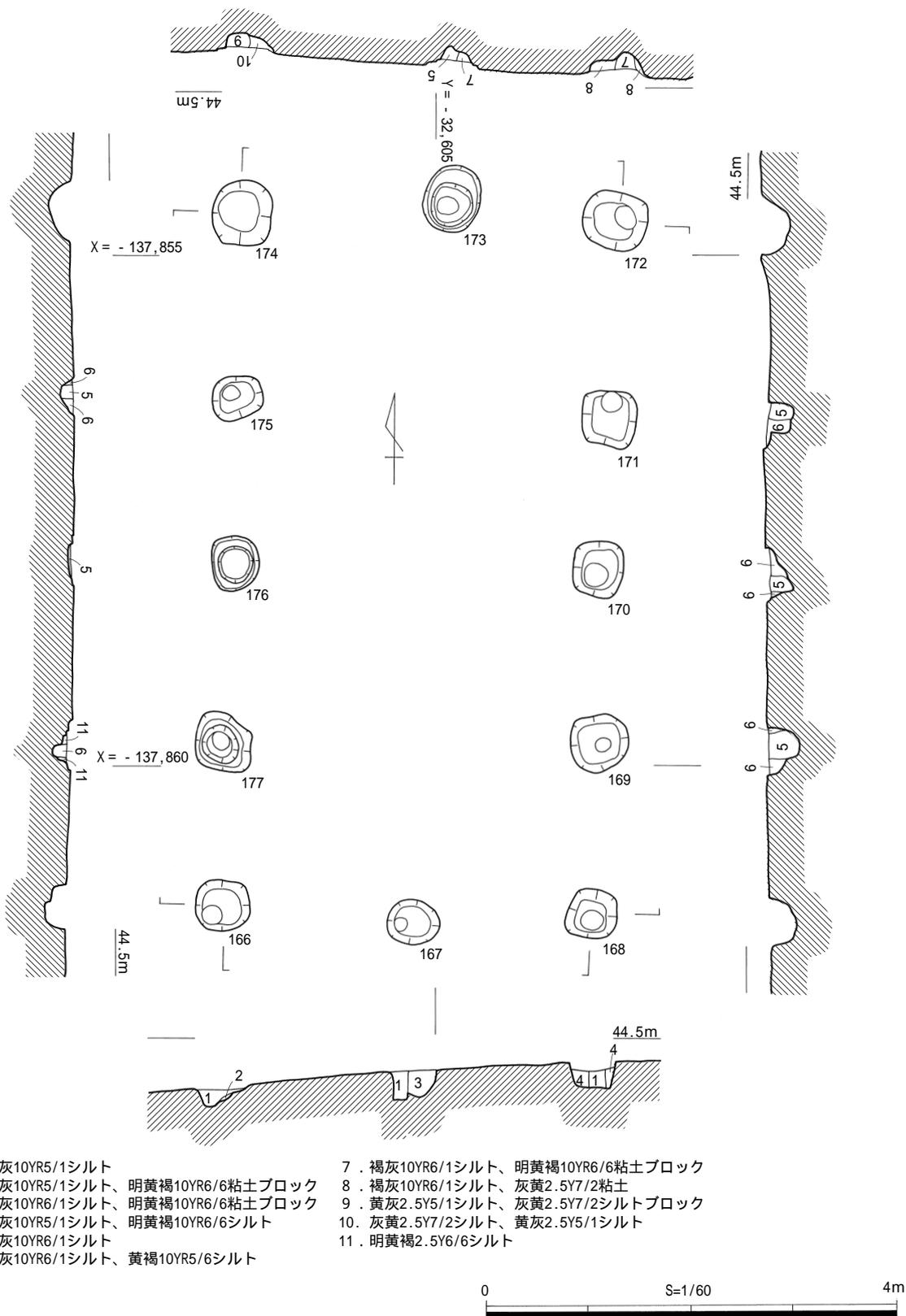


図15 05-1 4・8・9・270 豎穴住居



- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1. 褐灰10YR5/1シルト | 7. 褐灰10YR6/1シルト、明黄褐10YR6/6粘土ブロック |
| 2. 褐灰10YR5/1シルト、明黄褐10YR6/6粘土ブロック | 8. 褐灰10YR6/1シルト、灰黄2.5Y7/2粘土 |
| 3. 褐灰10YR6/1シルト、明黄褐10YR6/6粘土ブロック | 9. 黄灰2.5Y5/1シルト、灰黄2.5Y7/2シルトブロック |
| 4. 褐灰10YR5/1シルト、明黄褐10YR6/6シルト | 10. 灰黄2.5Y7/2シルト、黄灰2.5Y5/1シルト |
| 5. 褐灰10YR6/1シルト | 11. 明黄褐2.5Y6/6シルト |
| 6. 褐灰10YR6/1シルト、黄褐10YR5/6シルト | |

図16 05-1 165掘立柱建物

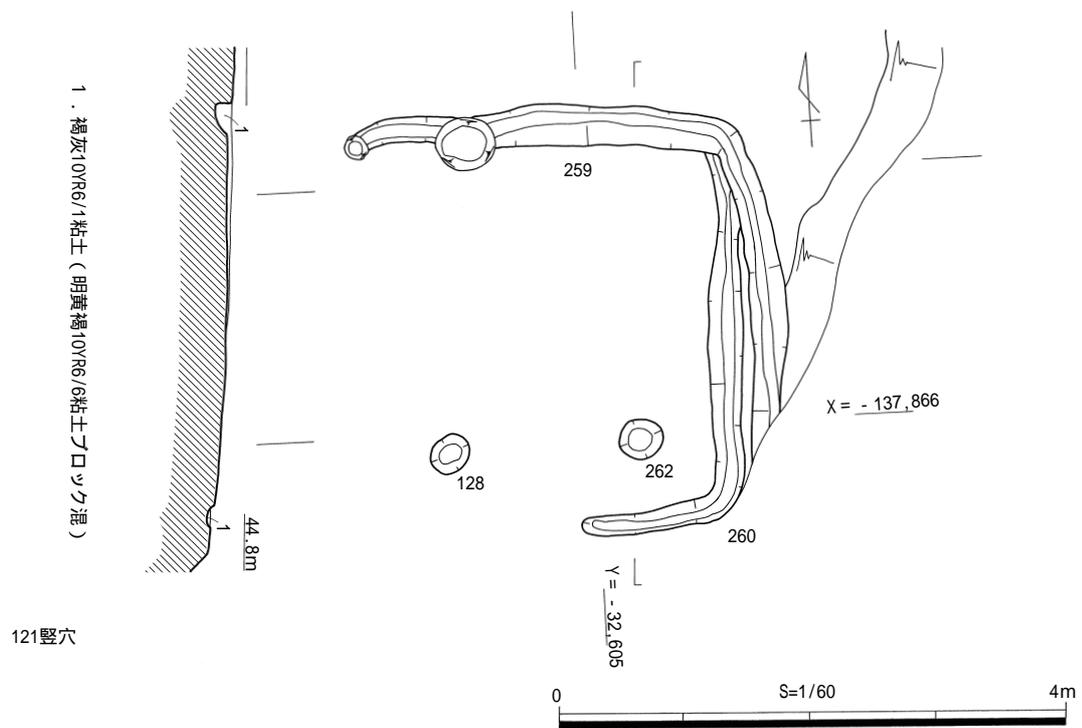
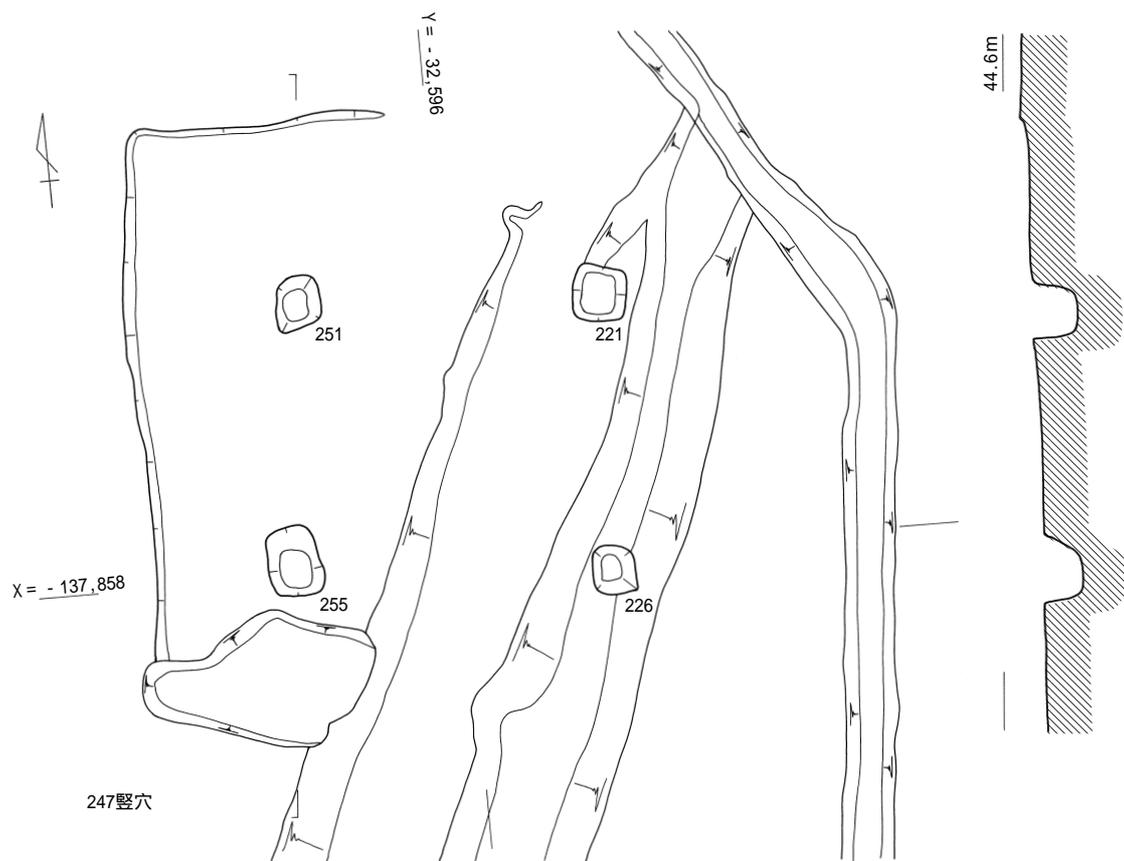


図17 05-1 121・247竪穴住居

ずれも覆土はほとんどなく、壁溝のみを検出した。内部からは柱穴を多数検出したが、組み合わせは不明である。西側半分が削平をうけ、全容は明らかではない。切り合い関係から9 竪穴住居が8 竪穴住居より後出する。

270竪穴住居 (図15、図版11-4) 平面円形を呈し、復元直径約5.5mを測る。壁溝を約1/4検出した。組み合う柱穴は不明である。

古代

165掘立柱建物 (図16、図版12-1) 桁行4間、梁間2間、約7.0m×3.6mの平面規模を有する南北棟建物である。柱間隔は1.5~2.0mを測る。柱穴は一辺約0.3mの方形を呈し、深さ約0.1~0.3mを測る。

121竪穴住居 (図17、図版12-3) 165掘立柱建物の南側に位置しており、平面方形を呈し、一辺約3.4mを測る。東辺が165掘立柱建物の東側柱筋と合致する。北東側に覆土が残存し、南西側に向かって削平を受けていたため、壁溝は全周しない。内側の260壁溝が先行し、259壁溝が後出する。

- 1. 明黄褐2.5Y6/6シルトブロック
- 2. 褐灰10YR5/1シルト (明黄褐2.5Y6/6シルトブロック混)

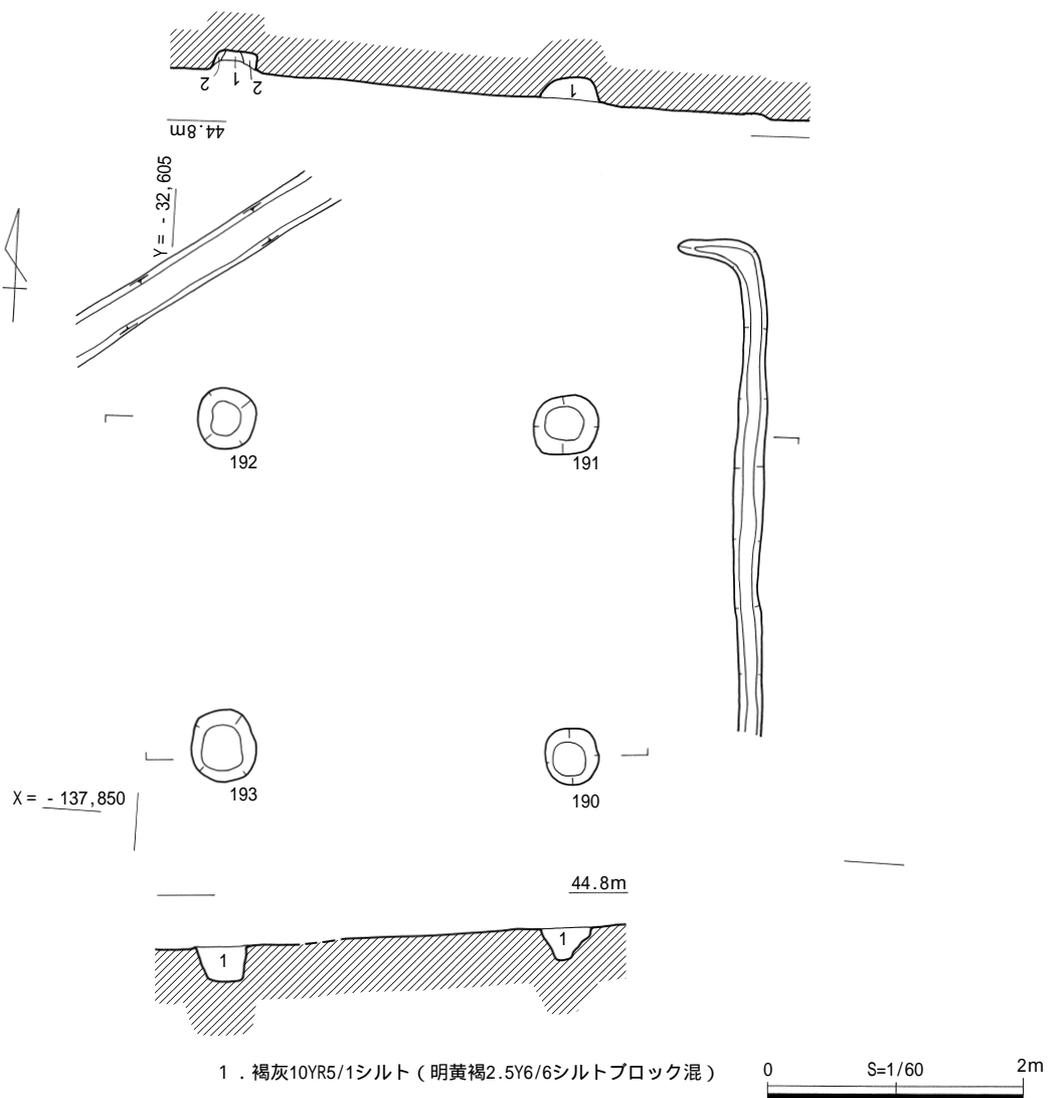


図18 05-1 267竪穴住居

247竪穴住居（図17、図版12-2） 165掘立柱建物の東側に位置しており、平面方形を呈し、一辺推定約5mを測る。北辺が165掘立柱建物の北側柱筋と合致する。北西側に覆土が残存していた。床面には支柱穴が4基、方形に配置されている。柱穴は一辺約0.4mの方形である。壁溝は存在しない。

267竪穴住居（図18、図版12-4） 165掘立柱建物の北側に位置しており、平面方形を呈し、一辺推定約5.5mを測る。165掘立柱建物の軸と一致する。壁溝は東側のみ検出した。床面には支柱穴が4基、方形に配置されている。柱穴は一辺約0.5mの方形である。

（4）遺物（図19・20、図版30～32）

今回の調査で弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、石器が出土した。図19はすべて弥生土器で、時期は中期中葉～後葉である。8～23は5溝、24は88土坑より出土した。

8～11は壺である。8はやや内傾して立ち上げた付加状口縁に3帯の凹線を施した後、口縁端部と口縁部から頸部の境に刻目を巡らせる。頸部と体部の境には押圧突帯を施す。9は口縁部に1帯、体部に2帯の精緻な簾状文が確認できる。10は残存部分の形状や文様の配置より広口壺の体部であると考えられる。上方より11条単位の直線文と同一原体により施された波状文を交互に配する。11はやや小型の壺である。口縁部の中央には突帯に刻目を施したものを一帯巡らし、その突帯を挟み上下にやや不揃いな円形浮文を配する11は8～10と様相が異なり装飾や口縁部の形状より搬入品であると考えられる。

12・13・24は蓋である。12は外面上部に1条の沈線様の痕跡が確認できる。13は口縁端部に孔を確認できる。12・13は内面外面ともに2次焼成を受ける。3個体ともに器表面の剥離が著しい。

14～16は台付鉢又は鉢の口縁部から体部である。14は肥厚させた口縁部に斜線文、体部に簾状文を施す。内面は縦方向のミガキを施す。15・16は両個体ともに口縁部端面は剥離が著しく詳細は図化できなかったが、外面に簾状文の痕跡を確認することができる。体部にも簾状文を施す。

17は甕、18～21は壺の底部である。19・20は剥離が著しく詳細は確認できなかった。17は内面に横方向のハケ、18は外面に縦方向のハケの調整を施す。

22・23は高杯の脚部である。22は杯部の底を円盤充填法により成形する様子が明瞭に観察できる。内外面ともにナデの調整を施す。23は脚部内面が未調整でしぼり目が顕著に残る。

25・26は石器である。2点とも既刊の報告書、『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』の報文で大型尖頭器と分類したものにあたる。ともに先端を欠損しており、基部に相当する部分の破片である。両側縁からの両面加工によって中央に鑄を作り出しているのは共通するが、25は片面の鑄付近から部分的に側縁にかけかけて丁寧な研磨を施している。また、反対側の面も剥離痕が残るものの、中央部をわずかに研磨している。側縁は階段状剥離の後、細かな刃部の作出を行っており、部分磨製石剣の未製品の残欠と考えておきたい。基部端面には原礫面が残っている。残存長6.20cm、残存最大幅（上端）2.83cm、残存最大厚1.41cmである。サヌカイト。58土坑から検出した。一方26は、階段状剥離によって成形しているが、片面が大きく欠損している。割れ面にも剥離痕が残り、一端に細かなリタッチがあることから搔器として転用したものかも知れない。全体に細身であり、本来は打製石剣あるいは小型の石槍を意図していたものと思われる。サヌカイト。残存長5.33cm、残存最大幅2.40cmである。

3 まとめ

調査地が平成15年度調査地と隣接しており、遺構が丘陵端まで拡がっていることが明らかになった。

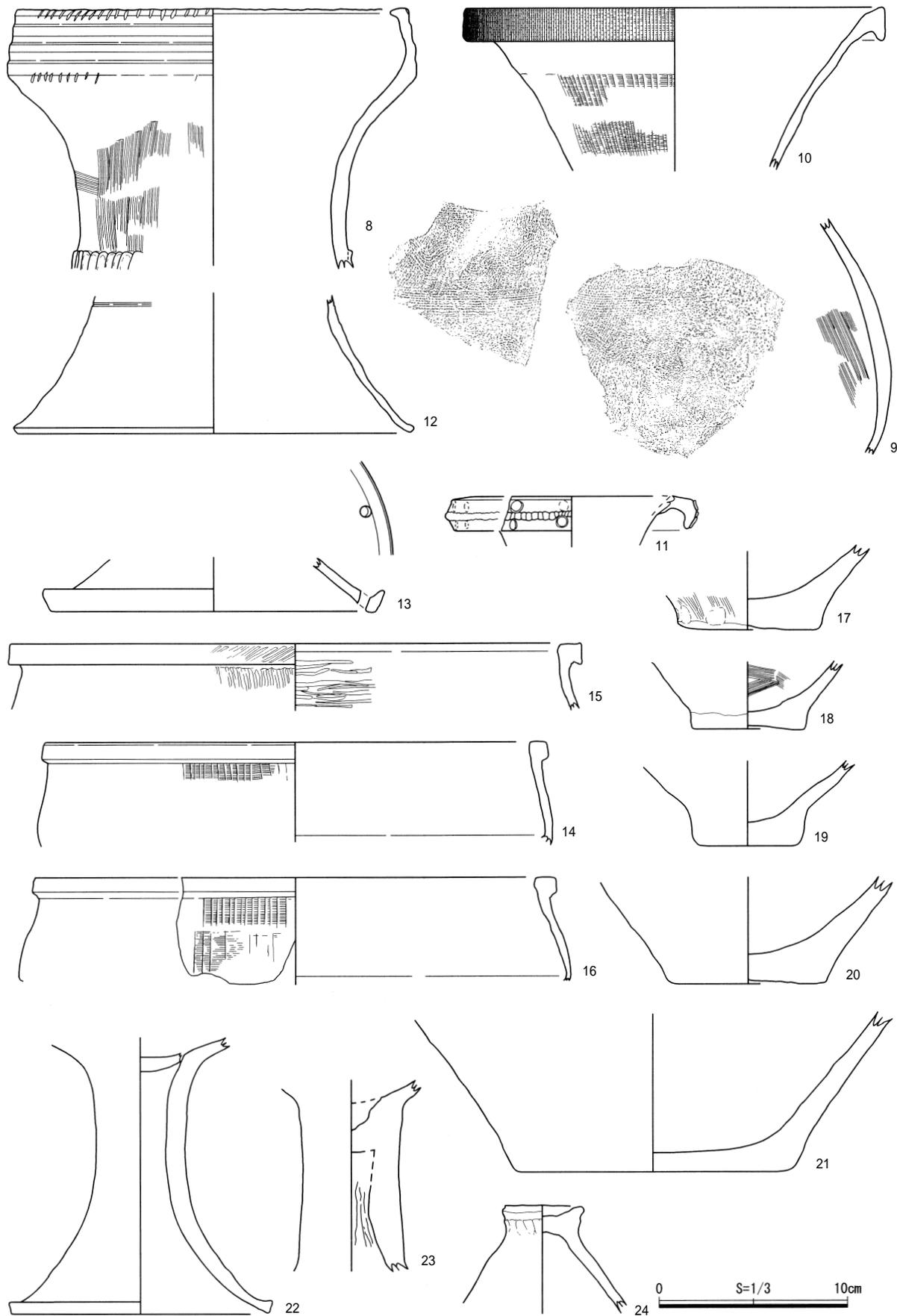


图19 05-1 出土土器

弥生時代では周溝墓1の全容がわかり、また周溝の断面の内側が垂直にたち上がる特徴をもつことがわかった。

3墓壙からは組み合わせの木棺痕跡を確認することができた。出土遺物はなかったが、弥生時代に属する可能性が高いと考えられる。この墓壙に伴う周溝等の遺構はなく、単独で存在していたと考えられる。

竪穴住居は周溝墓1下層の4竪穴住居の他、8・9・270竪穴住居を検

出した。平成15年度調査で明らかになった集落が、より拡がりをもっていたことがわかった。また、調査区全域から小穴を多数検出しており、埋土や既調査の状況から、その多くが弥生時代の竪穴住居に伴う遺構である可能性が高いと考えられる。

谷をはさんで西側にある大尾遺跡では、同時期の周溝墓群と1棟の竪穴住居が検出されている。今回の太秦遺跡調査区では竪穴住居の他、周溝墓1や3墓壙を検出した。このように、大尾遺跡が墓域、太秦遺跡が集落域との分別が認められる中で、双方において竪穴住居と墓が検出されている事実から、谷という地形で分割されながらも、両遺跡の集落域と墓域という性格が明瞭に分離していない時期もあったことを窺うことができる。

古代では165掘立柱建物の北、東、南側から竪穴住居を検出した。柱筋が合致するなどの配置状況から同一時代に存在していた可能性が窺える。

平成15年度の03-1で竪穴住居2棟、掘立柱建物12棟を確認しており、今回の調査により、同様の掘立柱建物や竪穴住居を検出した。古代の集落がさらに西側に拡がることが明らかになった。前述した大尾遺跡でも古代の掘立柱建物群が検出され、集落が谷をはさんで両側に拡がっていることがわかった。高宮廃寺との関連も切り離すことはできない。

今回の調査では以上の遺構が確認できた他、西側への谷地形の復元や遺跡の拡がりにも大きな手がかりを得ることができた。平成16年度に実施した谷北側にあたる04-2でも、弥生時代の遺構が検出されており、さらに今回の調査地のような丘陵端においても遺構が拡がっていることがわかった。両調査地の遺構のあり方から丘陵上の緩斜面上にも遺構が連なって存在することが考えられ、大尾遺跡と太秦遺跡・太秦古墳群は谷奥で連なったひとつの遺跡であることが想定できる。(図11)

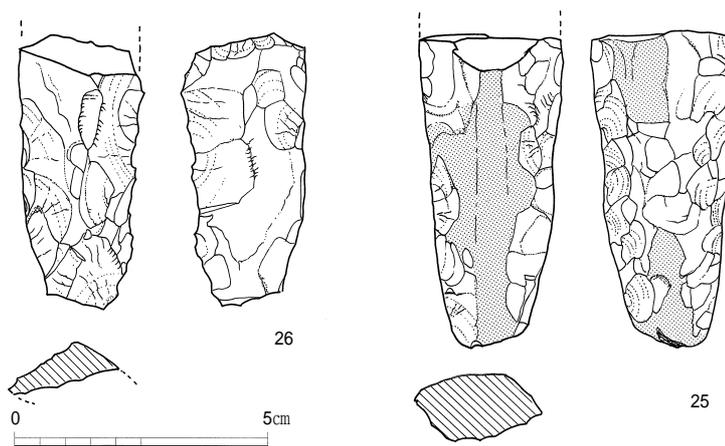
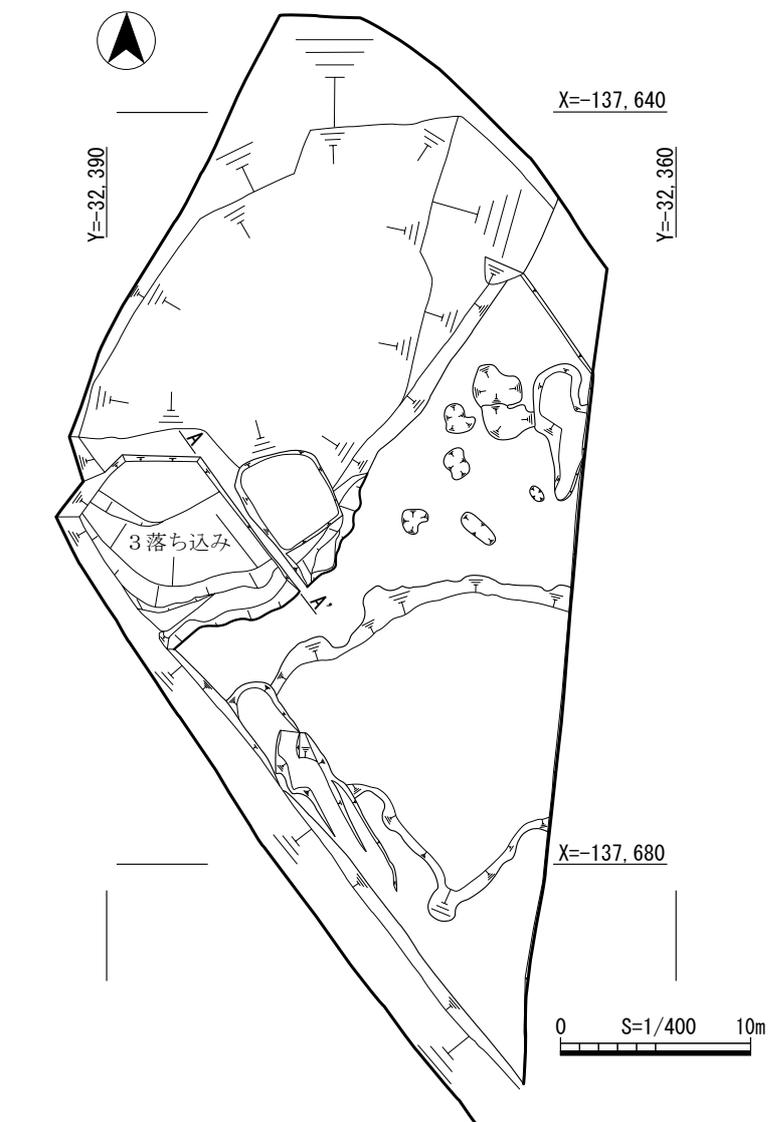
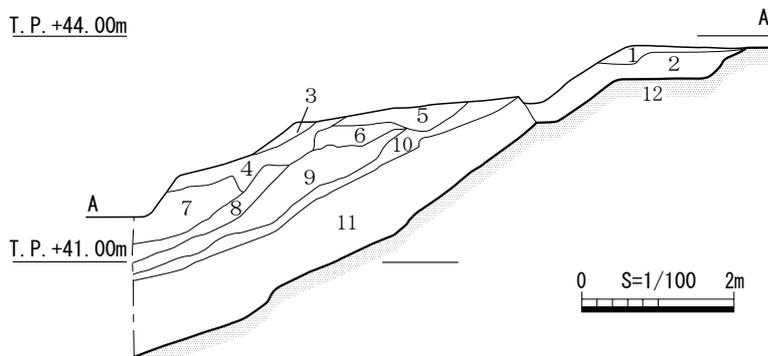


図20 05-1 出土石器

第2節 05-3



T. P. +44. 00m



- | | |
|--|------------------------------------|
| 1. 2. 5Y5/4黄褐色砂質土 | 7. 10YR4/6褐色粘土 |
| 2. 10YR6/6明黄褐色砂質土
(1~10cm大の礫含む) | 8. 2. 5Y4/4オリーブ褐色粘土
(3mm大の礫含む) |
| 3. 5Y5/2灰オリーブ色砂質土 | 9. 10YR5/8黄褐色砂質土
(5mm~3cm大の礫含む) |
| 4. 2. 5Y4/2暗灰黄色粘土 | 10. 10YR4/4褐色砂質土 |
| 5. 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 | 11. 10YR5/6黄褐色砂質土 |
| 6. 2. 5Y4/3オリーブ褐色粘土
(5mm~3cm大の礫、10YR5/6黄褐色粘土含む) | 12. 地山・10YR6/8明黄褐色砂質土 |

図21 05-3 1区 平面図・断面図

1 調査概要

建設工事の進捗にあわせて3つの地区に分けて調査を行った。調査順に1区・2区・3区と呼ぶ。

1区は道路敷地内の未調査だったところであり、小方墳群が発見された調査区(01-1 尾支群)の北西に接している。盛土および表層土を機械力で除去し、遺物包含層を人力で掘り進んだ。

2区は工事用進入路の用地として調査が必要になったところで、小方墳群が南に広がる地区(03-1の3トレンチ)の南に接している。竹林を機械力で伐開の後、人力で掘り進めた。

3区は同じく工事用進入路用地で、弥生時代中期の集落が発見された調査区(03-1の8トレンチ)の北に接している。掘削用重機が侵入困難であったため、表層から人力にて掘り進めた。

2 調査成果

(1) 全体層序

1区は、南の高いところは削平を、北の低いところでは攪乱を受けて本来の状態ではなかったが、一部の範囲で北側へ落ちる開析谷の斜面堆積が遺存していた(図21 3落ち込み)。

この土中から弥生土器・須恵器および土師器が出土している。また攪乱土中からはガラス小玉を検出した。

2区は表層土の下に粘質で黄褐色の旧耕作土と思われる土層が10~20cmあり、その直下が同じく粘質黄褐色の地山となる。この地山面で、13溝および14溝が検出された。これは03-1で見

ついていた19・21号墳周溝の延長部にあたっている。

3区でも同様に、旧耕作土と思われる粘質オリーブ褐色系の土層が0.4mの厚みで存在し、その直下が粘質橙色の地山となる。この地山面で、03-1で見つかった大溝（3208溝）の延長部（29溝）と、落込み（30土坑）及びピット群が検出された。

（2）遺構

2区の13溝（19号墳周溝）は、幅1.5m、深さ0.25mで、約1m分を検出した。内部上半には粘質の黒褐色土があり、その下は底まで粘質の黄褐色土である。上半から石鏃が出土しているほかは、いずれの層からも遺物は出土しなかった。

14溝（21号墳周溝）は、幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.2mで約4m分を検出したが、ここで途切れている。03-1調査区でもこの周溝は断続的にしか検出されず、とくに西隅部においては元々浅かったものと思われる。とすれば本調査区でも途切れたところが南隅であった可能性があり、その場合に03-1調査区の結果と合わせるとこの古墳は、一辺7～8mほどの小振りのものであったことになる。

なお調査区東部の27土坑は、近世以降の落ち込みで、下部に還元土壌がある。

3区の29溝は、幅2.4～2.6m、最深0.7mで、03-1 3208溝の延長部にあたる。約5m分を検出した。内部には、前調査で黒褐色シルトとされた土層に対応する土があり、その下には底まで堆積する黄褐色の粘土がある。旧調査では遺物が出土せず、中世以降のものかと推測されたが、今回、黒褐色シルト及びその下位から弥生土器が出土した。したがってこの溝は弥生時代の遺構の可能性が非常に高くなった。

30土坑は不定形の落ち込みで、長2.0m、幅1.6m、深さ0.15mである。内部には29溝での黒褐色シルトの下位の粘質土と同様の土が堆積し、弥生土器片が少量含まれていた。したがってこれも弥生時代の遺構と判断する。

ピット群は直径0.2m前後のものが大半で、建物等に復元することはできなかった。遺物の出土はなく、時期は不明である。

（3）遺物（図23）

1 弥生中期の壺底と、2 土師器高坏脚部は、1区での開析谷斜面堆積層中からの出土。丘陵上部からの流れ込みであろう。

3 須恵器壺口縁と4 染付け碗は、2区の27土坑中からの出土。

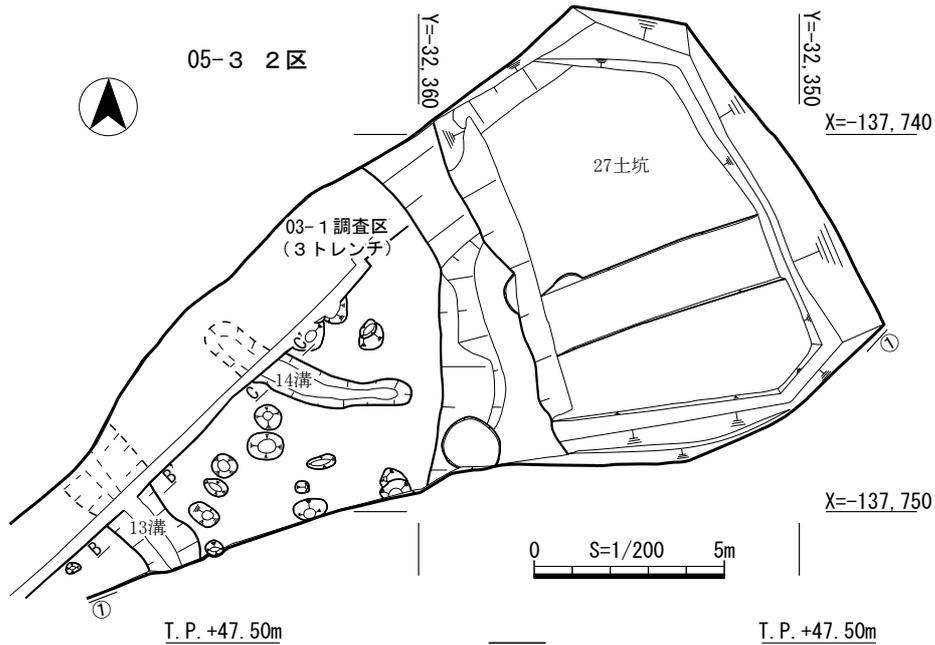
5～11は、3区の29溝中からの出土。弥生時代中期後半の土器と石器である。11のサヌカイト石錐は長4.8cm、幅2.4cm、厚0.8cm。

12の凹基無茎式石鏃は2区19号墳周溝内からの出土で、長4.8cm、幅2.4cm、厚0.8cm。弥生時代でも少数ながらあるタイプのものと思われる。

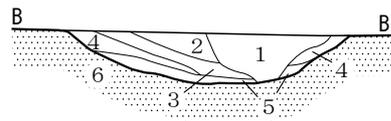
13のガラス小玉は、1区の攪乱土中から出たもので、長5.0mm、径4.5mm、孔径1.7mm。鮮やかに濃い水色を呈すカリガラス製で、丹後地方などに多く見られるような弥生時代のものかと思われる。

3 まとめ

本調査区では、弥生時代の大溝（3区 29溝）と、古墳周溝の続き（2区 2基分）が検出遺構の主なものである。3区の大溝は前の調査（03-1 3208溝）では時期が不明であったが、今回の調査で弥

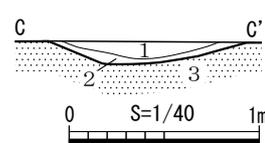


13 溝 (19号墳)

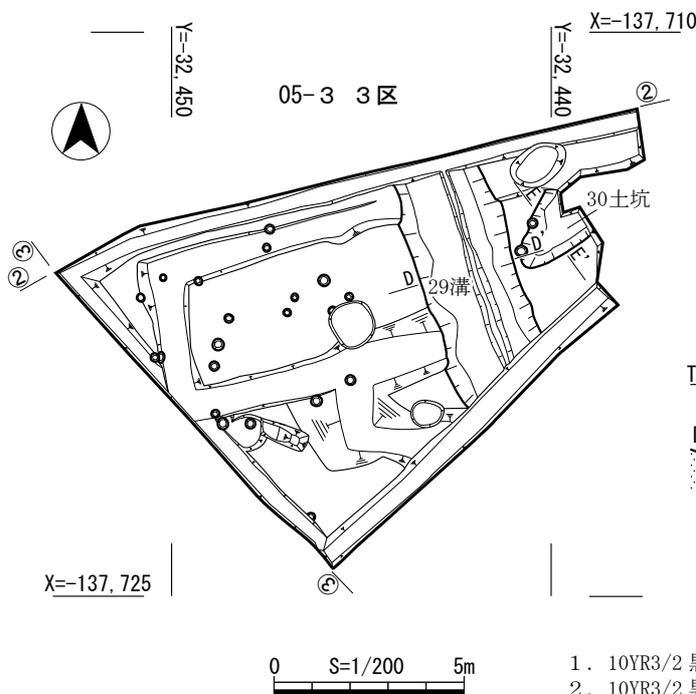


- | | |
|------------------|---------------------|
| 1. 2. 5Y5/3黄褐色粘土 | 4. 2. 5Y5/4黄褐色粘土 |
| 2. 10YR3/2黒褐色粘土 | 5. 10YR5/6黄褐色粘土 |
| 3. 10YR3/1黒褐色粘土 | 6. 地山・10YR6/6明黄褐色粘土 |

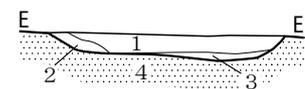
14 溝 (21号墳)



- | |
|---------------------|
| 1. 2. 5Y5/3黄褐色粘土 |
| 2. 2. 5Y5/4黄褐色粘土 |
| 3. 地山・10YR6/6明黄褐色粘土 |

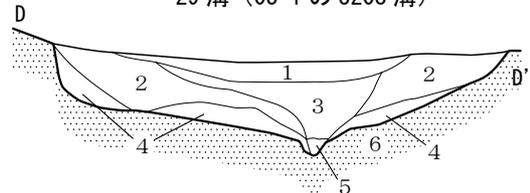


30 土坑



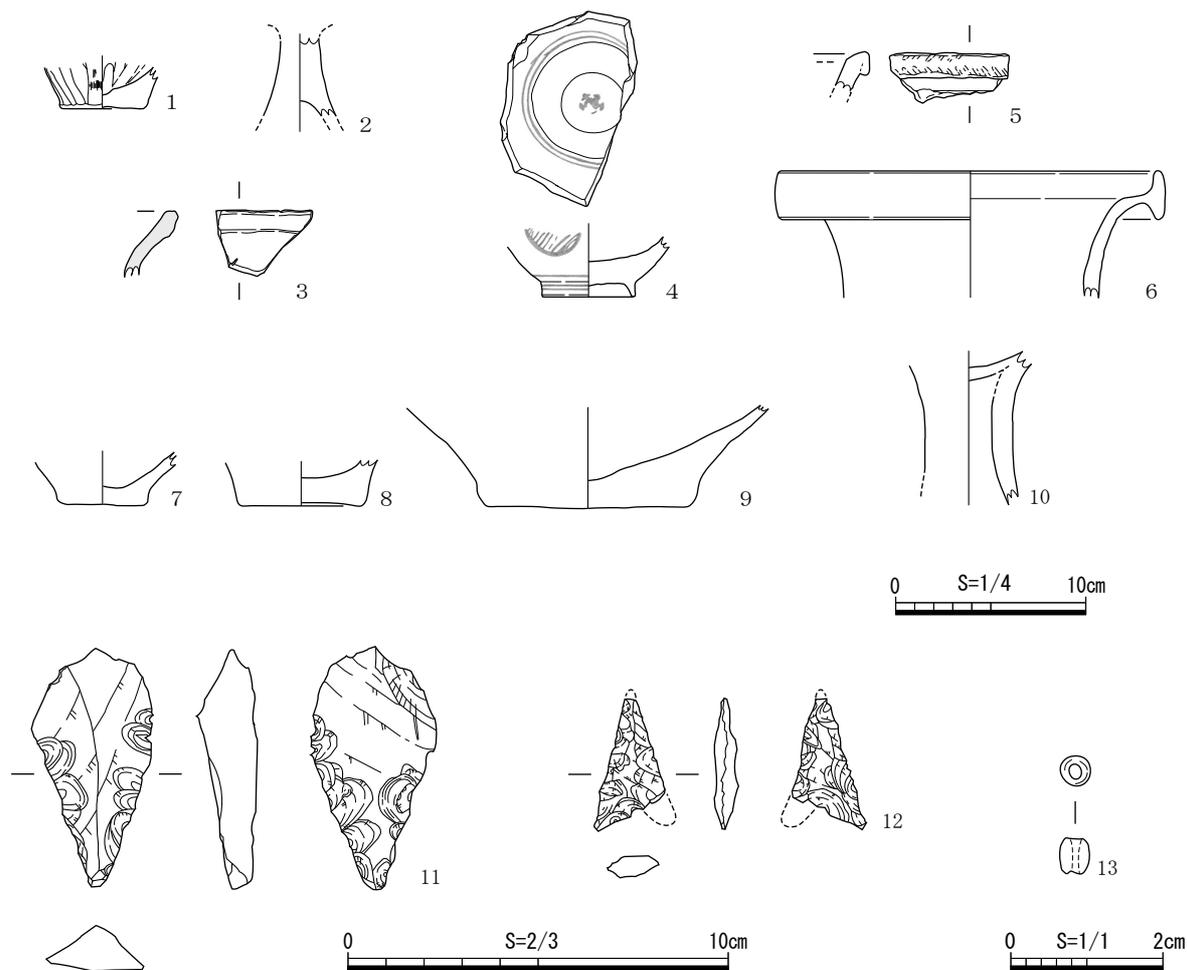
- | |
|--|
| 1. 7. 5YR4/4褐色粘土 |
| 2. 10YR5/6黄褐色粘土 |
| 3. 10YR5/4にぶい黄褐色粘土
(7. 5YR5/8明褐色粘土ブロック含む) |
| 4. 地山・5YR5/8明赤褐色粘土 |

29 溝 (03-1 の 3208 溝)



- | |
|---|
| 1. 10YR3/2 黒褐色シルト (土器片含む) |
| 2. 10YR3/2 黒褐色シルト (土器片含む) |
| 3. 10YR4/4 褐色粘土 (マンガング粒、土器片含む) |
| 4. 10YR5/8 黄褐色粘土 (10YR6/4 にぶい黄褐色粘土ブロック含む) |
| 5. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 |
| 6. 地山・7. 5YR6/8 橙色砂質土 (大礫含む) |

図22 05-3 2区・3区 平面図・断面図



1-2 1区3落ち込み
3-4 2区27土坑

5-11 3区29溝
12 2区13溝

13 1区攪乱土中

図23 05-3 各区出土遺物

生時代のものであることがほぼ確実となった。この少し南で多く見つかっている住居群の時期-中期後半(Ⅲ期~Ⅳ期)と時期が同じである。おそらく弥生集落の北側を限る境界の溝だったのであろう。なお、この大溝内に堆積する「黒褐色シルト」は、近接する古墳群(尾支群)の周溝内や、07-1の弥生大溝(本書53ページ)の内部に存在する黒ボク様の堆積層と同じものである。周辺ではこの真っ黒とも見える層が遺構内から見つかれば、たとえ遺物が出土しなくとも、その遺構の時期が古代あるいはそれ以前である可能性を、まずは考えてみる価値はあると考える。(第8章参照)

第3節 06-1

1 調査概要

本調査区は第二京阪道路の隣接地で、道路建設工事にともなう地元用の迂回路設置にあたって調査が必要になったものである。南西方向へ下っていく開析谷の谷頭にあたる場所で、地表面の高さは48.6m、地山面で48.1m前後と、これまで調査された太秦遺跡のなかでは最も高所にある。

盛土・旧表土を機械力によって除去した後、人力によって遺構の検出・掘削を行った。調査区の位置、

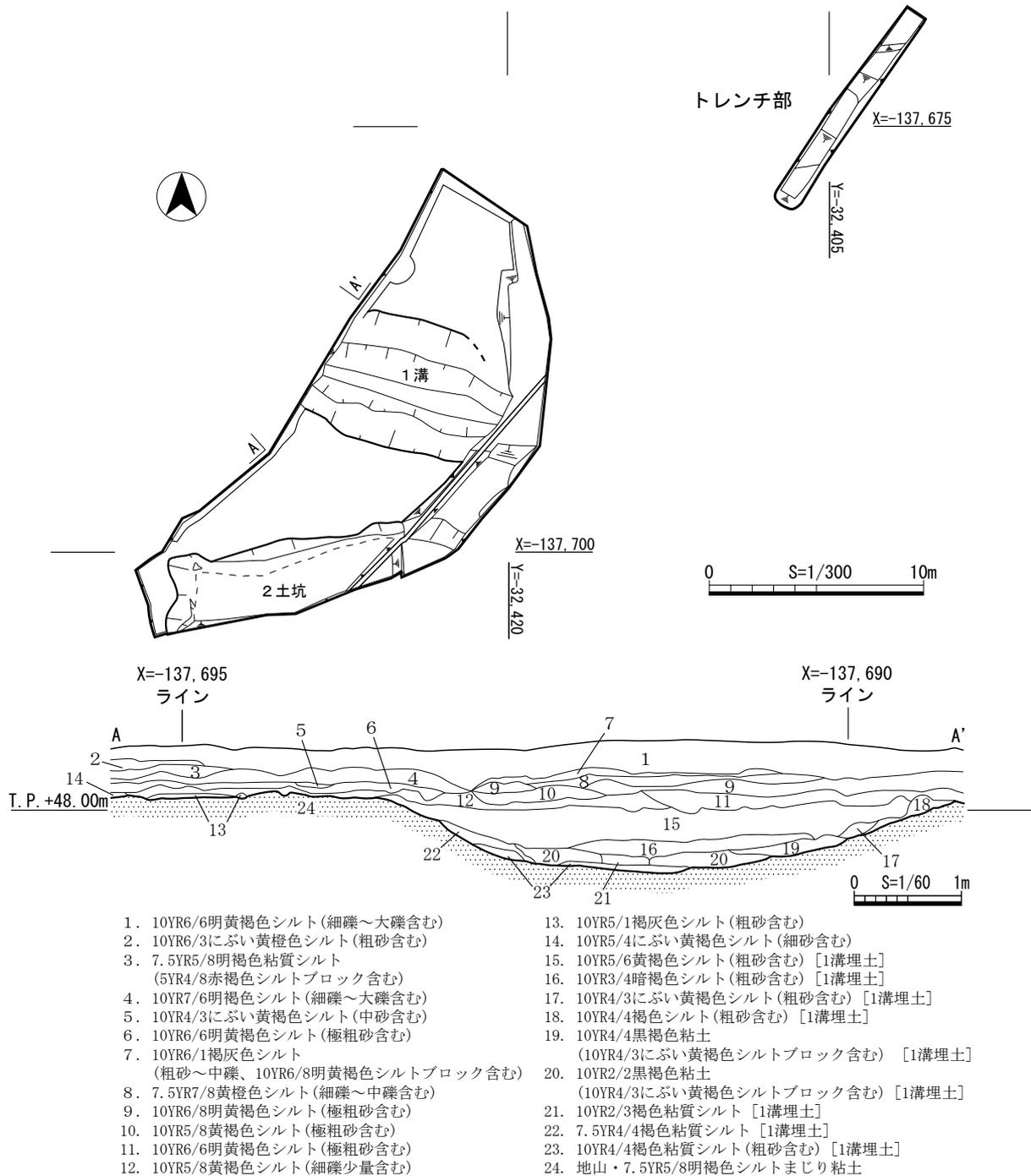


図24 06-1 平面図・断面図

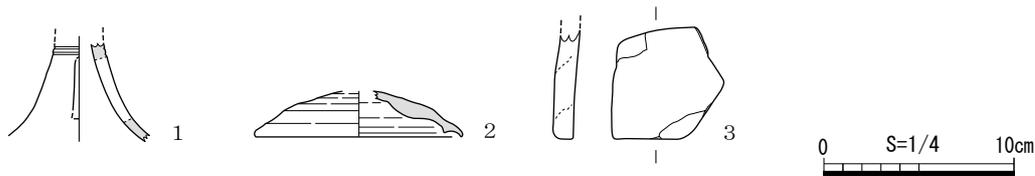


図25 06-1 1溝 出土遺物

遺構の平面図は世界測地系の国土座標をもとに実測し、空中写真測量はおこなっていない。

また調査区の北東10-20mの位置では、第二京阪道路の敷地境界における擁壁工事に先立って、トレンチ調査も行った。

2 層位および遺構

旧表土の下は無遺物の黄褐色系のシルトで、この下に黄褐色～橙褐色・粘質の地山がある。遺構としては調査区の中央を東西に延びる、幅6m前後、深さ0.6～0.8mの溝（溝1）を検出した。側面の傾斜はゆるく、底もゆるくカーブして平坦面はない。埋土は底部付近に暗褐色系のシルトが0.1～0.2mの厚みで存在し、中位以上は黄褐色系のシルトで充填されている。中位付近から須恵器および埴輪片が出土した。

調査区南部においては旧表土直下から急傾斜で掘り込まれた土坑を検出したが、これは近世あるいはそれ以降の土取り穴であろう。

トレンチ部は、03-1の1・2トレンチに接する場所にあたる。南北方向への浅い落ち込みがあるものの、遺物は出土していない。

3 遺物（図25）

図示したものはすべて1構内の中位から出土したものである。1は須恵器の高坏脚部、2は坏蓋で身受けの返りがあるもの。直径11cm前後の小形品で7世紀中ごろのものであろう。3は円筒埴輪の基部であるが磨耗が著しく、内外面ともに調整手法は不明である。

4 まとめ

1溝は、その延長部が本調査区の東側の06-2（本書で後述）で調査されている。浅く広がって、より深い南北溝に合流し、南の開析谷に流下していたようだ。内部から7世紀の須恵器が出土し、また延長部の06-2でも7世紀頃の土師器甕が出ているが、量が少なく決め手に欠ける。またそれらが二次堆積でないとも断定できない。しかし溝内の下位にある黒褐色の粘土は、周辺で見られる黒ボク様の土層よりも薄いものだが似てはおり、遺構の下限を古代末期頃とする可能性を残すものである。

本調査区から南西150～300m、T.P.44～45mのところには、7～8世紀の竪穴住居、掘立柱建物が検出されている（03-1）。1溝が古代のものとするれば、古代集落群は本調査区の西部の近接地にまで広がっていて、1溝はその結界の溝とすることができる。

第4節 06-2

1 調査に至る経緯と調査方法

本調査区は、大阪府寝屋川市太秦高塚町（旧国守町・打上・太秦）に所在し、北西－南東に延びる市道太秦打上線に、東西に延びる市道国守10号線が結節する場所に位置する。周知の太秦遺跡・太秦古墳の範囲内において、第二京阪道路および大阪北道路建設が計画されたことから、大阪府文化財センターは平成13年度から継続的に発掘調査を行っており、本調査区は主に、平成13年度と平成15年度（03-1）調査範囲に挟まれた道路下の未調査部分にあたる。

当センターは国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、平成18年11月14日から機械掘削、同月21日から人力掘削を開始し、平成19年2月27日に発掘調査を終了した。調査面積は約1,100㎡である。

調査は、市道国守10号線の迂回路を設置するため、まず調査区南東部を優先して行い、通行の切り替え後、残りの範囲の調査を実施した。アスファルト・整地土と、明らかに近代に堆積したと判断できる地層を重機によって機械掘削した後、人力により遺構の検出・掘削を行った。また調査区を縦断する形で、地表面下約1～1.5mに水道管、電話線などが埋設されており、必要に応じて撤去した。遺構の測量については世界測地系に準拠する平面図直角座標系第Ⅵ系を、水準は東京湾平均海水準面（T.P.）を基準としている。以上に基づき、適宜縮尺を設定して遺構図を作成し、随時、写真撮影を行った。遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順番に1から番号を通して付けている。出土した遺物は、先の座標軸による10m間隔の区画毎に、登録番号、層位、遺構名、日付などを明記し取り上げた。出土遺物の登録、洗浄、注記などの基本的な整理は、発掘調査と並行して現場で行い、調査終了後、遺物、図面を京阪調査事務所寝屋川分室に移送し、遺物の復元、実測、製図など報告書作成作業を実施した。

2 調査成果

（1）基本層序（図26）

調査区は、北東－南西方向の丘陵上に位置しており、市道太秦打上線は、その丘陵を断ち切る形で北西－南東方向に延びる。調査前の状況では、丁度、市道国守10号線との結節点あたりから、北西に向かって下っていく地形であった。下り坂となるその西側には、道路造成の改変を受けずに丘陵本来の地形に近いと考えられる場所が高まりとなって残っており、この付近の標高が最も高く、耕作土除去後の地山層の標高はT.P.+46.6～46.8mとなっている。また、調査区の南西側には、造成により埋没している谷地形（谷2）が存在している。

調査範囲のほとんどが道路造成による削平を受けているため、約0.4～0.6mほどの現代整地土を除去すると明褐色系粘質シルトの地山層となる。遺物包含層は一部、わずかに黄褐色細砂層・シルト層（図26 ②-9・10・14層）としてみられるのみで、ほとんど存在していなかった。そのため、地山層においてすべての遺構を検出した。また先述したように、調査区を縦断して水道管などの埋設による攪乱を受けているため、遺構の遺存状態は悪い。調査区南西側は、谷地形となっているため南に向かって緩やかに傾斜している。本調査区を西に進むにつれて、谷への落ち込みの範囲は広がり、その斜面上には、黄褐色シルトが約0.2～0.5mほど堆積していた。

(2) 遺構 (図27、図版17~19)

調査の結果、溝・土坑・ピットを検出した。ほとんどの遺構が、整地土下の地山層で検出されているため、本来の遺構の掘込み面より低くなっている。攪乱を受けているものが多いため遺存状態は決して良好とはいえず、特に北西-南東方向に延びる市道太秦打上線の北半部分では、道路造成により遺構が全く検出できない状況であった。ただ今回の調査によって、以前の調査区から延びる古墳の周溝や溝以外にも、新たな古墳の周溝や高まり上でピット群が見つかるなど新たな知見を得ることができた。

出土した遺物は、すべて土器である。遺物包含層がほとんど存在しないため、土器の出土量はコンテナ1箱分と少量である。また遺物を伴わない遺構が多く、出土しているものでも、ほとんどが土器の細片であった。したがって、時期については明確にできない遺構が多くを占めるが、以前の調査成果で時期が明確にされている遺構や、逆に今回新たに検討を行った結果、以前の調査成果とは異なる時期と判断された遺構も存在しているため、各遺構を時期別に述べることにする。

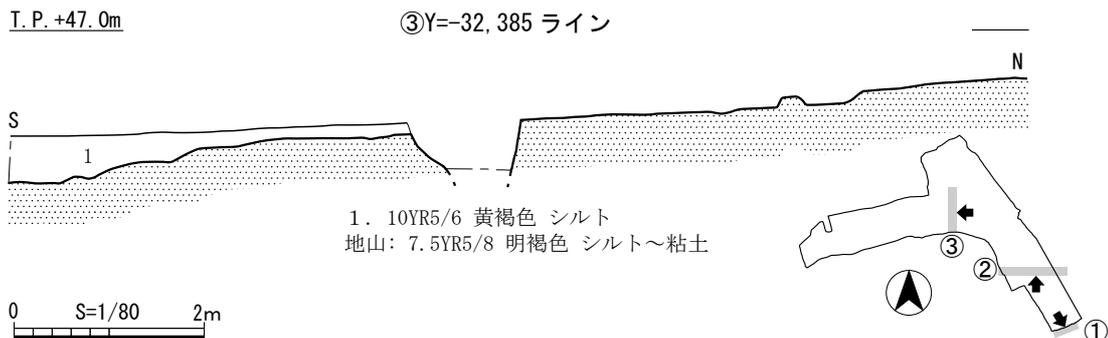
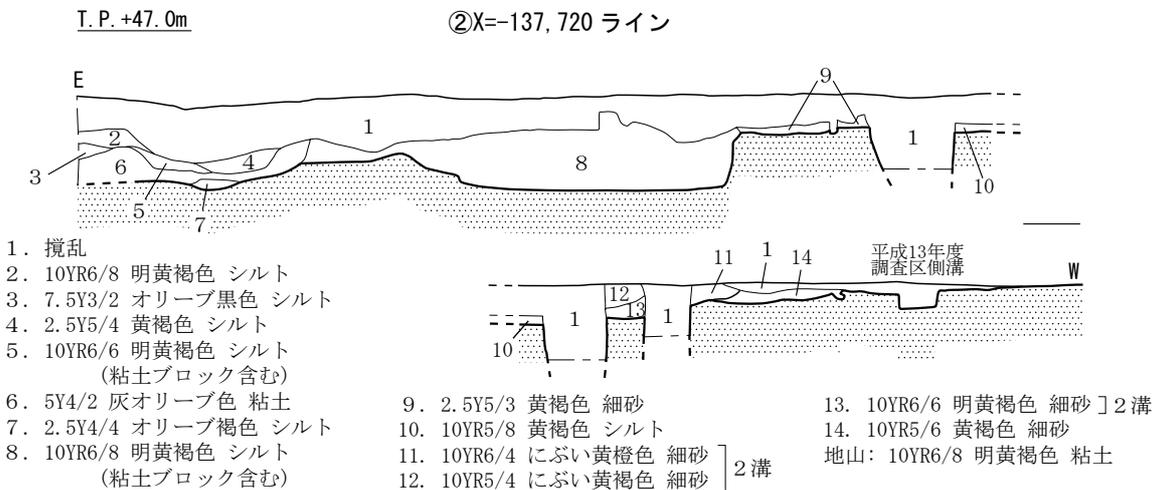
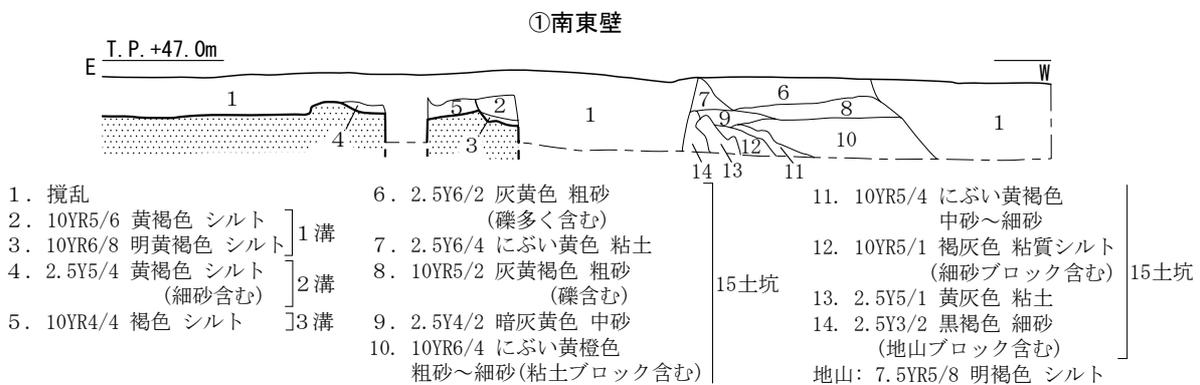


図26 06-2 基本層序

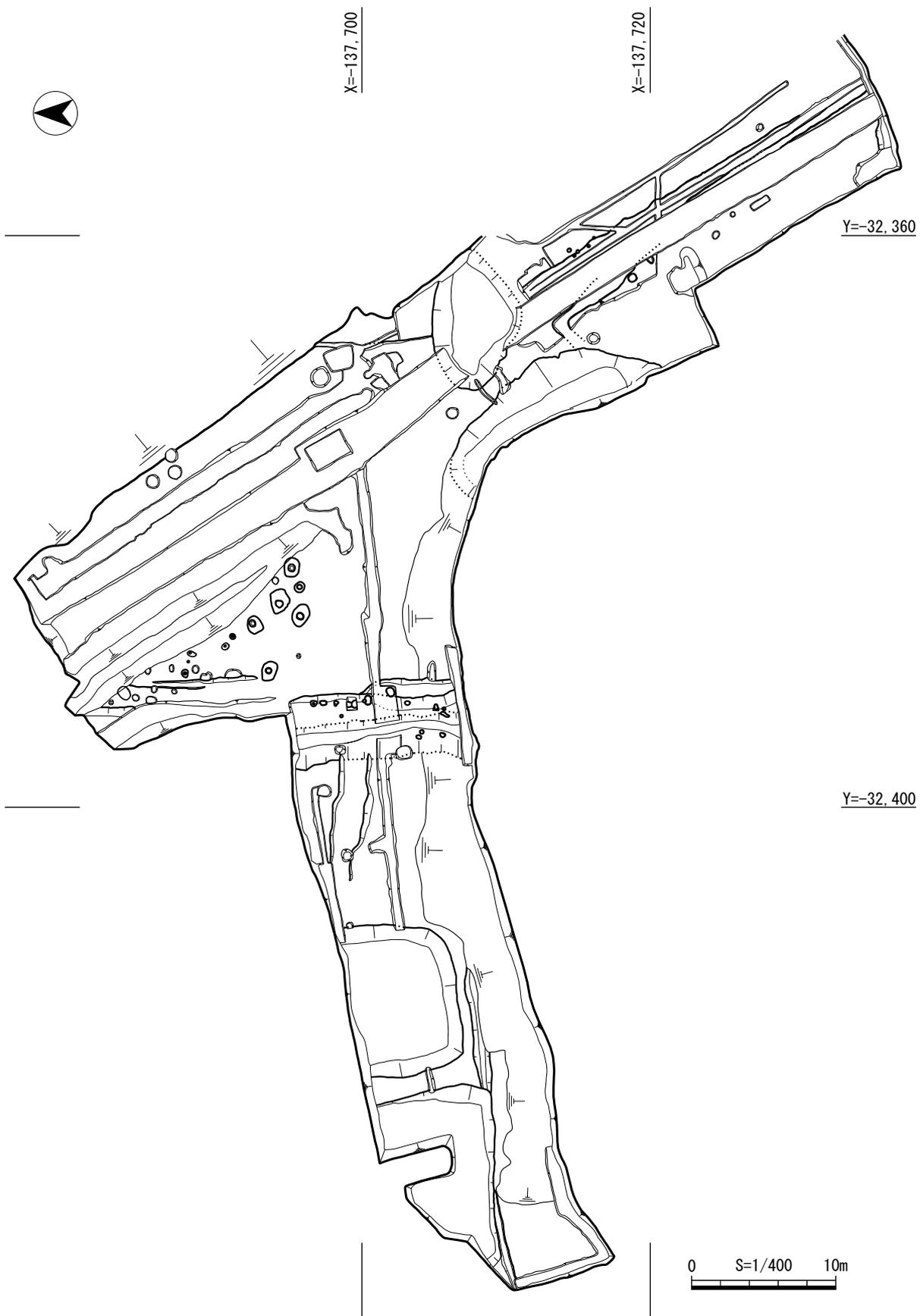


图27 06-2 全体图

古墳時代の遺構

6溝（図28、図版20-1・3） 調査区の南東部において、新たに検出した方墳の周溝である。これにより、太秦古墳群は合計26基となり、新たに26号墳とする。当初、周囲に攪乱が及んでいたため平面形が確認しづらく、単なる溝と認識していたが、コーナー部分とみられる場所を検出し、また03-1調査区でみつまっている22~24号墳とほぼ同一方向の主軸をとり、埋土も同様であったことから、古墳の周溝と判断した。幅は0.6~0.8m、検出面からの深さは0.2~0.4mを測る。西側は攪乱により失われているため、墳丘規模は明確にできないが、検出した周溝の長さが約6.5mほどになることから、一辺7~8mほどの墳丘と推測される。周溝内埋土は、周溝機能時に堆積したとみられる灰オリーブ色シルト上に、墳丘崩落土とみられる黄褐~暗灰黄色シルトが堆積していた。

遺物は、土師器の細片がわずかに出土しているのみである。この方墳に隣接する24号墳からは陶器須恵器編年のTK216・208型式、やや離れた場所に位置する22号墳からはTK208型式の須恵器が出土して

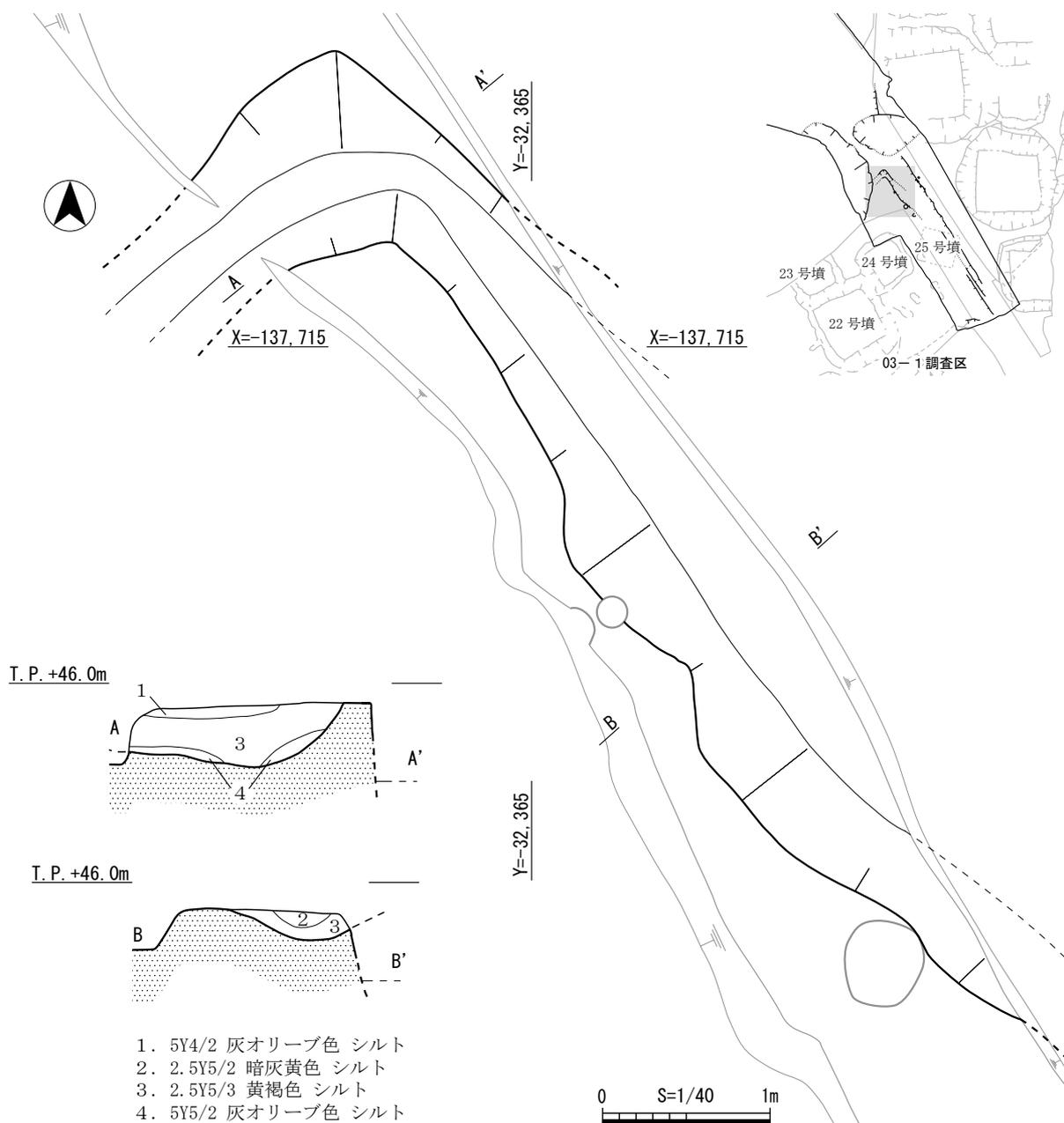


図28 06-2 6溝 (26号墳) 平面図・断面図

いることから、それに近い時期に築造されたものとみられる。

なお、03-1 調査区において周溝西側コーナーの一部が検出されていた25号墳であるが、今回の調査では攪乱が及んでおり、周溝の続きを確認することができなかった。

17溝 (図29、図版20-2・4) 平成13年度調査で検出されている3号墳の西側周溝である。3号墳は太秦古墳群のなかで、唯一木棺直葬の埋葬施設が検出された方墳である。今回検出した周溝の西側は攪乱により失われているため、幅は推定で約2.6m、検出面からの深さは、約0.2mを測る。これにより3号墳の東西軸の墳丘規模は約13mとなった。一次崩落土とみられる明黄褐色粘土～シルトが、墳丘側である東側にやや厚く堆積している。

以前の調査では、周溝内から土師器・須恵器片がまとまって出土していたが、今回そのような状況はみられなかった。遺物は上層から土師器の細片、須恵器の甕片が出土しているのみで、図示できるものはなかった。

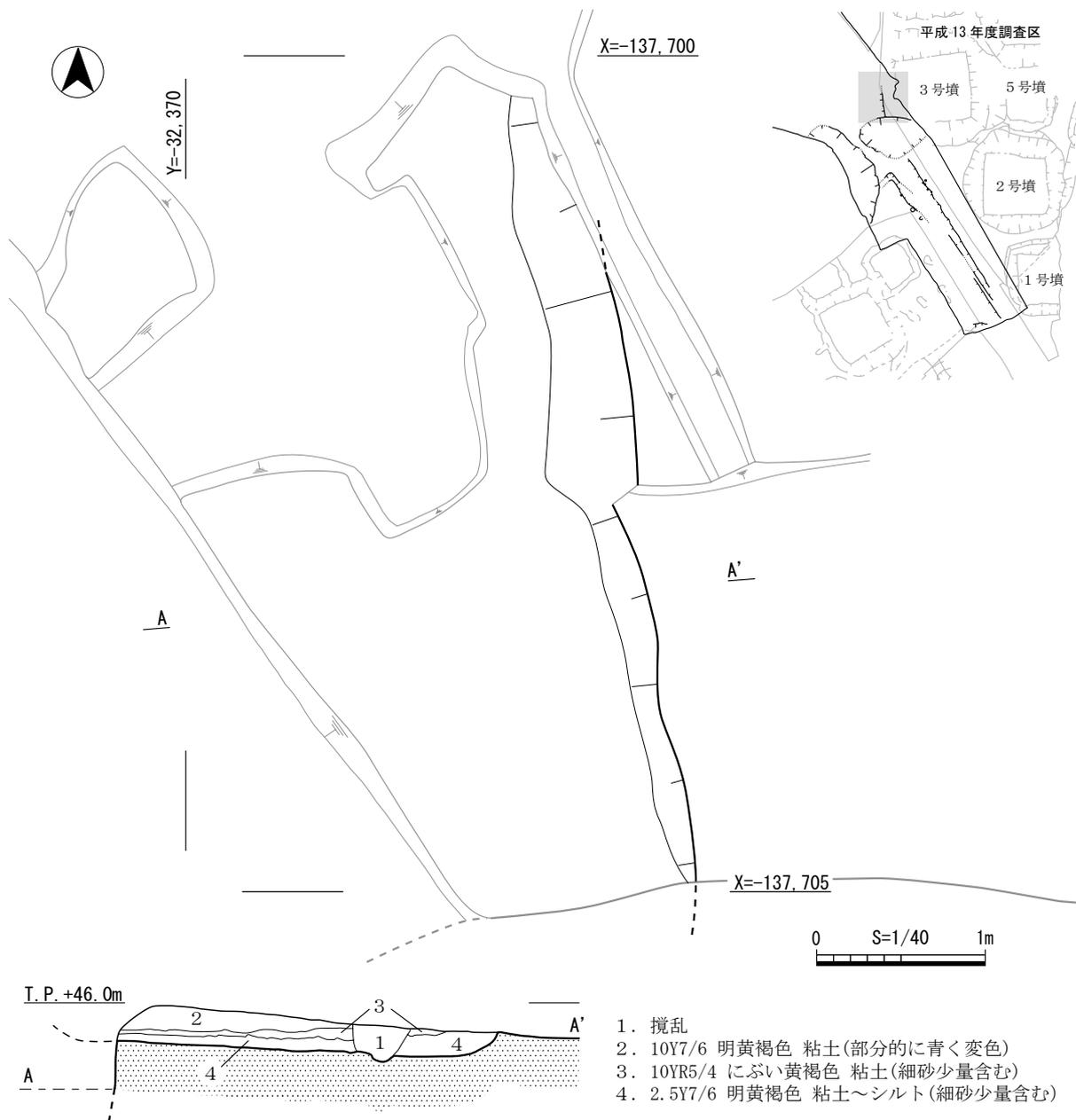


図29 06-2 17溝 (3号墳) 平面図・断面図

古代の遺構（図30～32、図版21）

調査区のほぼ中央において、18・23～26溝を検出した。いずれも以前の調査区から延びる溝で、03-1調査区から延びる26溝は本調査区の18・23～25溝、06-1調査区から延びる1溝は本調査区の26溝がそれぞれ対応している（以下、旧調査区の遺構を示す場合、[] 内に旧調査区名をつけ、26溝 [03-1] などと表記）。なお遺構の時期については、26溝 [03-1] は遺物が出土していなかったため、埋土の状況から中世以降の遺構、1溝 [06-1] では遺物が出土していなかったため、時期不明の遺構とされている。

また南北方向に軸をとる26溝 [03-1] は、以前の報告書の中ではひとつの溝と理解され、埋没状況から5つの段階が想定されていたが、今回の調査では断面観察により3条の溝が切り合うものと判断し、それぞれ新しい溝から、23・24・25溝とした。なお23・24溝の南側については、攪乱などにより、平面プランを明確にできず、推定により復元している。

18溝 26溝 [03-1] の東肩にあたる部分で、今回の調査で検出した23溝あるいは24溝に対応する溝と考えられるが、一部分しか残っていなかったため、切り合いや埋土の違いが不明瞭で、どの埋土がどちらの溝に属するか判断できなかった。ただし、断面形から図31Aラインの2・3層が23溝埋土、4・5

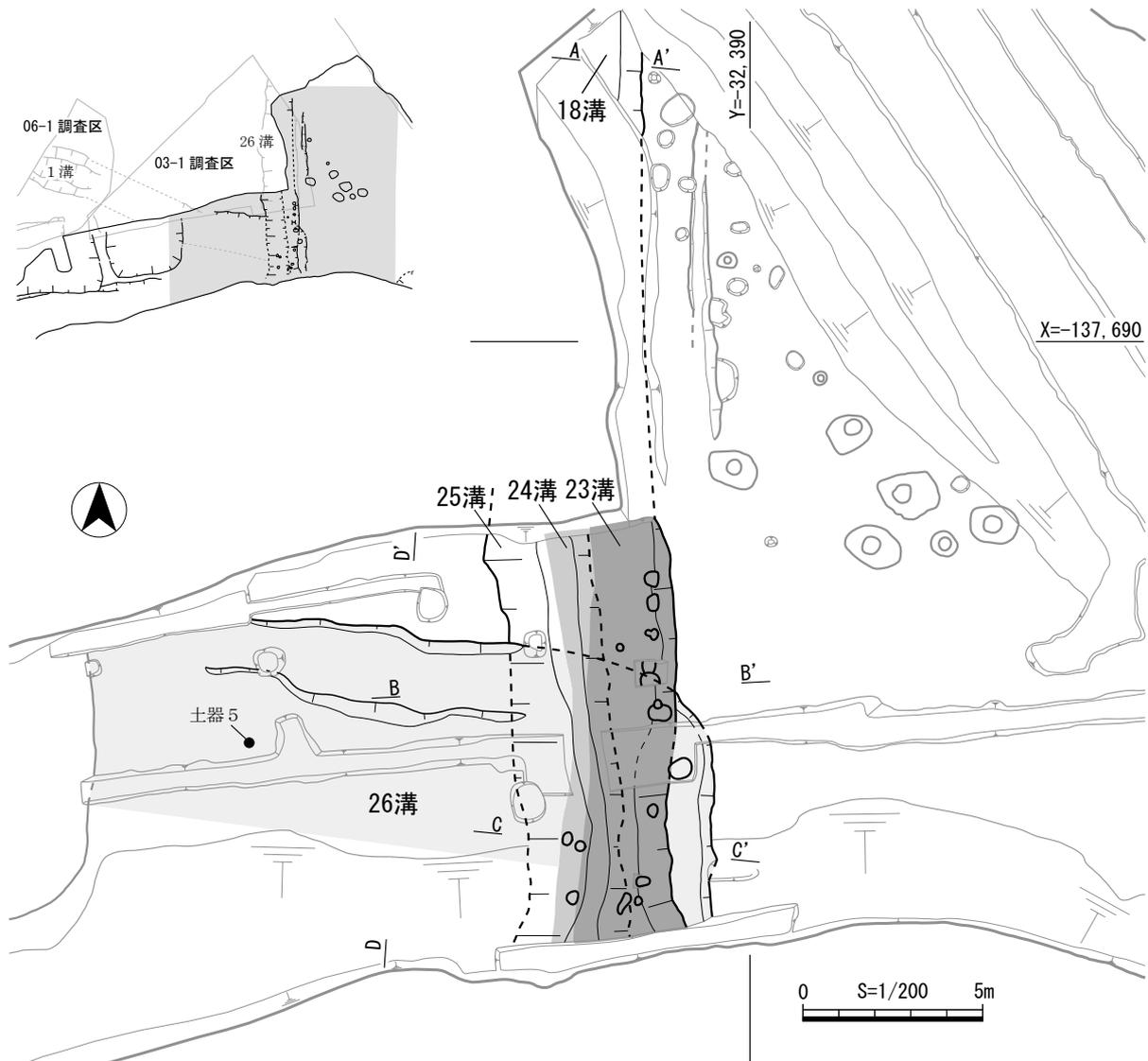


図30 06-2 18・23～26溝 平面図

層が24溝埋土と推測され、24溝を切る形で23溝がそのまま北に延びていた可能性が考えられる。18溝から遺物は出土していない。

23溝 肩が緩やかに立ち上がる断面皿形の南北方向に延びる溝で、幅約2.3～2.6m、検出面からの深さ約0.5～0.6mを測る。埋土はいずれもにぶい黄橙色系シルトで、止水性あるいは流水性堆積層などはみられなかった。遺物は、土器の細片がほとんどで、弥生土器の底部を図示しているが（図36-1）、これは周辺からの混入とみられる。

24溝 断面逆台形の南北方向に延びる溝で、東側肩を23溝によって切られているため幅は推定で約2.7～3m、検出面からの深さ約0.8～1mを測る。埋土は黄色系シルトで、地山ブロックを含んでいることから、人為的に埋め戻されたものとみられる。ただ33ピット埋土である図31 Bラインの7層を切る形で、6層が堆積していることから、何回かに渡って溝が掘り返された可能性がある。23溝と同様、止水または流水していた痕跡はみられなかった。遺物は、土器の細片が多く、図示できたのは5世紀後半とみられる須恵器高坏の脚部（図36-2）のみであった。時期の詳細は後述するが、これも24溝の時期を示す

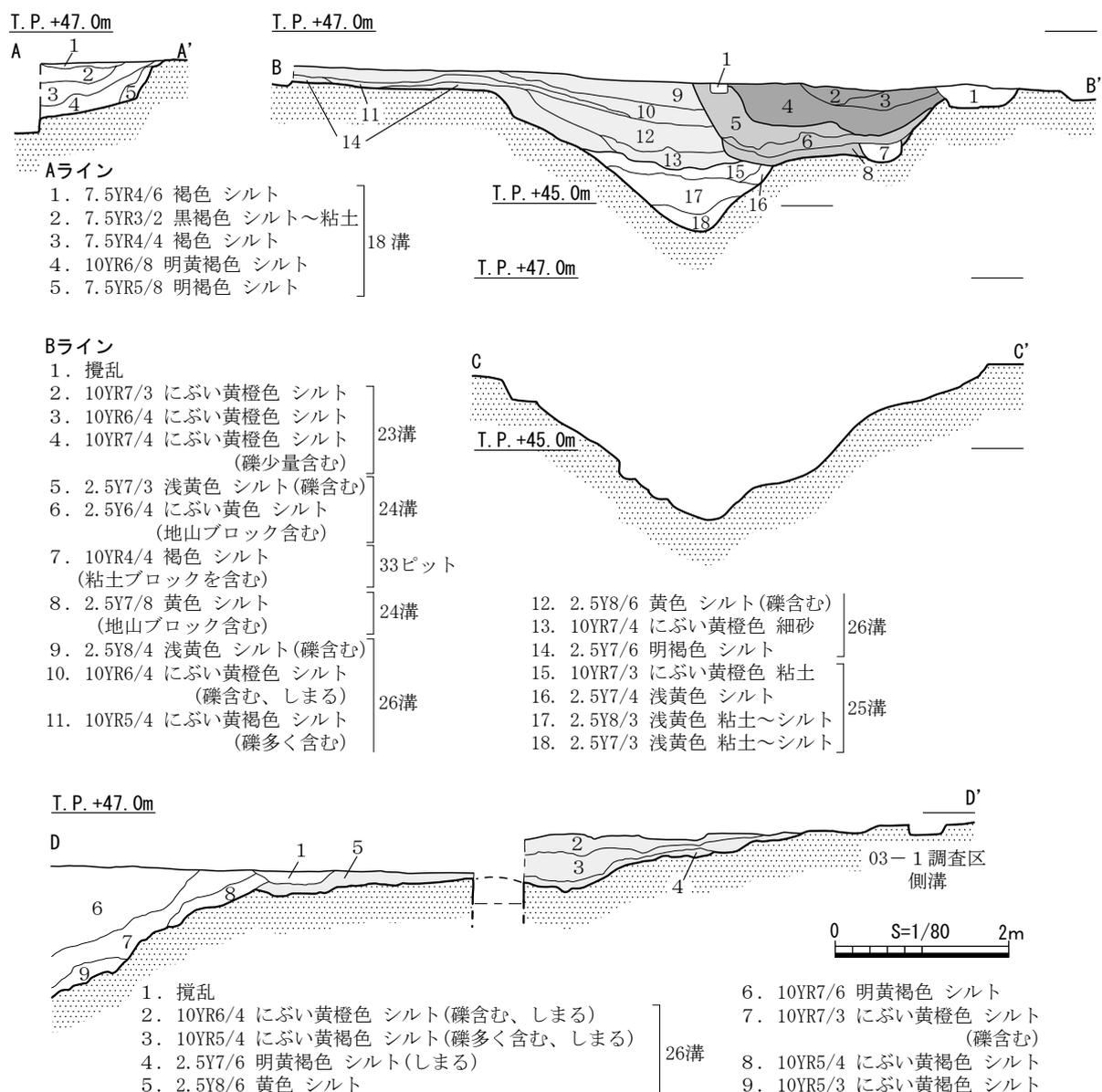


図31 06-2 18・23～26溝 断面図

遺物ではないとみられる。

また24溝を掘り下げていく途中で、16基のピットを溝内で検出した（図32）。いずれも不整楕円形の平面プランで、先でも触れた33ピットの断面状況を見る限り、24溝がある程度埋没した状態から掘り込まれている。検出面からの深さは0.1~0.3mと浅いが、溝の掘り返しによって、本来の掘込み面よりも低くなっているものとみられる。また柱跡などはみられなかったが、中心が深く掘り下げられている27ピットの例から、杭などが立てられていた可能性も想定される。しかし、これらのピットが、東側に偏っている点や、溝の北側下端のラインでは直線状に並んでいるのに対し、南側では直線的ではなく、散在しているなど、ピットの性格について不明な点が多い。

25溝 断面V字形の南北方向に延びる溝で、東側の肩部が24溝に切られているため幅は推定で約3~4

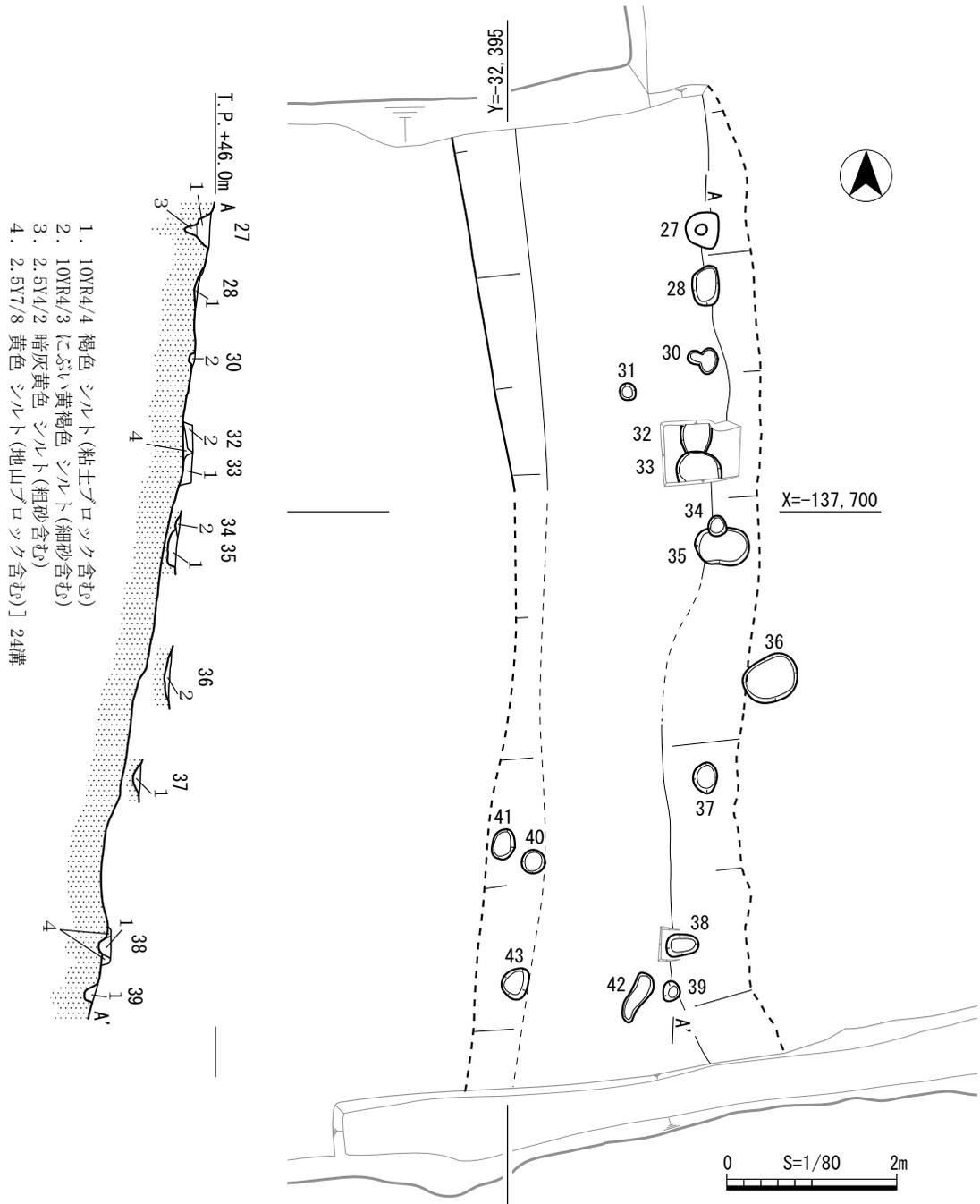


図32 06-2 24溝内ピット 平面図・断面図

m、検出面からの深さは約1.6～1.8mであるが、南側にある谷部に向かって下っており、溝底部の北端と南端では比高差約1.1mを測る。下層の埋土は、23・24溝に比べ粘性の強い浅黄色系シルトであった。遺物は弥生土器・土師器・須恵器の小片が出土しているが、図示できたものは6世紀後半～7世紀初頭の須恵器の坏身、弥生時代後期とみられる壺の底部（図36-3・4）のみであった。後述する26溝の遺物との関係から、坏身が25溝の時期を示していると考えられる。

26溝 1溝 [06-1] の続きの溝である。北西-南東方向に延びるが、そのまま直線的には延びず、25溝に合流する形で南側に屈曲し、谷部に続くことが判明した。南側肩部は、谷部への落ち込みによる崩落や攪乱などのため、明確にできなかった。そのため、幅は以前の調査の成果から約5mと推定され、検出面からの深さは約0.2～0.7mを測る。段差があり、中央部がやや深くなる。下層には黄褐色系シルトが堆積し、その上に礫を含むにぶい黄褐色シルトが堆積している。この層中から、主に土師器片、須恵器片が出土しており、溝中央付近では押し潰された状態で土師器の長胴甕（図36-5、図版21-5）が出土した。口縁部を欠くが、形状から7～8世紀頃の長胴甕と考えられる。この他には、縄文時代前期頃とみられる縄文土器（図36-6）も含まれているが、周辺からの混入とみられる。

23～26溝の新旧関係については断面観察から、25溝→26溝→24溝→23溝（古→新）という切り合い関係が確認できた。時期については、今回の調査によって、それぞれの溝からわずかながら土器が出土しているものの、前述したように、遺構の時期を確定できる資料はほとんどみられない。そのため唯一、出土状況から26溝に伴うと考えられる7～8世紀の長胴甕を基準として考えたい。26溝の埋没がその時期とすると、25溝は7～8世紀以前、23・24溝はそれ以降に掘削された溝となる。25溝出土の6世紀末～7世紀初頭とみられる坏身は、この年代観に矛盾しないが、23・24溝の出土遺物については、いずれも埋没過程に混入したものとみられる。

溝の変遷を整理すると、まず南北を軸として幅広で、かなり深い25溝が掘削される。その時期ははっきりしないが、6世紀末～7世紀初頭の段階で埋まり始め、その後、北西-南東方向を軸とした26溝が掘られ、7～8世紀頃に埋没。そしてさらに25溝とほぼ同軸上に24溝、23溝がやや規模を縮小しながら掘削されていった状況が想定できる。

近辺に同時期の遺構がみつかっていないが、この地点から南西に約250mほどの場所に位置している03-1調査区4～7トレンチでは、7世紀を中心とした8世紀までの掘立柱建物、竪穴住居が検出されている。この集落域が、調査範囲外である本調査区の西側の尾根上にも拡がっている可能性は高く、また尾根筋を切断する形で掘削されている点などから、23～26溝は集落域に関連する区画溝と考えられる。

その他の遺構

以下の遺構は、細片の土器のみ、あるいは遺物が出土しなかったため、時期が不明の遺構である。

1～3溝（図33） 調査区南西部において3条の溝を検出した。1・2溝が3溝を切る状況で北西-南東方向に延びており、北側において1・3溝は埋設管の攪乱により、2溝は16土坑により切られている。溝から出土した遺物は細片ばかりであるが、3溝埋土からは近世以降とみられる瓦片が出土していることから、1～3溝のいずれもそれと同時期の溝と考えられる。

14～16土坑（図33） 14土坑は、谷地形の東側端部にかかる場所に掘られた大型土坑である。北西-南東軸の規模は、約16mで、西側は調査範囲外であったため、北東-南西軸の規模は不明である。検出面からの深さは約2mを測る。埋土上層は、現代の攪乱を受けていたが、下層は粘土～シルトであった。攪乱を受けていない下層から出土した遺物はなく、時期は不明である。15土坑は調査区の南東端に位置

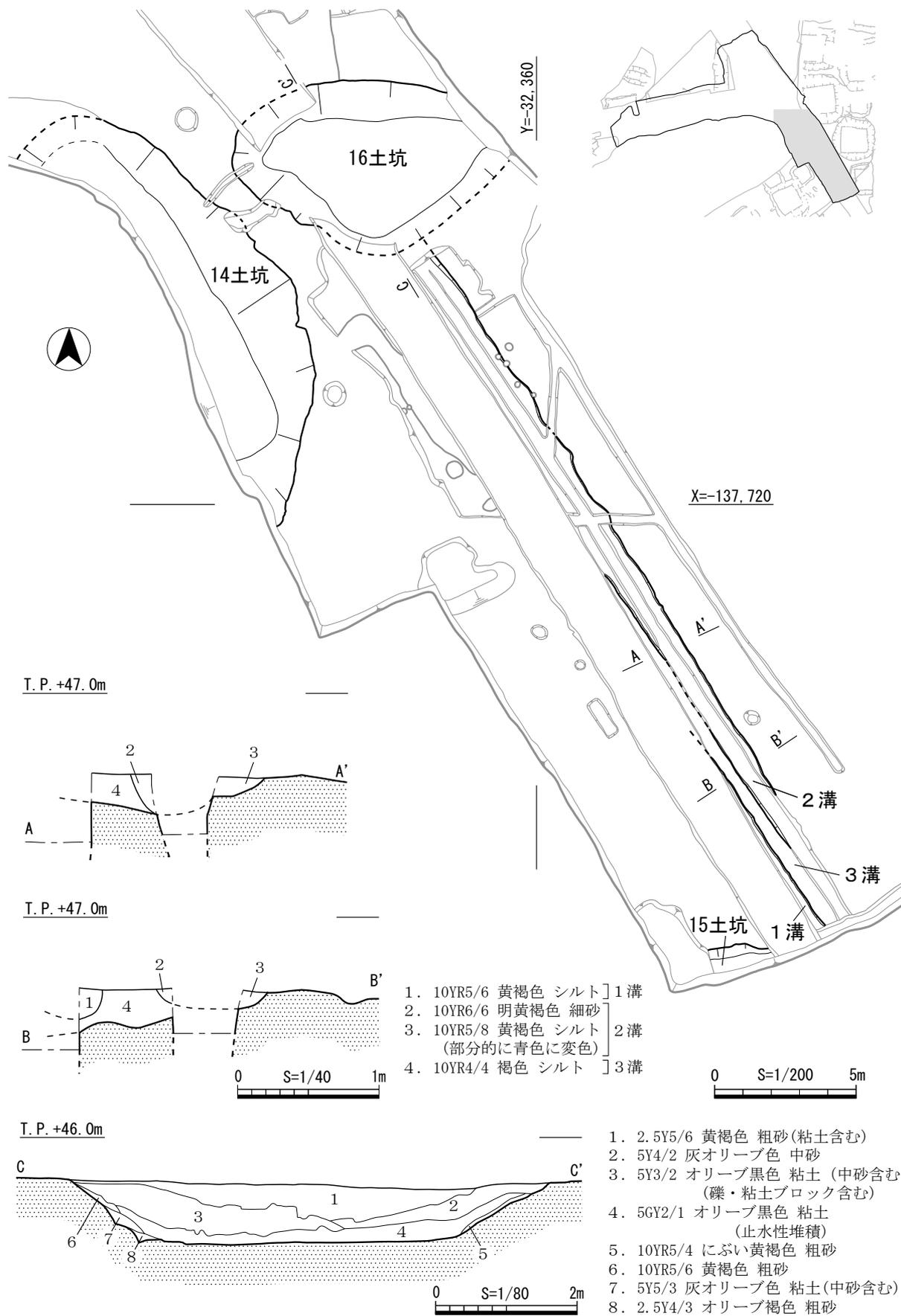


図33 06-2 南半平面図、1~3溝・16土坑 断面図

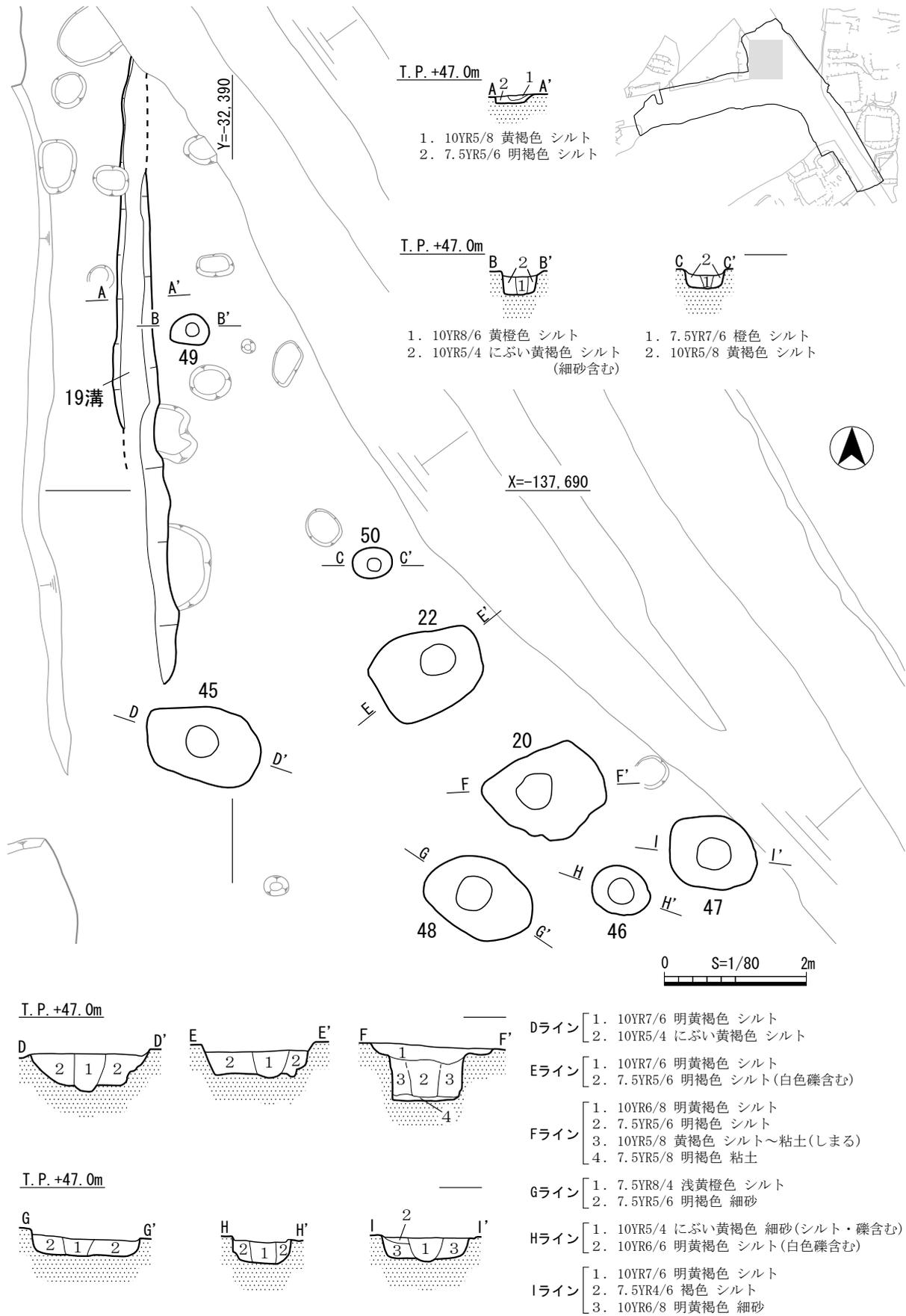


図34 06-2 19溝、20・22・45~50ピット 平面図・断面図

し、05-3 調査区で検出されている27土坑の北側にあたる部分である。05-3 調査区においても西側のプランを検出しているのみで、規模は不明である。遺物は出土していない。16土坑は、14土坑の北東側に位置し、長軸は推定で約10m、短軸は約6mの不整楕円形の土坑である。検出面からの深さは、約1.3mで、埋土は砂層と粘土層からなる。砂層においては葉理はみられず、粘土は止水性堆積によるものであった。埋土から溜め池とみられ、時期については、先述した2溝を切っていることから、近世以降に掘削された土坑と考えられる。

19溝 (図34) 太秦打上線と国守10号線が交わる北西側コーナー部分の高まり上で検出した南北方向に延びる溝である。北側は道路造成により、南側は攪乱により失われている。検出面からの深さは、約10cmと非常に浅い。埋土は黄褐色～明褐色シルトであった。23～25溝と並行していることから、それらの溝と関連する可能性があるが、遺物が出土していないため詳細は不明である。

20・22・45～50ピット (図34 図版22) 高まり上で検出したピット群である。いずれも平面不整楕円形で、長軸約1.2～1.6mのやや大型の20・22・45・47・48ピットと、長軸0.5～0.8mの小型の46・49・50ピットが存在する。埋土が地山層に近い明褐色系のシルトであったために、プランの確認が困難で、地山層をかなり掘り下げて検出を行った。その過程で、当初同様なピットが19溝周辺でも確認されたが、柱痕がみられず、非常に浅かったため攪乱と判断した。ピットと認識されたものについては、主に断面観察から柱痕が検出され、20ピットのみ、最下層に粘土がみられる。ピットの掘形埋土、柱痕から遺物の出土はなく、時期は不明である。建物プランも明確に並ぶものがないため、規模、軸方向など不明であるが、道路造成により削平を受けている東側に建物プランが拡がる可能性がある。

44溝 (図35) 調査区西側で検出した東西方向に延びる溝である。中央部分を46土坑によって切られて

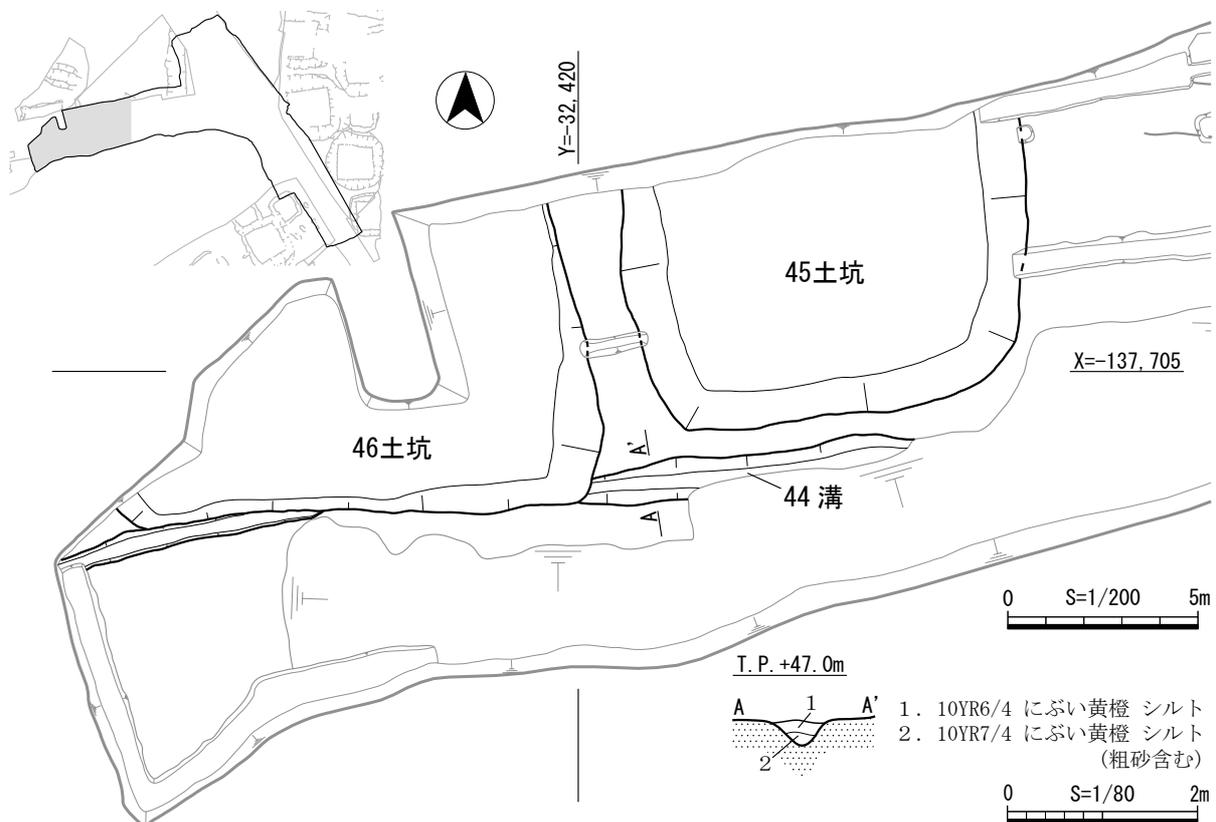


図35 06-2 西半平面図 44溝 断面図

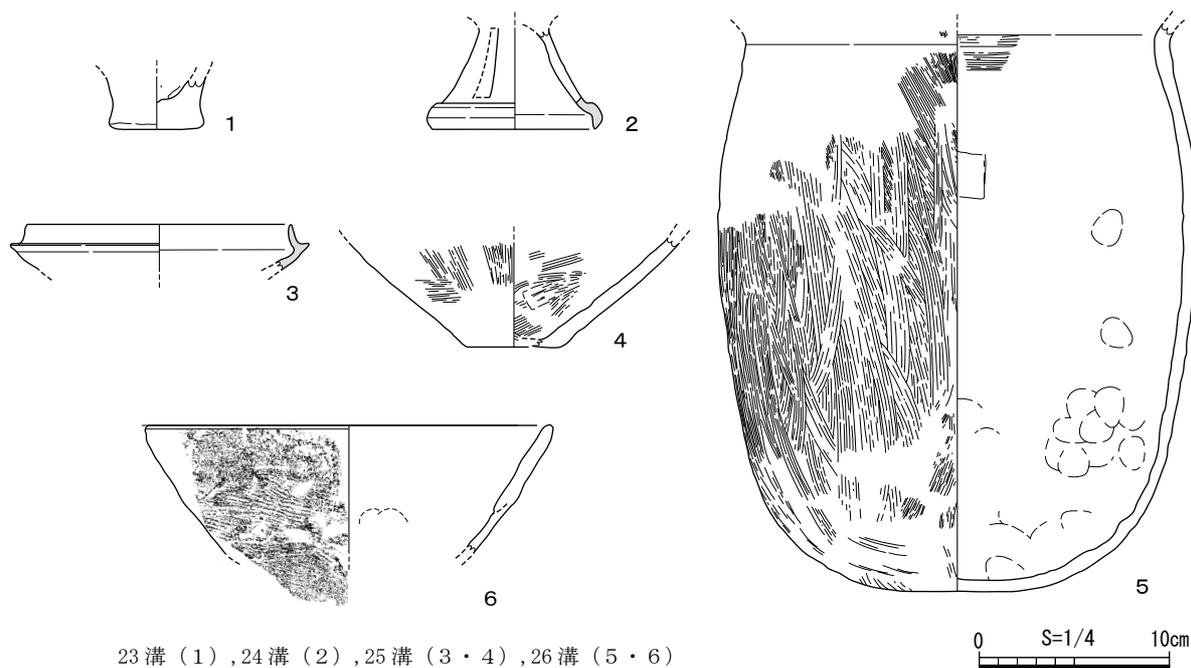
おり、東側は谷への落ち込みによる攪乱で失われている。検出面からの深さは約30cmを測る。埋土はにぶい黄橙色シルトであった。遺物は出土していない。

45・46土坑 (図35) 45土坑の北側は03-1 調査区で検出されており、攪乱と判断されているが、本調査区では16土坑と同様な溜め池と考えられることから、土坑とした扱った。03-1 調査区の成果をあわせると、南北規模約13m、東西規模約11m、検出面からの深さ約1mを測る、平面長方形の土坑である。埋土は粘土であった。46土坑は、06-1 調査区で検出されている2土坑の南側部分にあたる。その成果から、南北規模約11.5m、東西規模は推定で約15.5m、検出面からの深さは約1mの平面長方形で、形状は45土坑に似る。埋土も同様に粘土であった。遺物が出土していないため、45・46土坑の時期を明確にはできないが、埋土の状況からも、16土坑同様に近世以降の溜め池と考えられる。

(3) 遺物 (図36、図版35)

出土した遺物のほとんどが細片であるため、図示できたものは土器6点にとどまる。いずれも、調査区中央部の23~26溝で出土した遺物である。

1は23溝から出土した土器で、甕の底部である。土器表面がかなり磨滅しているため、調整などはみえない。やや尖り気味な形状から、弥生時代後期のものと考えられる。2は24溝から出土した須恵器高杯の脚部である。坏部を欠き、脚部には三方とみられる透しをもつ。陶邑須恵器編年のTK23~TK47型式の須恵器とみられる。3・4は25溝から出土した。3は、須恵器の杯身である。口縁部・蓋受部の形状から、陶邑須恵器編年TK43~209型式の範疇にあたりと考えられる。4は壺の底部とみられ、内外面に刷毛目が施される。1と同様、弥生時代後期のものと考えられる。5・6は26溝から出土した。5は口縁部を欠く長胴甕である。外面にみられる刷毛目は、幅広のものと、単位の細かい2者があり、後者は頸部下に施されている。内面は胴部下半では指頭圧痕、頸部下では刷毛目がみられた。胎土は細かく、焼成も良好である。やや時期判断が難しいが、7~8世紀のものと考えられる。6は粗製の浅鉢で、外面



23 溝 (1) , 24 溝 (2) , 25 溝 (3・4) , 26 溝 (5・6)

図36 06-2 出土遺物

に施される条痕文から縄文時代前期のものとみられる。

3 まとめ

5世紀前葉から後葉に築造された太秦古墳群尾支群は、今回の調査により方墳である26号墳が新たに1基確認され、合計26基となった。また以前調査された3号墳の西側周溝も検出され、墳丘規模は南北軸約10m、東西軸約13mとなった。26号墳については、以前設定された群構造をみると、軸方向からK群に属すとみられる。隣接する24号墳の周溝との共有あるいは切り合い関係を確認できなかったため、築造順は不明であるが、今回加わった26号墳によって尾支群のなかでは5基（やや軸方向が異なる21号墳を除くと4基）と、最多もしくはB群と並ぶ群構造を構成している。

旧調査区から延びる溝である23～26溝については、25溝→26溝→24溝→23溝（古→新）という新旧関係が確認され、いずれの溝も南側の谷部に延びる状況であった。出土遺物がわずかなため時間幅は不確定ながら、6世紀末～7世紀初頭以降、順に掘削されたものと考えられる。溝が同一地点において繰り返し掘削されている点が注目され、その性格については、現在みつからないものの、西側尾根上に想定される集落域に伴う区画溝として比較的長期間に渡って機能していたと考えられる。また高まり上で検出したピット群は、遺物が出土しておらず、建物としてのプランが不明確なため、それらの性格は不明であるが、隣接する23～26溝と関連する可能性もあるだろう。

近世以降とみられる遺構については詳細が不明なものも多いが、溜め池とみられる土坑などは、当地域における土地利用の一端を示すものである。

第5節 06-3

1 概要

03-1の第3トレンチの南東に接する場所、約335㎡を調査対象とした。表土直下の浅いレベルに古墳等遺構の存在が推定された場所である。第二京阪道路建設のための資材置き場として整地が予定された範囲を1区(310㎡)、道路敷地内の未調査地を2区(25㎡)とした。

1区の調査前は竹やぶで、伐採後、その根を機械力によって除去し、以下を人力によって掘り進めた。その結果、03-1で既に検出されていた16・17号墳周溝の延長および、新規に古墳の周溝が1ヶ所で検

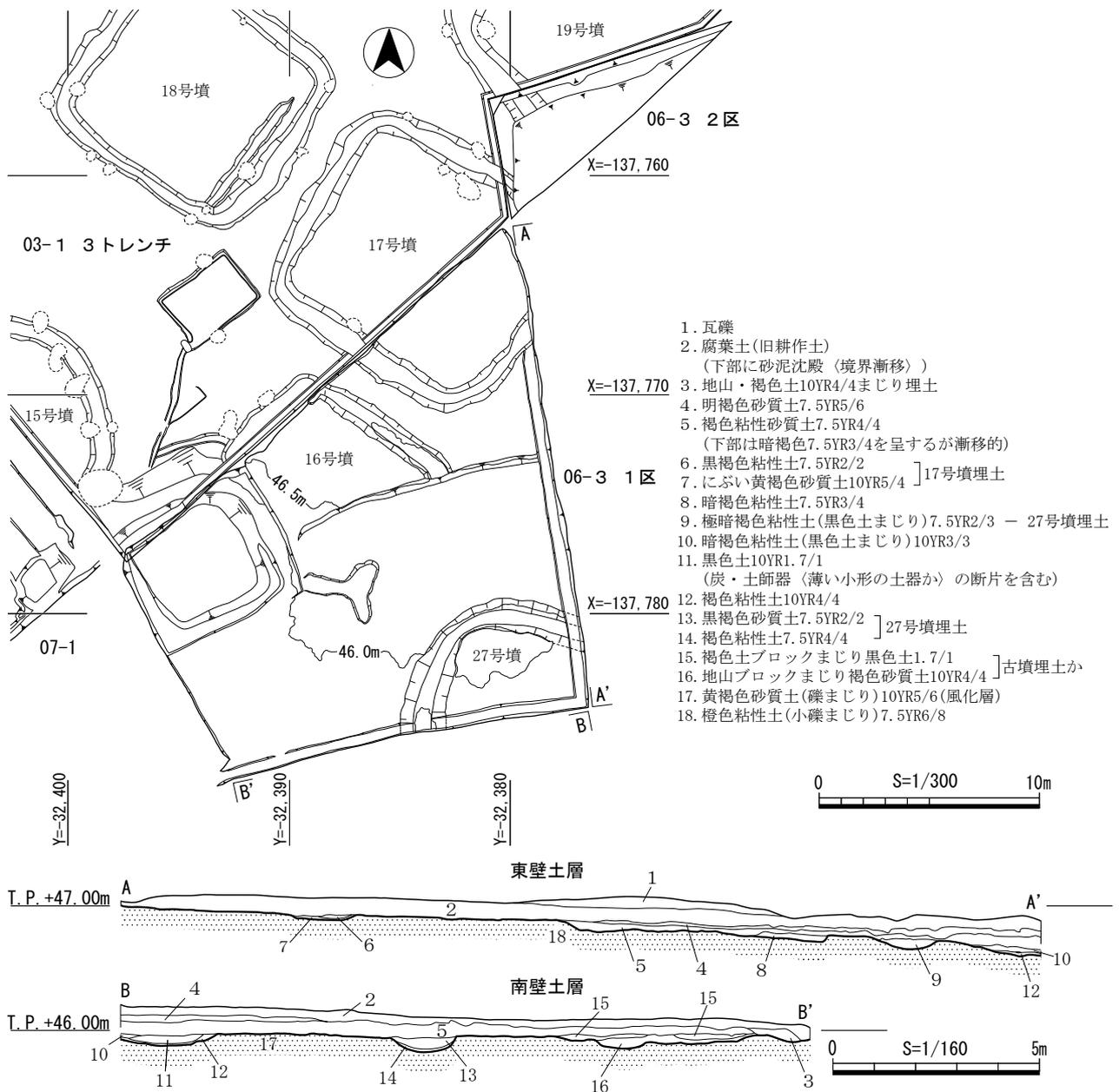


図37 06-3 全体 平面図・断面図

出された。延長にあたる古墳周溝については古墳番号をそのまま踏襲して16・17号墳周溝とし、新規のものは05-2発見のものに続いて27号墳とした。

2区の調査前は民間の資材置き場で、構造物の基礎および表層土を機械力で除去後、人力で掘り進めた。

2 調査成果

(1) 全体層序

1区では全体に竹の根を含む表層土が20~40cmの厚みであり、調査区の北部ではその直下から橙色粘性の地山が露出する。その地山上面を平面的にひろげると黒色の帯が残る。黒色の帯のなかには埴輪の細片が目視でき、古墳の周溝であることが一目瞭然となる。

調査区中央部では地山が段差20cmで落ち込み、古墳の周溝を底まで削っている。この段は東西に延び、段下には褐色砂質の土壌（土層図4・5）が堆積する。畑耕作にともなう段であろう。その下の地山は小礫を多く含むようになる。

27号墳も上記地山面で検出できるものであるが、その範囲内およびその西南方での地山面は比較的軟質で黄褐色砂質を呈する。この砂質土は断面観察によると厚さ20~30cmあり、下面が漸移的であるため粘性土の風化層と判断される。

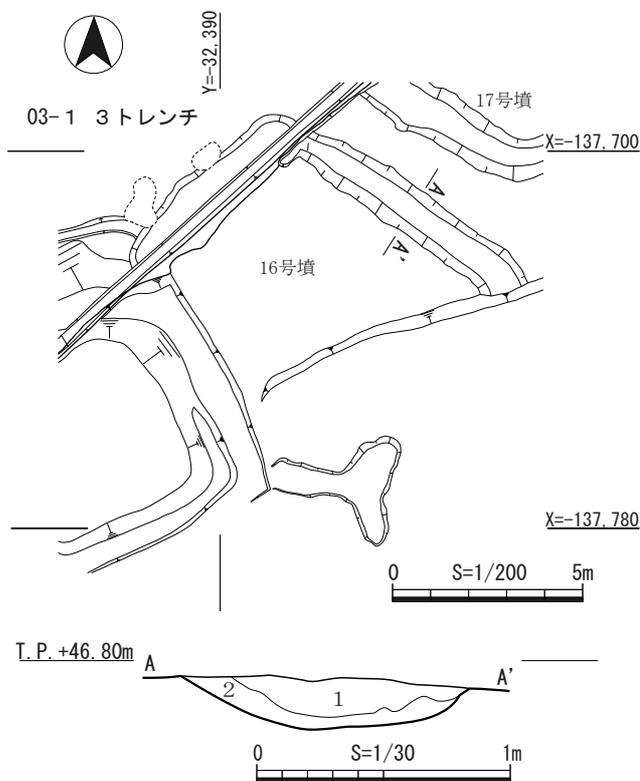
地山面は北端でT P +47.0m、南端で45.8mであり、弥生・古墳時代当時の旧表土あるいは封土らしい土壌は残存していなかった。

2区は調査地のほとんどで旧構造物の基礎地業による攪乱があり、わずかに03-1区に接して幅0.5~1.0mのベルト状に旧表層土とその直下の遺構が残存していたにすぎない。

(2) 1区の遺構

16号墳 北部の段上で周溝の北東辺が延び、段によって削られる直前のところで南に屈曲する傾向をしめす。また段下では周溝の南隅と思われる浅い溝状の落ち込みを検出した。

段上の周溝は幅1.1m、深さ0.1~0.2mで南ほど浅い。内部の上半にはレンズ状に粘質の黒褐色土が堆積し、埴輪の細片を少量と、弥生土器を1点包含していた。側面から底にかけては褐色土が堆積し、無遺物であった。段下の溝状落ち込みは、幅0.8m、深さ0.1mと浅いもので、内部には褐色土が堆積し、上面付近にうすく黒褐色土が残存していた。この上面付近で弥生土器が出土している。隅の部分から溝が南に延びる様子であるが、この先は削平されていて詳細は不明である。03-1での所見と合わせると16号墳は、墳丘裾間で一辺7.0~7.5mの方墳となる。



1. 黒褐色粘性土(炭まじり)7.5YR2/2(5と同じ)
2. 褐色粘性砂質土7.5YR4/4

図38 06-3 1区 16号墳 平面図・断面図

17号墳 北部の段上で周溝の南西・南東辺が検出された。幅1.0~1.4m、深さ0.15~0.20mである。内部の堆積は16号墳と同様で、上半に粘質の黒褐色土、下半にやや明るい褐色土がある。南西辺の内部上半の黒褐色土内から、多くの埴輪片と須恵器が出土した（図39）。須恵器のほうを下位から出る傾向にあった。03-1でも本古墳周溝内から須恵器と埴輪多数が出土している。

03-1での所見と合わせると17号墳は、墳丘裾間で北東-南西軸が9.0~9.5m、北西-南東軸が10.5mの方墳となる。

27号墳 調査区の南東隅で検出され、古墳周溝の約4分の1が現われたもの。周溝は幅1.5~1.8mだが、北西隅で1.0mに狭まる。深さは0.30~0.35mである。内部の堆積は16・17号墳と同様で、上半に粘質の黒褐色土、下半にやや明るい褐色土がある。北西隅のやや南の周溝内・黒褐色土中から須恵器の高坏（図41-12）が出土した。

その他 27号墳の西、調査区南端の壁に黒色土とその下の褐色土が地山上に見えている（南壁土層15・16）。これは調査区内の古墳周溝内の埋土と同様のものである。平面的に追求できなかったのは残念だが、古墳周溝の隅が顔を出した可能性の高いものである。将来の隣接地での調査に俟ってここでは古墳番号を付さなかった。

調査区北西にある方形の落込みは、近世以降のものである。03-1区でもその一部が現われていたもので、内部は水性堆積と思われる粘土・シルトで充填され、燻し瓦片が数点含まれていた。

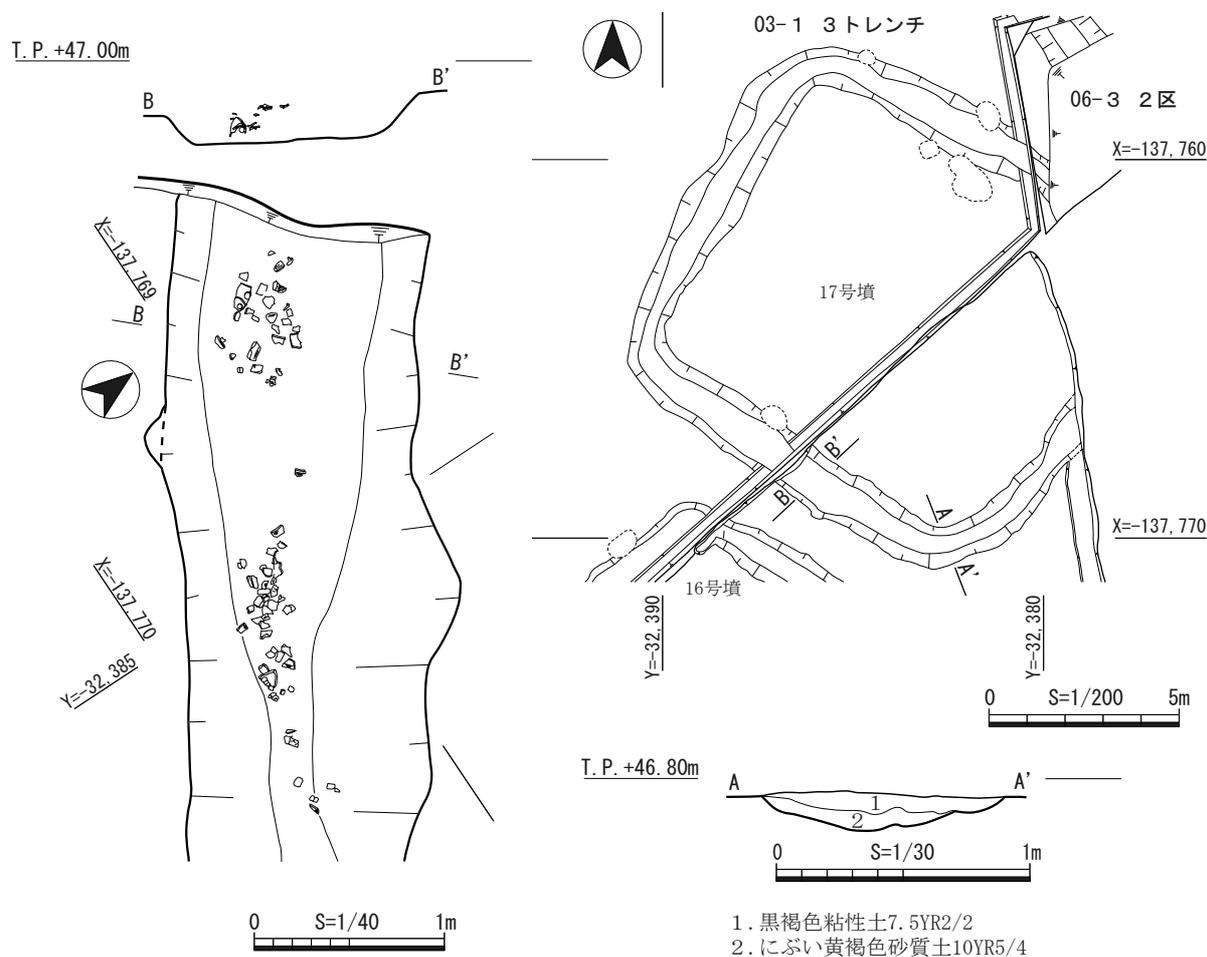


図39 06-3 1区 17号墳 平面図・断面図、周溝内遺物出土状況図

(3) 1区の遺物

図41-1~11は17号墳出土で、すべて南西辺の周溝内からのもの。

1は須恵器の無蓋高坏で、坏部・脚部ともに外面に突帯をもたず、口縁端を内傾ぎみに平滑に仕上げ、脚部端でも外面端部を平滑にしあげる。陶邑編年のTK73から216型式にあたる。2は壺の胴部。

3~11は同じく17号墳南西周溝内からのもの。3・4が口縁部で、11は底部。全体を復元できるものはないが、口縁部の直径を23~25cm前後に復元できる。いずれの埴輪も内外面ともにタテハケののちにヨコハケで調整。ハケ幅は1.5cm前後で、突帯間で数条の痕跡を残す。

12は27号墳出土の須恵器・無蓋高坏。17号墳のものとは異なり、坏部・脚部ともに外面に一条の突帯を施す。口縁端は外傾する平滑面。坏部外面の突帯下はほとんど回転ヘラケズリ。これも陶邑編年のTK73から216型式にあたるだろう。

13・14は16号墳周溝からの出土。壺の口縁と胴部で、弥生中期後半のものと思われ、十数m北の03-1区で検出されている住居址あたりから古墳時代以後に移動したものであろう。

(4) 2区の遺構と遺物

ベルト状に残された地山面上で、03-1の17・19号墳周溝の延長が検出された(図42)。

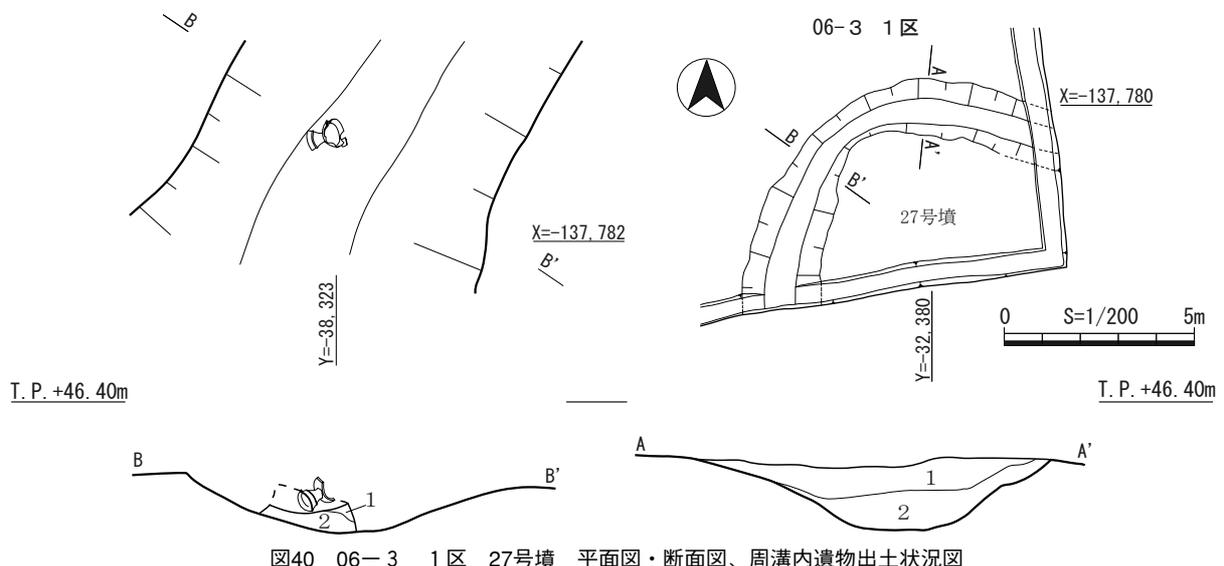
17号墳周溝は古墳の北東辺の延長部にあたる(幅1.0m 深さ0.1m)。浅くて、内部には褐色土しか残されておらず、遺物は出土していない。

19号墳周溝は古墳の南西辺の延長部にあたる(幅1.5m 深さ0.13m)。内部の褐色土上にわずかに黒色土が残り、ここに埴輪の小片と土師器の壺片1点が含まれていた(図版25-8)。埴輪はいずれも摩滅が著しく、調整等は不明。03-1では同古墳から須恵器3点と、本調査区と対面にあたる場所から埴輪が1片出土している。

3 まとめ

4基の古墳が検出された。このうち3基は既調査で一部が検出されており、その延長部を確認したものである(16・17・19号墳)。残る1基は新発見である(27号墳)

17・27号墳出土の須恵器はいずれも初期須恵器の類で、陶邑編年のTK73から216型式の時期に相当す



る。13年度調査の尾支群北部(1~13号墳 TK23~MT15)

のものより古い。

17号墳出土の円筒埴輪は、外表面ヨコハケ調整が明瞭で、タテハケだけで完成品とした尾支群北部のものより、やはり古い。尾支群全体として南部が古く、北部が新しいことを今回確認した。

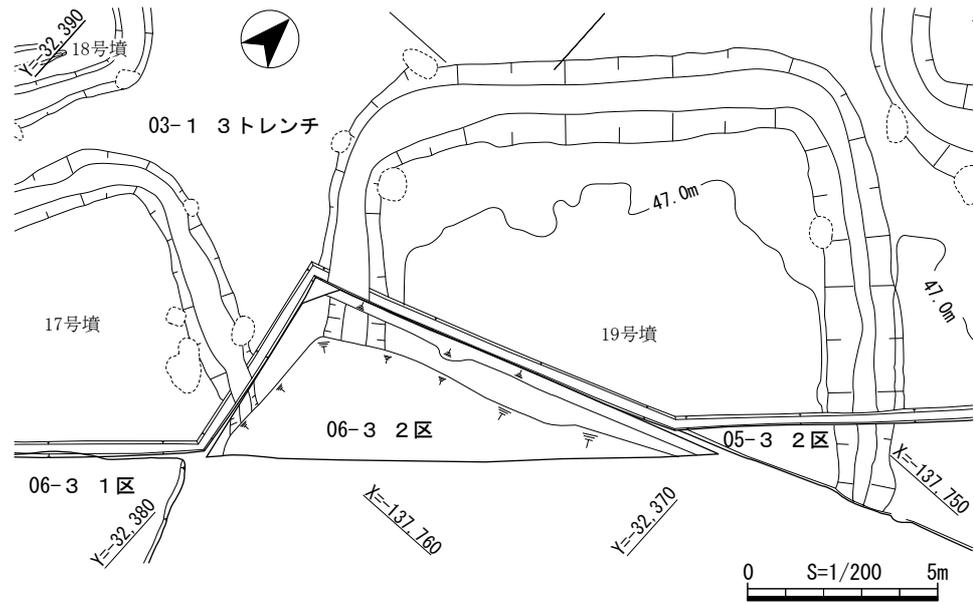


図41 06-3 2区 平面図

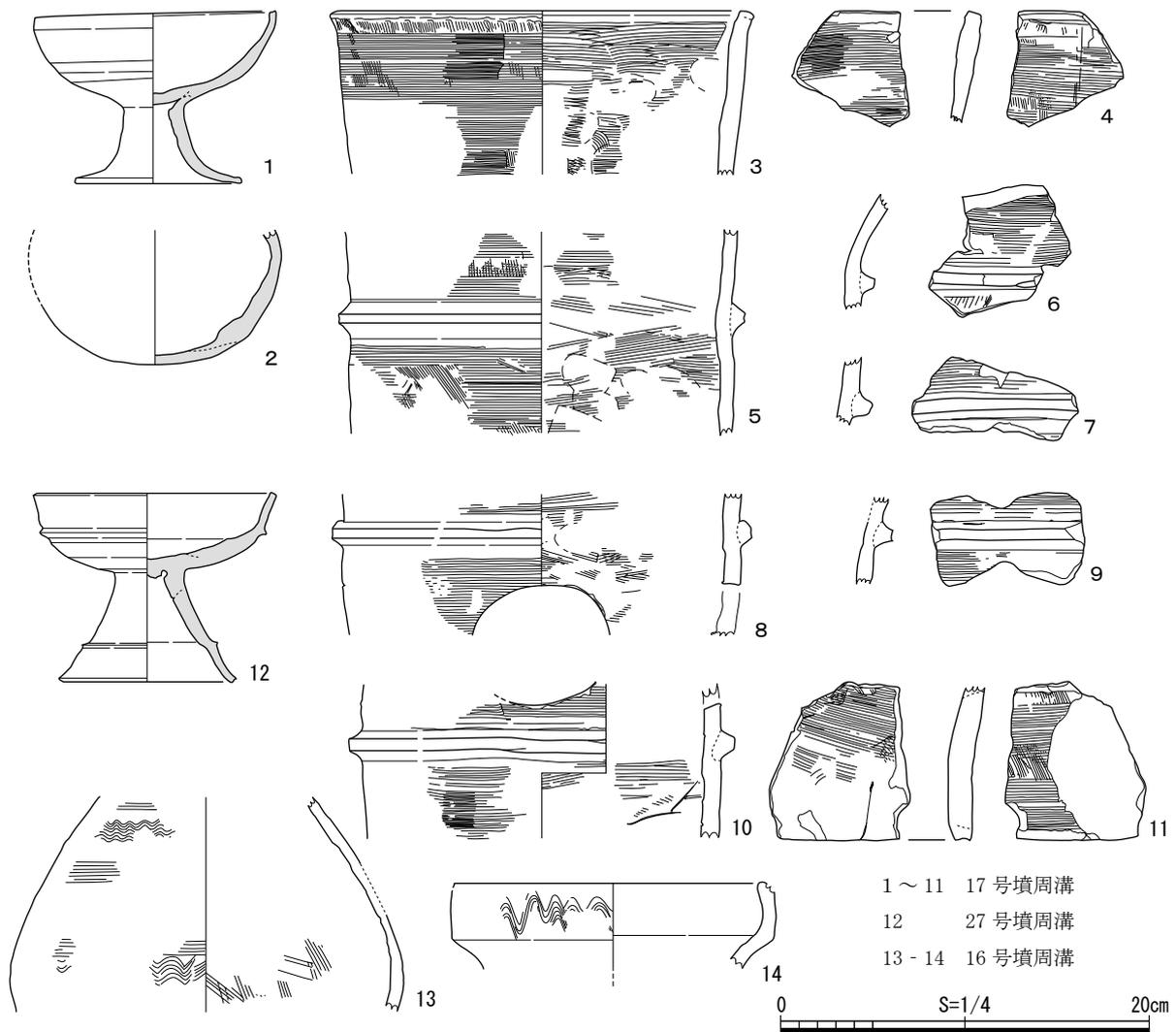


図42 06-3 出土遺物

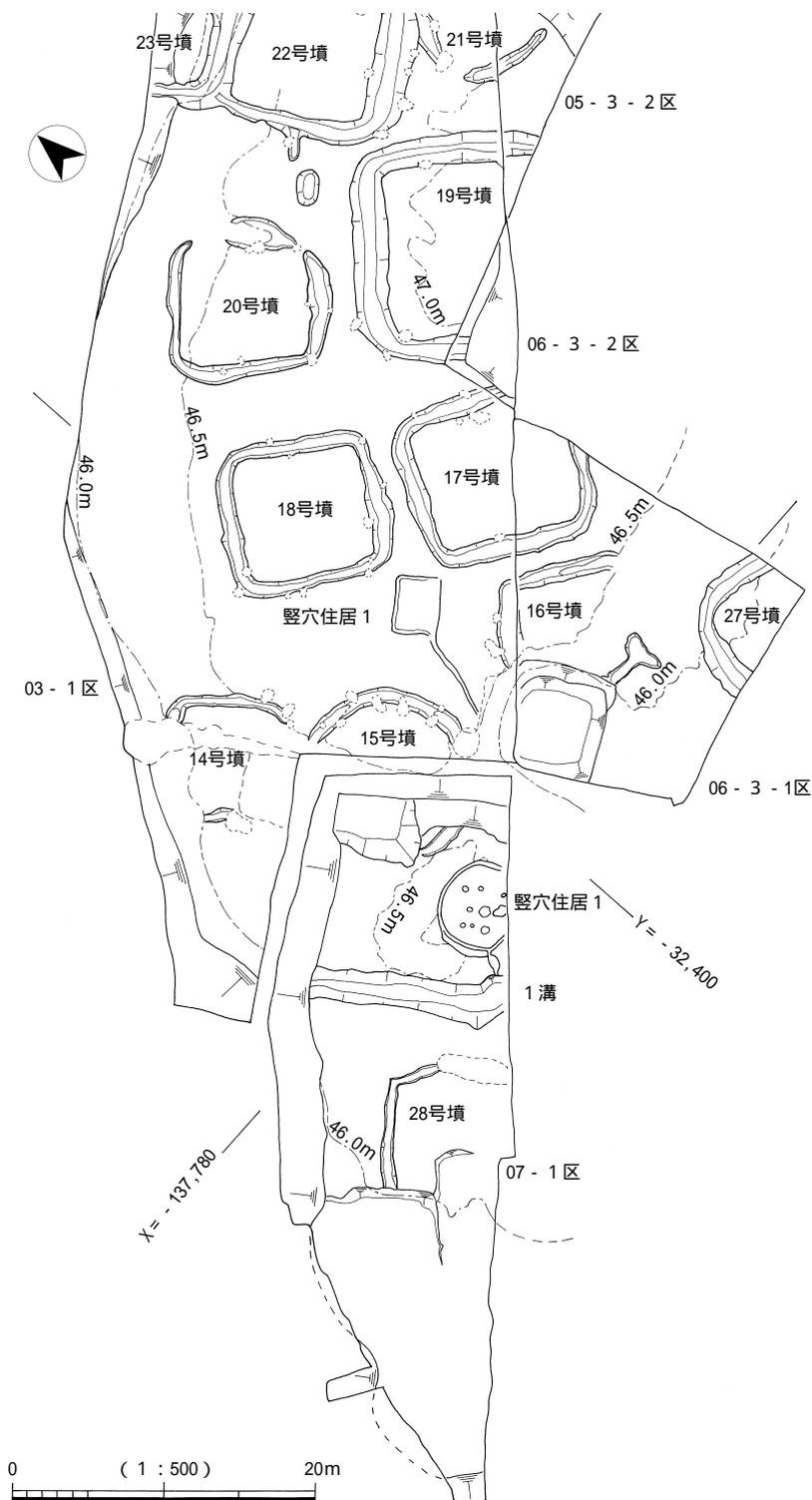


図43 07-1 調査区位置図

1 調査概要

古墳群と弥生時代の住居跡が検出されていた03-1の南西に接する位置で、未調査であったところの約520㎡を調査対象とした。03-1では丘陵トップ平坦面に太秦古墳群尾支群の南半があり、06-3での所見からも本調査区では、より古い時期の古墳の存在も予想された。また弥生時代の集落の範囲がどこまで及ぶかという視角もあった。

本調査区は、民間の資材その他の置き場であったところで、旧構造物・土間コン・基礎地業分を機械力で排除し、以下を人力で掘り進んだ。

2 調査成果

(1) 全体層序

全体に硬化剤の浸透した固いガラ土があり、下層に至るまで非常に土が固く締まっていた。調査区の北東部、弥生の住居跡が下に埋もれている範囲は局所的にやや低くなっている、ここに旧耕作土が残っていた。他の場所ではすき取られており、北部では黄褐色の砂質土（図45-3）が薄く残る。この砂質土を剥ぐと地山および黒褐色の帯（15号墳周溝）と、黒褐色粘質土および褐色の砂質土のブロックを混在させたシルト質の土で満たされた円形の遺構の輪郭が見える。これは弥生の住居跡で

あった。床面に至るまで硬化剤が浸透しているところもあり、内部から出土する土器の表面を残して取り上げるのが困難であった。

中央付近では、旧耕作土および黄褐色の砂質土が縞をなしてまっすぐ伸びる帯状部があった。これは弥生時代の大溝（1溝）であった。近代にいたるまでその痕跡を残していたことになる。

この大溝よりも南部では、基礎地業材の直下が粘質橙色の地山であった。機械掘削で地山上面を出し、いかざるを得ず、その過程で黒褐色の帯の見たのが28号墳周溝である。

28号墳周溝は東西に延びる段によって消滅しており、これより南では遺構は見つからず、開析谷に向かって落ちる肩の検出を調査の主眼とした。

(2) 遺構

1溝 (図44 図版27-2 29-1) 調査区北寄り、南東-北西方向に延びる大溝である。幅2.0~2.4m、深さ0.7~0.8mで、断面U字状を呈する。底のレベルは東部で45.8m。西へ低くなり、西端では45.5m。かつ底の幅を狭めて断面V字に近くなる。内部は、中ほどに黒褐色の粘質土があり、その下には底まで黄褐色系の粘質土が堆積している。この土は底付近では特に硬くしまっていて地山と見まがうほどだが、弥生土器の小片を含んでおり、また溝下半の地山は小礫を多く含む赤褐色の粘土であるから、一度見つけると見まがうことはない。なお、埋土の最上部は、かつてここが竹林であったときの根や腐葉土を含む表層土であり、近代にいたるまで沈下を続けていたことが分かる。東端は局所的に底にいたるまで井戸状の攪乱によって壊されていたが、その少し前から溝がこのあたりを屈曲点として、向きを変える傾向にあることは見て取れる。ちょうど竪穴住居のあったところである。

竪穴住居1 (図45 図版27・28) 地山検出面が南東に向かってレベルをゆるく下げていくところに所在する。規模は東西に6.3m、南北に5.5m前後か。

1溝内の黒褐色粘質土に対応すると思われる粘質暗色の土が中央付近にだけレンズ状にたまっており、

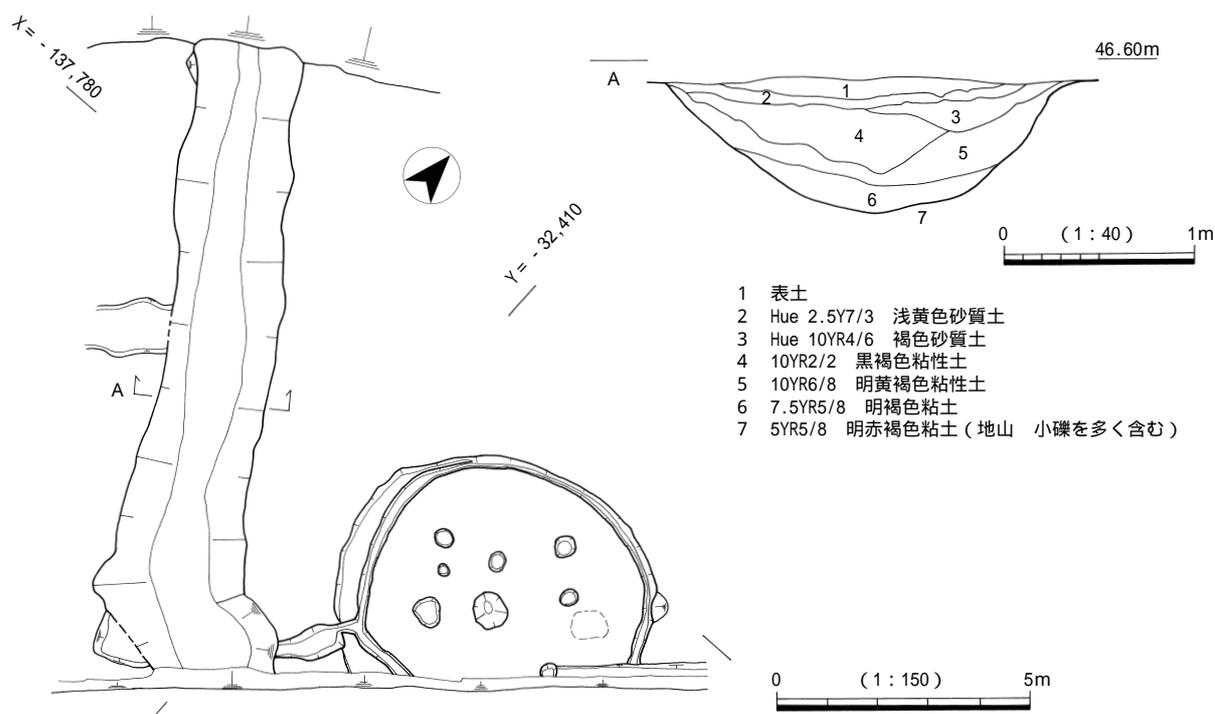


図44 07-1 1溝 平面図・断面図

確実な柱穴は図45の6ピットと8ピットで、直径50および40cm、深さは50および60cmもある。二つの柱の中心間距離は2.5mと広い。1ピットと3ピットは深さ30および35cmとやや浅いが、他に候補はなく、これも柱穴であろう。なおピット2・7・9は深さ0.1m程度で、柱穴とはいいがたい。これにより、かなりいびつではあるが4本柱とすれば、入口は間口の広い住居の北東側、つまり大溝を背にした位置にあるとせざるを得ない。

中央ピット内には、炭の小片はあったものの灰や焼土は含まれておらず、屋内炉とはいえなかった。内部から土器片が放り込まれたような状態で出土した。

壁溝は全周をめぐる。幅20~25cm、深さ7~10cmで、内部には砂質の黄褐色土が充てんされている。住居内の他の場所からはこの土は検出されていない。住居の西から南にかけては壁溝の外側に住居の外周がある。壁溝と外周との間は広いところで40cmあり、いわゆるベッド状遺構となるが、レベルは壁溝の内外でほとんど変わらない。住居の南端から壁溝は、ベッド状遺構を貫通して外部に延び、深さ20cmの屋外ピットを介して1溝に落ちている。これらの部分にも砂質の黄褐色土が充填されていた。

入り口とした住居北東側の柱間には浅い凹地があり、この直上に焼土が厚さ10cmで堆積していたが、地山面自体は焼けておらず、これも炉とはいえなかった。

住居南部で壺形土器4点、台形土器1点と、中央付近で壺形土器1点が出土している。壺1・3および

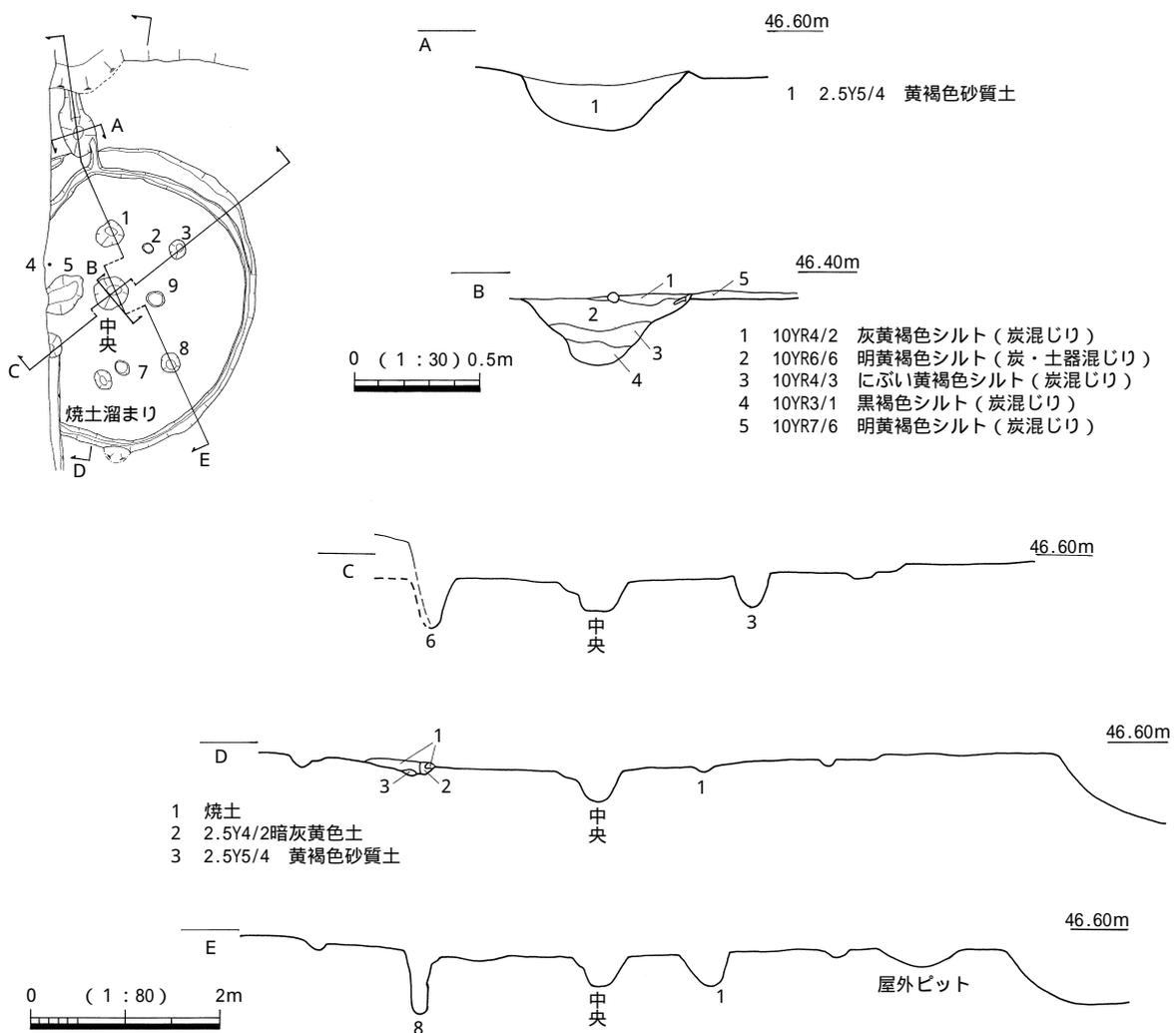


図46 07-1 竪穴住居1 断面図

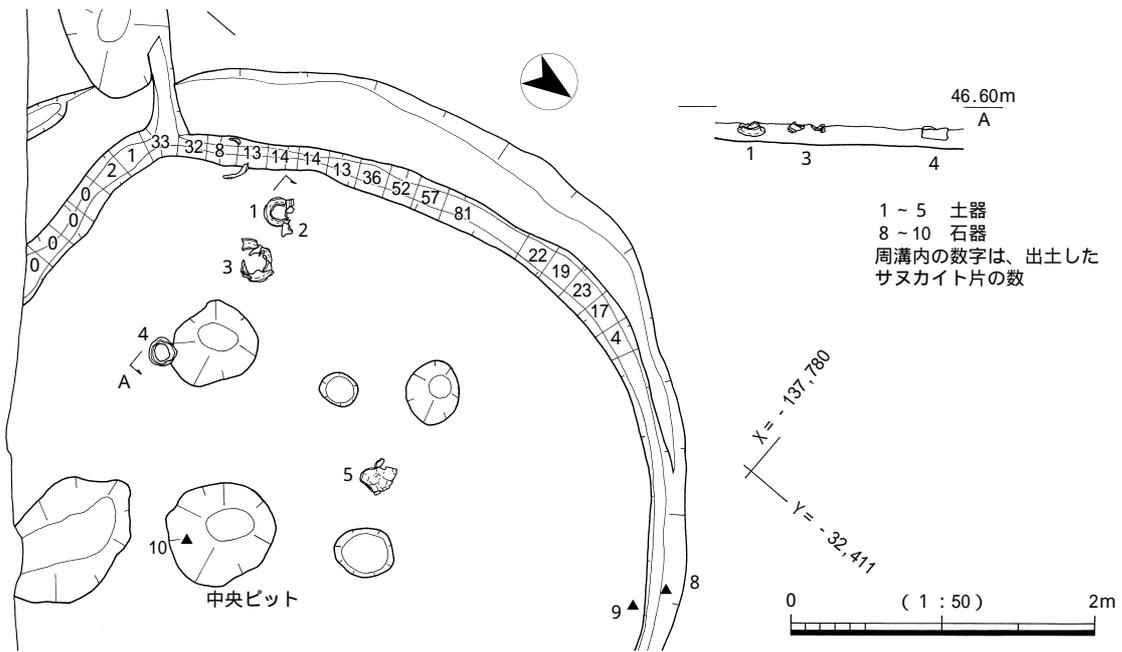


図47 07-1 竪穴住居 1 遺物出土状況図

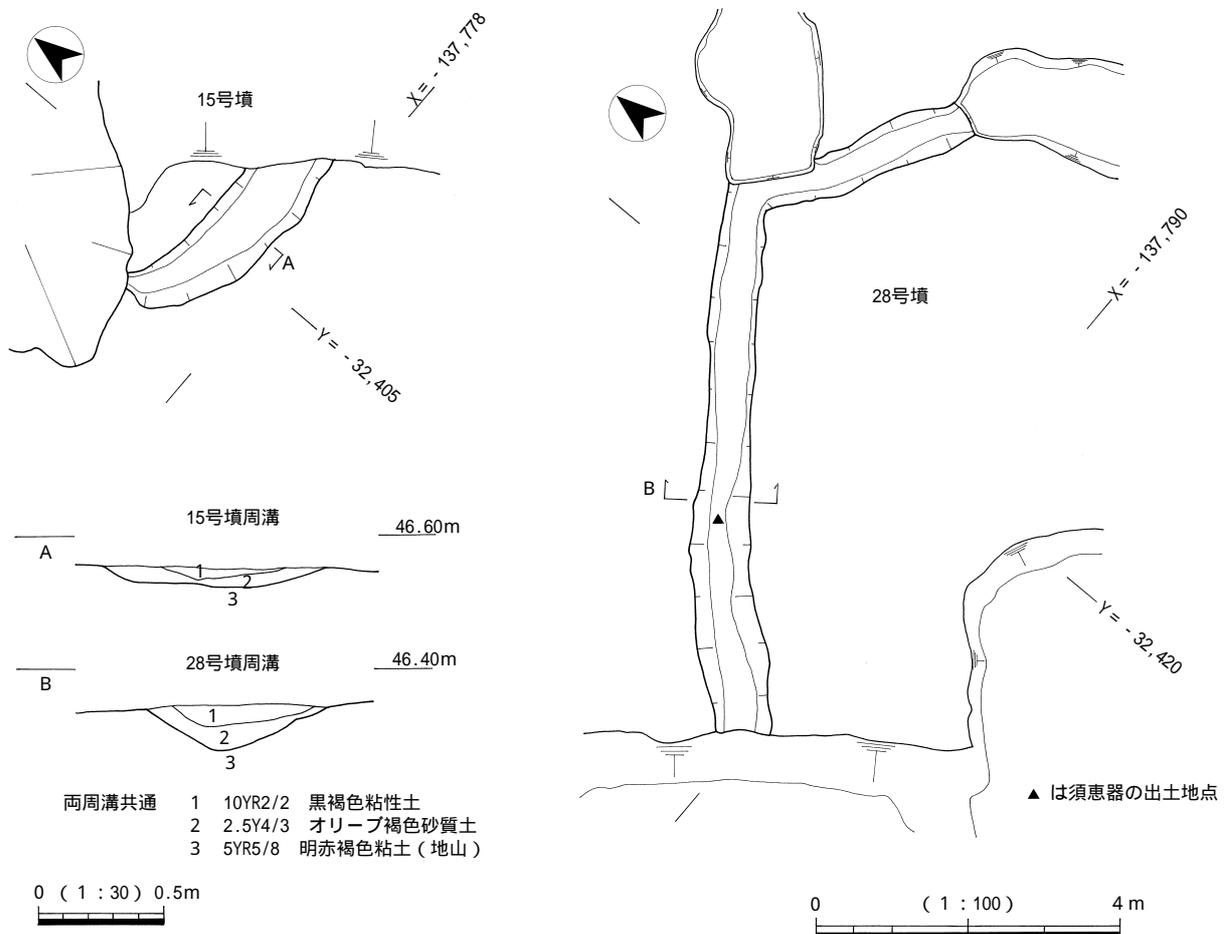


図48 07-1 15・28号墳 平面図・周溝断面図

び台4は、口縁部を下に向け、ほぼ水平に据え置かれたように一列に並んでいた(図版28-2)。最南の壺胴部は壁溝の上を覆っていた。石器は、北西壁際から槍8が(図版28-4)、その近くの地山面付近と中央ピット内部から鋤が各1点出土している。

また壁溝内のベッド状遺構の範囲内には、多くのサヌカイトチップ・フレイクが出土した(図版38-11)。多く含まれていることが判明した時点から、土を10cm単位で事務所に持ち帰り、約1.5mm目の網内で水洗して取り出し、点数を数えた(図47 20cm単位で表示)。30片以上のピークが2ヶ所にあるが、石器製作場所を反映しているのか、それとも弥生人の床面清掃の結果にすぎないのであろうか。

15号墳(図48 図版29-2) 約3m分であるが、調査区北端で周溝が検出された。03-1調査区で既に検出されていたものの延長部である。円墳と推定されていたことがここでも追認された。深さは0.15mと浅いが、埋土が上位の黒褐色粘質土と下位の淡褐色系粘質土に分かれることは、他の周辺古墳の例と同じである。遺物は出土しなかった。直径は、10.1mとなる。

28号墳(図48 図版29-2~4) 新たに見つかった古墳である。攪乱と削平により一部の検出にとどまるが、北の隅が存在し、方墳であったことが分かる。一辺8m以上である。周溝は幅0.6~0.8m、深さ0.10~0.18mで、埋土は15号墳と同様である。上位の黒褐色土中から須恵器甕片が出土した(図版29-4)。

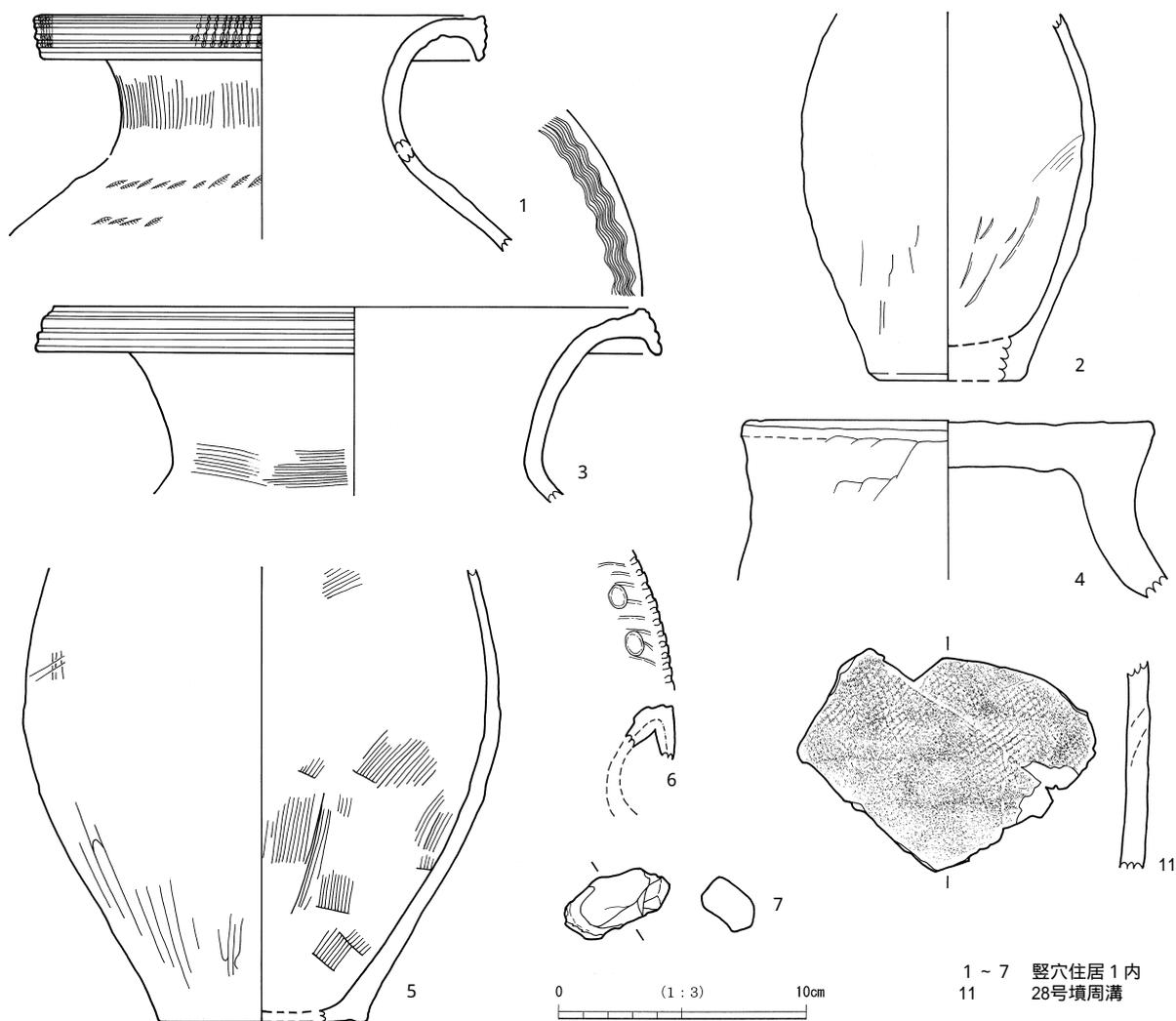


図49 07-1 出土土器

その他 調査区北端に方形の落込みがある。深さ1.3mほどのもので15号墳周溝を壊している。内部には水成堆積はなく、埋められたような堆積を示す。染付け碗の破片が出土している。

調査区南部の一部で、西側の開析谷に向かってサブトレンチをいれた。地山面がゆるく落ちていき、トレンチの西端では急激に落ちている。全体に廃棄物が堆積しているのでこれ以上は掘れなかったが、ここ以外でも調査区西端の所々で地山面の落ちを確認できた(図43)。

(3) 遺物

遺物番号は、出土位置図・図版の番号ともに統一している。

1～7は竪穴住居1からの出土。壺形1・3は、口縁部に細く凹線をめぐらし、1ではその上から縦位の連続刻みを施す。両者とも頸部以下はハケおよびミガキ調整とする。台形4は脚部が広がる傾向をみせる。表面の残りは悪いが、幅広の原体でていねいに磨かれていることが分かる。台形は山陽から摂津にかけて見られるものだが、河内では珍しい。7は水差形の把手であろう。

8～10も竪穴住居1出土の石器。槍8は、長さ8.4cm、幅2.4cm、厚さ1.2cm。鎌9は長さ3.7cm、幅2.4cm、厚さ0.65cm。鎌10は長さ4.9cm、幅2.4cm、厚さ0.7cm。

11は、28号墳周溝出土の須恵器。外面格子タタキ、内面ナデのもので、古式とまではいえるが詳細は不明。

3 まとめ

本調査区では、弥生中期後半の竪穴住居1棟と、同時期と思われる南北の大溝、および古墳2基を検出した。このうち南北の大溝は、幅約50mの開析谷をはさんだ対面の南北溝(本書 05-3-3区の29

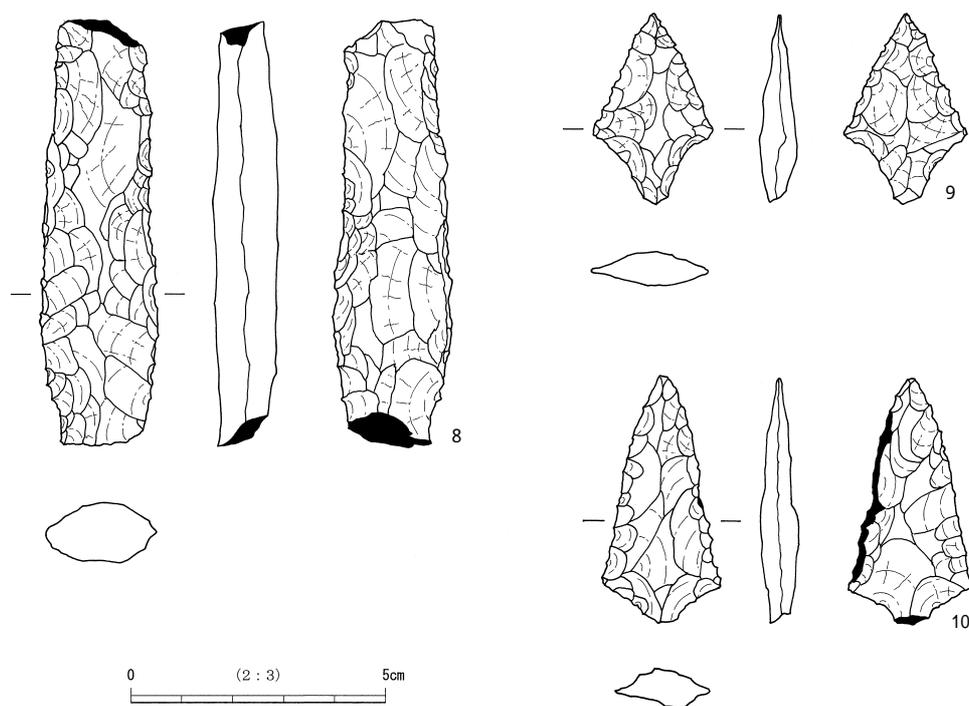


図50 07-1 出土石器

溝)と一連のものともみなすことができる。これら南北溝は地形的に区分される二つの地区の境界にある。南北溝の東側は分水嶺にあたる高所で、後に小方墳が群集する地区である。西側はゆるく下り勾配のついた丘陵尾根トップ平坦面であり、弥生中期後半の集落群がある。

本調査区の竪穴住居1および03-1の竪穴住居1は、ともに南北大溝の東側高所にあつて集落のひとつの支群をなすものである。旧報告書(『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』)ではG群に設定されており、数の少なさなどから他とは異質の群とした。土器群は、太秦の中期土器の中ではやや新しい傾向を示し、あるいは集落存続時期の後半期に、その中から一部が析出されたものとも考えられる。

古墳2基は太秦古墳群・尾支群の中で、現状では最南端に位置している。尾支群は南部の古墳ほど古い傾向にあることが分かっているが、今回の調査では出土遺物がほとんどなかったために、そのことを再検証することはできなかった。

出土した埴輪・須恵器は、古墳の周溝内において底からやや浮いたレベルの、黒褐色土内から検出される。この黒褐色土は、底にたまる無遺物の黄褐色系のシルトの上にあつて、これまで「古墳の二次崩壊土」「土壌化層」などと表現されてきた。いずれも有機物を非常に多く含むことは認識されていたが、その形成時期を示す資料には恵まれなかった。今回の調査でも時期を直接に示すデータはなかったが、近接する丘陵上あるいは段丘上の遺跡のデータを検討すると、古代末期～中世前半期頃に形成されたものとするのが可能である。この点については終章で触れている。

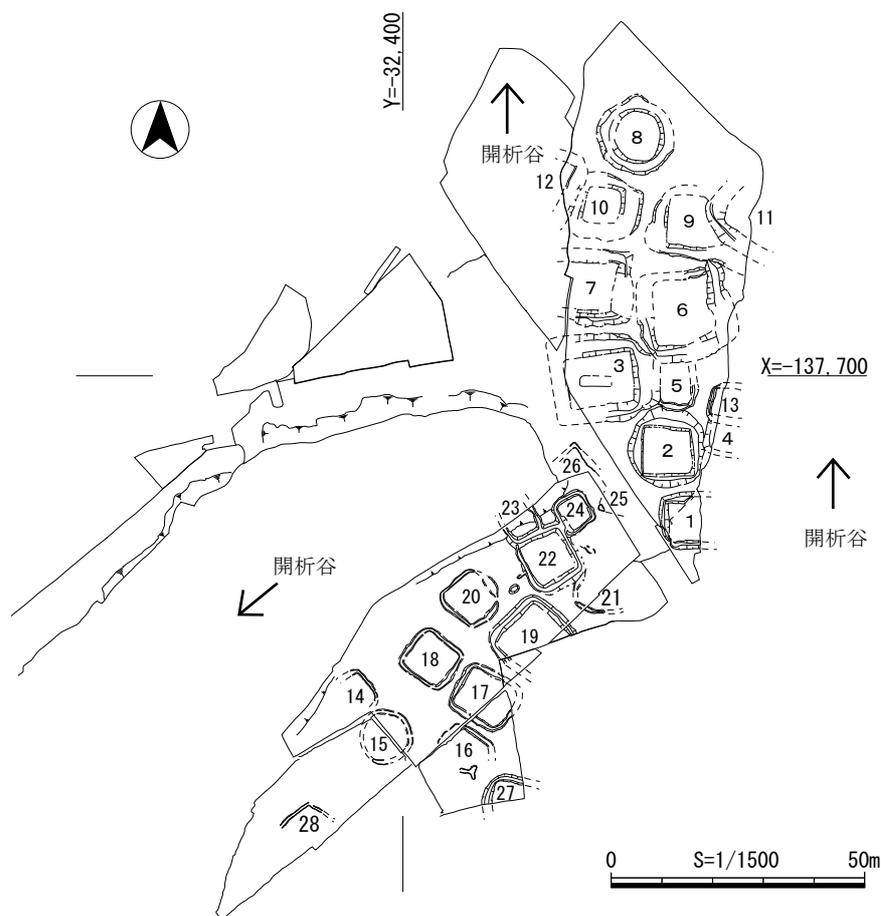


図51 太秦古墳群 尾支群 分布図

第7節 出土須恵器の胎土分析

1 はじめに

太秦古墳群は寝屋川市東部の丘陵上に分布する古墳群で、5世紀中葉から6世紀前葉に形成されたものと考えられている。当古墳群より出土した須恵器には焼成が良好な資料と不良な資料が見られた。これら資料について蛍光X線分析装置による元素分析を行い、焼成の異なる資料間の差異と化学組成からみる材料的特徴を検討した。

2 試料と方法

分析対象遺物は、太秦古墳群出土須恵器小片27点で、焼成の良好な資料と不良な資料がある（表2）。

胎土の分析には各資料よりガラスビードを作成し、それを分析試料とするガラスビード法を用いた。

まず必要量を各資料より切り取り、表面の自然釉や付着土壌などの影響を排除するため、岩石カッターで表面を十分に削り取った後、精製水にて超音波洗浄を行い、セラミック乳鉢で粉末にして、乾燥後、1.8000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$ と、リチウムメタボレイド LiBO_2 を8:2の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラー（NT-2000型；株東京科学製）にて約750℃で250秒間予備加熱し、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作成した。

分析はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX（PW2424型、ターゲットはロジウムRh）にて、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計14種類を用いた検量線法による定量分

析を行った。定量元素は、酸化ナトリウム Na_2O 、酸化マグネシウム MgO 、酸化アルミニウム Al_2O_3 、酸化ケイ素 SiO_2 、酸化リン P_2O_5 、酸化カリウム K_2O 、酸化カルシウム CaO 、酸化チタン TiO_2 、酸化マンガン MnO 、酸化鉄 Fe_2O_3 、ルビジウムRb、ストロンチウムSr、ジルコニウムZr、バリウムBaである。

3 分析結果

分析の結果、 SiO_2 が62.2～74.0%、 Al_2O_3 が15.8～25.4%と、定量元素の多くを占める。続いて、 Fe_2O_3 が4.75～7.03%、 K_2O が0.82～2.37%、 TiO_2 が0.79～1.08%、 Na_2O が0.05～0.82%、 MgO が0.43～0.72%、 CaO が0.01～0.23%、 P_2O_5 が0.014～0.072%、 MnO が0.008～0.016%、Rbが46～111ppm、Srが16～63ppm、Zrが194～325ppm、Baが166～481ppmであった。分析結果を表3に示す。

表2 分析対象須恵器一覧

No.	出土地点	器種	部位	焼成
1	22号墳	坏身	受け部	良好
2	22号墳	坏身	口縁部	不良
3	2号墳	坏身	底部	良好
4	2号墳	坏蓋	天井部	不良
5	2号墳	坏蓋	口縁部	良好
6	2号墳	坏身	受け部	良好
7	2号墳	坏蓋	天井部	不良
8	2号墳	坏蓋	天井部	不良
9	2号墳	坏蓋	天井部	不良
10	2号墳	坏身	口縁部	良好
11	3号墳	坏蓋	天井部	不良
12	3号墳	坏蓋	口縁部	不良
13	3号墳	坏身	口縁部	良好
14	3号墳	坏身	受け部	不良
15	3号墳	坏身	受け部	良好
16	3号墳	坏身	口縁部	良好
17	3号墳	坏身	受け部	良好
18	7号墳	坏蓋	天井部	不良
19	8号墳	坏蓋	天井部～口縁部	不良
20	9号墳	坏蓋	天井部～体部	不良
21	8号墳	坏蓋	天井部	不良
22	9号墳	坏身	受け部	良好
23	10号墳	坏蓋	口縁部	良好
24	10号墳	坏身	口縁部	不良
25	05-2 包含層	無蓋高坏	口縁部	良好
26	05-3 包含層	坏身	体部	良好
27	05-4 包含層	坏身	口縁部	不良

表 3 分析結果

No.	Na ₂ O (%)	MgO (%)	Al ₂ O ₃ (%)	SiO ₂ (%)	P ₂ O ₅ (%)	K ₂ O (%)	CaO (%)	TiO ₂ (%)	MnO (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)	No.
1	0.61	0.46	19.6	68.2	0.025	1.55	0.23	0.79	0.012	6.40	97.9	72	63	275	334	1
2	0.37	0.72	22.6	66.4	0.044	0.91	0.09	0.97	0.011	6.50	98.6	60	32	222	209	2
3	0.25	0.58	23.6	63.5	0.016	1.16	0.04	0.93	0.016	6.89	97.0	59	28	311	252	3
4	0.35	0.49	16.0	74.0	0.014	1.04	0.06	0.89	0.014	5.44	98.3	53	28	266	232	4
5	0.36	0.53	23.1	64.6	0.014	1.37	0.05	0.89	0.015	6.66	97.6	68	30	294	280	5
6	0.49	0.54	17.9	71.3	0.018	1.15	0.08	0.88	0.012	5.55	97.9	67	28	230	228	6
7	0.50	0.60	18.1	69.2	0.016	1.14	0.07	0.91	0.014	6.03	96.6	62	31	224	236	7
8	0.39	0.55	19.9	70.5	0.022	1.22	0.15	1.00	0.013	5.71	99.5	65	53	264	313	8
9	0.36	0.48	15.8	72.1	0.016	1.04	0.06	0.86	0.014	5.37	96.1	55	28	256	198	9
10	0.24	0.59	23.7	64.1	0.015	1.17	0.04	0.94	0.016	7.00	97.8	60	28	313	269	10
11	0.05	0.62	24.4	65.5	0.033	0.98	0.07	1.08	0.014	5.08	97.8	55	26	298	208	11
12	0.08	0.71	25.4	62.4	0.021	1.14	0.08	1.05	0.016	7.03	97.9	62	25	274	287	12
13	0.50	0.62	22.8	67.6	0.016	2.37	0.16	0.84	0.013	5.32	100.2	106	62	261	437	13
14	0.32	0.57	22.9	65.6	0.039	0.82	0.10	1.05	0.008	6.46	97.9	52	28	231	175	14
15	0.13	0.65	24.4	65.5	0.021	0.83	0.01	0.98	0.012	6.70	99.2	46	16	244	166	15
16	0.47	0.61	22.6	67.4	0.014	2.36	0.16	0.84	0.013	5.29	99.8	111	59	263	481	16
17	0.09	0.52	25.0	64.6	0.025	0.95	0.02	1.01	0.008	4.75	97.0	49	19	258	197	17
18	0.32	0.72	23.3	68.1	0.028	1.26	0.08	0.97	0.013	6.00	100.8	82	35	194	285	18
19	0.52	0.46	16.9	70.2	0.028	1.35	0.09	0.81	0.013	5.67	96.0	73	32	227	232	19
20	0.25	0.62	20.8	67.2	0.021	0.87	0.07	0.93	0.010	6.32	97.1	51	27	241	205	20
21	0.44	0.53	18.9	68.6	0.019	1.27	0.09	0.87	0.012	5.21	95.9	75	33	222	205	21
22	0.82	0.47	21.2	66.4	0.017	1.54	0.19	0.81	0.011	5.47	96.9	75	62	299	391	22
23	0.22	0.65	23.6	62.2	0.029	1.13	0.03	0.95	0.011	6.93	95.8	61	29	218	217	23
24	0.37	0.64	20.8	68.6	0.028	1.02	0.09	0.91	0.012	5.61	98.1	58	30	230	242	24
25	0.25	0.43	20.0	65.6	0.072	1.26	0.14	0.88	0.011	5.96	94.6	69	43	285	249	25
26	0.65	0.50	20.1	67.4	0.041	1.41	0.11	0.86	0.015	6.83	97.9	72	52	325	361	26
27	0.43	0.52	17.9	69.9	0.057	1.03	0.20	0.90	0.012	6.89	97.8	48	51	308	256	27
最大	0.82	0.72	25.4	74.0	0.072	2.37	0.23	1.08	0.016	7.03	100.8	111	63	325	481	最大
最小	0.05	0.43	15.8	62.2	0.014	0.82	0.01	0.79	0.008	4.75	94.6	46	16	194	166	最小

4 考察

まず図52のAl₂O₃-SiO₂の分布図を見ると、試料がAl₂O₃、SiO₂の定量値の合計85~90%前後で直線的に分布している様子が見て取れる。小村・藤根(2001)は、中世東海地方の山茶碗の材料的な検討において、粘土の化学組成はAl₂O₃が比較的多く砂粒はSiO₂が多いため、Al₂O₃とSiO₂の組成比の直線の変化は、同一材料の粘土と砂粒の混合比の変化を表しているとしている。これに従うと、例えばNo.4 矢No.9は砂粒成分の割合が他より大きいということが考えられる。ただし、土器自体Al₂O₃とSiO₂以外の成分が約10~20%程含むことが多いため、産地の同一な材料であろうとなかろうとAl₂O₃とSiO₂の間にある程度の負の相関が得られる可能性が高く、直線的に分布していれば同一材料の粘土と砂粒が混合されていることを意味する訳では当然の事ながら無い。今回の分析結果は、ある程度直線的に分布しており、同一材料に由来する可能性も示しているが、この図のみから判断することは難しい。

続いて各元素の定量値をしてみる(図54・55)。元素ごとに図中左側は焼成の良好な試料、右側は焼成の不良な試料であるが、両者とも良く似た分布を示しており、化学組成上の差異は見受けられなかった。このことから、これら焼成の良好な試料と不良な試料の間には、土器材料的な違いは特になく思われ、これらの違いは、例えば窯内の配置の関係などにより、焼成温度や空気の供給状況など焼成条件の違いに起因すると思われる。

図53にRb-Sr分布図を示す。Rb、Srは土器胎土分析における産地推定法においてきわめて有効な指標となっている(例えば三辻1983)。この図を見るとほとんどの試料が似たような場所に集まっているが、No.13とNo.16だけはやや異なる値を示していることがわかる。また、この2点は図52、図54、図55を見ても非常に良く似た組成を示しており、両者はほぼ同時といつていいような、極めて近い時期に同一

産地で生産されたものであると考えられる。

さらに、生産地遺跡の須恵器との比較を試みた。須恵器の分析は、三辻利一により大量に蓄積されているが（例えば三辻・今井1995）、地域差を有効に示す特定の元素のみに着目しており、分析対象元素はRb、Sr、K、Caの4元素が主で、それらに加えてNa、Fe等が補助的に使われる程度と限られている。また、その測定値は含有量までは算出せず、統計処理上都合の良い標準化値（同時に測定した岩石標準試料JG-1との強度比）を用いており、今回の分析結果と単純には比較できない。そこで、参考データではあるが、今回のRb、Srの分析結果とJG-1の定量値（Rb182ppm、Sr184ppm）とで含有量比を算出し、その値を用いて比較することとした。図56に太秦古墳群と大庭寺TG231・232号窯出土須恵器のRb-Sr分布図を示す（三辻・今井1995を基に作成）。これを見ると、単純比較できないことを差し引いても、No.13とNo.16を除いて大庭寺領域とは明確に異なる値を示していることがわかる。また、大庭寺領域を含んで大きく展開する陶邑領域とは重複箇所はあるものの、太秦古墳群の須恵器は全体的にやや左下方にずれており、陶邑の須恵器とは化学組成がやや異なる傾向がうかがえるが、今回は簡易的な比較に過ぎないため、今後のデータの蓄積を待って検討したい。

5 まとめ

太秦古墳群出土須恵器の波長分散型蛍光X線分析装置による胎土分析を行った結果、以下の結果を得た。

- ・焼成の良好な資料と不良な資料との間には、特に化学組成上の差異は見出せなかった。
- ・Rb-Sr分布図において、No.13とNo.16以外は比較的まとまった分布を示した。
- ・No.13とNo.16は、すべての元素において非常に良く似た組成を示した。

最後に、本報は消費地遺跡で出土した資料についてのみの分析であり、生産地遺跡出土資料の分析結果との比較検討が必要とされよう。土器胎土の材料的特徴の把握、ひいては産地の推定に繋げていくためには、生産地遺跡出土資料の詳細な検討が最も基礎となり重要であると思われる。今後、岩石標準試料を用いるなどして精度良く定量されたデータのさらなる蓄積が待たれる。

引用・参考文献

- 小村美代子・藤根久（2001）須恵質土器胎土中の砂粒分の化学的評価。日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨集，114-115，日本文化財科学会
- 小村美代子・藤根久（2002）山茶碗胎土の化学的評価。日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集，60-61，日本文化財科学会
- 三辻利一（1983）古代土器の産地推定法 考古学ライブラリー 14，ニュー・サイエンス社
- 三辻利一・今井加織（1995）大庭寺遺跡TG231・232号窯出土初期須恵器の蛍光X線分析。陶邑・大庭寺遺跡IV，343-358，大阪府教育委員会
- 三辻利一（2002）胎土分析30年をかえりみて 日本文化財科学会20周年記念講演。日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集，2-7，日本文化財科学会

付 記

太秦古墳群の北東約3.5kmに位置する上の山遺跡においても、同様の方法を用いて須恵器の胎土分析が実施されており、その分析結果が公表された。上の山遺跡のデータには、田辺編年のTK73型式に属するものが24点、TK73~TK216型式のものが1点、TK216型式のものが1点含まれている。太秦古墳群の試料と上の山遺跡の5世紀試料で作成したRb-Sr散布図を比較すると、上の山遺跡の試料はRbが105

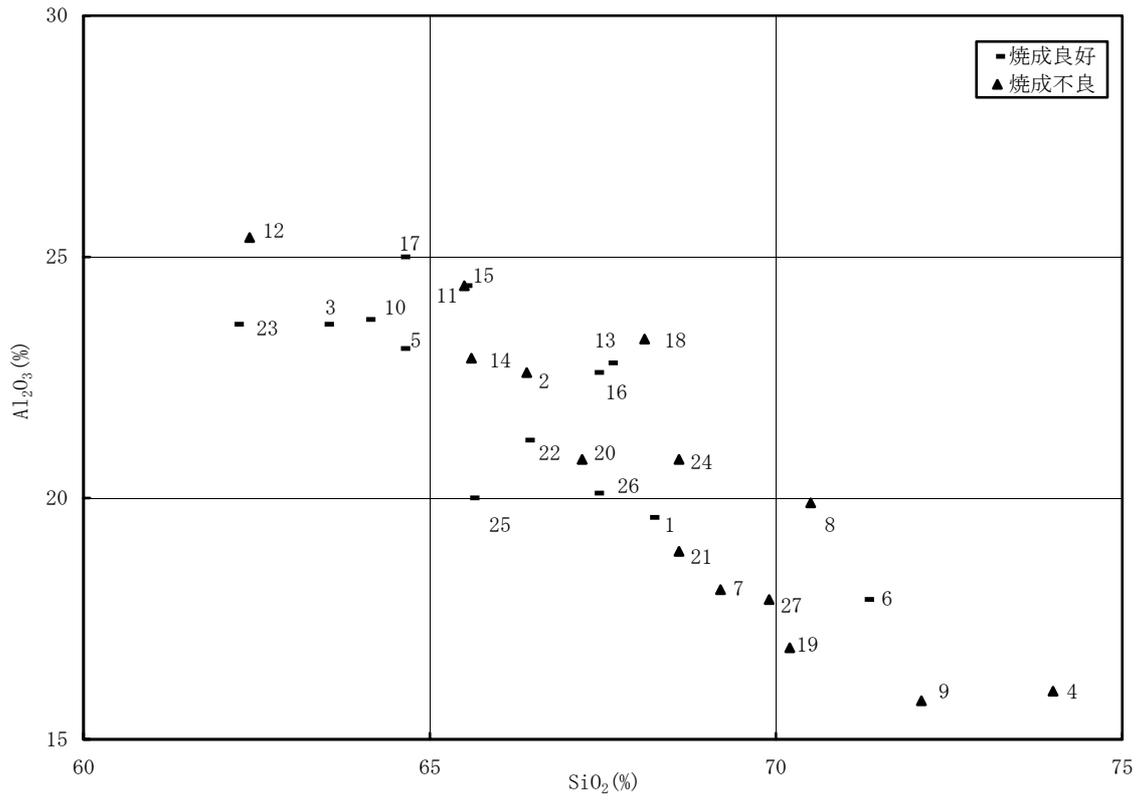


图52 Al_2O_3 - SiO_2 分布图

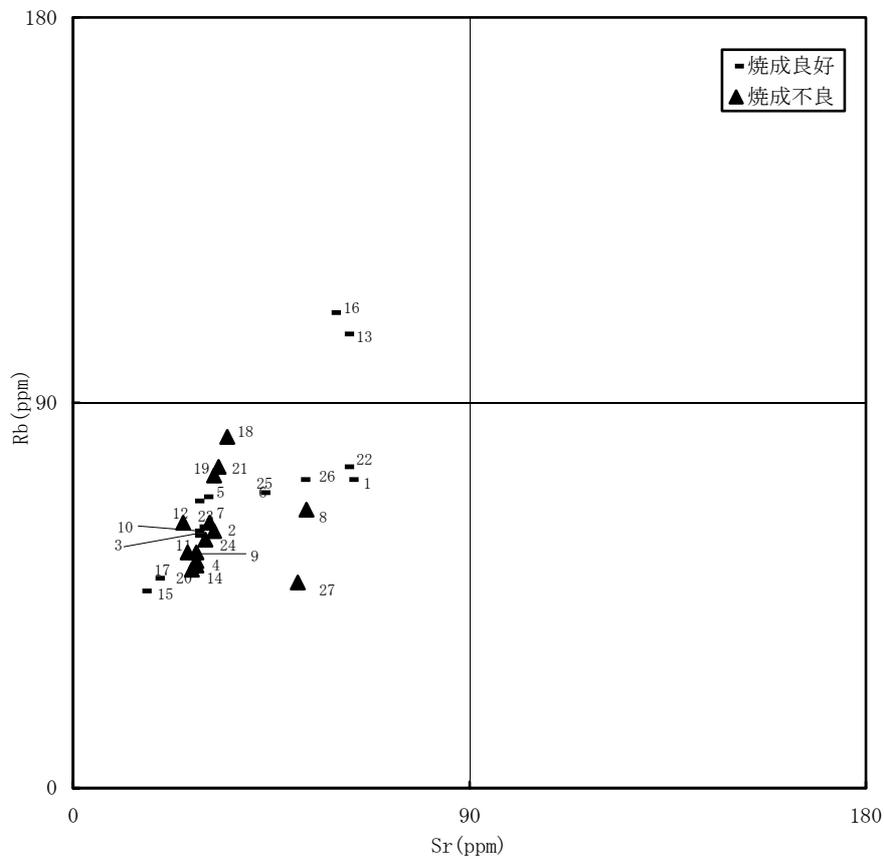


图53 Rb-Sr分布图

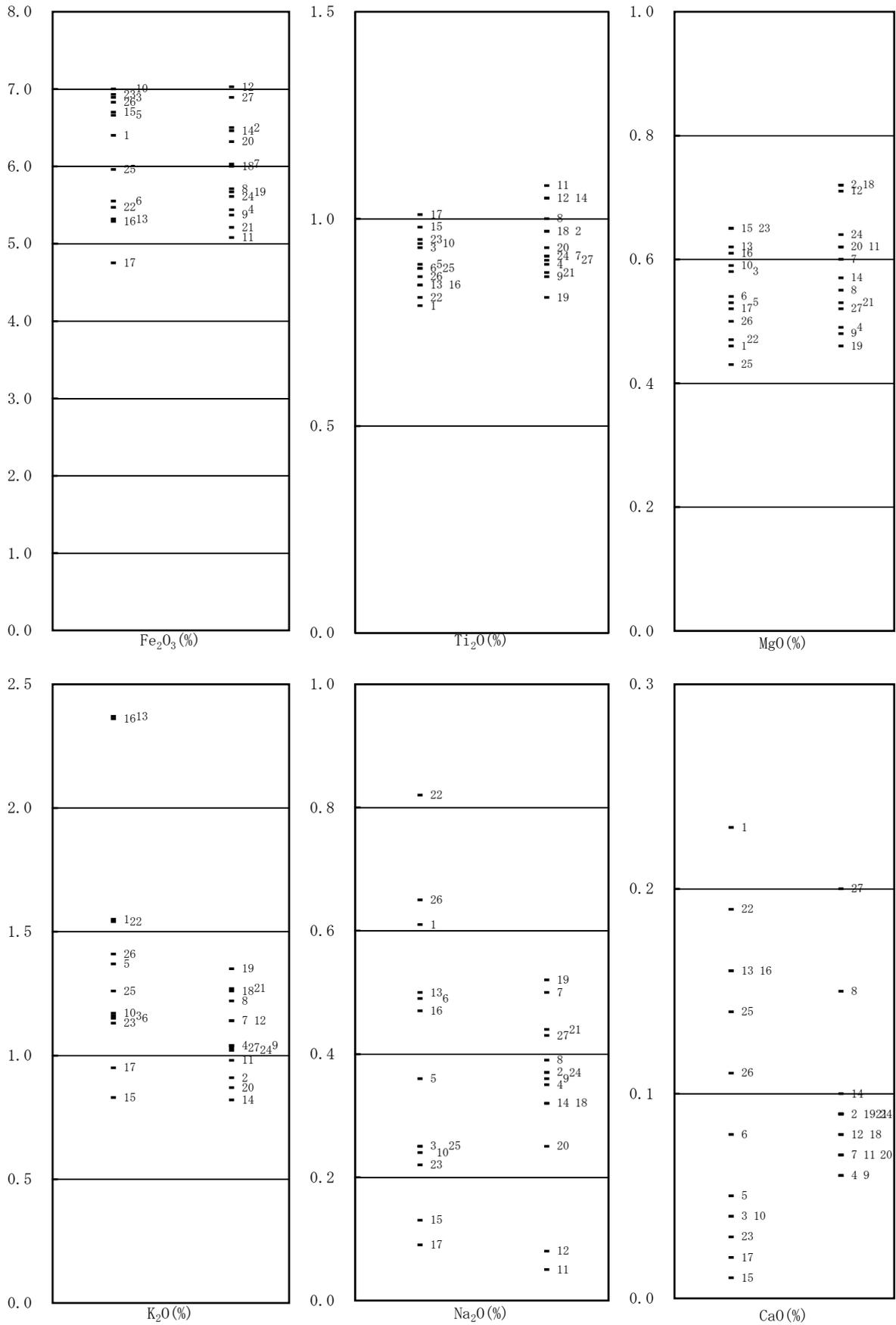


图54 各元素定量值 (1)

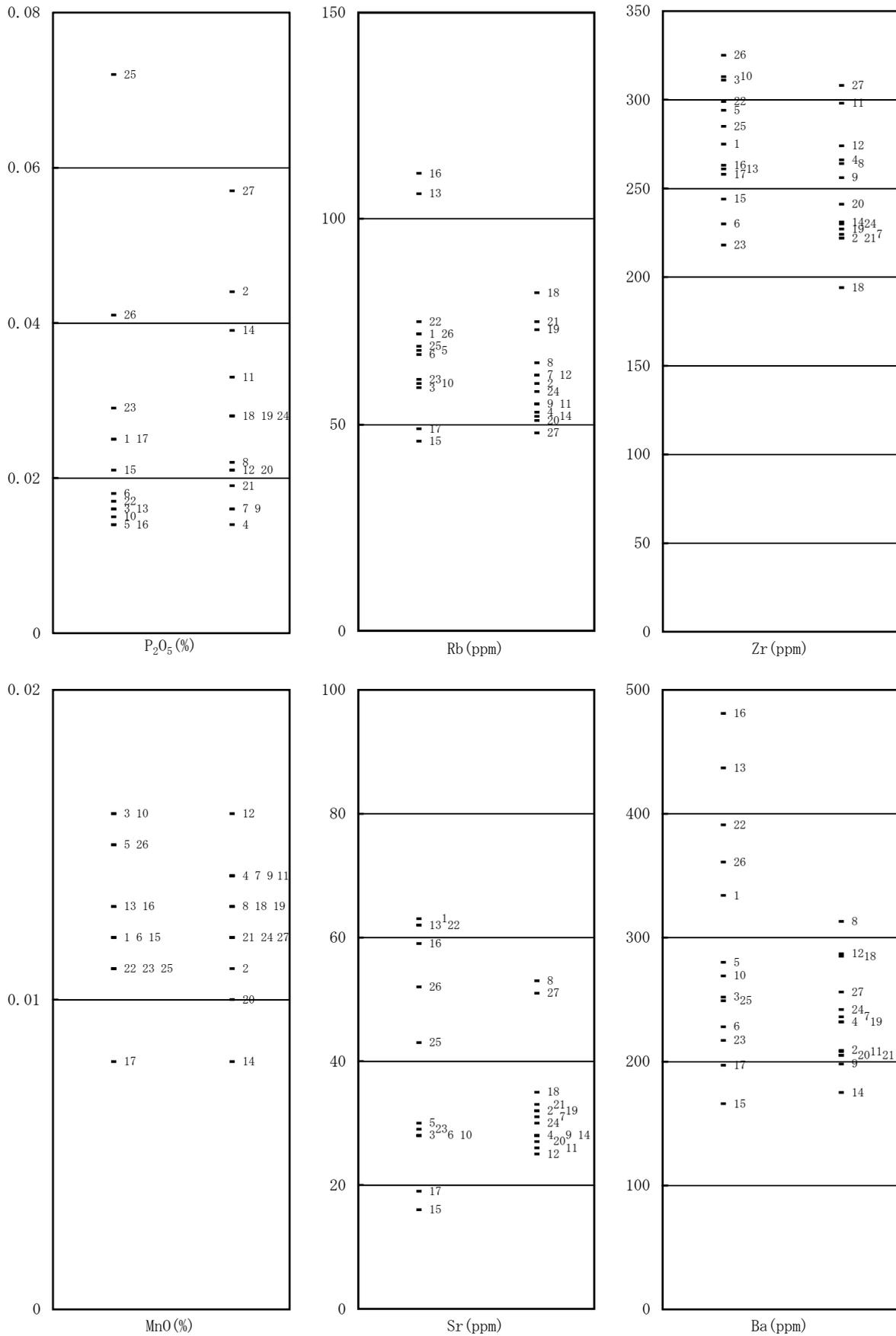


図55 各元素定量値 (2)

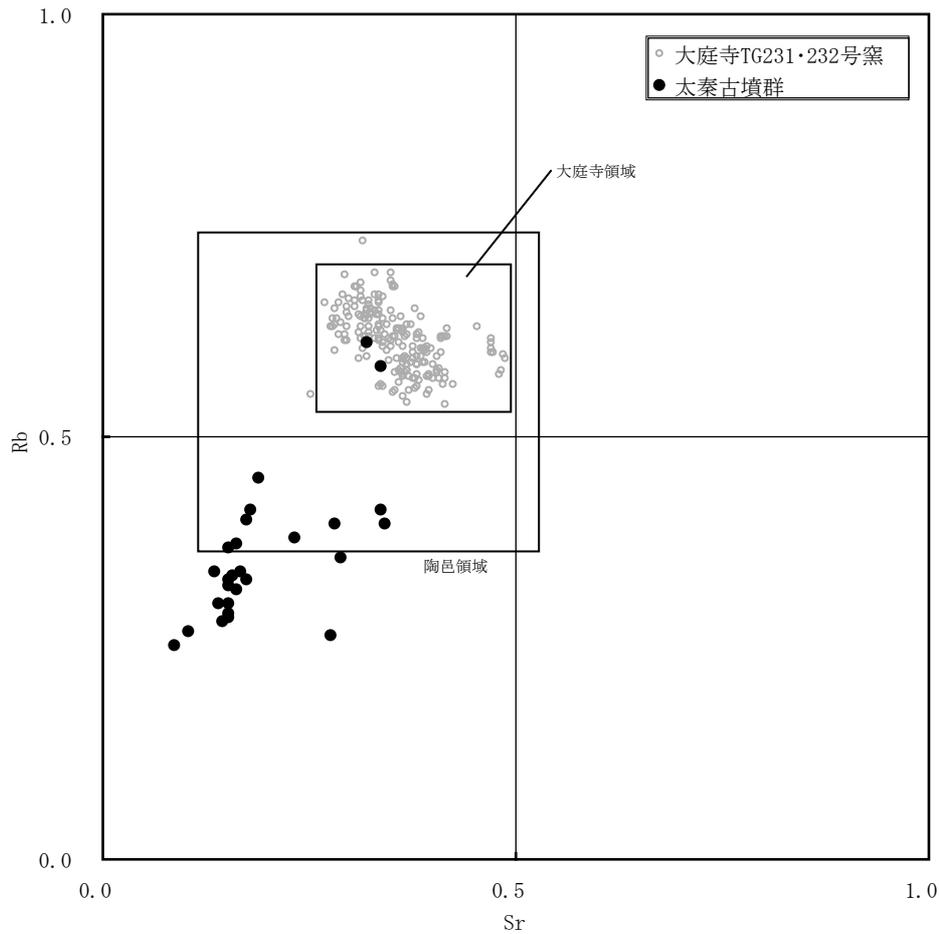


図56 (参考) Rb—Sr分布図

～130ppm、Srが70～90ppmあたりに集中しており、両者に違いがあることが読み取れる。

須恵器の産地推定のためには、窯跡出土資料のデータの蓄積が必要であるが、須恵器の流通の実態を明らかにするためには、消費地遺跡において元素組成から胎土を類型化し、類型の種類や数量を把握することも大切である。そして、一定地域内あるいは1遺跡における時期的な変化や、同一時期における遺跡ごとの特徴などが把握できれば、須恵器流通の実態解明のための手がかりとなりうる。

参考文献

矢作健二・斎藤紀之(2007) 上の山遺跡出土須恵器の蛍光X線分析法による胎土分析.上の山遺跡Ⅱ.268-279.大阪府文化財センター

第5章 大尾遺跡の調査（05-1）

1. 調査に至る経緯

大尾遺跡は、寝屋川市高宮あさひ丘（調査時は国守町）に所在する。この遺跡では第二京阪道路の建設に伴って、2001（平成13）年度・2003（平成15）年度・2004（平成16）年度に発掘調査が実施され（図57）、弥生時代中期の方形周溝墓、飛鳥時代～奈良時代の建物群などが検出された。これらの調査に関しては、既に報告書が刊行されている（伊藤・植村2003；辻・清岡2005；青柳2005）。

これらの発掘調査終了後、第二京阪道路の建設工事が進められた。その工事に伴って、路線予定地を横切っている市道あさひ丘小路線を迂回させることになったが、市道を迂回させるための用地に大尾遺跡の一部が含まれていた。特に、2001年度調査地の5区に隣接する部分に関しては、調査成果をもとにして弥生時代中期の方形周溝墓が3基存在する可能性が指摘されていたため、発掘調査の実施が決定された。この調査地の名称は、『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（大阪府文化財センター 2003）の規定にもとづき、大尾遺跡05-1とした。05-1と既往の調査地との位置関係は図57に示すとおりである。

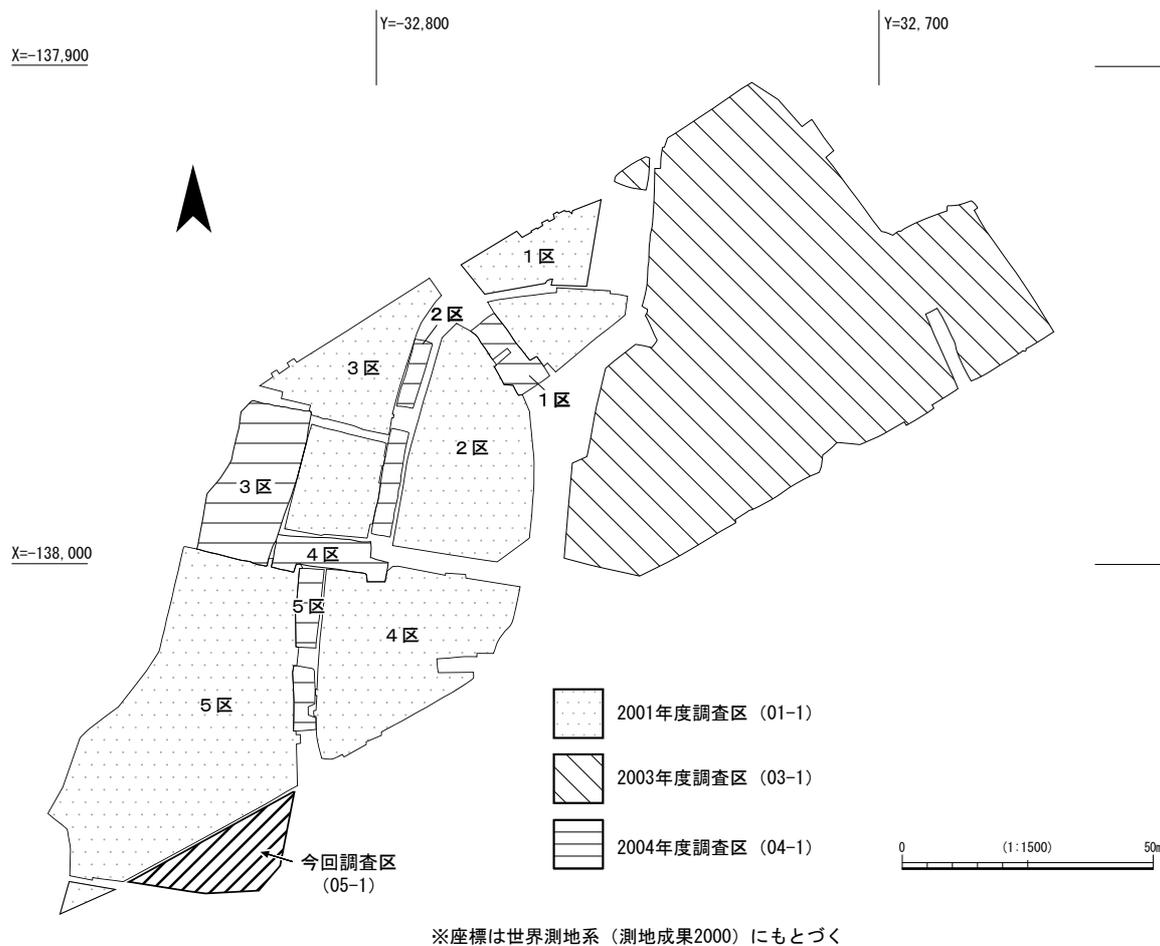


図57 調査区配置図

なお、2001年度調査はこのマニュアルが制定される以前に実施されたため、調査名が不明確になっている。このため今回の報告では、マニュアルの規定に準じて大尾遺跡01-1と呼ぶことにする。ちなみに、2003・2004年度調査地の調査名は、03-1・04-1である。

2. 遺跡の立地

大尾遺跡は枚方丘陵の南西端に立地している。今回、大尾遺跡の立地を検討するために、大阪府作製1961年3000分の1地形図にもとづいて枚方丘陵南西部の等高線図を作成した(図58)。近年、遺跡周辺においては、宅地開発が進んで地形を把握することが難しくなっているが、この等高線図では開析谷の位置を詳しく把握することができる。これらの情報はこれまでの確認調査・発掘調査のデータとよく整合しており、大尾遺跡だけでなく、太秦遺跡・高宮遺跡・高宮廃寺の遺跡立地を理解するために役立つと思われる。

大尾遺跡は、南に張り出す2つの尾根によって構成される。このうち、西側の尾根のほうが東側のものに比べて一段高くなっている。空中写真判読では、これらの尾根はそれぞれ別の地形面に属すると判断でき、表層地質に関する記載(宮地・田結庄・寒川2001)を参考にすると、西側の尾根は大阪層群を基盤とし、東側の尾根は高位段丘構成層を基盤とするようである。なお、01-1・04-1・05-1は西側の尾根、03-1は東側の尾根に位置する。

西側の尾根の両脇には開析谷が存在している。田村俊和(1996)による谷頭部の微地形分類を参考に

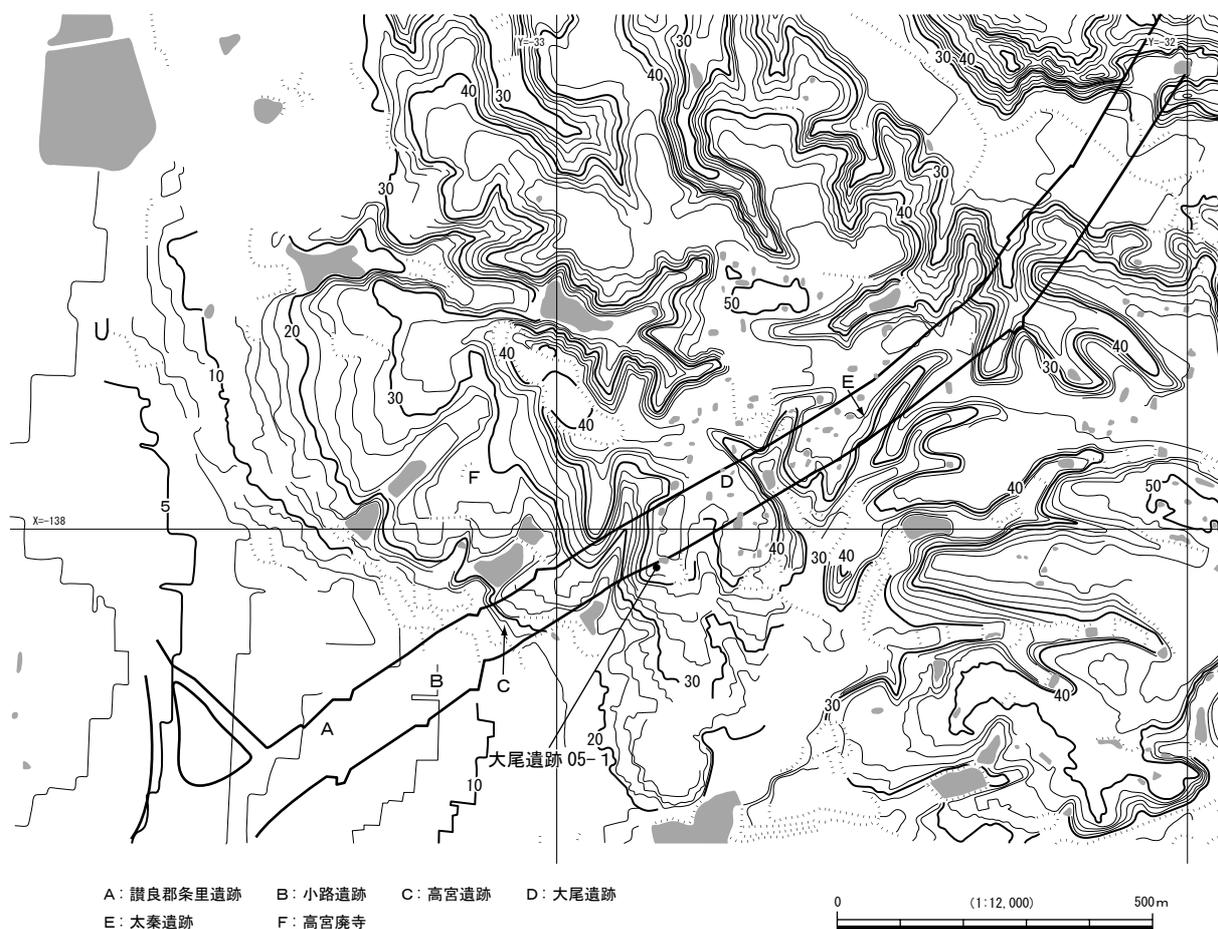


図58 遺跡周辺等高線図

すると、尾根の最高所は「頂部平坦面」、その周囲の傾斜がやや大きくなった部分は「頂部斜面」、さらに傾斜が大きくなり、等高線が密に入っている部分は「上部谷壁斜面」ないし「下部谷壁斜面」にあたる。尾根の南端は開析谷に面していないが、この部分にも頂部斜面と谷壁斜面に連続する斜面を認識することができる。また、図64に示すように、01-1の5区の南西端や05-1の南部では傾斜変換点（遷急点）が確認されているが、これが頂部斜面と上部谷壁斜面の境に対応する。調査区と微地形との対応関係を整理すると、01-1の1～3区や4・5区の一部は頂部平坦面、01-1の4・5区の大部分や05-1は頂部斜面に位置する。後述するように、このような立地条件の違いが地形形成と土地利用に大きな影響を与えたと思われる。

3. 調査方法

調査では、まず、盛土・盛土前の表土・近世以降と考えられる作土層を重機で掘削した後、人力で堆積層を掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。また、最終遺構面（第2層下面）に関しては、クレーンを使って写真測量をおこなった。

調査地の地区割については、『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（大阪府文化財センター 2003）の規定に従った。この調査地の第I区画はI 6、第II区画は16である。また、第III・IV区画に関しては図59に示すとおりである。なお、01-1に関しては、測地法改正前に調査されたため、日本測地系（改正前）にもとづく地区割がなされていた。また、04-1は01-1の隣接部を調査したものであり、01-1

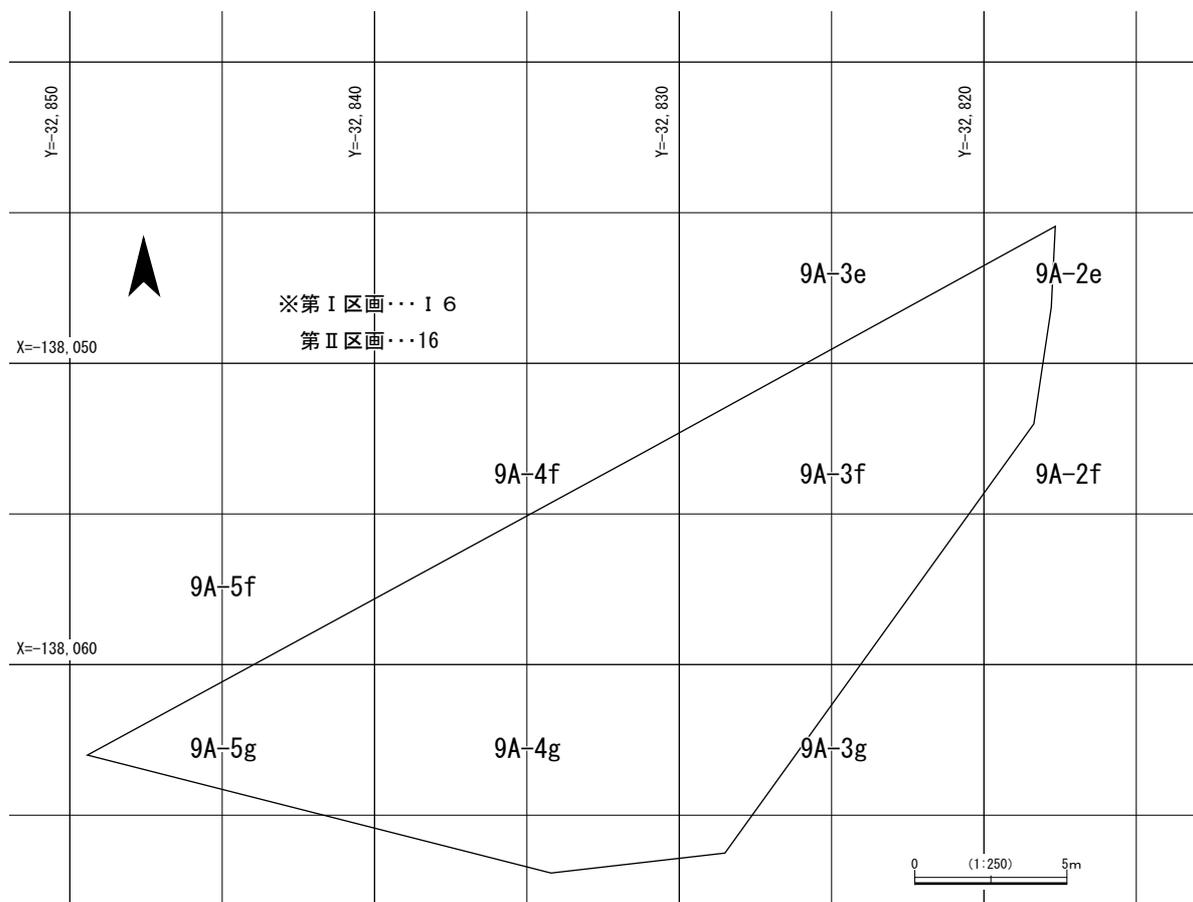


図59 地区割図

とのつながりを把握する目的で、日本測地系（改正前）にもとづく地区割を使用して報告がなされた。ここで報告する05-1も01-1に隣接していたが、今回は世界測地系（測地成果2000）を使用した。これにより、過去の調査成果との関係がわからなくなることが危惧されるため、図60には日本測地系（改正前）の座標も記載した。

4. 調査成果

(1) 層序

はじめに、この調査地の層序を説明する。

まず、盛土前の表土（層厚約20cm）を第1-1a層とし、その下の近世以降と考えられる作土層（層厚約10cm）を第1-2a層とした。第1-2a層の下には、礫混じり細砂～シルトが堆積しており、これを第2層とした。この層は水流によって形成された落ち込みを埋める堆積物であり、その層厚は場所によって異なっていた（図61）。また、第2層は調査地よりも南側の谷壁斜面にも連続して分布しているようである。なお、第2層の下には砂礫層が存在しているが、これに関しては第二京阪道路の工事によってできた露頭の観察によって、大阪層群に含まれる地層であることを確認した。以上のような層序の認識にもとづいて、機械掘削は第1-2a層まで、人力掘削は第2層までおこなった。

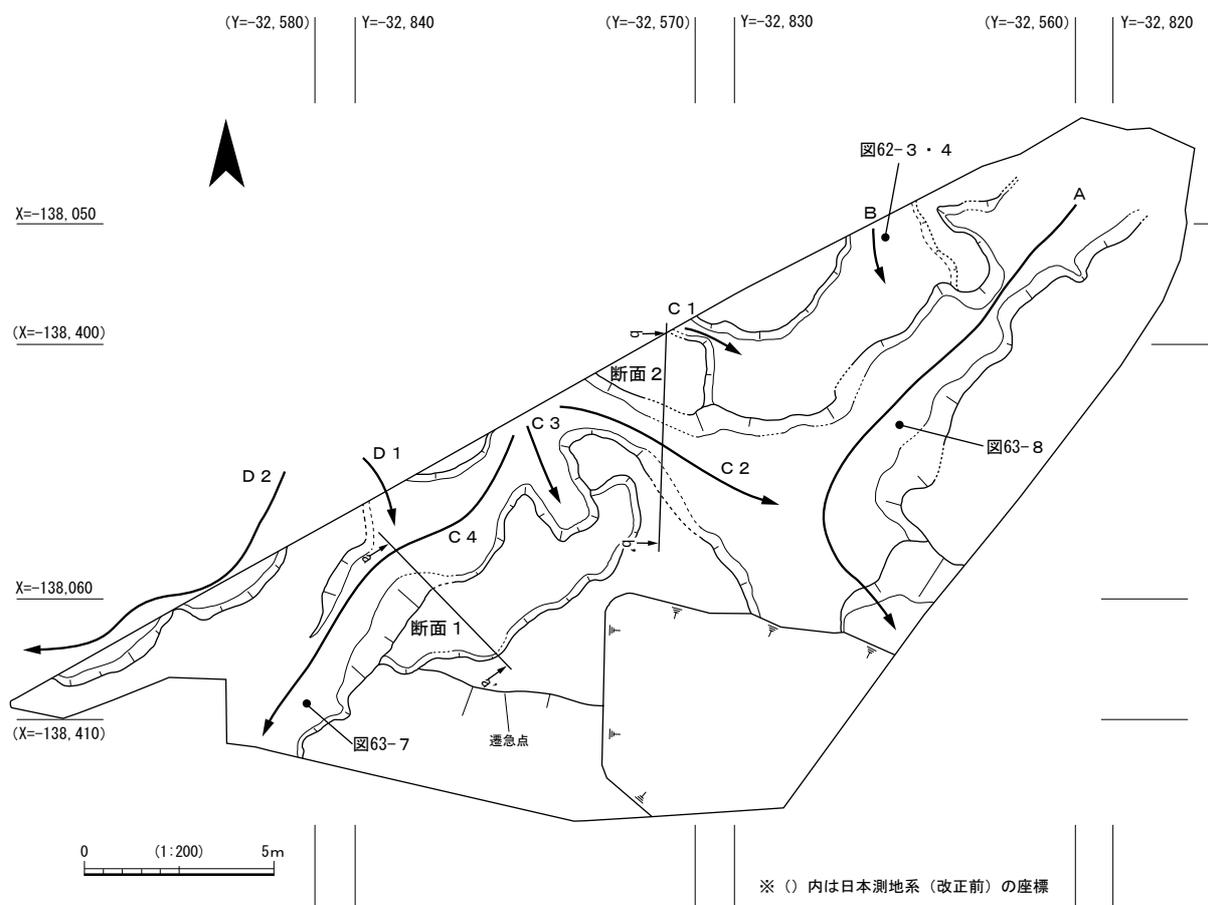


図60 第2層下面 平面図

(2) 検出遺構

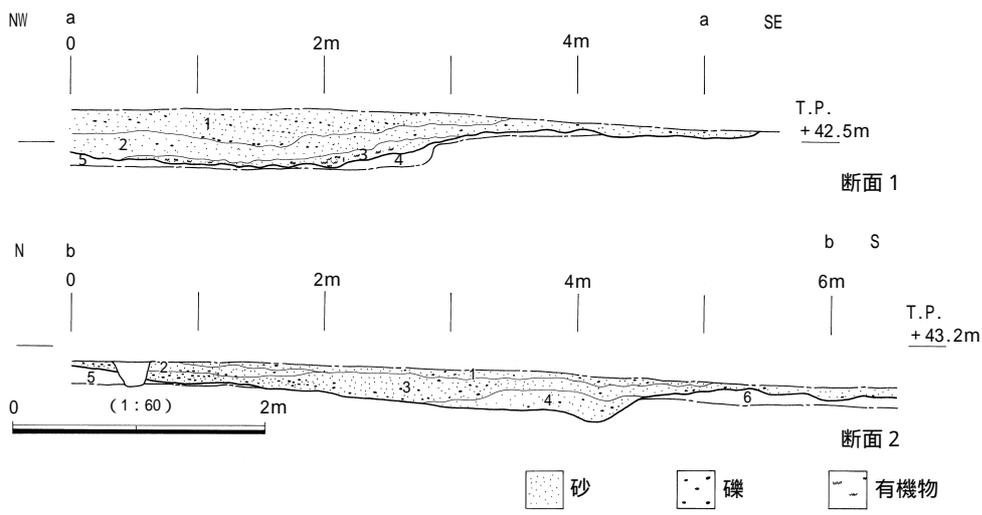
調査では、機械掘削終了後、第2層上面を精査して近現代の遺構を確認した後、第2層下面で遺構検出をおこなった。

まず、機械掘削終了後、第2層上面を精査した際に確認した遺構について簡単にふれておきたい。機械掘削終了面では、調査地北東部を中心とする部分において南北方向にのびる耕作溝を複数検出した。これについては、第1-2 a層を作土とする畝に伴うものと考えられる。大阪府1961年3000分の1地形図などによれば、この部分は近年まで耕作地として利用されていたようであり、近現代の耕作に伴う遺構と考えられる。また、調査地西端では、約4m×3m、深さ約40cmの土坑を検出した。埋土中からは瓦器の破片が出土したが、埋土はマサ土にシルトブロックが混じるものであり、客土と思われる。この遺構は、近現代のものと思われる。

第2層下面においては、調査区全体にわたって溝状の浅い落ち込みを検出した(図60)。落ち込みは複数存在していたが、複雑につながっていたため、深さや傾斜方向に着目してA~Dに細分した。

Aは調査地東部で検出されたもので、南西方向にのびた後、蛇行して南東方向に向きを変えていた。調査地北東隅では深さは約10cm程度であったが、徐々に深くなって南端では深さが60cmとなっていた。この落ち込みを埋める堆積物は極粗砂~細礫混じり極細砂であった。この堆積物には礫が葉理状に配列する部分が認められ、その部分において礫の重なり具合を観察したところ、一部でインブリケーション(覆瓦構造)が認められた。また、北東部では最下部に細礫~中礫混じり極細砂~シルトが堆積していたが、この層には有機物が多く含まれ、やや暗色を呈していた。なお、蛇行部付近において、落ち込みを埋積する堆積物の上部から、土師器甕(図63-8)がつぶれた状態で出土した。

また、Aの西側は第2層の厚さが薄く、不明瞭であったが、南方向にのびる溝状の落ち込みが存在しており、Bとした。その深さは約10cmである。これは01-1の5区の「溝5」に連続するものと考えら



- 断面1
- 1 黄褐2.5Y5/6 細礫-中礫 30mm 混じりシルト質極細砂 緩やかなカーブをなす礫の葉理が認められ(第2層)
 - 2 洗黄2.5Y7/4 細礫-中礫 20mm 混じり極細砂 礫の量は1と比べ少ない(第2層)
 - 3 灰3Y5/1 中礫 20mm 混じり極細砂 木本起源の有機物(厚 5~12mm前後) 多く含む 土壌化(第2層)
 - 4 にぶい黄2.5Y6/4 細礫-中礫混じり極細砂 糸根状~うろみ管状短鉄多(大阪層群を構成する地層)
 - 5 明黄褐10YR6/6 シルト 均質 クラックあり(大阪層群を構成する地層)

- 断面2
- 1 灰オリーブ5Y5/2 細礫-中礫 10mm 混じり極細砂 擾乱を受けていると思われる 下面で畝の耕作痕検出(第1-2 a層)
 - 2 にぶい黄2.5Y6/4 細礫-中礫 20mm 混じり極細砂 礫が葉理状に並ぶ傾向あり(第2層)
 - 3 黄褐2.5Y5/3 極細砂-中礫 30mm 質極細砂 淘汰悪し(第2層)
 - 4 黄褐2.5Y5/6 細礫-中礫 10mm 混じりシルト質極細砂(第2層)
 - 5 黄褐10YR5/6 極細砂-中礫質極細砂-シルト 淘汰悪し(大阪層群を構成する地層)
 - 6 黄褐10YR5/6 極細砂-中礫 20mm 混じりシルト質極細砂(大阪層群を構成する地層)

図61 断面図

れる。この落ち込みの上部は細礫～中礫混じり細砂～シルトであり、下部は中礫混じり極細砂であった。このうち、下部の層準には有機物粒が多く含まれており、やや暗色を呈していた。なお、この落ち込みの下部の層準から、弥生時代中期後半の広口壺が1個体、つぶれた状態で出土した(図62-3・4、図版39-4)。ただし、土器の遺存状況は悪く、ほとんど接合することができなかった。

Bの西側で検出された落ち込みはCとしたが、これらは4つの異なる方向にのびるもの(C1～4)から構成される。このうち、C1は位置がやや離れているが、01-1の5区南端の状況(図64)からみて、C2～4と同じ方向からの水流によって形成されたと考えられる。C1は深さ約10cmであり、細砂混じり中礫によって充填されていた。この落ち込みは水流によって形成された侵食痕であり、形成後すぐに埋没した可能性が高い。また、これは01-1の5区の調査において、「周溝墓22」の南西端とされた部分に対応するが、01-1の状況を写真で確認したところ、段落ちとして理解された部分は緩やかに南西へ向かって下がっており、明瞭な傾斜変換点は存在しなかった。一方、C2～4は同じ地点から異なる方向に分岐したものである。これらの深さは10～20cm程度である。図61と図版39-2・3には、C2の部分の断面図・写真を示した。この落ち込みを埋める堆積物は細礫～中礫混じり極細砂～シルトであった。ただし詳細に観察したところ、極細砂～シルトを主体とする部分の間に、緩やかにカーブした形態をとる中礫の薄層が挟在することを確認した。この特徴からみて、この堆積物は水流によって運搬された掃流堆積物と考えられる。また、落ち込みの底面には中礫混じり極細砂層が認められた。この層準には有機物粒が多く含まれており、暗色を呈していた。有機物粒のうち、1cm弱のやや大きなものを観察したところ、木本起源のものであると推定できた。また、弱いブロック状の構造(粒団?)をなす部分も認められ、土壤構造が発達している可能性がある。C2～4からは比較的多くの土器片が出土した。それらはすべて落ち込みを埋める堆積物の上部ないし中部から出土し、最下層からは遺物は出土しなかった。特に注目される遺物は須恵器横瓶(図63-7)で、図60に示した地点から破片がまとめて出土した(図版39-5)。

さらに、調査地北西隅で検出された落ち込みをDとし、D1・2に細分した。このうち、D2が主要な落ち込みであるが、ここからC4に向かって分岐する落ちが存在するようであり、これをD1とした。これらの深さは10～20cm程度である。01-1の5区では、「溝50」と一括された部分のうち、南端部分において溝状にのびる部分が確認されており、これがDに連続すると考えられる。なお報告書では、この溝状の落ちは5区南端で東に屈曲するように図示されたが、等高線図をみると、5区南端に沿って南西方向にも伸びているようであり、これがD2に対応すると思われる。これらを埋める堆積物もCと同様で、細礫～中礫混じり極細砂～シルトであった。調査地西端の壁において、この堆積物に水を撒いて観察したところ、砂が洗い流されて葉理が明瞭に観察できた。なお、この部分では最下層の有機物粒を多く含む層準は確認で

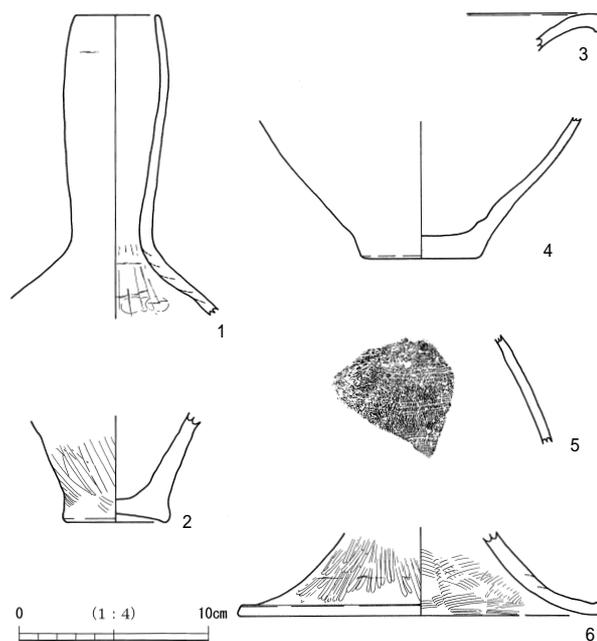


図62 出土遺物(弥生土器)

きなかったが、これに関しては侵食されて遺存しなかった可能性が考えられる。D 2からはC 2～4と同様、比較的多くの土器片が出土した。

なお、C 3・4の南側は浅い落ち込みとなっており、礫混じり細砂～シルトによって埋没していた。また、その南では第2層下面の傾斜が大きくなり、南へ向かって下がっていく様子が確認できた。やや不明瞭であるが、ケバをつけて表現した部分が傾斜変換点（遷急点）である。

A～Dに細分した落ち込みは蛇行する部分があり、徐々に深さを増して斜面を下っていくという特徴を有する。これらの特徴から、これらの落ち込みは水流の下刻によって形成された自然地形と推定され、地形学で「ガリー」と呼ばれるものに相当すると考えられる。今回の調査地からは方形周溝墓の周溝が検出されると予想されていたが、これらの落ち込みについては、平面形が不規則であり、人為的な掘削・埋め戻しに伴うブロック土は存在しないうえ、肩部や底面に人為的な加工が施されたと思われるような痕跡も認められなかったため、方形周溝墓の周溝であるとは考えがたい。これらを埋める堆積物のうち、上部の細礫～中礫混じり砂層は、礫が緩やかにカーブした葉理状に配列する部分や、葉理が明瞭に確認された部分があるため、水流によって運搬された掃流堆積物と思われる。その堆積物は粒径などの違いから細分できるが、顕著な堆積間隙を示唆するような特徴は存在せず、比較的短期間のうちに堆積したと考えられる。また、最下層は有機物粒を多く含む礫混じり砂層であり、土壤構造が発達している可能性が高い。したがって、最下層とそれより上の層の間には堆積間隙が存在すると思われる。なお、最下層に含まれる有機物粒が被熱して炭化したものかどうかは、実体顕微鏡を用いた観察によって判別できる（井上2007）。今回はそれを実施していないので不明であるが、被熱している可能性はある。

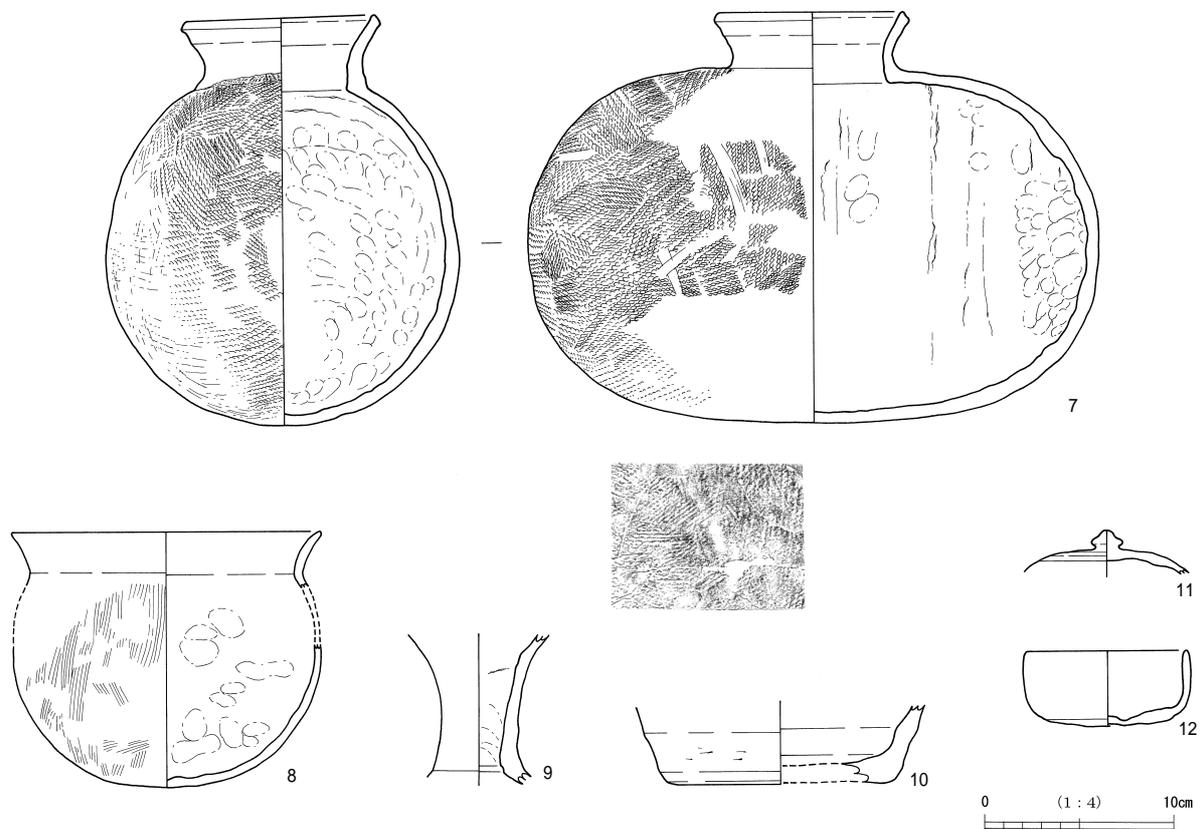


図63 出土遺物（土師器・須恵器）

(3) 出土遺物

図62・63には、ガリーと思われる落ち込みを埋める堆積物中から出土した遺物を示した。出土遺物には、弥生土器と飛鳥時代後半～奈良時代前半の須恵器・土師器がある。出土遺物の大部分が落ち込みを埋める堆積物の上部～中部に含まれていたが、前述したように図62-3・4に示した弥生土器は落ち込みBの最下層からつぶれた状態で出土した。

まず、弥生土器から説明する(図62)。1は細頸壺の口縁部から体部にかけての破片である。器壁の剥落が激しく、調整は不明である。2は甕の底部である。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。3・4は同一個体で、広口壺と思われる。これらは落ち込みBの最下層から出土したものであり、1個体がつぶれた状態で出土したが、遺存状況が悪かったため、口縁端部の断面と底部のみを図化した。なお、図示していない他の破片の中には、簾状文がわずかに残存するものも含まれている。この土器の胎土には角閃石が多く含まれており、生駒山西麓の胎土であると判断できる。5は壺の体部破片であり、外面に簾状文が3列認められる。6は脚部の破片である。裾端部の形状からみて、中期終わりから後期初め頃に属するものと思われる。

今回出土した弥生土器は、細片のため全体像が推定できないものが多いが、寺沢 薫・森井貞雄(1989)の編年を用いれば、おおむね弥生時代中期後葉(河内第Ⅳ様式)に属すると思われる。04-1の報告では、出土した弥生土器のほとんどは、濱田延充(1993)による編年の第Ⅲ様式中段階から第Ⅳ様式新段階にあたとされているが、今回出土した土器もその所見と矛盾しない。

図63には古代に属する土器を示した。7は須恵器横瓶である。これは落ち込みC4から出土した。外面には縄蓆文が施されている(実測図下の拓本参照)。また、内面の調整はナデであり、粘土紐の接合痕と指頭圧痕が明瞭に確認できる。8は土師器甕で、落ち込みAから出土した。外面の調整はハケメ、内面の調整はナデである。内面の粘土紐接合部分では、指頭圧痕が明瞭に認められる。9は須恵器長頸壺の頸部破片である。10は須恵器平瓶の底部破片と思われる。11は須恵器杯蓋の破片で、天井部に宝珠つまみがつけられている。また、12は須恵器杯身である。

11・12は田辺昭三編年のTK217型式、中村 浩編年の陶邑Ⅲ型式1～2段階に属すると考えられ、7世紀後半代のもものと推定される。また、9の長頸壺や10の平瓶と思われる底部片に関しては、8世紀前半のもものと思われる。7の横瓶に関しては時期を明確にすることが難しいが、飛鳥時代後半頃のものである可能性が考えられる。また、8の土師器甕も飛鳥時代後半から奈良時代前半に属するものと思われる。

5. 周辺調査区の再検討—大尾遺跡西半部における地形形成と土地利用

以上説明してきた遺構・遺物をもとに、05-1の地形変遷過程を整理すると以下ようになる。

まず、水流によって頂部斜面から谷壁斜面にガリーが形成された。ガリー形成後、侵食作用は弱まって、ガリーの内部には土壌が形成されたと推定される。この土壌の形成時期は、落ち込みB出土土器から弥生時代中期中葉～後葉と思われる。また、土壌形成に先立つガリーの形成時期も、それにきわめて近い時期と考えられる。弥生時代中期以降、ガリーの埋積はあまり進行しなかったが、7世紀後半～8世紀前半になると丘陵の上部から砂礫が活発に供給されるようになり、比較的急速に埋没した。その後の地形変遷や土地利用については、近世以降に耕作地となったこともあって、不明瞭である。また、ガリーの埋没はこの地点における主要な堆積空間の消滅を意味しており、ガリーの埋没後、主要な堆積の

場が谷壁斜面の下方に移動した可能性が高い。このことも、古代以降の情報がほとんど保存されなかった原因のひとつと思われる。

隣接する01-1・04-1では、弥生時代中期中葉～後葉の墓や、飛鳥時代後半～奈良時代前半の掘立柱建物などが検出されている。このような人間活動は地形変遷に重要な影響を与えた可能性が高く、今回の調査成果をふまえて従来の調査所見を再検討し、この遺跡の西半部における地形形成と土地利用の関係を明らかにする必要がある。ただし、それをおこなうためには、従来の調査における遺構解釈の問題点を整理しなければならない。ここでは、弥生時代中期中葉～後葉の墓に関する解釈の問題点を検討したい。

01-1の報告書（伊藤・植村2003）では、この尾根上に37基もの周溝墓が4列に並んでいると想定されたが、事実記載をみると、周溝墓の認定にほとんど根拠のないものや、わずかに検出された溝状の遺構から周溝墓の端を推定しているものが目立つ。また、遺構を理解する際に強引な解釈がおこなわれて

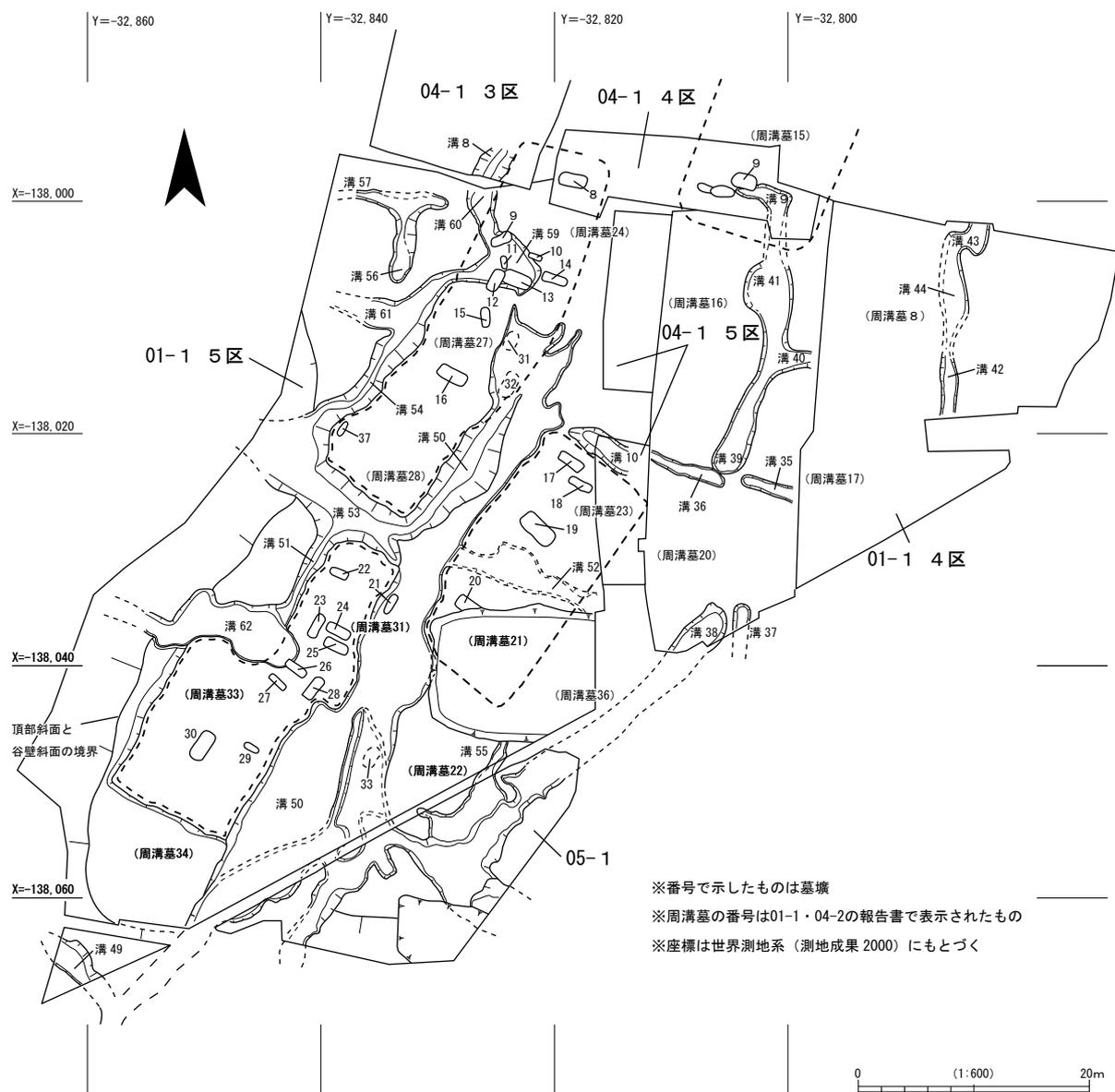


図64 01-1・04-1・05-1 全体図



1 「溝61」断面



2 「溝51」断面



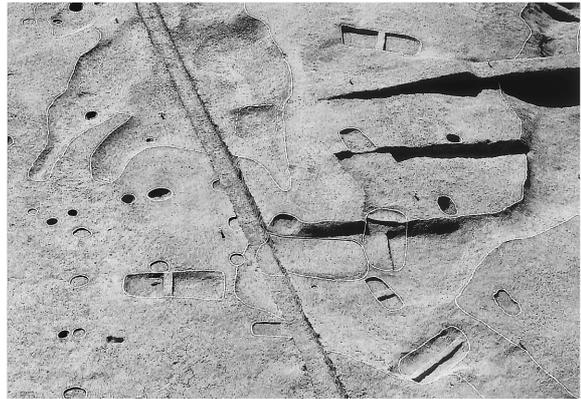
3 「溝50」断面



4 「溝53」断面



5 「周溝墓33」断面



6 「溝59」と墓壇12の切り合い関係

写真1 大尾遺跡01-1-5区

いる部分もある。例えば、「周溝墓27」と「周溝墓28」の境が「墓壙16」の検出された場所にあたると考え、この部分に本来周溝が存在しており、「墓壙16」は周溝内埋葬であったと推定した。しかし、この部分には周溝の痕跡は全く存在していない。さらに、「墓壙16」の検出面からの深さは4～20cmであり、遺体を収納することを考慮すれば、本来の墓壙掘削面は検出面から少なくとも数10cm上にあつたと考えられる。その高さを周溝の底面と想定すれば、墳丘の西側・東側を画するとされる「溝54」・「溝50」と比べて底面が1m以上高い位置にくるような、非常に浅い周溝を想定せざるを得ない。この墓壙付近を境にして墳丘側面ののびる向きが変化する、というのが調査者の発想の出発点であるが、何の根拠もない溝をあえて想定する必要があるとは思えない。さらに、「墓壙12」は「周溝墓27」に伴う主体部と推定されたが、その墓の「周溝」とされた「溝59」を切っている。これに関しては明確な説明はなされていないが、切り合い関係がある以上、「周溝」と解釈された遺構の少なくとも一部が埋没した後に、主体部がつくられたと考えるべきであろう。このような「周溝」と墓壙との切り合い関係は「墓壙26」と「溝62」上端部でもみられる。

04-1の報告書（青柳2005）においても、01-1の報告書の見解に沿って整理がなされ、周溝墓の数は42基とされた。この中には、「周溝墓40」・「周溝墓41」の境のように、溝かどうかわからない落ち込みを根拠にして周溝墓の区画を推定するなど、01-1における想定と同様の問題点が存在する。また、04-1の1区では、「周溝墓1」の周溝のひとつとされた「溝20」（04-1の「溝1」）の下層から6～7世紀の須恵器が出土した。「周溝墓1」については01-1の報告の中でも存在が疑問視されているが、04-1の調査によってその存在を再検討する資料が得られたにもかかわらず、依然として周溝墓一覧表の中に記載されている。

以上述べたような既往の調査の問題点を整理するためには、地形と墳丘の関係を明らかにすることが必要である。01-1の全体図をみると、頂部平坦面の中心部にあたる3区では、溝で画された部分が比較的整った方形をしている一方で、頂部斜面にあたる5区では、「周溝」が幅広で不規則に分布し、想定される墳丘がいびつな形状を呈する傾向がある。また、「周溝墓27」と「墓壙9・11・12」などのように、想定される墳丘と主体部の位置があまり整合しないものも存在する。これらのことは、これまでの調査成果を再検討し、この地点に築造された墓のあり方を考えるための手がかりになると思われる。この点について、01-1の4区・5区、04-1の3区の一部・4区・5区と05-1を合成した平面図（図64）をもとに説明していきたい。

まず、この区域の全体的な地形について述べる。01-1の5区西側では断面観察用のアゼが4箇所設定され、写真撮影と実測がおこなわれている。報告書（伊藤・植村2003）の第6図はそのうちのひとつである。この断面の西端には後世に段差が造成されており、本来の形状をとどめていなかったが、その他の部分では全体として西に向かって傾斜していることが読み取れる。また、報告書に提示された平面図には、5区の西端に傾斜変換点が示されている。この傾斜変換点については、攪乱を表すケバによって示されているが、等高線図や全景写真を参考にすると、これは本来の地形を反映していると思われる。こうした調査データと地形図の情報を合わせて考えると、図64に示した部分が頂部斜面と上部谷壁斜面の境をなす傾斜変換点（遷急点）と判断できる。

01-1の5区の「溝56・57」と「溝62」は、斜面に沿って流下するにつれて深さを増していくことから、05-1で検出されたようなガリーと考えられる。また、「溝60・61」と04-1の「溝8」は一連の遺構であるが、これも蛇行しており、ガリーの可能性が高い。なお、良好な断面写真（報告書未掲載）が

残されていた「溝61」については、緩やかにカーブした形態をとる中礫の葉理がみられ、05-1で検出されたものと同様の埋没過程をたどったことがわかる。また、「溝56・57」や「溝62」に関しても、やや蛇行する形状や斜面に沿って深さを増していくことなどから、ガリーと推定される。さらに、「溝50」とされたものについても、05-1の調査成果を考慮すれば、ガリーと思われる。その深さは北側では浅いが、01-1の5区の南端から05-1にかけて徐々に深さを増していき、複数の流路に分岐する。5区「溝55」や4区「溝38」に関しても、05-1の成果からガリーと考えられ、4区「溝37」も同様の性格のものと考えられる。なお、5区「溝49」に関しては一部しか検出されていないが、断面写真（報告書未掲載）などを検討して、ガリーの可能性が高いと判断した。北西側が浅く、南東側が深くなっていることからみて、南東方向に下っていき、05-1で検出されたD2に合流すると思われる。その上流側は不明であるが、北西側がかなり浅くなっていることからみて、調査区の西方で北に向きを変え、頂部斜面と上部谷壁斜面の境にあたる傾斜変換点付近で収束すると想定される。なお、「溝49」の断面写真を観察したところ、05-1と同様に中礫が葉理状に配列する部分が認められた。

このように、01-1の5区には多数のガリーが存在していた。前述の微地形分類をふまれば、ガリーは頂部斜面から始まって、上部谷壁斜面に向かって発達したと理解することができる。なお、底面の勾配に着目すれば、ガリーは2つのタイプに分類できる。ひとつは斜面に沿って勾配が大きくなり、深さを増して流下するものであり、もうひとつは底面の勾配が相対的に小さく、遷急点付近で斜面の傾斜とほぼ変わらなくなり、下流側の端部が不明瞭となるものである。

従来の解釈では、これらのガリーがすべて周溝と解釈されていた。5区の西端は頂部斜面から上部谷壁斜面へ移行する傾斜変換点付近にあたっており、西へ向かって傾斜している。弥生時代以外の遺構であるが、古代に属する「建物16」や墓壙34は頂部斜面の端につくられたものであり、これ以上西へ遺構の分布が広がる可能性は極めて低いし、「建物16」は建物ではなく、報告書で「堀」と分類される遺構になる可能性もある。これらのことを考慮すると、5区西端に想定されていた「周溝墓29・30・32」は存在しないと思われる。また、同様の位置にあたる「周溝墓34」も存在しない可能性が高い。

ガリーと考えられるものの断面は、有機物粒を多く含み、土壤構造が発達している可能性のある層が最下部ないし下部に存在し、その上に礫混じり砂層が堆積する、という特徴を有している。有機物粒を多く含む層が確認されなかった部分もあるが、これは侵食されたためである可能性が高い。ただし、「溝54」の断面に関しては、こうしたガリーの埋没過程とは大きく異なっている。01-1の報告書（伊藤・植村2003）の第6図に示された断面図をみると、一番低くなっている部分を「12層」と呼ばれる層が埋めているが、この層準を写真（報告書未掲載）で確認したところ、不明瞭ながらブロックが集積しているように判断できた。この遺構が直線的にのびていることも考慮すると、人為的に掘削された溝である可能性が高く、「12層」は加工時形成層（那須・趙2003）か、盛土が早い段階に崩落して堆積したものであると解釈できる。なお、「12層」の下に堆積する「10層」は斜面に沿って堆積し、写真で見るとかぎり人為的な擾乱がおよんでいるようには見えない。報告書では周溝墓の盛土とされているが、その解釈は成り立ちがたく、墓が営まれる以前に斜面に堆積した堆積物と考えるのが妥当であろう。

「溝54」と同じように、人為的に掘削された溝や段差と考えられるものは、他にも存在する。5区「溝51」を埋める堆積物は、断面（報告書第38図のD-D'断面、本書：写真1-2）で2層に細分されているが、断面写真（報告書未掲載）を観察したところ上層も下層もブロック土であると判断でき、ガリーの間をつなぐように掘削された人工的な溝と推定される。また、「溝50」として一括されたもののう

ち、深くなった部分に関しては、報告書（伊藤・植村2003）第38図のB-B'断面（本書：写真1-3）をみると、最下層は細砂～シルトのブロックによって構成されているようであり、人為的に掘削された可能性が考えられる。また、「溝53」に関して、最下層に加工時形成層と考えられるブロック土が堆積していた（本書：写真1-4）。さらに、「周溝墓33」の西側には直線的にのびる明瞭な段差が存在しており、それは東西方向に設定された断面（本書：写真1-5）でも明瞭な傾斜変換点として認識できる。これに関しては、人為的に削り出されたものである可能性が高い。なお、「溝59」が「墓壙12」に切られていること（本書：写真1-6）に関しては、断面図・写真がないため断定はできないが、この部分では墳丘を整えるためにガリーの一部を人為的に埋め、その上に墓壙が掘り込まれた可能性が考えられる。

次に、検出された主体部の位置に着目して、墓域のあり方をみていきたい。ここで問題になるのは、本来存在した主体部のうち、多くのものが削られて遺存していないのではないのか、という疑問である。確かに、頂部平坦面に位置する01-1の3区では周溝のみが検出されており、主体部が削られて遺存していない可能性が高いものの、ここで主な検討対象としている5区では多くの主体部が検出されている。この地区においては、削られた土量が局所的に大きく異なるとも思えないため、かなりのものが遺存していたと想定できる。5区を中心とする主体部の分布をみると、4箇所のみまわりに区分することができる（図64において破線で囲んだ部分）。それらは「溝50」とされたガリーの両側に分布している。なお、5区「溝52」は周溝として解釈されているが、深さが数cmしかなく、その底面は「溝50」の底面よりもかなり高い位置にある。埋土も他の弥生時代に属する遺構とは若干異なっており、礫を多く含む細砂～シルトで埋没していたようである。この溝については弥生時代に属する遺構かどうか不明であり、今回は「墓壙20」を「溝52」の北にある「墓壙17・18・19」と同一グループに含めて考えた。なお、主体部の分布をみると、集中している部分の他、そこからやや離れた位置に単独で存在するものもみられる（「墓壙16・37」、「墓壙30・29」）。近畿地方の方形周溝墓には、主体部が1基のみの「単数埋葬」と2基以上の「複数埋葬」が弥生時代前期から存在することが判明しており（藤井2007）、大尾遺跡の墓域もそうした状況と共通したあり方を示すと思われる。

以上のことを総合して、この遺跡の墓域の状況を整理すると、次のようになる。まず、この部分には水流によって形成されたガリーが複数存在しており、その一部を利用して墓の区画がなされた。具体的には、5区の「溝50」と呼称されたガリーの両側に墓を列状に配置しており、部分的に人為的な加工を施して墳丘を造成した。さらに、01-1の3区の状況をみると、「溝50」の延長線上にあたる部分に「溝8・10・18」と「溝3」が平行するように掘削され、その両側に方形周溝墓が並んでいる。この部分は頂部平坦面にあたり、ガリーが発達せず、比較的平坦であったと考えられる。このように、頂部平坦面と頂部斜面では、地形条件の違いに合わせて墳丘の造成方法が異なっていたと推定できる。

次に、この墓域の範囲について述べる。これまでの調査によって、墓域の西端と南端は明らかにできたといえる。しかし、東端に関しては不明瞭である。01-1の4区で検出された「溝41・39・36・35」や「溝42・43・44」が墓に関連する遺構であったかどうかは不明である。「溝41」に連続する可能性の高い04-1の4区の「溝9」は「墓壙9」に切られており、墓が造成される以前に形成されたと考えられる。このように、ここにあげた遺構の中には墓と直接関係しないものが含まれている可能性がある。現状で最も東側に存在するのは01-1の2区の「周溝墓2」であり、その南に想定された「周溝墓3・4・5・19・18・17・14・20」に関しては、積極的に存在を示唆する根拠は見出せない。「周溝墓18」については、主体部の可能性もあるとされた「土坑26」が検出されているが、報告（伊藤・植村2003：45

～46ページ)に記述されているように、これを主体部とする根拠は薄い。この地区からも弥生時代中期の土器が多数出土しているため、墓が全く存在しなかったとは断言できないものの、現状では墳丘を復原できるだけの情報は得られていない。なお、「周溝墓36・35・37」に関しては、05-1の調査成果からみて、存在しないと考えられる。

一方、周辺地形を考慮すると、北のほうへは墓域は広がると思われる。01-1の北方に位置する太秦遺跡・太秦古墳群04-2では方形周溝墓と考えられる遺構が検出されている(大樂2005)が、両調査地の間にも方形周溝墓が存在していた可能性がきわめて高い。また、墓域のある尾根の西方にも南に張り出す尾根が存在していたが、確認調査の結果(田中・植村2002)からみて、そこには墓は存在しなかったと思われる。

このように整理すると、01-1・04-1の範囲には、少なくとも10基の墓が存在していたと推定される。01-1の2・4区にあたる部分にも墓が存在していたとすれば、それよりも数基増えることになる。さらに、墓域は北にも広がると思われることから、墓の数はさらに増えることは確実である。

出土遺物からみて、それらの墓が営まれたのは弥生時代中期後葉のことであったと考えられる。土器は主に溝やガリーから出土しているが、まとまって出土した遺構も少なくないことから、今後出土土器の時期的な傾向を遺構ごとに整理する必要がある。なお、04-1の「溝8」からは、弥生時代中期の土器に混じって、弥生時代後期前半に属する甕ないし鉢の底部片が出土している(青柳2005:図30-24)。「溝8」はガリーと考えられるが、他のガリーと同様、最下層に有機物粒を多く含む層が認められ、上層との間に堆積間隙があると判断される。したがって、墓が弥生時代後期前半まで継続して営まれたかどうかについては、他の資料も含めてさらに検討する必要がある。

これまでの調査データを再検討することによって、この遺跡における墓域の実態についてはある程度の見通しを立てることができたが、地形変遷と土地利用の関係に関しては、なお問題が残されている。ガリーが形成されたのは弥生時代中期後葉にきわめて近い時期であったと推定される。一般的に言って、ガリーは植生が破壊され、裸地が広がると発達する。大尾遺跡の北東に位置する太秦遺跡では、この時期の集落跡が見つかっており、両遺跡の立地する丘陵・段丘上において活発な人間活動がなされたと思われる。このような人間活動の結果、集落周辺の植生が破壊されて裸地が広がり、ガリーが発達した、という推定が可能である。また、ガリーを埋める堆積物の最下層ないし下層に含まれる有機物粒が被熱によって炭化したものであるならば、何らかの人間活動に関連したものである可能性が考えられる。

また、飛鳥時代後半～奈良時代前半には、ガリーは掃流堆積物の礫混じり砂～シルトによって埋没した。この堆積物は粒径の違いにより細分されるが、顕著な侵食面や安定期の存在を示す古土壌は認められない。また、含まれる土師器・須恵器の時期からみても、ガリーの埋積は比較的短期間のうちに進行した可能性が高い。01-1では飛鳥時代後半～奈良時代前半の建物群が検出されており、集落形成に伴い頂部平坦面から頂部斜面にかけて人為的な改変や表層侵食が進み、土砂流出量が増加した可能性が高い。そして、ガリーは丘陵の上部から供給された砂礫の主要な堆積の場となったと推定される。なお、01-1の調査では、墳丘の破壊を含む整地によってガリーや人工的な溝が埋められたと想定されている。01-1の「溝50」の断面B-B'(伊藤・植村2003:第38図、本書:写真1-3)を写真で観察したところ、埋土上部もブロックが混じる層のようであり、このような想定は妥当と思われる。ただし、前述したように「溝61」では05-1と同様の埋没状況が確認できるので、5区西端で検出されたガリーに関しては掃流堆積物によって埋没したと考えられる。

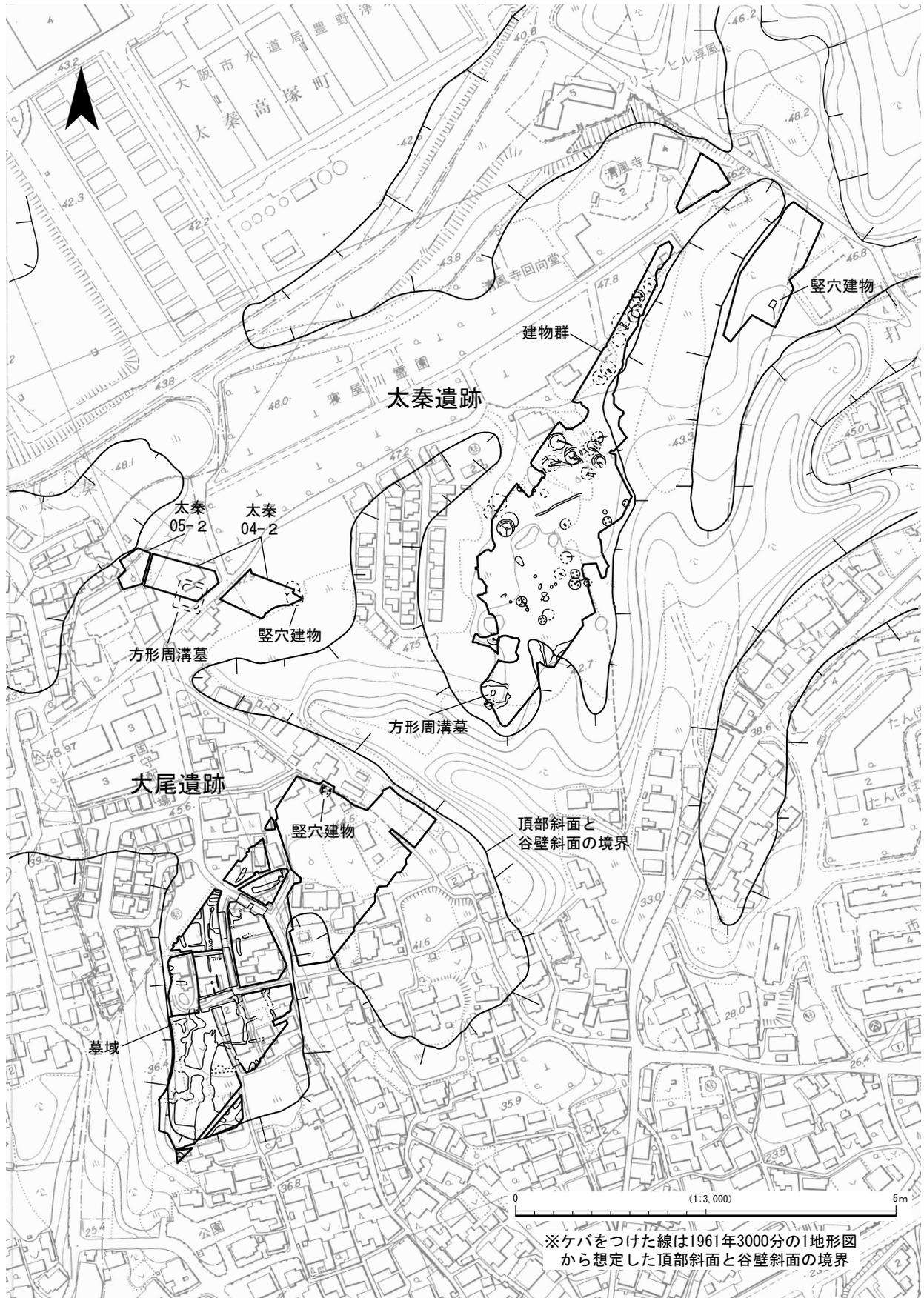


図65 大尾遺跡・太秦遺跡 全体図

ベースマップは大阪府作成 平成7年2500分の1 地域計画図(地形図)

6. まとめ

今回の調査の目的は、01-1の調査において想定された方形周溝墓の続きを確認することであったが、検出されたのは自然の営力によって形成されたガリーのみであった。今回の報告では、これまでの調査データも再検討し、今回の調査地に隣接する01-1の5区において「周溝」とされたものの多くは、ガリーと思われることを指摘した。また、墓域の構造についても従来の想定とは異なった考え方を提示し、墳丘築造方法の立地による違いなどについても見通しを示した。さらに、ガリーを埋める堆積物の観察から、人間活動と地形変遷過程との関係について議論できる可能性も指摘した。今後、今回おこなった整理に対する検証作業がなされ、この遺跡の墓域に対する理解が進むことを期待したい。

また、大尾遺跡と太秦遺跡におけるこれまでの調査によって、弥生時代中期の集落・墓域の実態が明確になってきた(図65)。枚方丘陵南端部における大尾遺跡・太秦遺跡の調査データを、西方の沖積扇状地・後背湿地に立地する讚良郡条里遺跡のデータと合わせて検討し、より広い範囲における土地利用の実態を明らかにすることが、今後の重要な課題である。

参考文献

- 青柳佳奈 2005 「大尾遺跡〔大尾遺跡04-1〕」『太秦遺跡・太秦古墳群・大尾遺跡・高宮遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第131集, pp.19-58.
- 伊藤 武・植村 悟 2003 『大尾遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第92集, 86p.
- 井上 淳 2007 「火災史を考える上でのmacro-charcoal研究の重要性と分析方法—日本の火災史研究におけるその役割—」『植生史研究』第15巻第2号, 日本植生史学会, pp.77-84.
- 大阪府文化財センター 2003 『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』, pp.1-20.
- 大樂康宏 2005 『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅰ』(財)大阪府文化財センター調査報告書第126集, 26p.
- 田中龍男・植村 悟 2002 「小路遺跡」『讚良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大亀谷遺跡、長尾窯跡群、長尾東地区』(財)大阪府文化財センター調査報告書第77集, pp.33-62.
- 田村俊和 1996 「微地形分類と地形発達—谷頭部斜面を中心に—」恩田裕一・奥西一夫・飯田智之・辻村真貴編『水文地形学—山地の水循環と地形変化の相互作用—』古今書院, pp.177-189.
- 辻 祐司・清岡廣子 2005 『大尾遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター調査報告書第125集, 44p.
- 寺沢 薫・森井貞雄1989 「河内地域」寺沢 薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社, pp.41-146.
- 濱田延充 1993 「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『弥生文化博物館研究報告』第2集, 大阪府立弥生文化博物館, pp.111-126.
- 藤井 整 2007 「近畿地方における方形周溝墓の基本的性格」近畿弥生の会編『墓制から弥生社会を考える』考古学リーダー10, 六一書房, pp.3-26.
- 那須孝悌・趙 哲濟 2003 「地層の見方」松井 章編『環境考古学マニュアル』同成社, pp.33-53.

第6章 讃良郡条里遺跡の調査（06-1-1区）

1. 調査に至る経緯

ここで報告する讃良郡条里遺跡06-1-1区は、寝屋川市高宮地内に所在する。地形的には、生駒山地から枚方丘陵の西麓に形成された沖積扇状地に立地している。この調査地の周辺では、第二京阪道路（大阪北道路）建設に伴い、平成13年度に讃良郡条里遺跡（その1）・（その2）・（その3）・小路遺跡（その2）、平成14～17年度に讃良郡条里遺跡03-1・05-2の発掘調査が実施された（図66）。その結果、縄文時代から中世に至る各時期の遺構・遺物が検出され、縄文時代以降の土地利用や古環境の変遷過程が明らかになった。

これらの調査地の間には、旧国道170号・市道小路笠松線や里道、あるいは「十八川」などの農業用水路が存在しており、未調査部分として残されていた。それらの取り扱いに関しては事業者と大阪府教育委員会の間で協議がなされ、隣接部分で重要な遺構・遺物が見つかった箇所を発掘調査することになった。今回報告する讃良郡条里遺跡06-1-1区も、そうした箇所のひとつである。

讃良郡条里遺跡06-1は6箇所にわかれていたため、東側から1～6区と呼称した。1区は、讃良郡条里遺跡（その1）と小路遺跡（その2）に挟まれた、市道小路笠松線の道路部分にあたる（図66）。なお、2～6区は讃良郡条里遺跡03-1の範囲内に残されていた未調査部分であるため、03-1の報告書に含めて報告することにしたい。

また、平成18年度に讃良郡条里遺跡（その1）の北端の用地境界において擁壁を建設する工事が施工され、掘削時に立会をおこなった。その際、奈良時代後半～平安時代初頭の流路にあたる部分（位置は図87右上参照）から遺物が多数出土したため、それらを回収した。その中の主な遺物についても、ここで報告したい。

2. 調査の方法

讃良郡条里遺跡（その1）・小路遺跡（その2）の調査では、奈良時代後半～平安時代初頭の流路や溝が検出され、流路を埋める堆積物から人面墨書土器、人形・絵馬をはじめとする木製品などの遺物が出土した。これらの調査地では、縄文時代や古墳時代初頭の流路なども検出された。しかしながら、縄文時代から古代に至る流路変遷・地形形成過程に関してはあまり把握されておらず、溝のつながりについても不明瞭な部分が残されていた。そこで今回の調査では、周辺調査地も含めた地形・土地利用の変遷過程の復原を主要な課題として設定した。

地区割については、世界測地系（測地成果2000）の国土座標（第Ⅵ座標系）に則った基準線を利用しておこない、遺物の取り上げや遺構図作成に用いた。区割りの方法はマニュアルの規定に従った。06-1-1区は、第Ⅰ区画がⅠ6、第Ⅱ区画が16にあたる。第Ⅲ・Ⅳ区画に関しては、図67に示すとおりである。

遺構番号に関しては、遺構種類に関わらず通し番号を付し、番号の後に遺構種類を記している。なお、06-1に含まれる調査区の大半が03-1の範囲内にあたるため、06-1の調査では03-1の遺構番号の続きで番号をふることにした。そのため、06-1-1区の遺構番号は600番台となっている。

遺構の測量に関しては、平板測量のほか、主要な遺構面に関してはクレーンによる写真測量をおこ

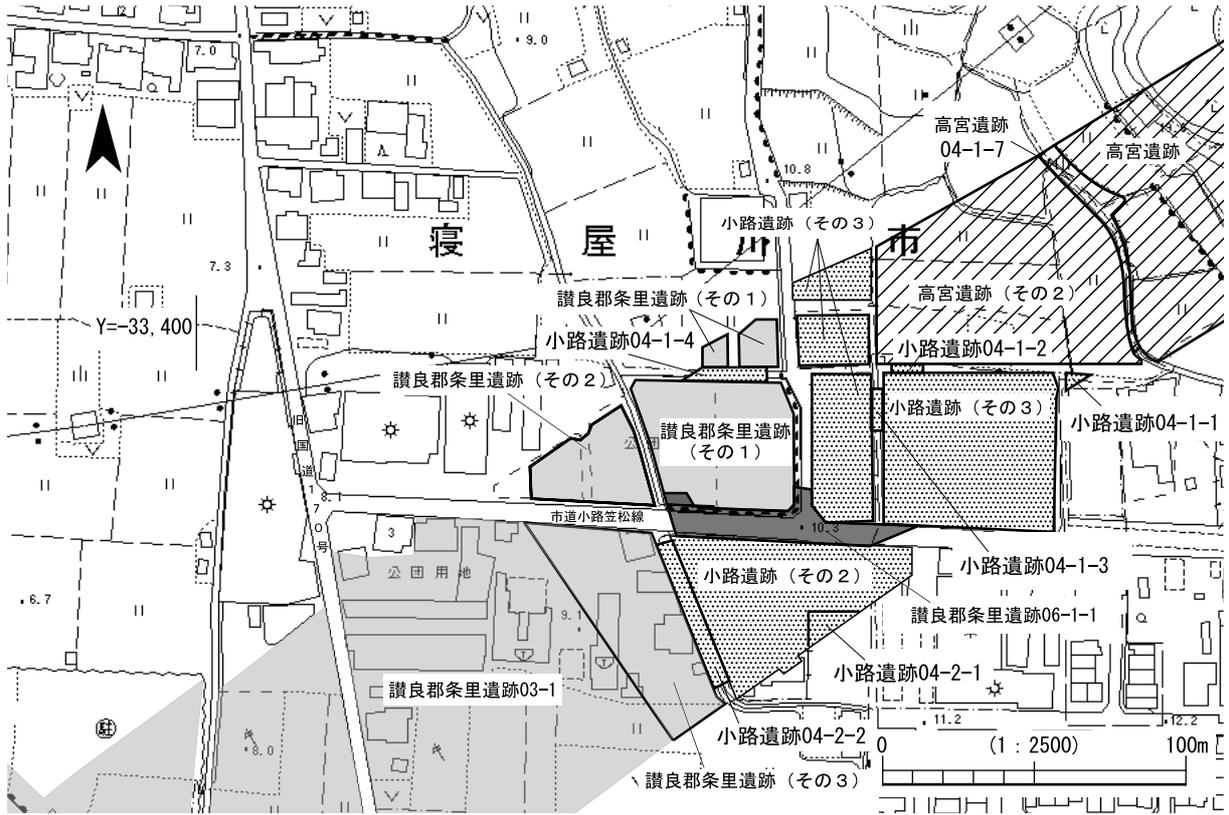


図66 調査区位置図

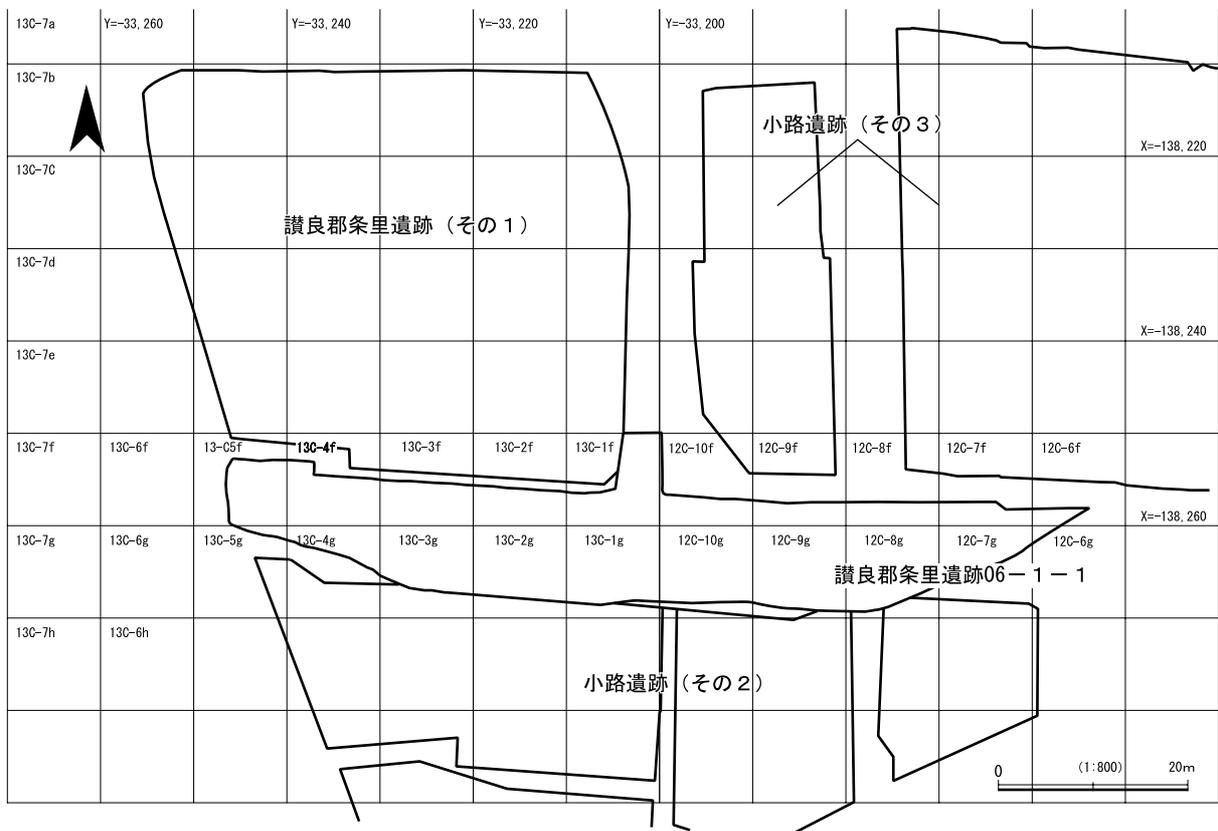


図67 地区割図

なった。また、断面図に関しては、調査区南壁の中央部約35m分を機械掘削終了面から側溝底面の深さまで実測した。その他、主要な遺構については、遺構内に適宜設定した断面を実測した。

次に、当調査区で実施した自然科学分析について述べる。奈良時代後半～平安時代初頭の流路を埋める堆積物にはシルト層が複数挟まっており、花粉の遺存状況が比較的良好であると予想された。そこで、この時期における調査地周辺の植生を明らかにするために、花粉分析を実施した。また、古墳時代初頭と奈良時代後半～平安時代初頭の流路からは木製品や流木が出土し、流路の肩部から立木も検出された。それらの樹種は、木製品の用材選択のあり方や流路周辺の植生を知る手がかりになると思われるため、樹種同定・大型植物遺体同定分析を実施した。

3. 調査成果

(1) 層 序

まず、この調査区の層序について述べる（図68）。この調査区の層序番号は、03-1において設定した標準層序に合わせている。このうち、近世以降の作土層である第1 a層に関しては重機で掘削したため、断面にはほとんどあらわれていない。

この調査区の特徴は、中世末以降の作土層（第2-1 a層）と中世の作土層（第2-2 a層）の層厚が厚く、複数の層に細分されることである。03-1との層序対比は粒径の変化に着目しておこない、第2-1 a層を2つに（第2-1 a層①・②）、第2-2 a層を3つに細分した（第2-2 a層①～③）。第3 a層と考えられる地層は668流路部分を中心に残存していた。これは流路跡の窪地部分に残存したもので、その他の場所では第2-2 a層段階の耕作によって削られて遺存しなかったと考えられる。当調査区においては時期が明らかにできるような土器は出土しなかったが、上下の層準の出土土器および周辺調査地での出土遺物からみて、平安時代に属すると思われる。古墳時代中期～平安時代初頭の古土壤（暗色帯）である第4-1 a層は遺存していなかったが、小路遺跡（その2）の断面を再検討したところ、第4-1 a層と思われる古土壤（暗色帯）が部分的に残存していたことが判明し、奈良時代後半～平安時代初頭の遺物が多く出土した流路は第4-1 a層上面に帰属することを明らかにできた。また、第4-2 a層は弥生時代後期～古墳時代初頭の古土壤（暗色帯）であるが、666流路・670流路の周囲では、流路充填堆積物の細別層や氾濫堆積物の間層によって、3つに細分できた（第4-2 a層①～③）。

この調査区では、縄文時代晩期～弥生時代中期の古土壤（暗色帯）である第4-3 a層・第4-4 a層はほとんど認められなかったが、それは第4-2 a層と一体化して分離できなかったためと考えられる。また、縄文時代後期の古土壤（暗色帯）である第5-1 a層は、調査区中央部以外の部分で広く確認できた。

縄文時代前期～中期の古土壤である第6 a層・第7-1 a層・第7-2 a層は、南壁断面と下層確認トレンチで確認された。それらの断面観察の結果、各層の上面に帰属する流路の存在が明らかになった。周辺調査地の調査成果からみて、各古土壤の形成時期は、第6 a層が中期前葉～中葉、第7-1 a層が縄文時代前期末、第7-2 a層が前期後葉と推定される。

なお、この調査区では、3つの時期の地震痕跡を確認した。確認された層準は、新しい順に第2-2 a層下部、第3 a層下部～668流路内堆積物、第4-2 a層②下部である。確認されたのは、いずれも含水塑性変形である。ただし、第4-2 a層下面では土坑状変形も検出されており、それは第4-2 a層②下部の変形構造と同一の地震で形成された可能性が考えられる。

図68の注記

- 1 灰 5Y6/1 粗砂～細礫混じり極細砂 擾乱受ける(作土) (第1 a層)
- 2 灰 5Y6/1 粗砂～細礫混じり中砂～極細砂 (第1 a層下面の遺構)
- 3 灰オリーブ 5Y6/2 粗砂～細礫混じり極細砂 擾乱受ける(作土) (第1 a層)
- 4 灰 5Y6/1 粗砂～細礫混じり極細砂～シルト 擾乱受ける(作土) (第1 a層)
- 5 灰オリーブ 5Y5/2 中砂～細礫混じり極細砂～シルト 擾乱受ける(作土) (第2-1 a層①)
- 6 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂～細礫混じり極細砂質シルト 擾乱受ける(作土) (第2-1 a層②)
- 7 黄灰 2.5Y6/1 中砂～極粗砂混じりシルト (第2-1 a層②下面の遺構)
- 8 灰オリーブ 5Y5/2 中砂～細礫混じり極細砂～シルト (第2-1 a層②下面の遺構)
- 9 黄灰 2.5Y5/1 中砂～細礫混じりシルト 擾乱受ける(作土) (第2-2 a層①)
- 10 灰 5Y4/1 粗砂～細礫質極細砂～シルト 擾乱受ける(作土) (第2-2 a層②)
- 11 灰 5Y4/1 粗砂～細礫混じり細砂～極細砂 擾乱受ける(作土?) (第2-2 a層②)
- 12 黄灰 2.5Y4/1 粗砂～細礫混じり極細砂質細砂 擾乱受ける (第2-2 a層③)
- 13 灰 5Y5/1 中砂～極粗砂混じり極細砂～シルト 擾乱受ける (第2-2 a層③)
- 14 黄灰 2.5Y4/1 中砂～細礫混じりシルト 土壤構造発達 (第3 a層?)
- 15 灰 5Y4/1 中砂～細礫混じりシルト 土壤構造発達 (第3 a層?)
- 16 灰 2.5Y4/1, 灰 N4/0 中砂～細礫混じりシルト シルトブロックを多く含む
- 17 黄灰 2.5Y5/1 粗砂～細礫混じり極細砂～シルト 土壤構造発達 変形構造みられる
- 18 灰 5Y4/1 シルトブロックと中砂～粗砂が混じる 人為的に埋め戻された層か?
- 19 灰 5Y4/1 シルトブロックと中砂が混じる 人為的に埋め戻された層か?
- 20 灰 5Y4/1 シルトブロックと中砂～粗砂が混じる ブロックは葉理状に配列する傾向あり 砂の薄層を挟在
- 21 灰 5Y4/1 シルト質極細砂ブロック、灰 5Y5/1 シルトブロック、黒 2.5Y2/1 シルトブロック、青灰 10G6/1 極細砂～シルトブロック、中砂～細礫混じる 人為的に埋め戻された層 (681溝)
- 22 灰 5Y4/1 中砂～粗砂混じり極細砂 やや暗色化(土壤化) (第4-2 a層①)
- 23 黒 2.5Y2/1 中砂～細礫混じりシルト 土壤化(暗色帯) (第4-2 a層②)
- 24 黒 2.5Y2/1 シルト 土壤化(暗色帯) (第4-2 a層③)
- 25 黒 2.5Y2/1 中砂～極粗砂混じりシルト 3mm以下のブロック含む (674流路上部)
- 26 灰 5Y5/1 中砂～粗砂混じり極細砂質シルト 第4-2 a層(下)や下層起源のブロックを含む(674流路上部)
- 27 灰白～黄灰 2.5Y7/1～6/1 中砂～極粗砂混じり極細砂質シルト 土壤構造発達 (第5-1 a層)
- 28 黒 2.5Y2/1 中砂～細礫混じりシルト 土壤化(暗色帯) (第4-2 a層)
- 29 黄灰 2.5Y5/1 中砂～細礫混じりシルト 土壤化(暗色帯) (第5-1 a層)
- 30 青灰 5B5/1 中砂～粗砂混じり極細砂～シルト 土壤構造発達 上部に炭化物、土器片、礫(花崗岩)含む (第6 a層)
- 31 緑灰～暗緑灰 5G5/1～4/1 細砂混じり極細砂 土壤構造発達 (第6 a層)
- 32 緑灰～暗緑灰 5G5/1～4/1 中砂～粗砂混じり細砂質極細砂 土壤構造発達 (第7-1 a層)
- 33 灰 N4/0 極細砂質細砂 炭化物・焼土塊?、2～4mmの礫を多く含む (第7-2 a層)
- 34 黄灰 2.5Y5/1、暗灰 N3/0、灰 5Y5/1 極粗砂～細礫混じり中砂～粗砂 シルトブロックを多く含む

(2) 遺構・遺物

以上述べた層序の認識にもとづいて、平面的な調査は第4-2a層下面までおこない、それ以下の層準に関しては下層確認トレンチ（位置は図82下段参照）を掘削して、遺構・遺物の有無を確認した。

第2-1a層・第2-2a層 図69上段には、第2-1a層・第2-2a層下面に帰属する遺構を示した。検出された遺構のほとんどは南北方向ないし東西方向にのびる小溝である。また、調査区西端では、第2-2a層下面に帰属する長方形の浅い土坑が検出された（682土坑）。現代の攪乱によって北側の肩がほとんど遺存していないが、幅は約2mと推定される。また、検出された長さは約10mであるが、西端は調査区外にあたるため、正確な数値は不明である。なお、682土坑の東にも浅い土坑が3つ存在するが、攪乱によって大半が破壊されているため、詳細は不明である。

なお、Y=-33,180ライン付近には、南北方向にのびる段差が存在していた。機械掘削の際の断面観察によって、この段差は第1a層段階の耕作地造成・耕作に伴って形成されたことが判明した。ちなみに、この段差は現地表面で認識できる条里型地割の坪境にあっている。

この面で検出された遺構は、水田ないし畠の耕作に関わる遺構と思われる。

第2-2a層③の下面では、684溝を検出した（図69下段）。この溝の規模は幅約2m、深さ約0.4mである。南東-北西方向にのびており、条里型地割に合致しない。断面（図68の30~35m地点）をみると、下部は中砂~粗砂と極細砂~細砂の互層であり、葉理が明瞭に認められるが、上部はシルトブロックと砂礫が混じる堆積物であり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

この溝は、讚良郡条里遺跡（その1）の「溝29」と、小路遺跡（その2）の「8溝」と同一の溝である。それらの調査地で検出された部分を含めると長さは80mを超えており、この地域における基幹水路であった可能性が高い（図87左上）。なお、今回の調査では、この溝からは土師器の細片しか出土しなかったため、時期を明らかにすることはできなかった。これまでの調査でも出土遺物は少ないが、小路遺跡（その2）においては青白磁の合子蓋が出土している（田中・島田編2004）。この青白磁の時期については判断が難しいものの、おそらく12~13世紀頃に属すると推定される。

第4-1a層 この調査区では、中世以降の耕作の影響で第4-1a層は遺存していなかった。しかし、小路遺跡（その2）では部分的に第4-1a層が残存していたようである。当調査区で検出された668流路（上）はその上面に帰属し、681溝・686溝も第4-1a層の形成期間中に機能していたと考えられる（図70上段・図版41-1）。

668流路に関しては、流路中央に残したアゼの断面観察（図71b-b'ライン）によって、第4-2a層上面段階の流路充填堆積物が存在することが確認されたため、第4-2a層上面段階の流路を「668流路（下）」、第4-1a層上面段階のものを「668流路（上）」と呼称することにした。この流路の底面の形状に関しては、調査区北端の状況が注目される。この部分では、第4-2a層下面の687流路を埋める泥層が島状に取り残されて高くなっていた。この部分に関しては少し掘りすぎてしまったため、図では破線で表現している。

668流路（上）を埋める堆積物は、①~④層準に細分された（図68・71b-b'ライン）。①層準はシルトブロックを多く含み、人為的な擾乱を受けた可能性が高い。②・③層準は葉理のみられる砂層である。図68の断面では明確ではないが、図71b-b'ライン断面では、③の上部に土壌化した部分が認められ、②と③の間には堆積間隙が存在したと考えられる。なお、図68断面付近では③の上部から立木（バラ属）が検出されたが、これも堆積間隙の存在を示す資料である。④は流路充填堆積物の最下部に

あたり、下層起源の極細砂～シルトのブロックを多く含む。このブロックは、流路の開析によって生じたものと思われる。なお、これらすべての層準において、地震によって形成されたとされる変形構造（含水塑性変形）が顕著に認められた。変形の最上部は、第3 a層と考えられる土壌の下部から①層準上部にかけて認められる。第3 a層に関しては、03-1の調査成果から平安時代前半を中心とする時期と推定されるため、この変形構造を生じさせた地震はその頃に発生したと考えられる。

668流路（上）を埋める堆積物中や流路の肩部からは、②・③層準を中心に土師器・須恵器・木製品が出土した。遺物の量は③のほうが多く、遺存状況もよかった。

また、668流路（上）の周囲からは681溝・686溝が検出された。これらは第4-1 a層下面に帰属する遺構であり、この層準の形成期間中に形成・埋没したと考えられる。681溝は右岸に位置し、668流路（上）と合流する。その合流部分は幅約4 m、深さ0.8 mであり、668流路（上）とほぼ同じ深さとなっていた。しかし、その南では急激に浅くなり、調査区南端では深さ約0.2 mの2本の溝となっていた。その南側の小路遺跡（その2）ではこの溝の続きは検出されていないが、南側へいくにつれて浅くなっていったため、中世以降の耕作の影響で削られてしまった可能性が考えられる。この溝はシルトブロックを多く含む堆積物によって充填されており、人為的に埋め戻されたと推定される。この堆積物は668流路（上）③層準の上に堆積していた（図68の20 m地点付近）。なお、668流路（上）との合流地点の底面付近から、図75-37に示した土師器鉢が出土した。この土器はタタキ技法によって成形されたものであり、内面下半に同心円状の当て具の痕跡が認められる。外面の調整は下半がハケメ、上半がナデで指頭圧痕が見られる。口縁部内面および体部内面上半の調整はハケメである。

686溝は668流路（上）の左岸に位置し、流路にほぼ平行してのびていた。この溝の規模は、幅0.6 m、深さ0.2 mである。流路内の堆積物は葉理の認められる砂であり、水の営力によって堆積したことがわかる。図71 b-b' ライン断面では、流路側の肩が侵食によって破壊され、溝を埋める砂層が668流路③層準に連続する状況を確認できた。なお、図68の断面では、この砂層の上にシルトブロックを多く含む砂礫混じりシルトが堆積していたが、これは668流路①層準に対応する。前述の状況からすれば、この両者の間には堆積間隙があると思われる。この溝から出土した遺物としては、図75-36に示した土師器甕がある。調査区南端にあたる地点から破片がまとまって出土し、周囲から溝内に転落したものと考えられる（図版42-8）。この土器は内外面の遺存状況があまりよくないが、外面にハケメ、内面に指頭圧痕が認められる。

686溝は、讚良郡条里遺跡（その1）の「溝25」、小路遺跡（その2）の「21溝」と同一のものである。周辺調査地の情報を合わせると、この溝は流路左岸に沿って流下し、讚良郡条里遺跡（その1）南端で向きを西へ変えて、その先の耕作地を灌漑した灌漑水路であった可能性が高い（図87右上）。なお、讚良郡条里遺跡（その2）では、（その1）の「溝25」の続きにあたる部分から、「30（溝）」と「96（溝）」が検出されている（井上編2003）。この調査地では、途中で溝が途切れる部分もあったが、本来は連続したひとつの溝であったと思われる。なお、この調査地では、溝は第4-1 a層と同一の土壌で埋没していたが、これは水によって運ばれてきた砂が、この調査地までは到達しなかったためと考えられる。次に、668流路（上）内の堆積物と681・686溝を埋める堆積物の関係から、遺構の変遷過程を復原したい。まず、681溝の埋土は668流路（上）③層準の上に堆積していた。この溝と668流路（上）の合流地点では、溝の底面と流路③層準の下面のレベルはほぼ同じであったため、681溝は流路③層準堆積前に掘削され、流路内に③が堆積した後、人為的に埋め戻されたと考えられる。また、686溝を埋める砂は、前述

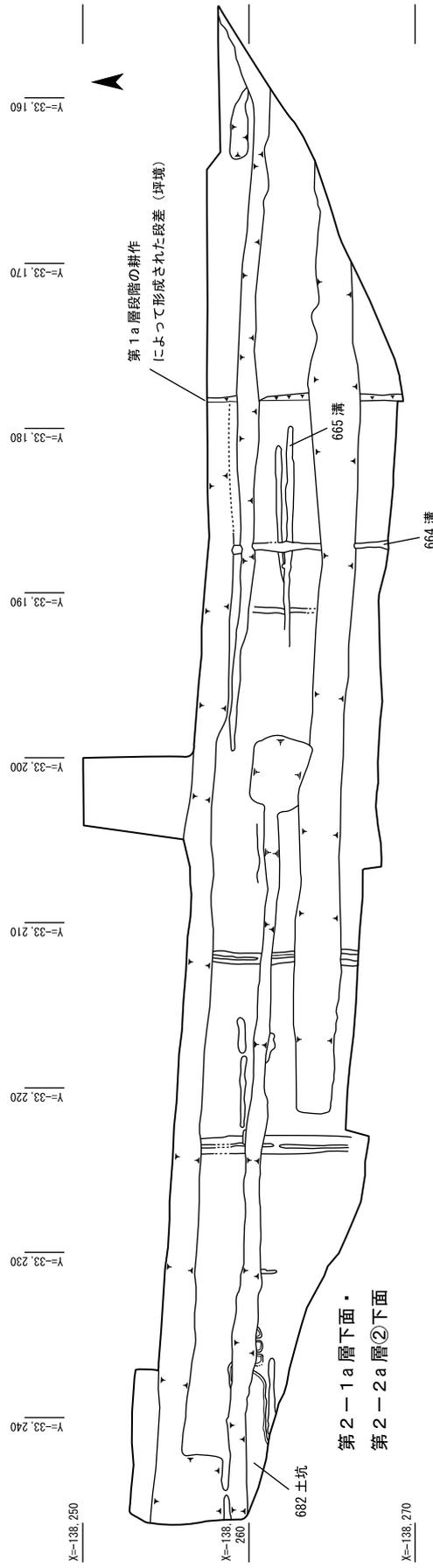
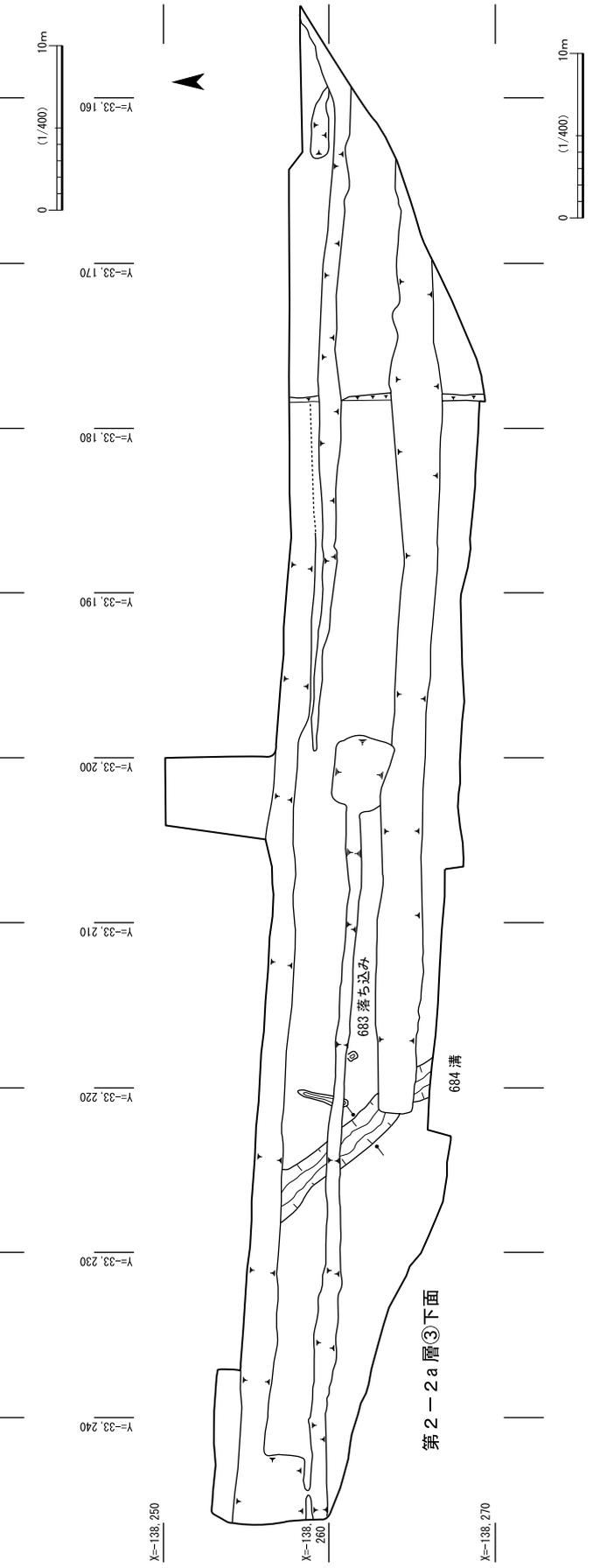


図69 平面図(1)



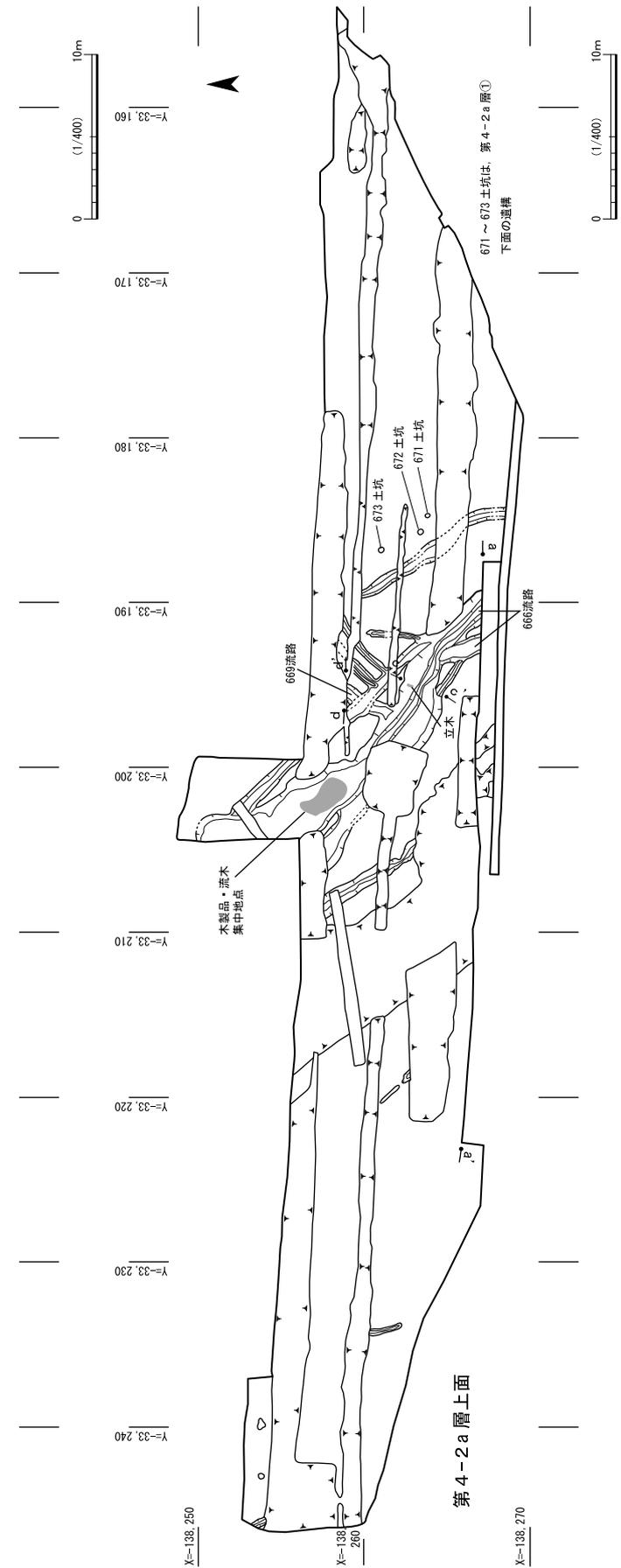
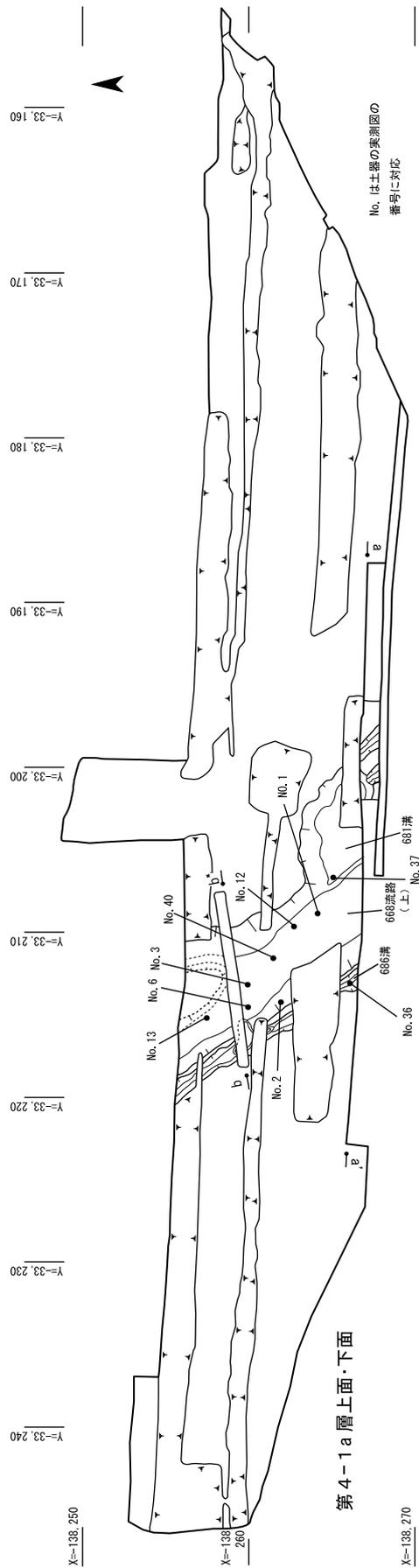
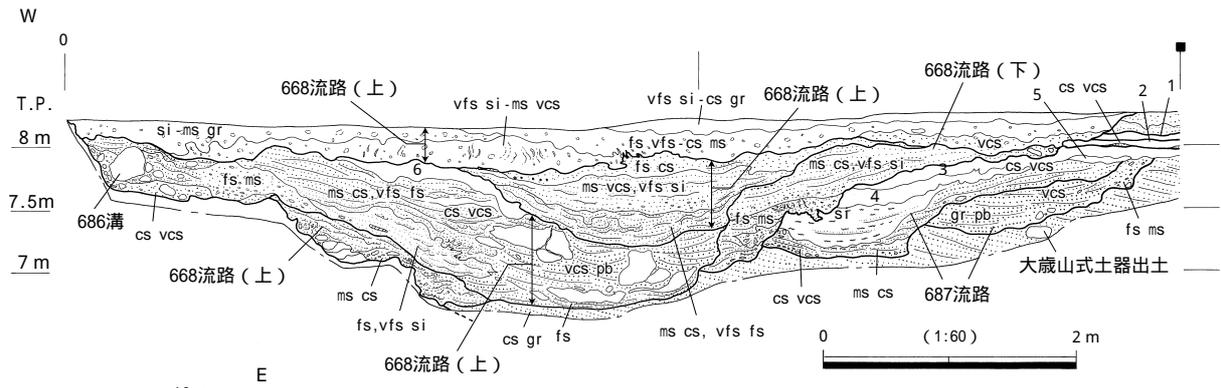
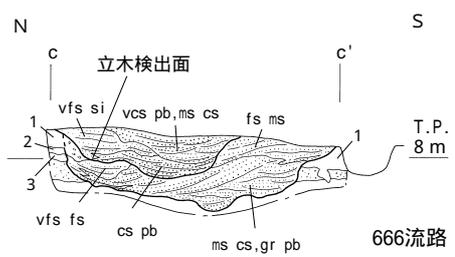


図70 平面図(2)

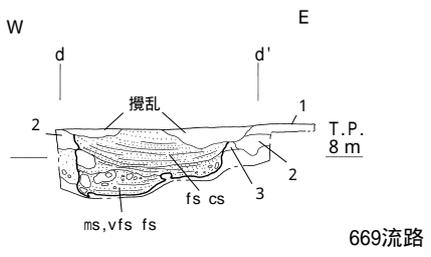


1. 黄灰 2.5V4/1 極細砂-シルトブロックと細砂-粗砂混じる 土壌化(暗色帯) (第4-2a層)
2. 黄灰 2.5V4/1 シルト 有機物粒含む 土壌化(暗色帯) (第4-2a層)
3. 黄灰 2.5V4/1 粗砂-細礫混じり極細砂-シルト 土壌化(暗色帯) (第4-2a層)
4. 黄灰 2.5V4/1 中砂-粗砂混じり極細砂-シルト 土壌化(暗色帯) (第4-2a層)
5. 黄灰 2.5V5/1 極細砂-シルト質中砂 土壌化(暗色帯) (第4-2a層)
6. 灰 5Y4/1 粗砂-中礫混じり細砂-極細砂 擾乱を受けている (第4-1a層の細分)

(b-b'ライン)



1. 黒 5Y2/1 粗砂-細礫混じりシルト 土壌化(暗色帯) (第4-2a層②)
2. 黄灰 2.5Y5/1 細砂-中砂混じりシルト 土壌化(暗色帯) (第4-3a層)
3. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混じりシルト-極細砂 土壌化(暗色帯) (第5-1a層)



1. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂-細礫混じり極細砂 土壌化(暗色帯) (第4-2a層)
2. 黄灰 2.5V4/1 極粗砂-細礫混じり極細砂-シルト 土壌化(暗色帯) (第4-2a層)
3. 灰 5Y5/1 シルト 土壌化(暗色帯) (第5-1a層?)

図71 流路断面図

したように668流路(上)③層準に対応する。したがって、この溝は流路③層準堆積前に掘削されたといえる。

なお、668流路(上)の下流にあたる讚良郡条里遺跡(その1)の「溝27」では、井堰が検出されているが、堰を構成する杭は流路内に砂がある程度堆積した後に打設されており、杭打設前に堆積した砂の中にも奈良時代後半の土器片が含まれていた。今回の断面観察結果からすれば、井堰は668流路(上)③堆積後に設置され、②によって埋没した可能性が考えられる。そのように考えれば、井堰やそれに伴う「溝28」は、668溝埋没後につくられたことになる。ただし、(その1)では流路充填堆積物と杭の関係が把握されていないため、そこで検出された井堰が③層準の途中の段階で築かれ、最終的に②層準段階に埋没した可能性も完全に否定することはできない。668溝も668流路(上)から取水した水路の可能性が高く、調査範囲外に井堰が存在すると思われるが、それと(その1)で検出されたものが同時存在した時期があったかどうかについては、今後の検討課題として残る。

図72~76に、668流路(上)から出土した遺物を示した。遺物は②・③層準に含まれていたが、前者のほうは少なく、図化できるものがなかったため、今回は③層準から出土したものを図示した。また、2に関しては流路左岸の肩部から出土した(図版42-7)。ちなみに、②層準と③層準から出土した土器に

は、顕著な時期差は認められない。なお、主な遺物の出土位置は図70上段に示すとおりである。

1・2は体部が球形を呈する甕である。1は底部の成形にタタキ技法を用いており、内面には当て具の痕跡が明瞭に残る。外面はハケメが施されており、タタキの痕跡は観察できない。なお、外面には墨書が認められる。形はくずれているものの人面を表現したと思われるものが、体部全体で4つ確認できる。2の外面調整もハケメである。内面の調整はナデであり、体部下半には指頭圧痕が顕著に認められる。外面には人面を表現した墨書が3つ認められる。9も体部が球形を呈する甕である。外面の調整はハケメである。内面は、体部上半がハケメで、下半では同心円状の当て具の痕跡がナデによって消されている。なお、外面には人面を表現したと思われる墨書が認められる。3・6・7・8・17・18は長胴甕である。いずれも、体部下半の成形にはタタキ技法を用いたと思われ、内面に同心円状の当て具の痕跡が認められる。なお、外面にはハケメが施されているが、3と8には部分的に平行タタキの痕跡が残存している。また、これらのうち、7には外面および口縁部内面に墨書が認められ、前者は人面を表現している。さらに、17にも外面に墨書が認められる。4・5は甕の口縁部破片であるが、これらについては体部の形状を明らかにすることは難しい。10～15は小形の甕である。これらの土器の調整は、外面がハケメ、内面がナデないしハケメであり、成形にはタタキ技法は用いられていない。このうち、11には底部に焼成後の穿孔がみられる。また、12には外面にススが顕著に認められ、内面には炭化物が付着している。30も小形の甕の破片であり、外面に墨書が認められる。墨書の全体像は不明であるが、おそらく人面を表現したと思われる。

16は小形の鉢である。外面の調整はハケメであるが、内面には同心円状の当て具痕跡がみられ、成形にはタタキ技法が用いられたと思われる。

19は土師器皿の破片である。見込みには暗文が施され、底部外面には墨書の痕跡が確認できる。20～23は土師器杯である。20には内面に斜放射状の暗文が認められる。21～23の調整は内外面ともナデであるが、21に関しては、底部外面にハケメの痕跡がわずかに残存している。また、29も土師器杯の破片であり、内面にはハケメが認められる。

24・25は須恵器杯B蓋の破片、26は須恵器長頸壺の破片である。また、28は須恵器鉢の口縁部破片である。内外面の調整はヨコ方向のヘラミガキであり、内外面ともに漆が塗布されている（図版44）。

32～35は製塩土器の破片である。32～34の調整はナデである。また、35に関しては外面に布目痕が認められる。

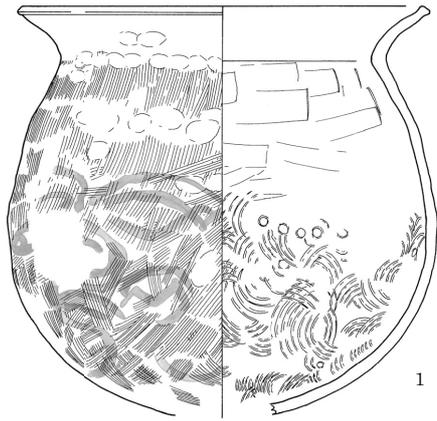
38は棒状の木製品であり、先端を加工して尖らせている。なお、図では上部が二股に分かれているように見えるが、これは出土時に破損したものであり、元に戻せなかったためこのように表現した。この木製品の樹種はエノキ属である。

40は花崗岩の石材の破片であり、③層準の最下部から出土した。ひとつの面に炭化物が付着しており、被熱したことがわかる。なお、図化していないが、この石材とともに、長さ約20cmの板状を呈する花崗岩も出土した。

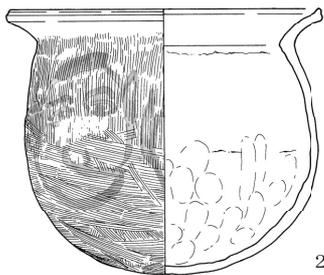
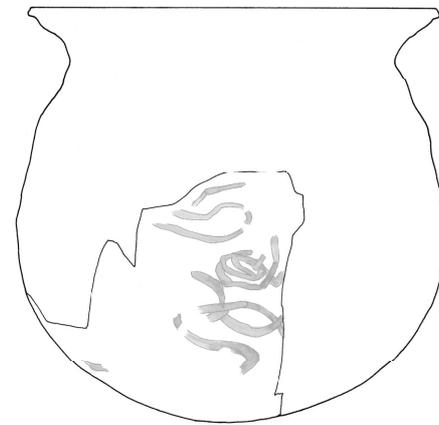
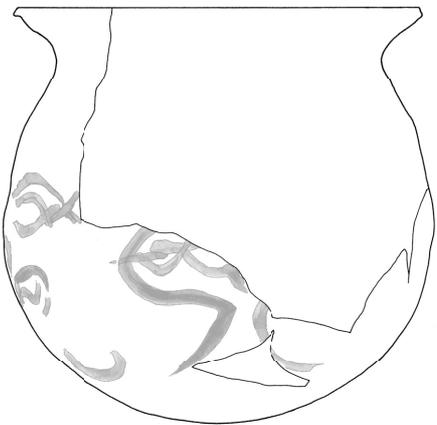
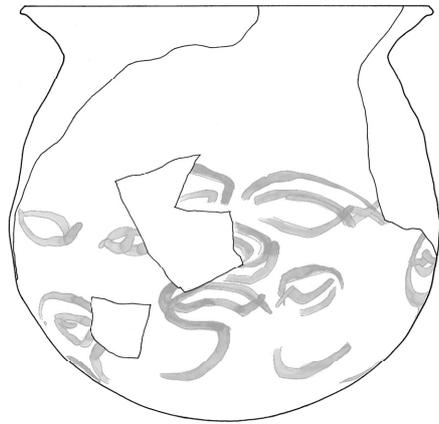
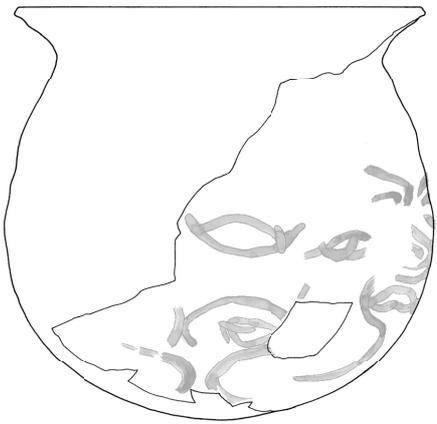
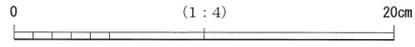
この他、土器などに混じって、骨も若干出土したが、遺存状況が悪かったため、同定はできなかった。

最後に、流路の埋積時期よりも古い時期の遺物についてふれておきたい。27は弥生時代中期に属すると思われる甕の底部である。また、32は円筒埴輪の破片である。39はサヌカイト製のスクレイパーであり、2側縁に刃部が作り出されている。縄文時代のものと思われる。

なお、2005年度には、讚良郡条里遺跡（その1）の北端の用地境界に擁壁を建設することになり、立



1



2

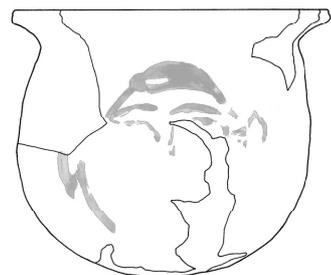
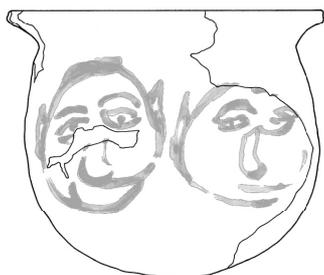


图72 668流路(上)出土遺物(1)

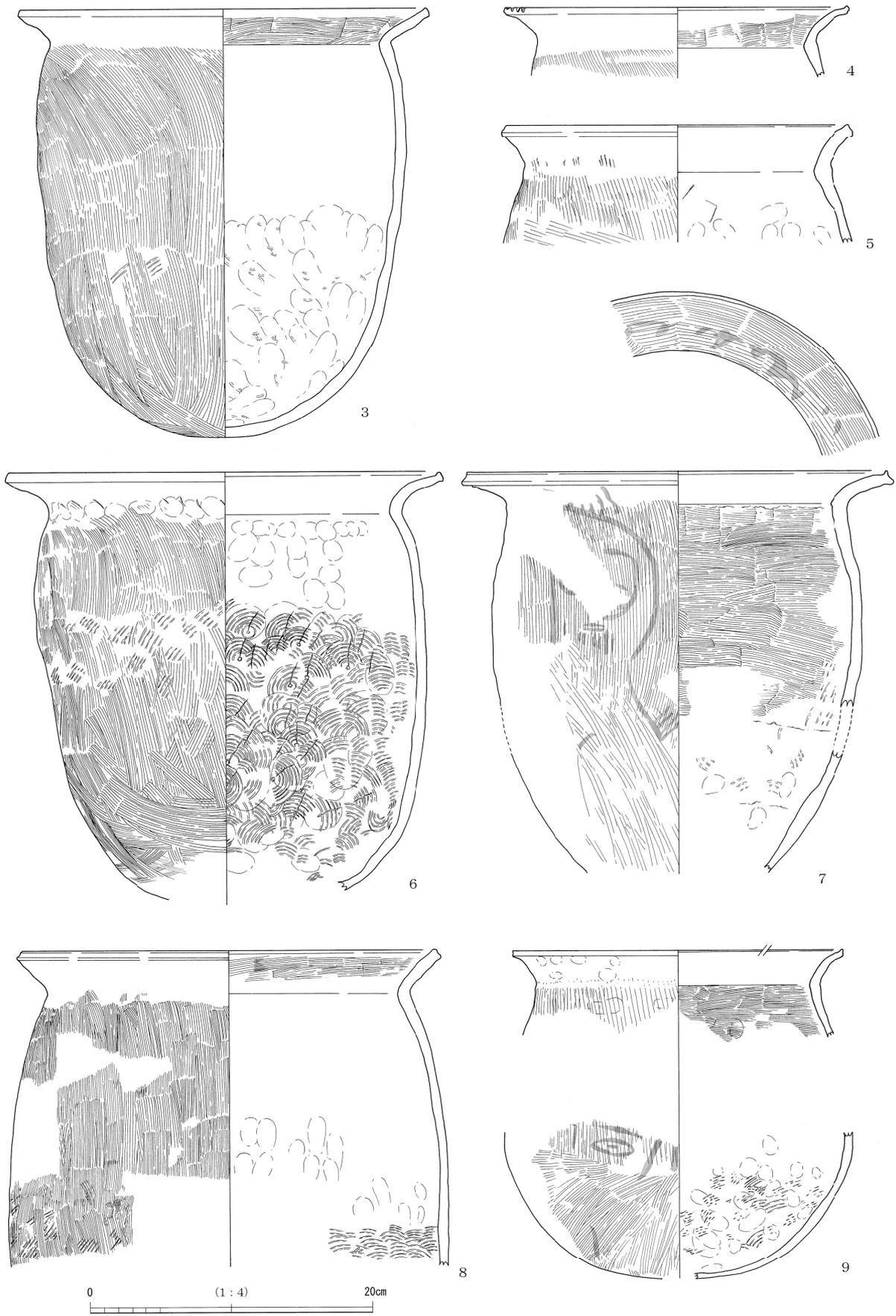


图73 668流路(上)出土遺物(2)



图74 668流路（上）出土遺物（3）

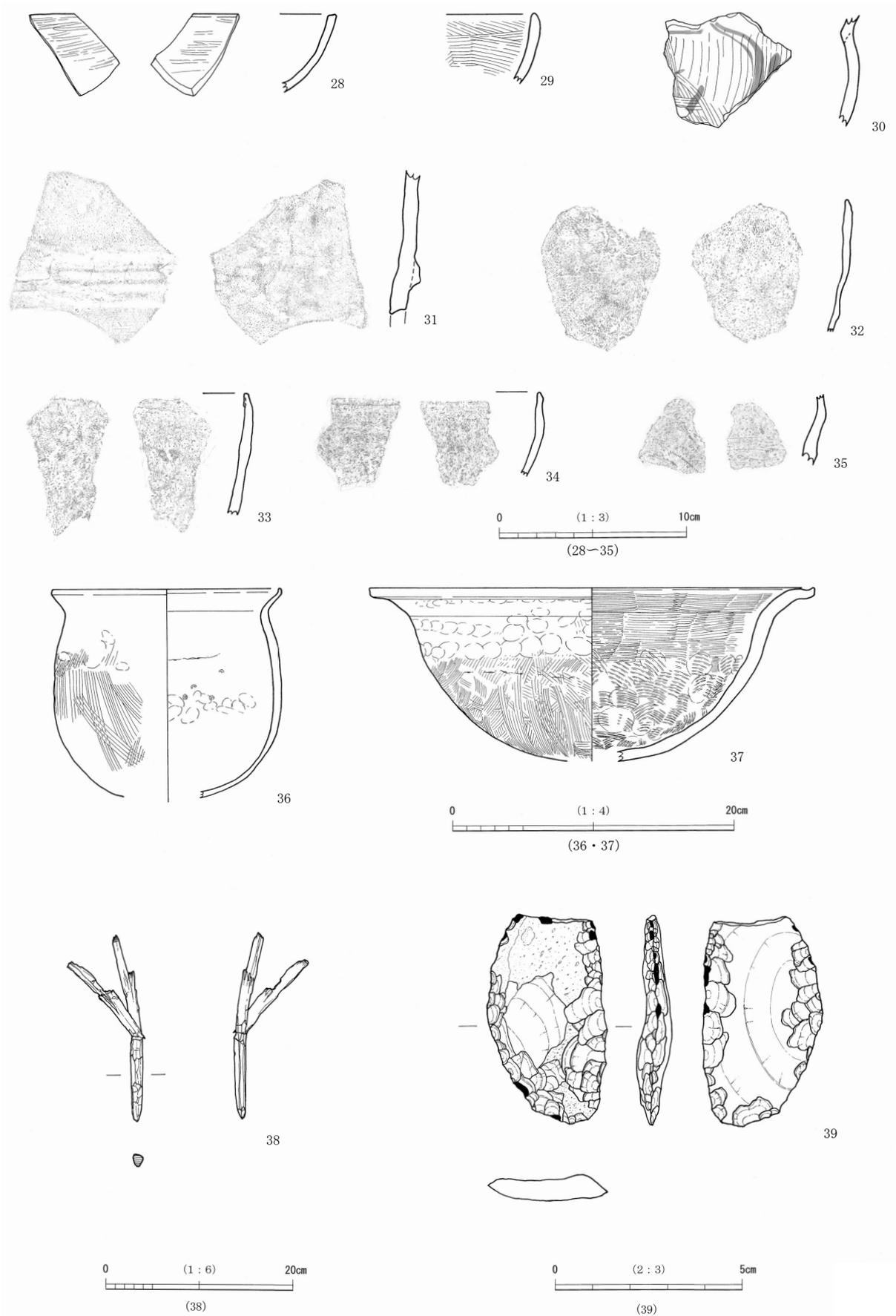


图75 668流路（上）出土遺物（4）

会をおこなった。その際に、668流路（上）の部分（図87に位置を表示）から遺物を回収したので、ここで報告しておきたい（図77）。

41は須恵器杯Bの破片である。42～44は土師器杯、45は土師器皿である。46～48は製塩土器の破片である。46・48には内面に布目痕がみられる。49～51は土師器の細片であり、外面に墨書が認められる。いずれも人面を表現したものと思われる。52～56は土師器甕の口縁部から体部にかけての破片である。このうち、52には体部外面に墨書が認められる。

57は庄内式期に属すると思われる有稜高杯の破片である。58は鉢の底部であり、弥生時代後期～古墳時代初頭に属すると思われる。59は大歳山式（縄文時代前期末）の口縁部破片である。60はサヌカイトの石核であり、縄文時代に属すると思われる。

第4-2 a層 図71に示すように、668流路は第4-2 a層上面段階に既に存在しており、この段階のものを668流路（下）とした。これについては調査区中央の断面付近でしか確認できないが、その原因は第4-2 a層上面段階の流路が一定程度埋没した後、流路が開析（下刻）されたことにある。

この他、第4-2 a層上面では、666流路が検出された（図70下段）。この流路は668流路（下）の右岸に位置する。全体として南東から北西に向かって流れるが、複雑に分岐し、大きく3つの分流路に分かれている。また、流路充填堆積物は大きく2つに細分された（図71）。断面付近では流路肩部において立木（ヤマグワ）が検出されたが、これは下層の堆積物の上部に生えていたものである（図版42-4）。この立木の存在から、上層と下層の間には堆積間隙があったことがわかる。さらに、調査区北部では南西から北東に向かって分岐する分流路（669流路）があり、それが南東-北西方向にのびる666流路の分流路のひとつに切られていた。669流路の充填堆積物（図71）は、666流路の下層に対応する。

666流路は、讃良郡条里遺跡（その1）の「溝19」、小路遺跡（その2）の「22～24流路」と同一のものである。小路遺跡（その2）では、668流路の右岸から北東方向にのびる分流路が複数派生し、06-1-1区で向きを北西に変えた後、讃良郡条里遺跡（その1）で668流路（下）に合流する。小路遺跡（その2）において、668流路（下）右岸から放射状に派生する状況からみて、この流路は668流路（下）の河岸の決壊によって生じた破堤流路（クレバスチャネル）と考えられる。この流路は北東方向に向かって流れ出したが、北東に高くなる緩傾斜地に当たって北西方向に向きを変え、668流路（下）に合流したと考えられる。

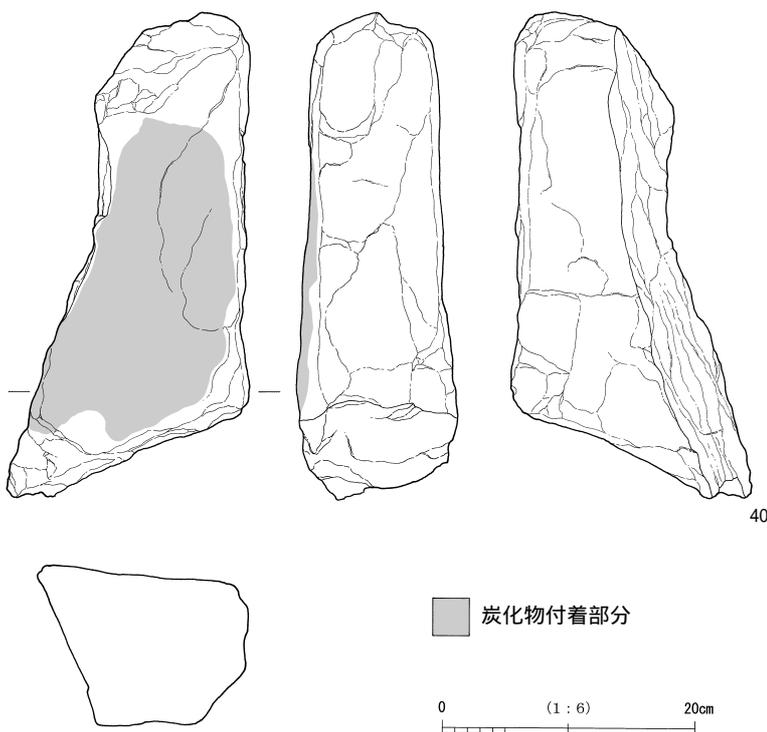


図76 668流路（上）出土遺物（5）

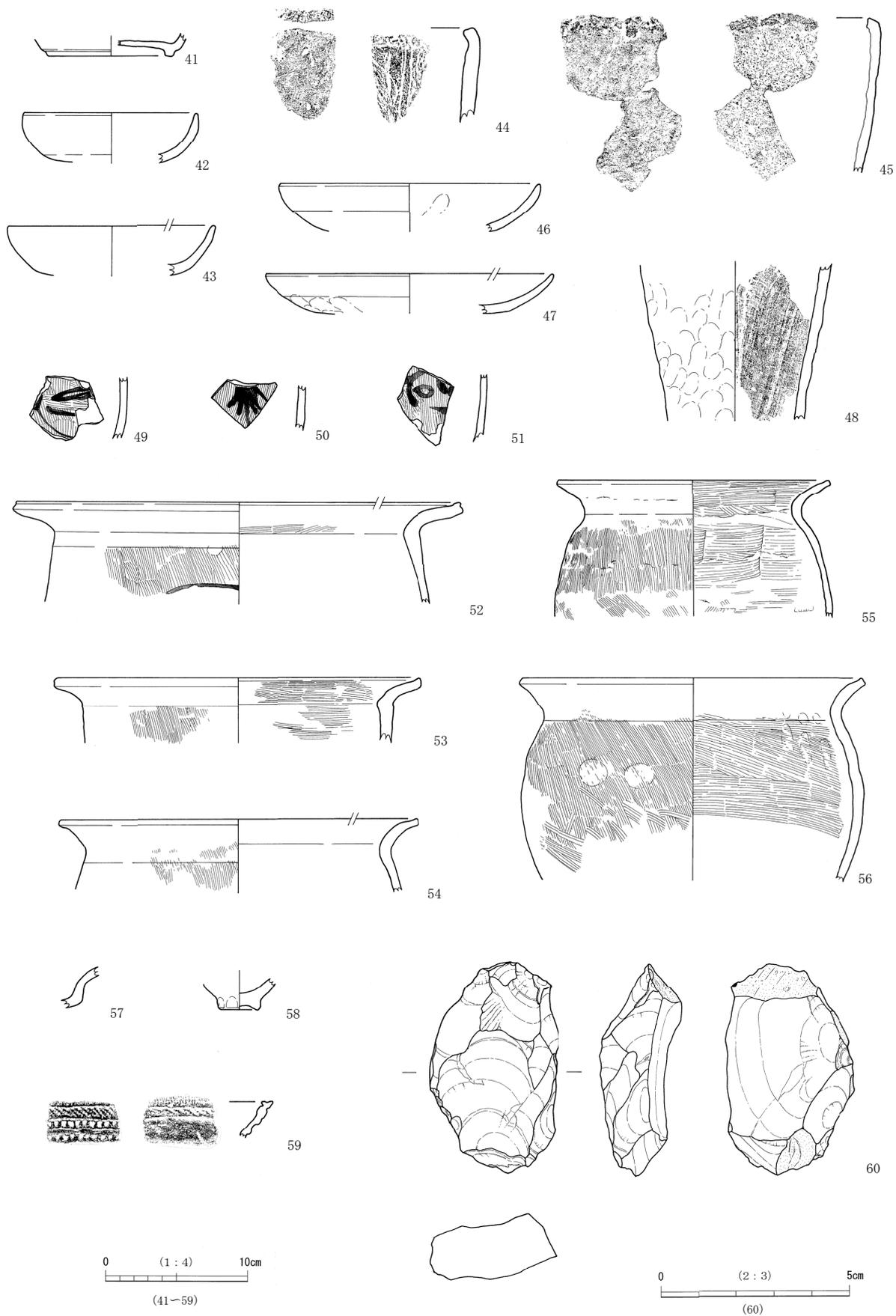


图77 立会地点 出土遺物

666流路内からは土器片や木製品が出土した（図78～81）。61～72は甕の口縁部ないし口縁部～体部上半の破片である。このうち、61～68は庄内形甕で、64・66以外は生駒山西麓の胎土のものである。69～71は弥生形甕、72は小形の甕である。73～81は底部破片である。82は弥生土器甕であり、弥生時代中期前葉（第Ⅱ様式）のものと思われる。83・84は壺の体部である。

85・88は弥生時代後期末～庄内式期に属する広口壺の口縁部、86は弥生時代後期の広口長頸壺の頸部破片である。87・89・90・91は広口壺の口縁部、93は直口壺の体部と思われる破片、95は直口壺の口縁部である。92はミニチュア土器、94は小形の鉢である。96・97は小形器台である。98～108は高杯である。98は椀形高杯であり、庄内式後半に属する可能性がある。99は有稜高杯であり、弥生時代後期末に属すると思われる。100も有稜高杯であり、庄内式後半に属すると思われる。なお、この土器の杯部内面にはススが付着している（図版46）。101は有稜高杯の破片、102～108は軸部の破片である。

109は壺の頸部破片であり、外面に櫛描列点文が施されている。110は壺の肩部破片であり、外面に櫛描直線文・波状文が施されている。これに関しては、庄内式に属する。111は手焙形土器の覆部の破片であり、弥生時代後期後半～庄内式前半に属すると思われる。

これらの土器の時期にはやや幅があるものの、最も新しいものは庄内式新段階～布留式古段階に属する。また、讃良郡条里遺跡（その1）や小路遺跡（その2）において、この流路から出土した土器の時期も同様の傾向を示す。また、小路遺跡（その2）の「27溝」は03-1の489溝（図91左下）と同一の遺構であり、668流路（下）から取水した水路と思われるが、そこからは庄内形甕のほかに布留形甕も出土した。これらのことから、666流路の時期は庄内式新段階～布留式古段階と考えられる。

また、流路内に設定した地層観察用のアゼを掘削した際に、図81-114の広楕未製品が出土した。これについては、着柄隆起部を掘削時に誤って欠損してしまった。なお、この未製品には部分的に炭化した部分も認められる。また、図70下段にアミをかけて示した部分には、流木や木製品が集中していた。ここから出土した木製品が112・113・115・116である。112は約65×30cmの長方形を呈する板材である。一側縁の上端には突起が作り出されている。なお、この突起は実測後に外れてしまったため、図版48には外れた状態の写真を掲載している。樹種はヒノキである。113は厚みのある板状の木製品である。取り上げ時に破損してしまい、図示したのは全体の半分程度にあたる。残存する端部をみると、やや反っているが、これは埋没後に変形したものではなく、加工によってこのような形にされたと思われる。この木製品の樹種はエノキ属である。115は先端を尖らせており、一側縁に段差を作り出している。樹種はスタジイである。116は板状を呈する。一端（図の下側）は直線的に加工しているが、もう一方の端（図の上側）は角が丸くなるように加工されている。樹種はヒノキである。

次に、第4-2 a層①の下面で検出された遺構について述べる。この面では、671～673土坑が検出された（図70下段）。671土坑の規模は径0.6m、深さ0.6mである。672・673土坑の規模はいずれも、径0.5m、深さ0.3mである。これらの土坑の埋土は、上半が第4-2 a層①と同じ土壌、下半が黒褐色シルト～粘土で極細砂質シルトの薄層や下層起源のシルトブロックを含んでいた。このことから、これらの土坑は滞水して、周囲から流入した泥によって埋積されていった可能性が高い。なお、これらの土坑からは遺物は出土しなかった。

また、第4-2 a層を完全に除去した段階（第4-2 a層下面）では、流路と土坑状変形が検出された。まず、流路としては670流路と687流路がある（図82上段）。これらは、第4-2 a層③の下面に帰属する可能性が高い。このうち、670流路は666流路の位置と重なっており、ほぼ同じ位置を流れていたと

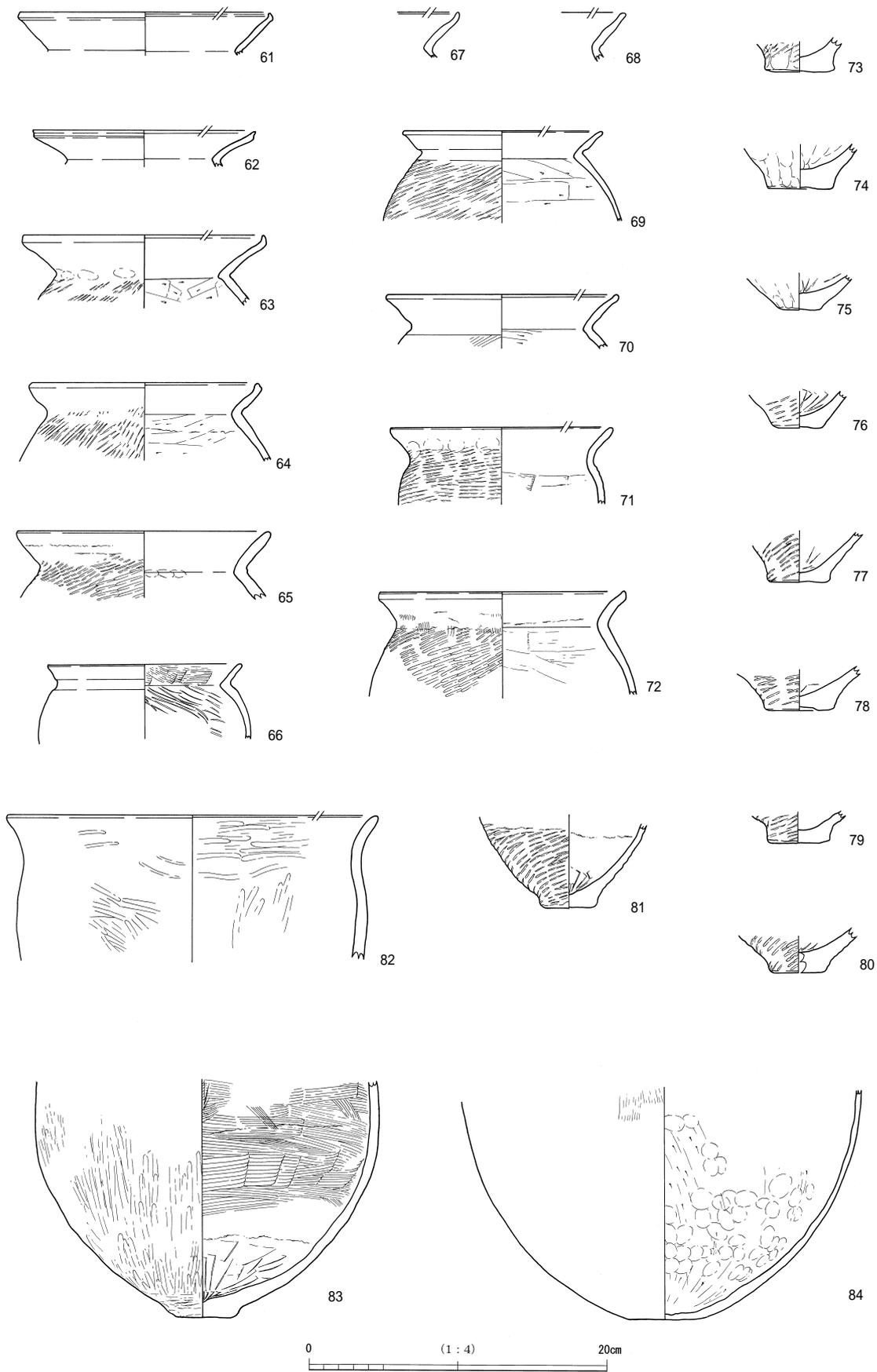


图78 666流路 出土遺物 (1)

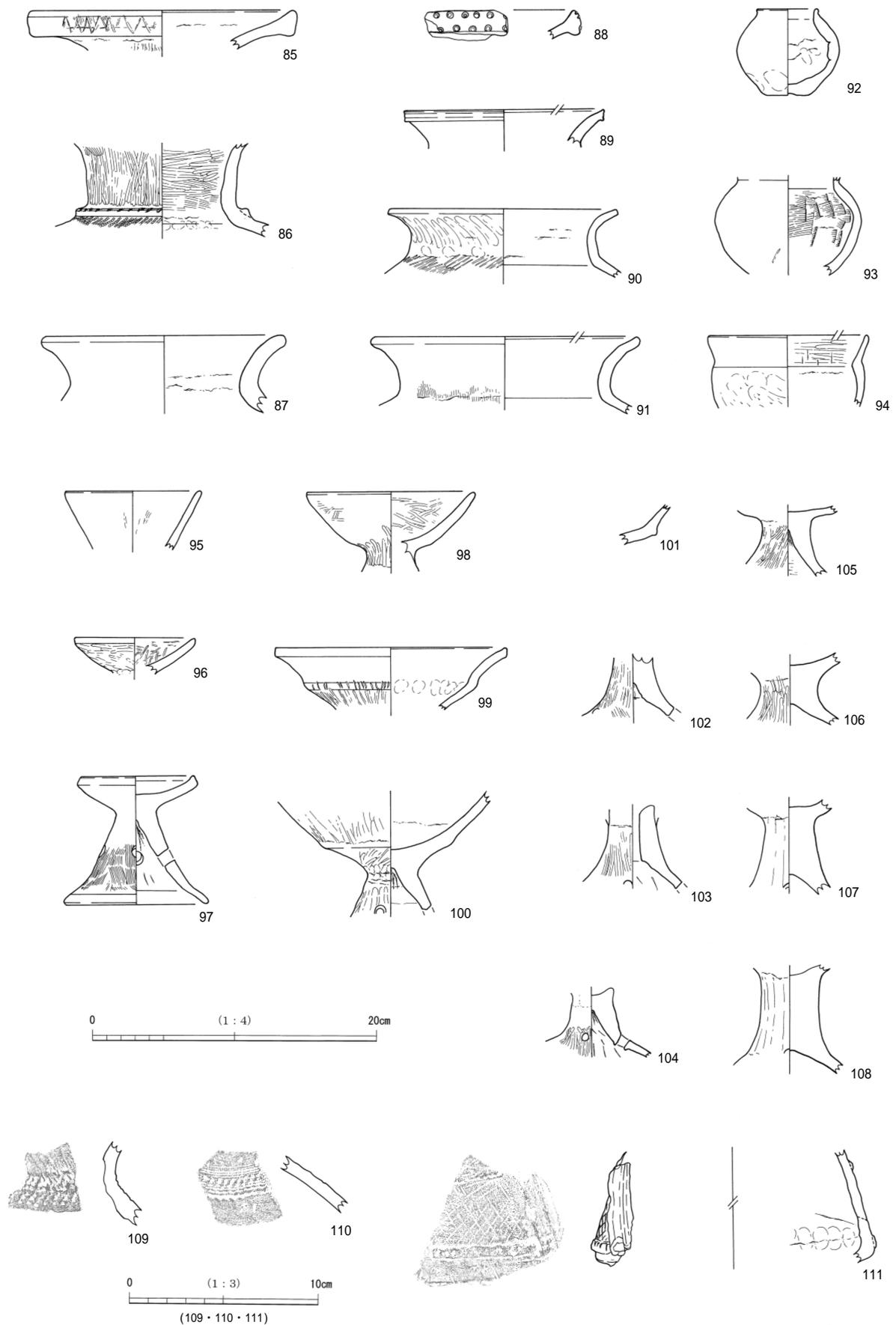


图79 666流路 出土遺物 (2)

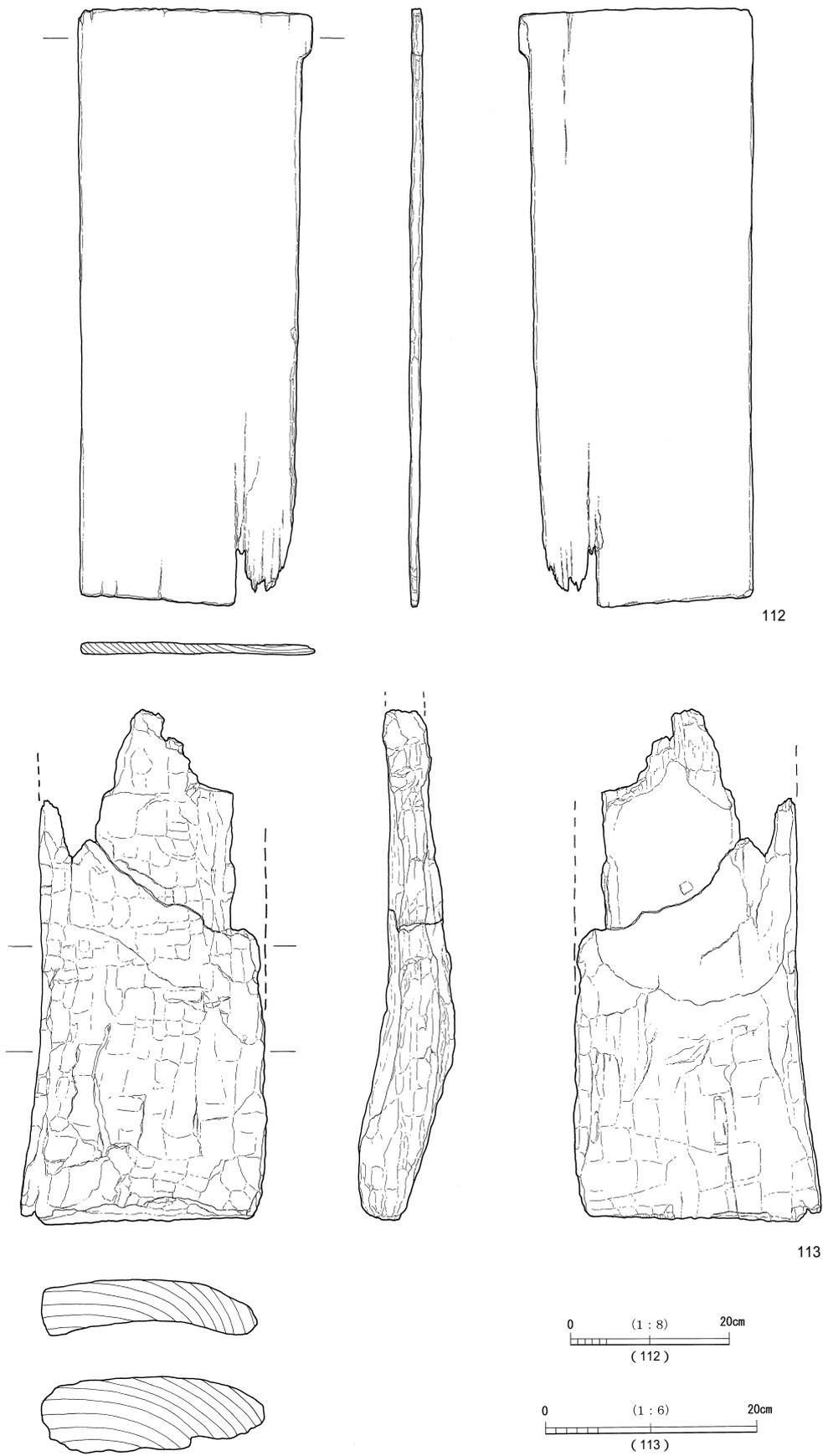


図80 666流路 出土遺物 (3)

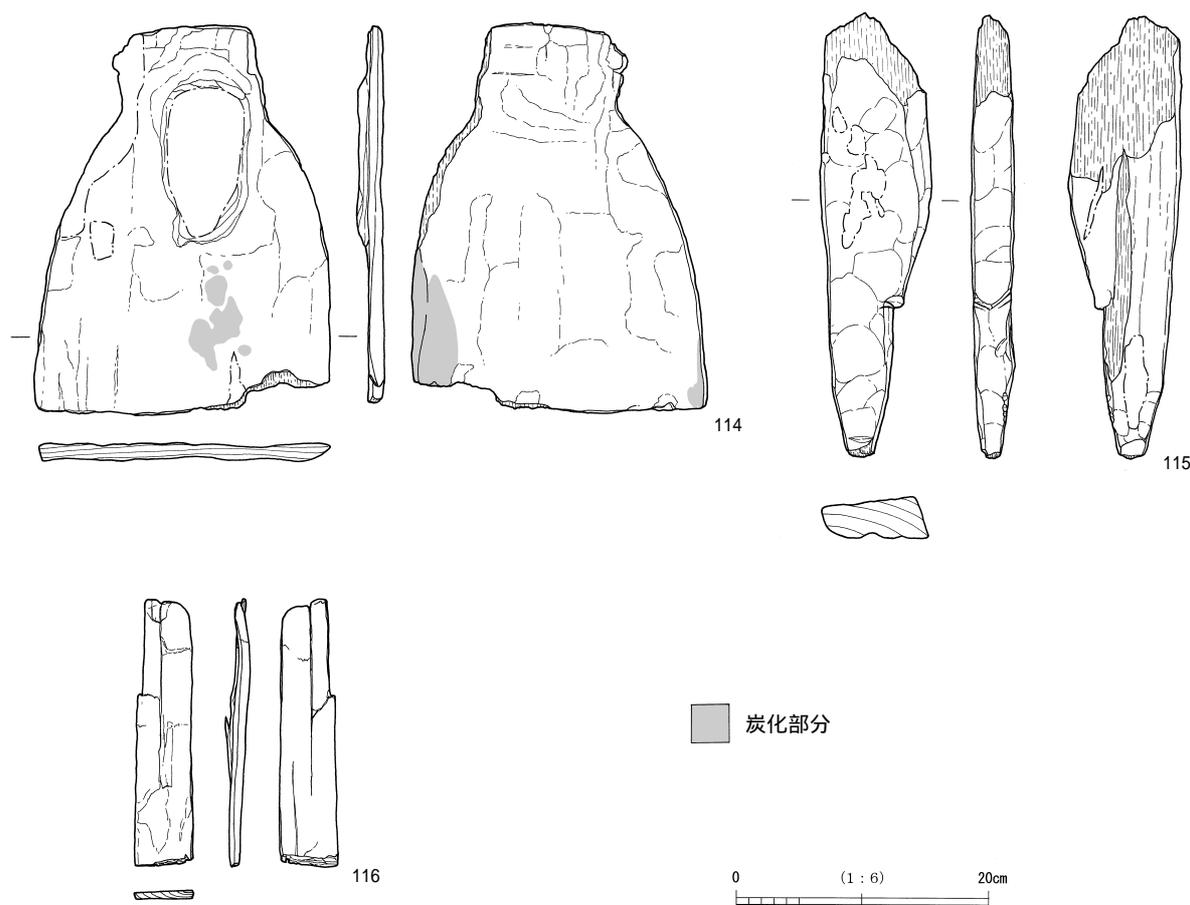


図81 666流路 出土遺物（4）

思われる。また、687流路は調査区北側で668流路と重なっており、調査区北側から讃良郡条里遺跡（その1）の南半にかけては、668流路と同じ位置を流れていたと思われる。それらの流路充填堆積物は、下部が葉理のみられる砂で、上部は有機物を多く含むシルト～粘土である。このことから、この流路は形成後しばらく活発に砂を運搬していたが、やがて放棄流路化したことがわかる。この状況は、03-1で検出された第4-2 a層下面の流路の変遷過程と共通しており、当遺跡周辺におけるこの時期の流路変遷の特徴であると思われる。03-1の流路の時期からみて、670・687流路は弥生時代後期前半に形成され、後期後半～庄内式期前半には放棄流路化していたと思われる。

これらの流路は、小路遺跡（その2）の「31流路」と同一のものである。ただし、その報告書に掲載された平面図は、流路の形状を適切に表現できていないため、図87右下では原図や写真をもとに修正して表示している。さらに、讃良郡条里遺跡（その1）北半で検出された「溝33」は、埋没過程の共通性などからみて、687流路の続きである可能性が高い。これらのことを考え合わせると、この段階の主要な流路は687流路であり、そこから分岐して、讃良郡条里遺跡（その1）南東部で687流路と再び合流する分流路（670流路）が存在していた、と復原することができる（図87右下）。

687流路の上部の堆積物からは図83-117・118が出土した。前者は甕の体部破片であり、後者は底部破片である。いずれも弥生時代後期に属する。

また、670流路の右岸では、674流路・678流路・679流路が検出された。これらは幅0.5m、深さ0.4m程

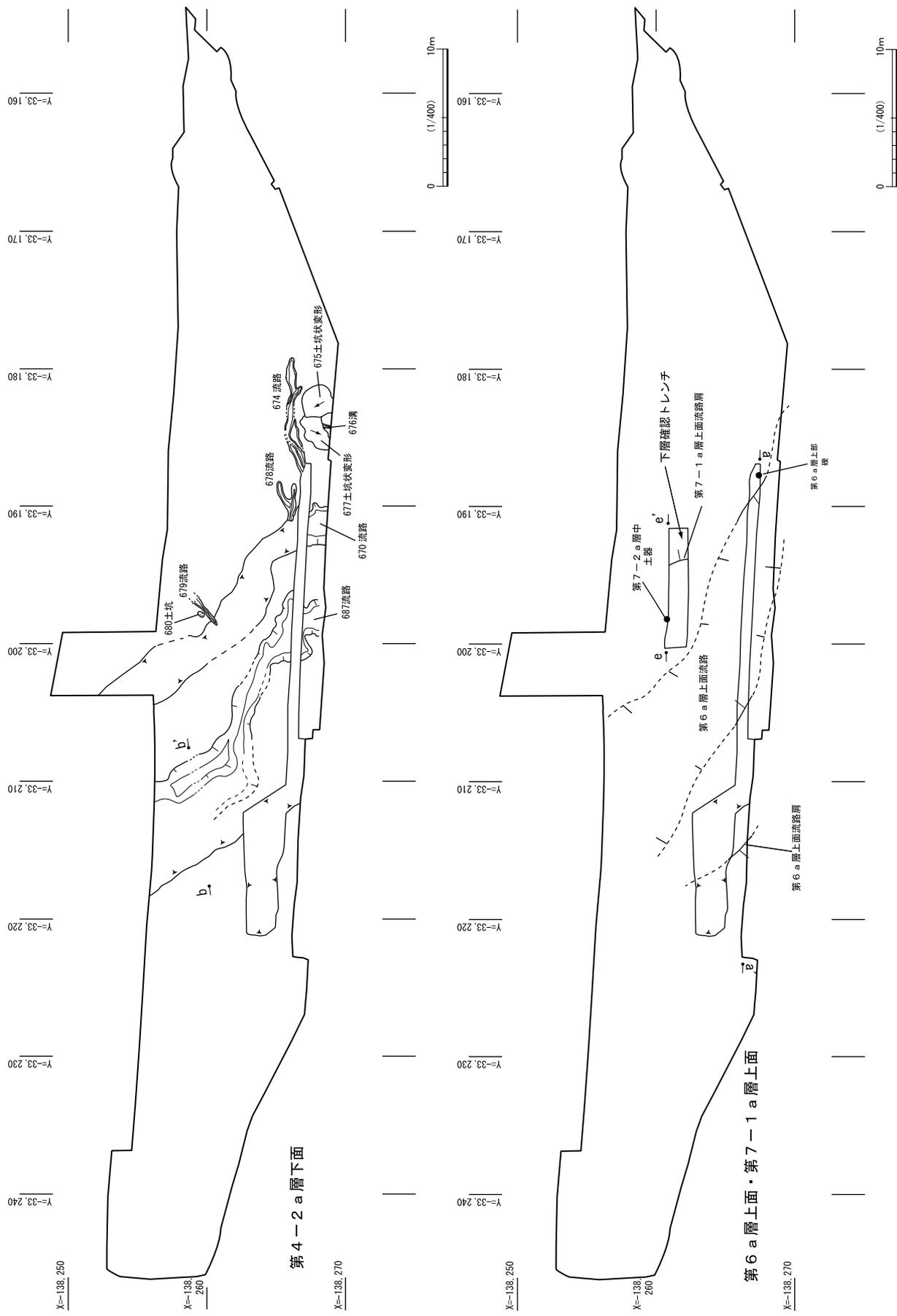


図82 平面図 (3)

度の小規模なもので、東側に向かって浅くなっていた。充填堆積物は上層と下層にわかれ、下層は下位層準起源のブロックを多く含み、葉理のみられる砂層、上層は暗色を呈するシルトであった。これらの流路は、東ないし南東から670流路に流れ込む水流によって形成されたものと思われる。

その他、調査区南端では675・677土坑状変形、676溝が検出された。土坑状変形は、讃良郡条里遺跡03-1における検討の結果、地震によって生じた変形構造と判断されたものである。03

-1ではほとんどすべての土坑状変形を完掘して断面図を作成したが、今回は検出後にトレンチを掘削するにとどめ、平面およびトレンチ断面の検討によってすべり方向を確定した。ふたつの土坑状変形はわずかに重なっており、675が677を切っていた。すべり方向は、675が南南東→北北西方向、677が北北東→南南西方向である。また、土坑状変形検出地点の第4-2 a層②下部では、地震によって生じたと考えられる含水塑性変形が認められることから、これらは第4-2 a層②の下面に帰属する可能性が考えられる。一方、676溝の規模は幅0.2m、深さ0.1mである。この溝は677土坑状変形に切られていた。

第5層以下 第5層以下の状況は、南壁断面（a-a'ライン）・668流路中央アゼ断面（b-b'ライン）、および下層確認トレンチ（e-e'ライン）において観察した。

小路遺跡（その2）から讃良郡条里遺跡03-2にかけて、第5-1 a層上面からは多数の流路が検出されている。しかし、今回の調査では第5-1 a層の流路は検出されなかった。小路遺跡（その2）の遺構を再検討したところ、第5-1 a層上面・第4-4 a層上面の流路の状況は図91右下のように復原できた。これによれば、06-1-1区の西端に流路がかかっていたと思われるが、この部分に関しては調査区壁面が崩落する危険があったため、掘削は取り止めた。

第6 a層に帰属する遺構としては、流路が確認された。668流路の中央アゼ（図71 b-b'ライン）では、第6 a層上面に帰属する流路を埋める砂層の一部を確認した。この砂層の中には、下層起源のシルトブロックが含まれていたが、ブロックのひとつから前期末の大歳山式土器の口縁部破片が出土した（図86-120）。また、この砂層は南壁断面（図68）の5~15m地点に認められる砂層に対応すると思われる。さらに、南壁断面では25m地点付近で第6 a層が西へ下がっていくことが確認された。これは流路の肩と思われる。これらのことをふまえて第6 a層上面の状況を復原すると、図82下段のようになる。

その他、南壁断面東端付近において、第6 a層に炭化物が多く含まれることが確認され、そこから土器片、1.5×1.0×0.8cmの花崗岩の礫（図84-119）が出土した。これについては人為的な研磨痕などは観察できないが、この礫が含まれる堆積物の粒径よりもはるかに大きいため、自然に流されてきたのではなく、人為的に持ち込まれたと考えられる。

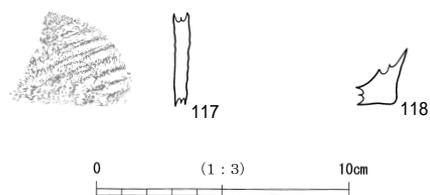


図83 687流路 出土遺物

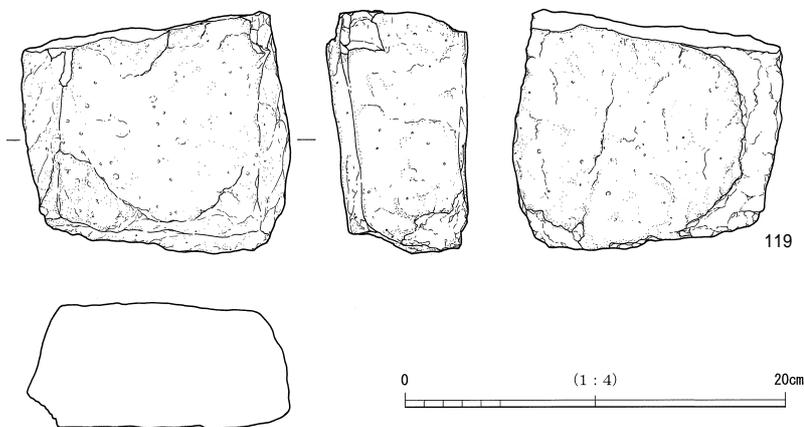
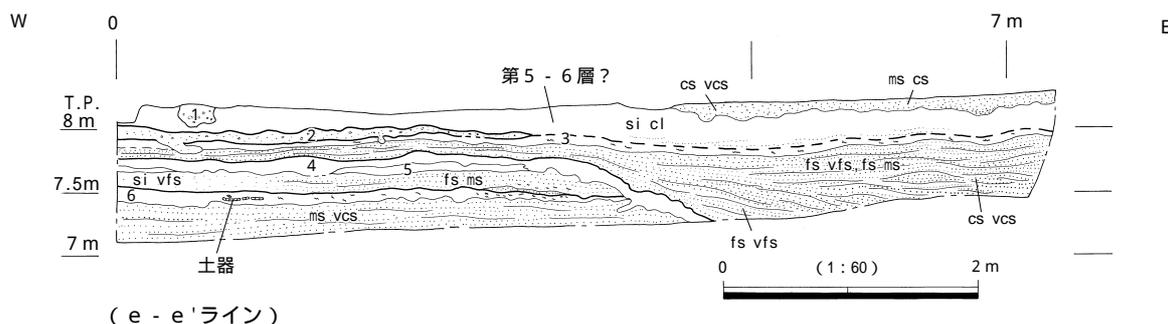


図84 第6 a層 出土遺物



- 1. 黒 2.5Y2/1 粗砂 - 細礫混じりシルト (第4 - 2 a層下面の遺構埋土)
- 2. 緑灰 7.5GY5/1 極細砂質中砂 - 極粗砂 擾乱を受けている (第6 a層)
- 3. 青灰 5B6/1 シルト 有機物粒を含む (第6 a層)
- 4. 暗緑灰 7.5GY4/1 極細砂質細砂 土壌構造あり 炭化物粒多く含む (第7 - 1 a層)
- 5. 緑灰 10GY5/1 シルト 炭化物粒多く含む やや暗色を呈する (第7 - 1 a層)
- 6. 灰 - 緑灰 N5/0 - 10B6/1 極細砂質細砂 - 中砂 擾乱を受けている 炭化物多く含む (第7 - 2 a層)

図85 下層確認トレンチ断面図

第7 - 1 a層・第7 - 2 a層に関わる遺構としては、流路が確認された。下層確認トレンチ断面では、第7 - 1 a層上面段階の流路の肩が確認された (図85)。このことをふまえて小路遺跡 (その2)・(その3) の下層確認トレンチのデータを再検討したところ、この流路は少なくとも第7 - 3 a層段階には存在しており、周囲に氾濫堆積物を累重させつつ、側方移動しながら第7 - 1 a層上面段階まで存続したことが明らかになった。第7 - 2 a層では炭化物の集中部が、下層確認トレンチにおいて2箇所、調査区南壁において1箇所確認された。炭化物集中部を平面で観察すると、径0.5~1 m程度の範囲に炭化物が集中しており、特に中心部分に密集している状況が認識できた。これらは火を焚いた痕跡と思われる (図版43 - 1)。これらの炭化物集中地点周辺には、3~5 cm大の礫が多く含まれていた。この礫に関しては、第7 - 2 a層の粒径と大きく異なること、礫が炭化物密集地点付近に集中する傾向のあることから、人為的に持ち込まれた可能性が高いと考えられる。また、下層確認トレンチにおいては、第7 - 2 a層から土器片や石器が出土した。その中で特に注目されるのは、深鉢の胴部破片がかたまって出土したことである。(図版43 - 2)。遺物は主に、炭化物集中部の周辺から出土した。

図86 - 121~127は下層確認トレンチの第7 - 2 a層から出土したものである。このうち、122と123は、図版43 - 2に出土状況の写真を掲載した土器である。口縁部に穿孔が1つ認められたため、穿孔部分の破片を拓本で示した。この土器は北白川下層Ⅲ式に属する。121は深鉢の体部破片と思われるもので、外面にRL縄文が施されている。124・125はいずれもLR縄文を施すもので、器形からみて北白川下層Ⅲ式に属すると思われる。126・127はサヌカイトの石器類で、126は楔形石器から剥離した剥片、127は楔形石器の破片である。なお、実測図は掲載していないが、図版50上段に示した128・129の剥片も第7 - 2 a層から出土した。

小路遺跡 (その2) からは北白川下層Ⅲ式の良好な資料が出土しているが、報告書では詳しい出土状況が記載されていない。今回の成果にもとづいて、小路遺跡 (その2) の層序を再検討したところ、この土器は第7 - 2 a層上面に対比される流路の肩部から出土したことが判明した (図88右)。さらに、第7 - 2 b層に対比される流路充填堆積物からは、北白川下層Ⅱ b式が出土したことも確認できた。これらのことから、第7 - 2 a層の時期は縄文時代前期後葉と考えられる。

小 結 06 - 1 - 1 区の調査成果を周辺調査地の状況も考慮してまとめると、次のようになる (図87・88)。まず、縄文時代前期後葉 (第7 - 2 a層上面段階) には、流路が南東から北西に向かって流れてい

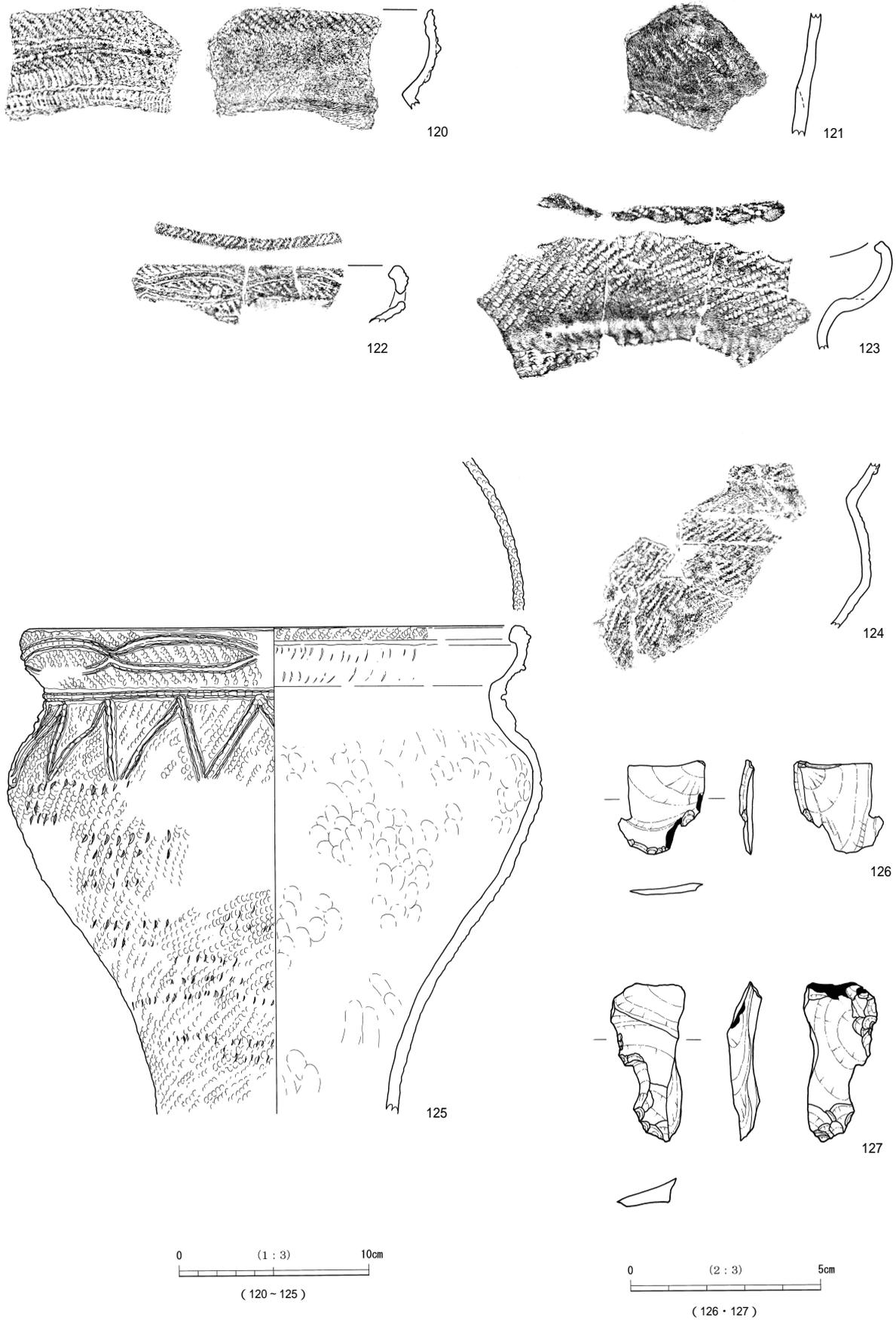


图86 第6 a層上面流路・第7-2 a層 出土遺物

た。この流路は蛇行流路であり、側方移動するとともに氾濫堆積物を周囲に供給したが、その状況は讃良郡条里遺跡03-1の第7層～第6a層下面段階の流路と共通する。また、縄文時代中期（第6a層上面段階）には、それとは別の場所に流路が形成された。部分的な観察にとどまったため、この流路の埋没過程は明らかにできなかったが、小路遺跡（その2）では縄文時代後期に属する土器が出土しており、讃良郡条里遺跡03-1の337→477→476流路と同様の埋積過程をたどった可能性が高い。

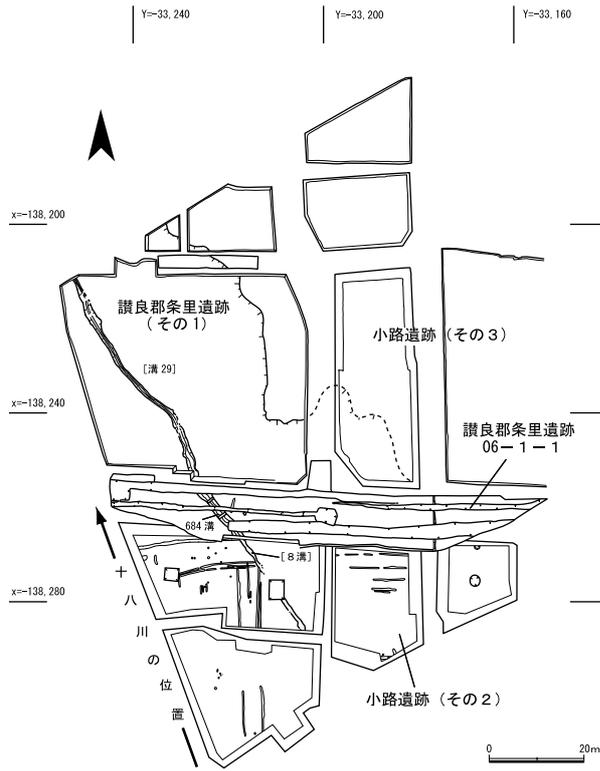
この調査区では第5-1a層から第4-2a層の間の地層の残りが悪いが、これはこの地点に第5-1a層上面・第4-4a層上面の流路が存在せず、氾濫堆積物がほとんど堆積しなかったことに起因すると思われる。一方、この調査区より西にあたる讃良郡条里遺跡（その3）・03-1には、その段階の流路が複数存在していた。流路が多数存在していた部分では、流路から供給された砂が堆積して第4-2a層段階には高くなったが、流路の存在しなかった小路遺跡（その2）の中～東部や06-1-1区の範囲は、周囲と比べてやや低くなっていた可能性が高い。そして、第4-2a層～第4-1a層段階の流路は、この低くなっていた部分の流れていた。

第4-2a層～第4-1a層段階には、687流路→668流路（下）→668流路（上）という流路変遷が認められ、さらにそこから分岐した分流路として、第4-2a層下面670流路や第4-2a層上面666流路が存在した。なお、第4-1a層上面段階には、このような分流路は存在しない。

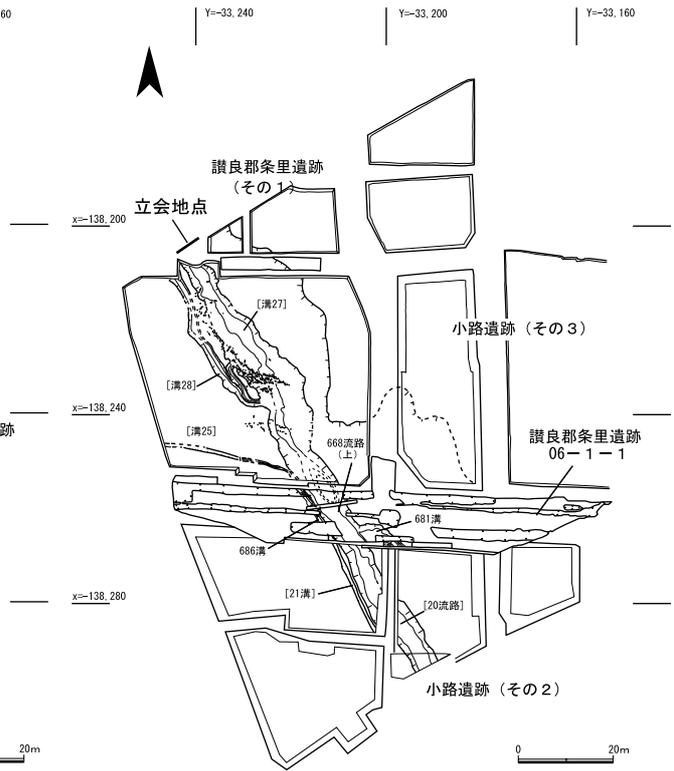
これまでの調査では、668流路が奈良時代後半～平安時代初頭に出現するとされてきたが、今回の調査では、その前身となる流路が弥生時代後期に形成されたことが判明した。これまでの調査において流路の形成時期に関して誤解が生じたのは、古墳時代から奈良時代後半まで開析（下刻）が進行したため、668流路（下）の堆積物がほとんど残存していなかったことと、666・687・670流路の性格を適切に認識できなかったことに原因がある。

なお、これまでの報告では、668流路を人工的な溝ととらえるか（長戸編2004）、人為的に直線的な形状に整形されたものとする見解（田中・島田編2004）が出されている。しかしながら、前者に関しては、人工的に掘削されたと判断する根拠は示されていない。また、堰を設置した結果、その周囲の侵食が激しくなって幅が広がったと想像された部分は、流路の蛇行部にあたる。このような場所は河床に砂州が形成されて瀬となるため、堰が設置されることが多い。また、後者に関しては、小路遺跡（その2）における検出面の輪郭だけを見れば直線的といえなくもないが、流路内に設定された断面では、すべての断面において粗粒の堆積物がどちらかの岸側に偏って堆積していた。これは砂州が右岸側と左岸側に交互に形成され、粗粒の堆積物の存在する部分が滲筋となっていたことを示すと思われる。したがって、小路遺跡（その2）の範囲においても、流路内の水流は蛇行していたと推定される。また、小路遺跡（その2）の範囲では、流路肩部に対する人為的な加工の痕跡（讃良郡条里遺跡03-1の報告参照）や護岸施設は確認されていない。さらに、06-1-1区北端では687流路を埋める泥質堆積物が削り残されて、流路内に島状の高まりが存在していたが、この部分でも人為的な加工は施されていない。なお、一瀬和夫（2004）は、668流路を「縄文時代前期に形成された微高地を斜めに分断」する形で「意識的に掘り込まれ」た「運河的引き込み水路」とする見解を提示している。しかし、この部分に関しては、縄文時代前期の堆積物（第7層）による地形形成だけでなく、縄文時代中期（第6a層段階）における開析流路の形成と埋没、そして縄文時代後期中葉（第5-1a層段階）における開析流路の形成についても考慮すべきであり、地形形成に関する認識に問題がある。

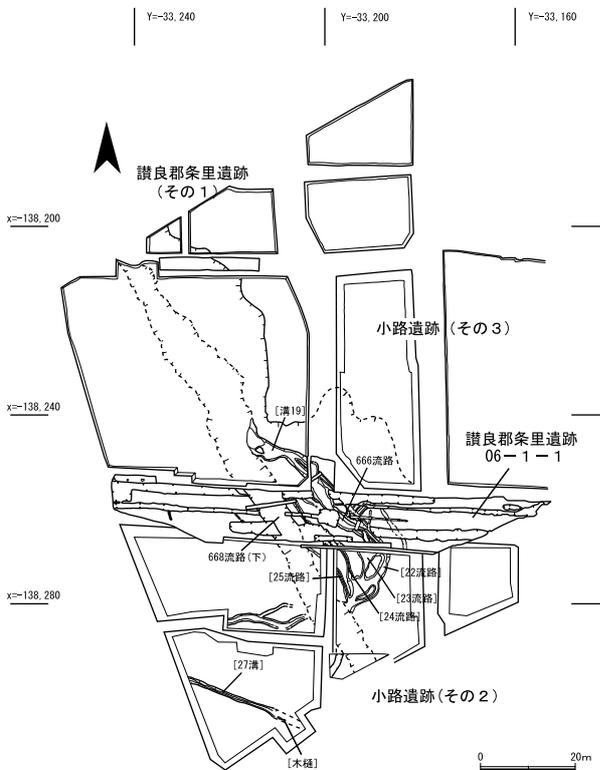
668流路（上）は最終的に放棄流路化し、中世までに泥質堆積物で埋没したが、その後もこの調査区に



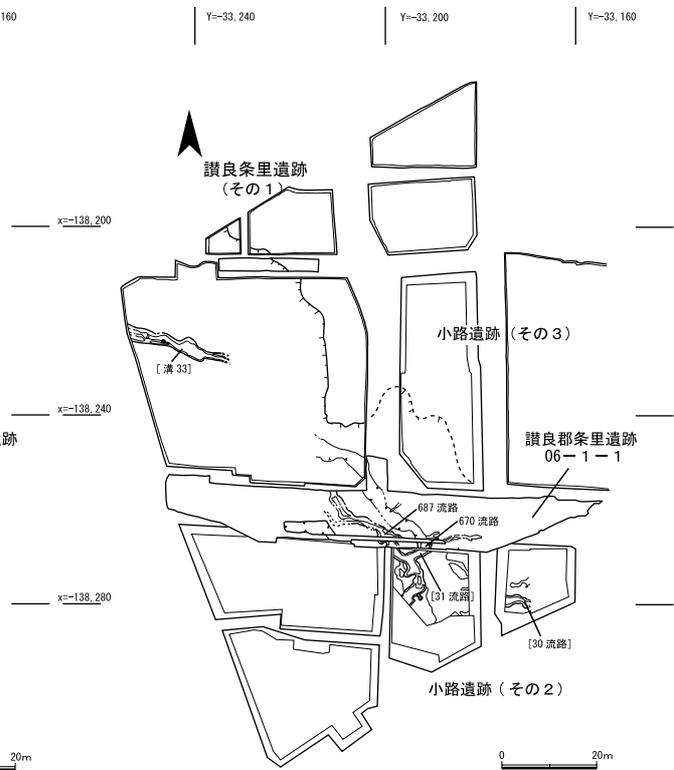
第2-2a層下面



第4-1a層下面



第4-2a層上面



第4-2a層下面

図87 遺構変遷図 (1)

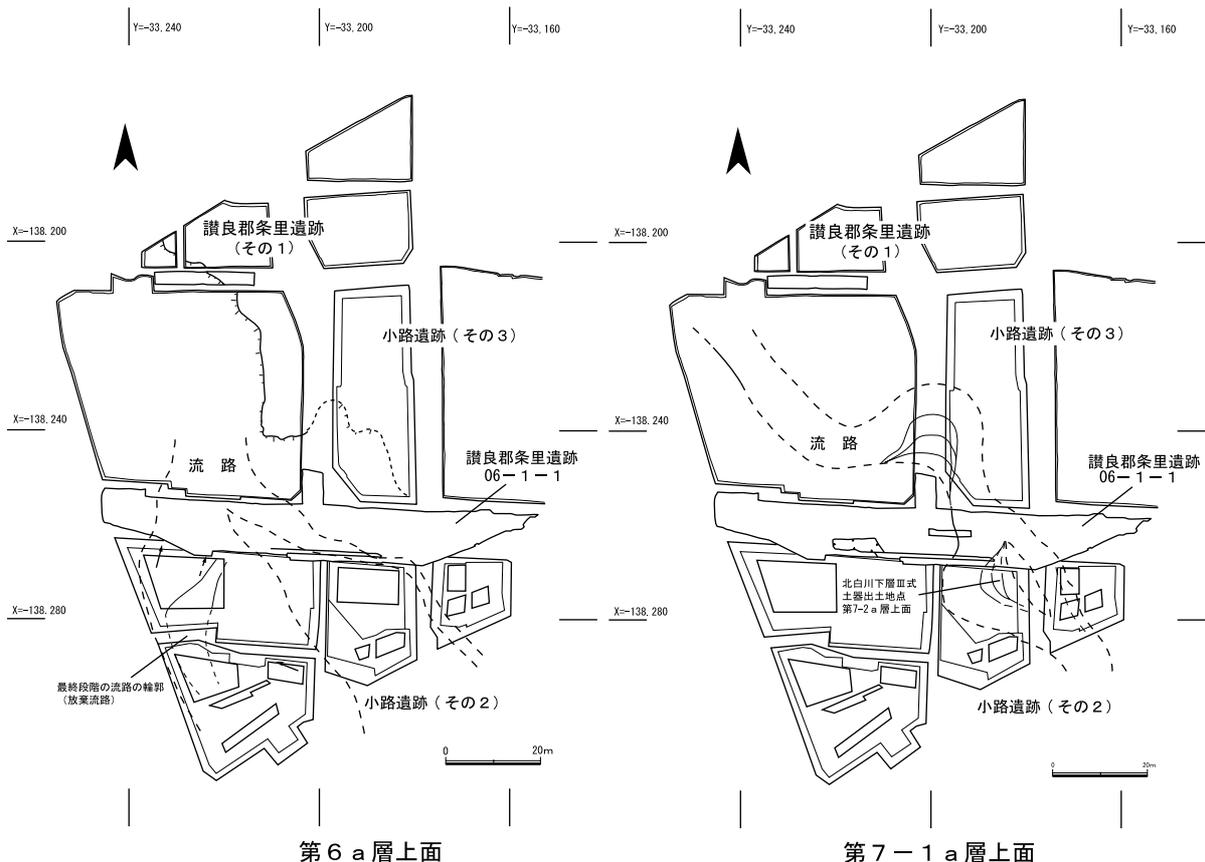


図88 遺構変遷図(2)

は砂混じりシルトが厚く堆積したことからみて、依然として周囲と比べてやや低くなっていた可能性が高い。第2-2 a層③の下面で検出された684溝は12~13世紀頃に掘削された水路と考えられるが、これは668流路と同じく南東-北西方向にのびており、地形に合わせて掘削されたと思われる。なお、現地表面に存在する「十八川」と呼ばれる用水路も、684溝と同じ方向にのびている。讚良郡条里遺跡(その2)で検出された「12(溝)」は「十八川」の前身の溝と思われるが、その最古段階のものは第2-2 a層段階(その2では「第2-3 a層」と呼称)に属する可能性がある。このことから、684溝は若干位置をずらして「12(溝)」に踏襲され、さらに「十八川」へと踏襲されたと想定できる。

(3) 自然科学分析

讚良郡条里遺跡06-1-1区における弥生時代後期・庄内式期後半~布留式期初頭・奈良時代後半~平安時代初頭の古植生や当時の木材利用状況に関する情報を得ることを目的として、各時期の流路充填堆積物について花粉・大型植物化石・木材化石(木製品含む)の産状を調査した。

3-1. 試料

調査地点の位置および調査地点における堆積層の累重状況を模式柱状図として図89に示す。

弥生時代後期の687流路は、下部が中粒砂~極粗粒砂からなる堆積物で充填され、上部は腐植に富むシルト混じり極細粒砂に級化する。分析試料は、流路縁において上部にあたる層準から採取した。

668流路(上)は砂質堆積物により充填されているが、堆積と侵食の繰り返しの状況から、上位より①

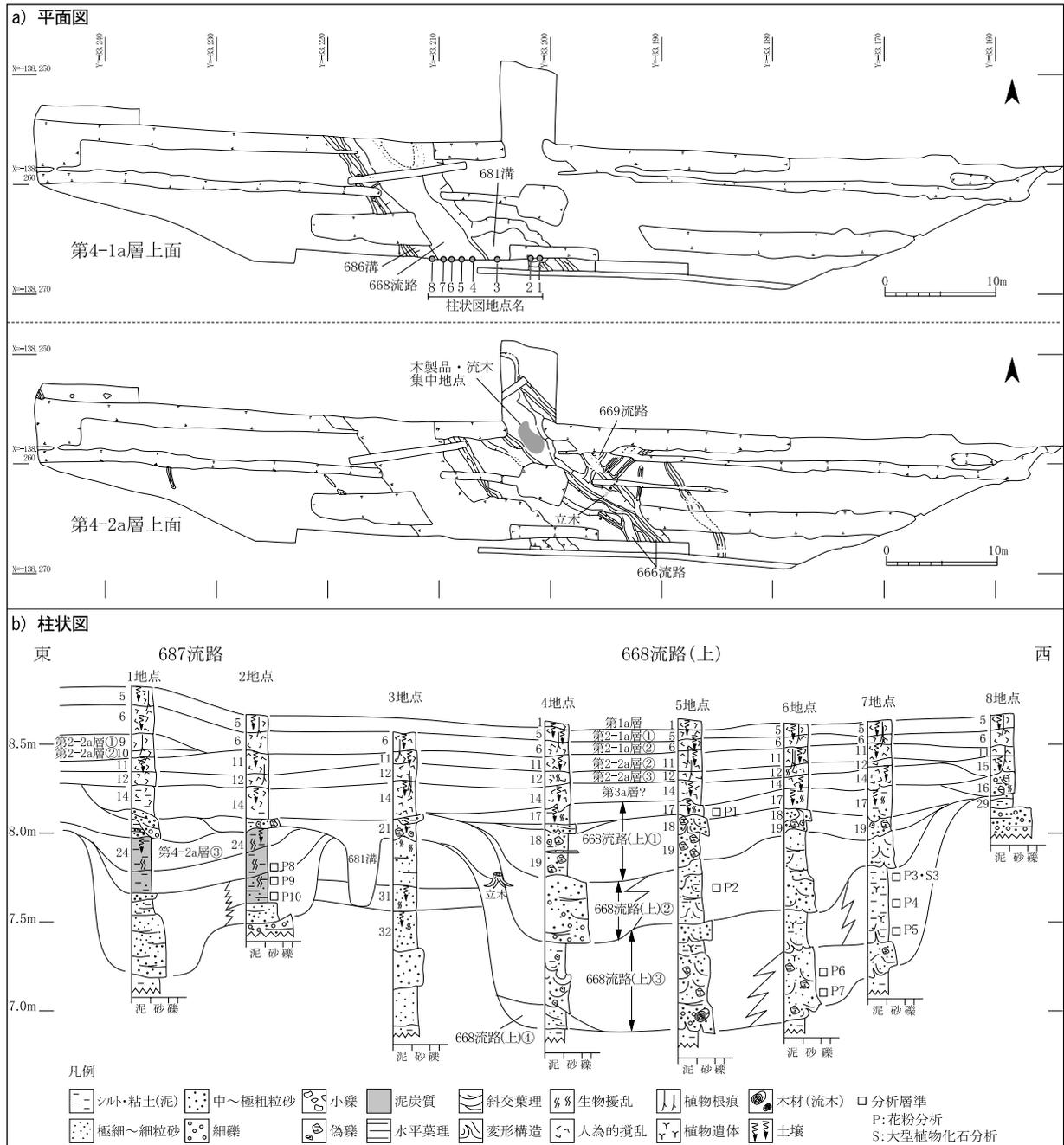


図89 調査地点の位置および分析試料採取位置

～④の4層準に細分されている。①層準は流路の充填がほぼ完了し、放棄流路となった時期に堆積した泥質堆積物からなる。②～③層準は流路としての機能を有していた時期に形成された砂質堆積物からなり、いずれの層準も上方細粒化する。また、これら④から①層準、さらに第3a層の堆積物には連続する変形構造が確認される。この変形構造は、地震動に起因する水底下堆積物の変形構造のユニットである含水塑性変形ユニット(Matsuda1999)に相当する。地震の発生層準は、変形構造上限の形成期が相当する(Matsuda1999)ことから、流路の充填がほぼ終了する第3a層形成期と推定される。668流路(上)充填堆積物の分析試料採取に際しては、変形の影響が小さい領域より行った。分析層準は、花粉分析が流路充填堆積物①～③層準の7層準(試料P1～7)、大型植物化石群集は③層準(試料S1)

について実施した。

木材化石同定は、668・666流路充填堆積物から出土した自然木と木製品、および流路河岸で検出された立木について実施した。

3 - 2. 分析方法

花粉分析 試料約10gについて、水酸化カリウム処理、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）分離、フッ化水素酸処理、アセトリシス（無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液）処理の順に物理・化学的処理を施して花粉・孢子化石を濃集する。分析後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍以上の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての分類群（分類群）について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

大型植物化石分析 試料100cc（176.8g）を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や葉を抽出する。現生標本および石川（1994）、中山他（2000）等との対照から、種実や葉の分類群と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。分析後の種実や葉は容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施す。

木材化石同定 剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から分類群を同定する。広葉樹については、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースも利用して同定を行う。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3 - 3. 各化石群集の特徴

花粉化石の産状と対比（表4・図90） 弥生時代後期の687流路縁堆積物の花粉化石群集は、層相から、集水域の広い範囲より運搬堆積した化石と判断される。ただし、上位にかけて腐植の集積や生物擾乱が顕著となることから、上位層準では調査地点近辺の局所的な植生も反映している可能性が高い。

花粉化石群集は下部で木本花粉の占める割合が高く、上部で草本花粉の占める割合が増加する。各種類では、木本花粉において温帯性針葉樹のスギ属、落葉広葉樹のコナラ亜属、常緑広葉樹のアカガシ亜属とシイノキ属が比較的多産することが特徴である。

奈良時代後半～平安時代初頭の668流路（上）①～③層準の花粉化石群集は、各層準の堆積環境をふまえると集水域の広い範囲より運搬・堆積した異地性の群集と判断される。花粉化石群集は草本花粉の占める割合が高く、木本花粉において温帯性針葉樹のスギ属、落葉広葉樹のコナラ亜属、常緑広葉樹のアカガシ亜属が比較的多産することが特徴である。弥生時代後期の層準で多産したシイノキ属は減少傾向を示す。また、層位的変化をみると、草本花粉のイネ科や木本花粉のコナラ亜属が増加傾向を示し、逆に常緑広葉樹のアカガシ亜属が減少傾向を示している。

讃良郡条里遺跡では、今回と同時期の花粉化石群集が沖積低地に位置する03-4・5調査地において確認されている（未公表）。沖積低地の調査地では、庄内式期から中世の層準にかけて、イネ科を主とする草本花粉の割合が増加傾向を示し、木本花粉において多産していたスギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科といった温帯性針葉樹や常緑広葉樹のアカガシ亜属が減少傾向を示し、マツ属複維管束亜属が増加傾向を示す変化が確認されている。扇状地に位置する今回の調査地の結果と比較すると、草本花粉の増加傾向は同調的であるが、各分類群の産状は多少異なり、木本花粉のコナラ亜属の産出率が低地の調査地では低く、また、低地で確認されているマツ属の増加傾向は扇状地の調査地では顕著でない。このような扇状地と沖積低地の調査地における花粉化石群集の差異については、花粉化石群集の形成過程（タフォノミー）の違いが関係しており、植生領域に近い扇状地の花粉化石群集は低地のそれに比較して、局地的な植生を反映しているものと考えられる。

大型植物化石 大型植物化石分析結果を表5、産出した大型植物化石の形態学的特徴を表6に示す。奈良時代後半～平安時代初頭の668流路（上）の流路縁堆積物である③層準から産出した大型植物化石群集は、草本植物の分類群を主体とすることが特徴である。木本

表4 花粉分析結果

種 類	上段: 遺構名 下段: 試料番号									
	668流路							687流路		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉										
マキ属	2	-	1	-	1	1	1	1	13	6
モミ属	14	10	11	14	16	19	15	27	14	19
ツガ属	16	3	10	13	11	11	9	16	9	25
マツ属単維管束亜属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	17	14	5	7	7	10	3	5	4	2
マツ属(亜属不明)	10	4	12	5	12	22	14	43	9	16
コウヤマキ属	6	9	10	16	15	15	12	19	16	21
スギ属	29	50	63	52	45	34	54	96	82	44
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	19	5	9	14	9	15	9	40	32	25
ヤナギ属	-	-	-	-	1	-	-	7	2	4
ヤマモモ属	1	2	1	3	1	5	3	3	1	2
サワグルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
クルミ属	-	-	-	1	-	1	1	-	1	-
クマシデ属-アサダ属	3	4	7	4	3	5	10	6	4	3
ハシバミ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カバノキ属	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
ハンノキ属	-	-	-	1	-	-	-	3	2	1
ブナ属	1	2	2	2	1	1	1	1	2	-
コナラ属コナラ亜属	40	72	61	42	57	31	23	68	85	82
コナラ属アカガシ亜属	40	39	34	34	57	42	71	109	60	76
クリ属	2	1	1	5	4	4	10	2	-	1
シイノキ属	4	3	6	7	5	5	15	44	30	49
ニレ属-ケヤキ属	3	2	1	1	3	1	2	3	4	4
エノキ属-ムクノキ属	1	4	3	1	1	-	-	6	3	2
ヤドリギ属	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
シキミ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
センダン属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
シラキ属	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-
ウルシ属	-	1	-	-	-	-	-	2	7	2
モチノキ属	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-
カエデ属	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
トチノキ属	-	1	-	-	-	-	1	3	1	-
ブドウ属	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-
ツタ属	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-
ノブドウ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ツツジ科	-	1	-	-	2	-	-	1	-	-
ハイノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-
テイカカズラ属	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-
スイカズラ属	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
草本花粉										
ガマ属	-	-	1	-	-	-	1	1	1	3
ミクリ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	-	-	-	1	-	-	1	2	-	1
オモダカ属	1	2	3	1	1	-	1	3	-	-
イネ科	246	229	233	214	121	100	214	280	61	95
カヤツグサ科	27	31	20	18	22	23	48	86	23	22
ホシクサ属	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-
イボクサ属	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-
ミズアオイ属	4	1	3	1	-	-	-	2	-	-
クワ科	1	1	1	2	-	2	-	-	-	-
ギシギシ属	1	-	2	1	1	1	1	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	4	7	5	1	2	2	4	1	1	-
タデ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ソバ属	-	5	4	2	-	-	-	-	-	-
アカザ科	-	4	11	9	2	2	-	1	-	1
ナデシコ科	1	11	3	13	-	1	-	-	-	-
キンボウゲ科	-	-	-	1	3	1	1	-	3	2
アブラナ科	4	-	3	2	1	1	1	-	-	-
バラ科	-	1	4	11	8	-	-	-	-	-
マメ科	-	1	4	1	-	1	-	6	9	-
ツリフネソウ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キカシグサ属	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-
アリトウグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
セリ科	1	9	8	10	10	21	3	4	2	7
ネナシカズラ属	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
シソ科	-	-	2	-	-	-	-	-	1	1
ゴキツル属	-	3	-	-	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	17	18	49	36	15	23	18	64	22	46
オナモミ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キク亜科	2	1	1	1	4	3	2	7	7	6
タンポポグサ科	1	5	2	-	1	2	-	3	5	1
不明花粉	8	15	13	20	33	12	23	25	27	25
シダ類胞子										
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	2	-	1	1	-	-	-
ゼンマイ属	-	2	-	5	5	8	4	-	-	-
イノモトソウ属	-	-	-	1	-	7	9	-	-	-
デンシソウ属近似種	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サンショウモ	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミズニラ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
他のシダ類胞子	24	38	21	45	126	158	85	173	119	347
合 計										
木本花粉	209	229	243	226	257	226	261	509	387	387
草本花粉	315	330	362	326	193	184	296	462	135	186
不明花粉	8	15	13	20	33	12	23	25	27	25
シダ類胞子	25	40	21	53	131	176	99	173	119	347
総計(不明を除く)	549	599	626	605	581	586	656	1144	641	920

ではマツ属複雑管束亜属の葉の破片が産出するだけである。草本の分類群は、イネ、イネ科、カヤツリグサ科、イボクサ、ギシギシ属、サナエタデ近似種、イヌタデ近似種、ヤナギタデ近似種、ソバ、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属、カタバミ属、チドメグサ属、イヌコウジュ属、ナス科、タカサブロウの17分類群が産出した。明るく開けた場所に草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種を含む分類群が多く、水湿地生の分類群を伴っている。また、栽培種のイネの穎7個、ソバ1個と、栽培種の可能性が高いナス科1個が含まれることも特徴である。

以上の大型植物化石群集は、層相から、集水域より水流によって運搬・堆積した異地性の群集と判断される。種実や葉などの大型植物化石群集の水流による淘汰の過程は、堆積物のシルト・砂・礫の量比の違いが影響し（黒松・粉川1986）、同一単層内でも粒度の微妙な違いによって含まれる植物の形状や大きさが異なることが確認されている（百原・吉川1997）。また、洪水流堆積物中の大型植物化石には、その大きさなどの形態の違いからベッドロードとして堆積するものと、浮遊沈降して堆積するものが存在することも指摘されている（中嶋ほか2004）。今回の大型植物化石群集は、層相からベッドロードとして堆積したものと判断される。大型化石群集で木本類が少なかったのは、先述の花粉化石群集においてアカガシ亜属やコナラ亜属などの木本類の産状が目立つこと、コナラ亜属やアカガシ亜属の堅果類が今回産出した草本類と大きさや浮力などが異なることなどから、水理的淘汰が関係しているものと判断される。

木材化石 流木および木製品の樹種同定結果を表7、同定された分類群の木材組織の解剖学的特徴を表8に示す。

奈良時代後半～平安時代初頭の668流路（上）河岸の立木はバラ属、流路充填堆積物から出土した木製品はヒノキとエノキ属に同定された。

庄内式期後半～布留式期初頭の666流路充填堆積物から産出した流木は、いずれも小径の枝ないし幹材

表5 大型植物遺体分析結果

分類群 和名	学名	部位	状態	668流路 (上)③ 試料S1	備考
木本					
マツ属複雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	葉	破片	3	(先端部)
草本					
イネ	<i>Oryza sativa</i> L.	穎	破片	7	栽培種 1個炭化
イネ科	Gramineae	果実	完形	26	
カヤツリグサ科	Cyperaceae	果実	完形	5	
イボクサ	<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	種子	完形	5	
ギシギシ属	<i>Rumex</i>	果実	完形	5	
サナエタデ近似種	<i>Polygonum</i> cf. <i>lapathifolium</i> L.	果実	破片	1	
イヌタデ近似種	<i>Polygonum</i> cf. <i>longisetum</i> De Bruyn	果実	完形	48	
ヤナギタデ近似種	<i>Polygonum</i> cf. <i>hydropiper</i> L.	果実	完形	4	
ソバ	<i>Fagopyrum esculentum</i> Moench	果実	破片	1	栽培種
アカザ科	Chenopodiaceae	種子	完形	5	
ナデシコ科	Caryophyllaceae	種子	完形	13	
キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属	<i>Potentilla</i> - <i>Duchesnea</i> - <i>Fragaria</i>	核	完形	1	
カタバミ属	<i>Oxalis</i>	種子	完形	20	
チドメグサ属	<i>Hydrocotyle</i>	果実	完形	43	
イヌコウジュ属	<i>Mosla</i>	果実	完形	6	
ナス科	Solanaceae	種子	完形	2	1個大型(栽培種?)
タカサブロウ	<i>Eclipta prostrata</i> (L.) L.	果実	完形	7	
不明	unknown	種実	—	10	

注)試料1は土壌100cc(176.8g)に含まれる葉や種実の産出数を示す

であり、広葉樹のヤナギ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・ヤマグワ・クリ・バラ属・スイカズラ属が確認された。また、流路河岸で検出された立木はヤマグワであった。これらの分類群のうち、アカガシ亜属は暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素である。クリ・クヌギ節・コナラ節は二次林や河川攪乱の影響を受ける領域において河畔林を構成する落葉高木である。ヤナギ属に含まれる種は落葉低木から高木まであり、河畔から山地・丘陵まで様々な環境に生育する種を含むが、流路充填堆積物から出土していることを考慮すれば、川辺林を構成する分類群に由来すると考えられる。ヤマグワ・バラ属・スイカズラ属は、林縁部等によく見られる分類群である。このように流木の組成は、暖温帯における二次林や河畔林ないし林縁を構成する要素を主体する。また、666流路からは樹種を特定できない広葉樹の根材が産出したが、これは流路沿いに生育していたものが流路の侵食により運搬堆積したものである可能性が高い。

一方、庄内式期後半～布留式期初頭の666流路から出土した板材、板状木製品、広鋏未製品の木製品は、ヒノキ・エノキ属・スダジイ・アカガシ亜属が利用されていることが確認された。これらの樹種は、流木で確認されている樹種とは異なるものが多い。

表6 大型植物化石の形態学的特徴記載

<p>・マツ属複雑管束亜属(<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>) マツ科 針葉の破片が検出された。灰褐色、破片は長さ6mm、径0.6mm程度の針形で2葉性。横断面は半円形で、中心部に2つの維管束がある。1個体の横断面の組織観察を実施した結果、7-10個程度の樹脂道が下表皮に接するアカマツ(<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.)が確認された。</p> <p>・イネ(<i>Oryza sativa</i> L.) イネ科イネ属 穎(果)の破片が検出された。淡褐色、1個炭化しており黒色。完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ1-1.5mm程度のやや偏平な長楕円形。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。破片は長さ4mm、幅2.5mm、厚さ0.5mm程度。果皮表面には顆粒状突起が縦列する。</p> <p>・イネ科(Gramineae) 果実が確認された。灰褐色、長さ2.8mm、径1mm程度の半楕円体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には微細な縦長の網目模様配列がある。</p> <p>・カヤツリグサ科(Cyperaceae) 果実が検出された。灰褐色、長さ1.5mm、幅1mm程度のレンズ状倒卵体。頂部の柱頭部分は伸び、基部は切形。果皮表面には微細な網目模様がある。</p> <p>・イボクサ(<i>Aneilema keisak</i> Hassk.) ツクサ科イボクサ属 種子が検出された。灰褐色、長さ1.5mm、径2mm程度の半楕長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面には円形の小孔が散在する。</p> <p>・ギンギン属(<i>Rumex</i>) タデ科 果実が検出された。暗灰褐色、長さ2mm、径1.5mm程度の三稜状倒卵体。三稜は鋭く明瞭で、両端は急に尖る。果皮表面はやや平滑。果実周囲には、果実を取り巻く内花被片が発達する。花被は灰褐色、径2.5mm程度の心円体で粗い網目模様をなし、縁には歯牙がある。中肋は瘤状に膨れる。</p> <p>・サナエタデ近似種(<i>Polygonum</i> cf. <i>lapathifolium</i> L.) タデ科タデ属 果実が検出された。黒褐色、径1.8mm程度の偏平な円形。両面中央はやや凹む。頂部はやや尖り、2花柱を欠損する。基部にある灰褐色の萼と、基部から伸び、先が2つに分かれ反りかえる花被の脈を欠損する。果実表面は平滑で光沢がある。</p> <p>・イスタデ近似種(<i>Polygonum</i> cf. <i>longisetum</i> De Bruyn) タデ科タデ属 果実が検出された。黒褐色、長さ2.3mm、径1.5mm程度の丸みのある三稜状卵体で、基部に灰褐色の萼片がある。果皮表面はやや平滑で光沢がある。</p> <p>・ヤナギタデ近似種(<i>Polygonum</i> cf. <i>hydropiper</i> L.) タデ科タデ属 果実が検出された。黒褐色、長さ2.7mm、径1.6mm程度の広卵体で、背面正中線上に鈍稜がある。頂部は尖り、2花柱が残存する。果皮表面には明瞭な網目模様が発達する。</p> <p>・ソバ(<i>Fagopyrum esculentum</i> Moench) タデ科ソバ属 果実の破片が検出された。灰褐色、長さ4.8mm、径3mm程度の三稜状倒卵体。三稜と頂部は鋭く尖り、基部を欠損する。面の部分は凹む。果皮表面はやや平滑。</p> <p>・アカザ科(Chenopodiaceae) 種子が検出された。黒色、径1.4mm程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。</p> <p>・ナデシロ科(Caryophyllaceae) 種子が検出された。灰褐色、径1mm程度の腎状円形でやや偏平。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には瘤-針状突起が臍から同心円状に配列する。</p> <p>・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属(<i>Potentilla-Duchesnea-Fragaria</i>) バラ科 核(内果皮)が検出された。淡灰褐色、径0.9mm程度のやや偏平な腎形。内果皮は厚く硬く、表面は粗面で数個の隆条が斜上する。</p> <p>・カタバミ属(<i>Oxalis</i>) カタバミ科 種子が検出された。黒褐色、長さ1.5mm、幅1mm程度の偏平な倒卵形。基部は尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には4-7列の肋骨状横隆条が配列する。</p> <p>・チドメグサ属(<i>Hydrocotyle</i>) セリ科 果実が検出された。淡灰褐色、径1.2mm程度の半月形でやや偏平。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には1本の明瞭な円弧状の稜がある。</p> <p>・イヌウジュ属(<i>Mosla</i>) シン科 果実が検出された。灰褐色、径1.5mm程度の倒卵体。基部には臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。</p> <p>・ナス科(Solanaceae) 種子が検出された。淡灰褐色、歪な腎臓形で偏平。1個は長さ1.3mm、幅1.7mm程度。別の1個は破片で、大きさ2.5mm程度と大型であることから、栽培種に由来する可能性が高い。基部のくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星型網目模様配列が臍から同心円状に発達する。</p> <p>・タカサブロウ(<i>EcLipta prostrata</i> (L.) L.) キク科タカサブロウ属 果実が検出された。灰褐色、長さ2.8mm、径1.7mm程度のやや偏平な倒狭皮針体。両端は切形、表面はスポンジ状で、背腹両面には瘤状突起が分布する。縁には翼があり、水に浮きやすい。</p>
--

表7 樹種同定結果

遺構	時期	試料名	器種等	大きさ	樹種		備考
666流路	庄内式期後半～布留式期初頭	アゼ-1	流木		スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	
		アゼ-2	流木		バラ属	<i>Rosa</i>	
		アゼ-3	流木		バラ属	<i>Rosa</i>	
		アゼ-4	流木		スイカズラ属	<i>Lonicera</i>	
		アゼ-5	流木		広葉樹	broad-leaved tree	
		南アゼ-1	流木		バラ属	<i>Rosa</i>	
		南アゼ-2	流木		コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	
		南アゼ-3	流木		コナラ属コナラ亜属コナラ節	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>	
		南アゼ-4	流木		ヤナギ属	<i>Salix</i>	
		南アゼ-5	流木		コナラ属コナラ亜属クヌギ節	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>	
		木2	流木	6.6×5.5cm	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	芯持丸木
		木4	流木	8.2×6.4cm	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	芯持丸木・端部炭化
		木5	流木	5.4×3.5cm	ヤマグワ	<i>Morus australis</i>	芯持丸木
		木7	流木	—	クリ	<i>Castanea crenata</i>	破片
		立木	立木	8.7×7.5cm	ヤマグワ	<i>Morus australis</i>	芯持丸木
		図81-116	(板状)	—	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	
		図80-112	板材	—	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	
		図80-113	?	—	エノキ属	<i>Celtis</i>	
図81-115	板状木製品	—	スタジイ	<i>Castanopsis cuspidata</i> var. <i>sieboldii</i>			
図81-114	広銀未製品	—	コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>			
668流路(上)	奈良時代～平安時代初頭	立木	立木	—	バラ属	<i>Rosa</i>	
		木製品	—	—	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i>	No.236は未掲載
		図15-38	棒状	—	エノキ属	<i>Celtis</i>	

表8 木材化石の解剖学的特徴の記載

<p>・ヒノキ (<i>Chamaecyparis obtusa</i> (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属 軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。</p> <p>・ヤナギ属 (<i>Salix</i>) ヤナギ科 試料は小径の枝等の破片と考えられる。観察した範囲では年輪界は含まれていない。散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して散在する。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。</p> <p>・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Cerris</i>) ブナ科 環孔材で、孔圏部はやや急激～緩やかに管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。</p> <p>・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i> sect. <i>Prinus</i>) ブナ科 環孔材で、孔圏部はやや急激～緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。</p> <p>・コナラ属アカガシ亜属 (<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>) ブナ科 放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと同複合放射組織とがある。</p> <p>・クリ (<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属 環孔材で、孔圏部はやや急激～緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。</p> <p>・スタジイ (<i>Castanopsis cuspidata</i> var. <i>sieboldii</i> (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属 環孔性放射孔材で、道管は1-2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。</p> <p>・エノキ属 (<i>Celtis</i>) ニレ科 環孔材で孔圏部は2-4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、塊状にて複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-10細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。</p> <p>・ヤマグワ (<i>Morus australis</i> Poiret) クワ科クワ属 環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では2-4個が塊状または接線方向に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。</p> <p>・バラ属 (<i>Rosa</i>) バラ科 いずれも2-4年生の若年部分で、髓の一部が認められる。環孔材で、孔圏部は2-4列、孔圏外でやや急激に径を減じた後、ほぼ単独で散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列で1-10細胞高前後のもの、10細胞幅以上、60-100細胞高以上の大型のものがある。</p> <p>・スイカズラ属 (<i>Lonicera</i>) スイカズラ科 散孔材で、小径の道管が単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高で、直立細胞で構成される単列部が上下に長く伸びる。</p> <p>・広葉樹 木の中心部を含む小径の木片。中心部に髄が認められないことから根材である。散孔材で、道管はほぼ単独(稀に2個が複合)で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で10細胞高前後のもの、10細胞幅以上、100細胞高以上の大型のものがある。大型の放射組織を有する等の特徴から、つる植物の根材の可能性はあるが、根材の組織配列に関する資料が少なく、同定には至らなかった。</p>

3-4. 各時期の植物相と植生について

弥生時代後期 弥生時代後期前半に形成された687流路は、弥生時代後期後半～庄内式期前半頃には放棄流路へと変化する。この堆積環境の変化と先述した流路縁堆積物の花粉化石群集の層位的産状は同調的である。すなわち、流路の減衰に伴い、植生遷移の途中相をなす落葉広葉樹のコナラ亜属が減少し、より安定した領域に生育する常緑広葉樹のアカガシ亜属が増加しており、流路沿いの植生に対する河川氾濫などの植生攪乱の影響が小さくなったことが推定される。また、堆積環境の静穏化に伴い、草本類

も分布を拡げた可能性が高い。

当時の植物相としては、アカガシ亜属・シノキ属・ツバキ属・ヤマモモ属といった暖温帯性常緑広葉樹のほか、クマシデ属－アサダ属・クルミ属・センダン属・アカメガシワ属・ウルシ属・トチノキ属・カエデ属などの落葉広葉樹の種類が認められる。これら落葉広葉樹の多くは河畔林の構成要素でもあり、当時も流路沿いの河川攪乱領域を中心に分布していたものと思われる。

扇状地に位置する調査地では隣接する03－1 調査地において、縄文時代中期の流路縁堆積物の花粉化石群集が確認されている。今回の弥生時代の花粉化石群集と縄文時代中期の花粉化石群集と比較すると、明らかに常緑広葉樹のアカガシ亜属が減少していることが確認される。この変化は、縄文時代中期から弥生時代後期にかけての地形発達過程に起因する変化の可能性もあるが、発掘調査成果をふまえると、人為的攪乱に起因する変化の可能性が高い。また、本時期の花粉化石群集では、常緑広葉樹のシノキ属が比較的多産することも特徴であり、虫媒性であることから、当概期の流路沿いにおいて分布を拡げたことが推定される。

奈良時代後半～平安時代初頭 弥生時代後期後半に放棄流路となった流路近辺では、庄内式期後半～布留式期初頭に再び開析流路（668流路〔上〕・666流路）が形成される。666流路は砂礫で充填されている。本時期の花粉化石群集は確認されていないが、堆積環境から流路沿いの植生は河川攪乱の影響を受けていたことが推定される。なお、666流路河岸で検出された立木の樹種はヤマグワであった。ヤマグワは河畔林の構成要素でもあり、河川攪乱の影響が小さくなった時期には流路沿いに樹木が生育可能な状況にあったことを示唆する。

その後、流路は充填され、布留式期以降に再開析され、奈良時代後半～平安時代初頭に再び充填される。この開析流路の形成によって河岸は離水し、安定した植生領域に変化したことが推定される。しかし、この時期の668流路（上）流路充填堆積物の植物化石群集をみると、安定した領域に分布するアカガシ亜属などの常緑広葉樹が減少し、二次林に普通なコナラ亜属などの落葉広葉樹の種類が増加している。このように地形変化と植物化石群集の層位変化は、全く逆の傾向を示していることになり、その原因として、植生に対する人為的攪乱の影響が継続して及んでいたことが考えられる。

奈良時代後半～平安時代初頭の668流路（上）の埋積期を通じて、流路近辺は草地の卓越する領域に変化していたと推定される。産出する草本由来の分類群構成は多様であり、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タデ属、アカザ科、ナデシコ科など比較的多産する種類のほか、ガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、ヤナギタデ近似種、タカサブロウ、サンショウモ、ミズニラ属といった水生植物の分類群が植生を構成する要素であったことが推定される。これらの草本類は当時の地形や水文条件などに応じて分布していたことが考えられ、水生植物の分類群は流路内やその集水域に分布していたことが推定される。また、草本類には栽培種であるイネ・ソバ、栽培種の可能性が高いナス科が含まれる。流路充填堆積物からの産出であること、ソバ属花粉化石は耕作地から離れた場所において急激に産出率を減じることからみて、これら栽培種が流路周辺において栽培されていた可能性が充分考えられる。産出した水生植物の分類群は、水田雑草として、水田内や付帯施設（用水路や溜め池など）に普通にみられる分類群でもある。これらの栽培種や水生植物の産状については、発掘調査成果にもとづく奈良時代後半～平安時代初頭の流路沿いの土地利用状況をふまえると、耕作地に伴うものである可能性が充分考えられる。

一方、流路沿いおよび山地斜面には林分が存在した。産出した分類群のうち、針葉樹のマツ属や広葉

樹のヤナギ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・ヤマグワ・クリ・バラ属・スイカズラ属などは、流路沿いに発達する林やそれを取り巻く林縁に発達する低木層の構成要素でもあり、当時も流路沿いの植生を構成する要素であったと推定される。花粉化石で多産した分類群のうち、落葉広葉樹のコナラ亜属は先述した沖積低地の花粉化石群集との比較から、流路沿いに分布していた可能性が高い分類群である。コナラ亜属には、クヌギ節に含まれるクヌギ、ナラガシワ、コナラ、アベマキなどが含まれるが、花粉化石の形態から種を特定することはできない。少なくとも木材化石においてコナラ節とクヌギ節が確認されていることから、複数の樹種が生育していたことは確かである。一方、アカガシ亜属は流路沿いにも分布していた可能性があるが、主に山地斜面などの土地的に安定した領域において林分を形成する要素であった可能性が高い。なお、スギ属は大型植物遺体では全く産出していない。これは各化石群集におけるタフォノミーの違いに起因する可能性もあるが、スギ属花粉が広域飛来花粉であることをふまえると、流路より離れた場所にスギ属が分布していた可能性も考えられる。

今回の調査区の北側に隣接する讚良郡条里遺跡（その1）調査地では、668流路（上）に連続する流路内において多量の木材を利用した堰が確認されている（長戸編2004）。堰1と堰2を通じて確認されている樹種は、針葉樹のスギ・マツ科・イヌガヤ・ヒノキ、常緑広葉樹のアカガシ亜属・サカキ・クスノキ・ヒイラギ、落葉広葉樹のクヌギ・クリ・クルミ属・ケヤキ・コナラ亜属・サクラ属・ハシバミ属・ハンノキ・ホホノキ・ムクノキ・ヤナギ属・ヤマザクラ・ヤマグワと多様であり、落葉広葉樹が多い。このような樹種構成は今回の結果から推定される植生とも同調的である。

以上のことから、奈良時代後半～平安時代初頭の周辺植生は、人為的攪乱の影響を受け、樹種構成の多様な落葉広葉樹を多くまじえる二次林であったことが推定される。なお、弥生時代後期に分布を挙げた常緑広葉樹のシイノキ属が減少しているが、庄内式期後半～布留式期初頭の666流路出土木製品にシイノキ属の1種であるスダジイが利用されていることをふまえると、人間活動と関連した植生変化の可能性がある。

木材利用状況について 庄内式期後半～布留式期初頭の666流路から出土した木製品は、ヒノキ・エノキ属・スダジイに同定された。一方、奈良時代後半～平安時代初頭の668流路から出土した用途不明の木製品は、ヒノキとエノキ属であった。

これら木製品のうち、板材（図80-112）に認められたヒノキは、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、板の加工には適材である。用途は不明であるが、板状を呈する図81-116もヒノキであり、加工性の高いヒノキ材を板に利用していたことが推定される。また、図81-115は、112・119のような長方形の板とは形状が異なる。樹種も広葉樹のスダジイであり、木材選択も異なる。スダジイはやや重硬な部類に入り、板状への加工はやや困難であることから、ヒノキとは異なる目的・形状の製品であることが推定される。広鋏未製品（図81-114）に認められたアカガシ亜属は、重硬で強度が高い材質を有する。これまでの調査でも同様の事例が確認されており、鋏・鋤類に多用されていたことが推定される。また、花粉分析で比較的多く認められ、今回の流木中にも確認できることから、アカガシ亜属の木材が遺跡周辺で入手可能であったと考えられる。

4. まとめ

06-1-1区の成果をふまえて、小路遺跡（その2・3）・讚良郡条里遺跡（その1～3）・03-1における土地利用変遷をまとめたのが、図91である。ここでは、第4-2a層段階・第4-1a層段階・

第3 a 層段階について説明したい。

第4 - 2 a 層段階は弥生時代後期～古墳時代初頭にあたる（図91左下）。弥生時代後期前半には687・670流路が形成された。これらの流路はすぐに放棄流路化したが、庄内式期にはほぼ同じ位置に再び流路が形成された。668流路（下）左岸側には北西方向に直線的にのびる灌漑水路（讚良郡条里遺跡03-1の489溝）が存在していたが、これは668流路（下）から取水された可能性が高い。この水路の存在からみて、668流路（下）よりも西側には耕作地が存在していたと考えられる。一方、北東部の緩傾斜地には前方後方形周溝墓や方形周溝墓が築かれたことが判明している。また、讚良郡条里遺跡03-1では弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落跡が検出されている。03-1の範囲で検出された遺構は前方後方形周溝墓よりも古いが、この集落の中心は調査範囲外にあると考えられ、集落中心部では庄内式新段階～布留式古段階に属する遺構も存在する可能性が高い。

第4 - 1 a 層段階は古墳時代中期から平安時代初頭にあたるが、06-1-1区周辺では主に奈良時代後半～平安時代初頭の遺構・遺物が検出された（図91右上）。まず、668流路（上）は前段階から継続して存在する流路である。この流路内には井堰が築かれており、流路から取水して周囲の耕作地を灌漑していたと思われる。今回検出された686溝も、この流路から取水した水を耕作地へ導くための水路であった可能性が高い。また、流路内からは、人面墨書土器を含む土師器・須恵器、人形・絵馬などの木製品、馬骨などがまとまって出土した。なお、北東の段丘上に立地する高宮遺跡で検出された大形掘立柱建物群や、その北に位置する高宮廢寺もこの段階に属しており、それらも含めて当時の土地利用の実態や景観変遷を復原することが今後の課題である。

第3 a 層段階は平安時代にあたり、讚良郡条里遺跡（その3）・03-1において9世紀後半～10世紀前半の屋敷地の存在が明らかにされている（図91左上）。この屋敷地は668流路から供給された堆積物によって形成された微高地に立地しているが、同時に条里型地割にも規制されていた可能性が高い。この時期の06-1-1区では、668流路が放棄流路化し、泥で埋積されて窪地となっていたと考えられる。ただし、その堆積物は擾乱を受けており、放棄流路周辺で人間活動がおこなわれた可能性が高い。

今回、花粉分析・大型植物遺体分析・樹種同定を実施したことにより、弥生時代後期と奈良時代後半～平安時代初頭における周辺植生の様子が明らかになった。讚良郡条里遺跡03-1では、旧石器時代から縄文時代後期までの植生変遷の様子が明らかにされていたが、それ以降の状況については良好なデータが得られていなかった。今回のデータはそれを補うものであり、人為的攪乱が激しくなった弥生時代以降の植生変遷を明らかにする上で重要な資料といえる。分析では、植生変化を流路変遷・河川活動や人為的攪乱との関連で解析をおこなった。今後は、西方の後背湿地に立地する讚良郡条里遺跡06-4・5で得られたデータと比較して、植生分布のあり方をより詳細に検討することが必要である。なお、奈良時代後半～平安時代初頭の層準からは、種実としてはイネ・ソバのほか、栽培種の可能性の高いナス科の種子が検出された。さらに、花粉でもソバ属の花粉が若干検出されている。これらの作物は、この調査区よりも上流の流路周辺で栽培されていたと思われる。

参考文献

一瀬和夫 2004 「高宮遺跡とその周辺の古墳時代以降の集落構造の変遷」『高宮遺跡―遺構編一』、(財)大阪府文化財センター調査報告書第115集, pp.143-148.

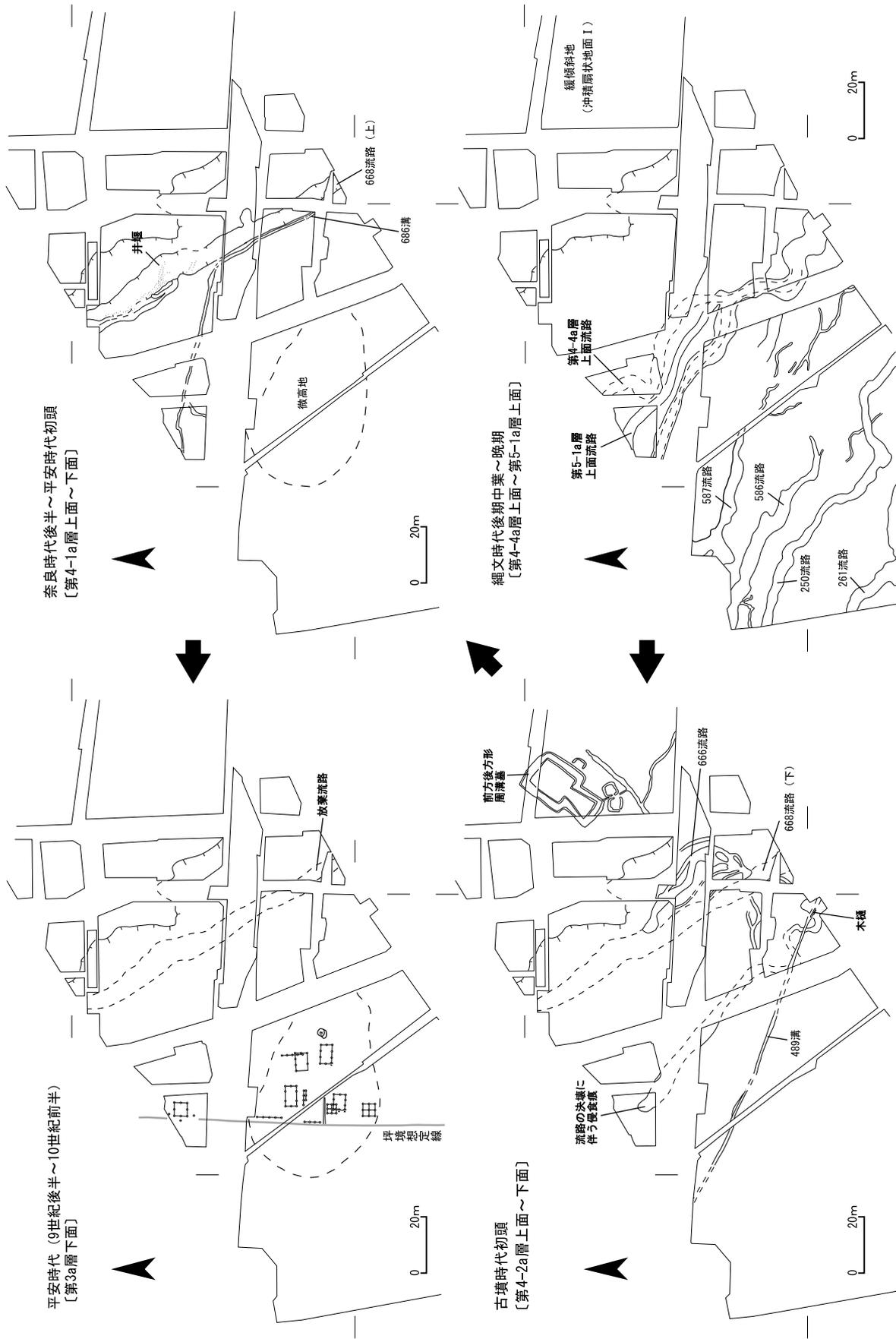


図91 畿良部条里遺跡・小路遺跡・阿阿遺跡変遷図

- 井上智博編 2003 『讚良郡条里遺跡（その2）』, (財)大阪府文化財センター調査報告書第98集, 39p.
 木下保明 2004 『小路遺跡（その3）』, (財)大阪府文化財センター調査報告書第113集, 38p.
 田中龍男・島田裕弘編 2004 『小路遺跡（その2）』, (財)大阪府文化財センター調査報告書第122集, 86p.
 長戸満男編 2004 『讚良郡条里遺跡（その1）』, (財)大阪府文化財センター調査報告書第109集, 62p.

引用文献（自然科学分析の項目分）

- 林 昭三 1991 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
 伊東 隆夫 1995 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
 伊東 隆夫 1996 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
 伊東 隆夫 1997 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
 伊東 隆夫 1998 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
 伊東 隆夫 1999 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
 石川茂雄 1994 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
 黒松康悦・粉川昭平 1986 亀井遺跡出土の大型植物遺体. 亀井（その2）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一本文編, 大阪府教育委員会・大阪文化財センター, 339-388.
 百原 新・吉川昌伸 2007 蛇行河川内での大型植物化石群の堆積過程. 植生史研究, 5, 1, 15-27.
 中嶋雅宏・中山勝博・百原 新・塚越 実 2004 中新統土岐口陶土層の堆積過程と産出する大型植物化石の水理的挙動—岐阜県多治見市大洞地区の例—. 地質学雑誌, 110 (4), 204-221.
 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
 Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編) 2006 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
 島地 謙・伊東 隆夫 1982 図説木材組織. 地球社, 176p.
 Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編) 1998 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
 Matsuda, J. -I. 2000 Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan. *Sedimentary Geology*, 135, 99-116.
 長戸満男編 2004 讚良郡条里遺跡（その1）, (財)大阪府文化財センター調査報告書第109集, p47

第7章 砂遺跡の調査（06-1）

1 調査の経緯と経過

砂遺跡06-1は、大阪府寝屋川市砂に所在する。調査地は、埋蔵文化財包蔵地として周知されている砂遺跡内にあり、当遺跡内を南北に走る大阪外環状線の第二京阪道路（大阪北道路）への取り付け・拡幅工事に伴い発掘調査が実施されたものである。発掘調査は、当センターが国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の依頼を受け、すでに発掘調査が終了し遺物整理事業として行われている第二京阪道路（大阪北道路）太秦遺跡他遺物整理事業として行った。この第二京阪道路（大阪北道路）太秦遺跡他遺物整理事業は、平成18年4月1日から平成19年3月31日の期間で、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所と受託契約を結んで実施したものである。現地における調査は、平成18年6月5日に人力掘削を開始し、平成18年8月9日に終了している。

2 調査方法

調査方法は、当センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】2003.8」に従って行っている。

3 遺跡の立地

砂遺跡は、現在も条里地割の景観をよく残していることから、古代河内国讃良郡に施工された条里型地割の復元可能な遺跡として周知されている讃良郡条里遺跡内に内包されるような形で存在する遺跡であり、またこれまでの調査成果から、縄文時代中期後半・後期後半の土器が出土する縄文時代の遺跡として知られている。地形的には、沖積扇状地に立地しており、現在見られる讃良川などの河川の前身となる旧流路により当遺跡を含め、周辺の地形は形作られている。

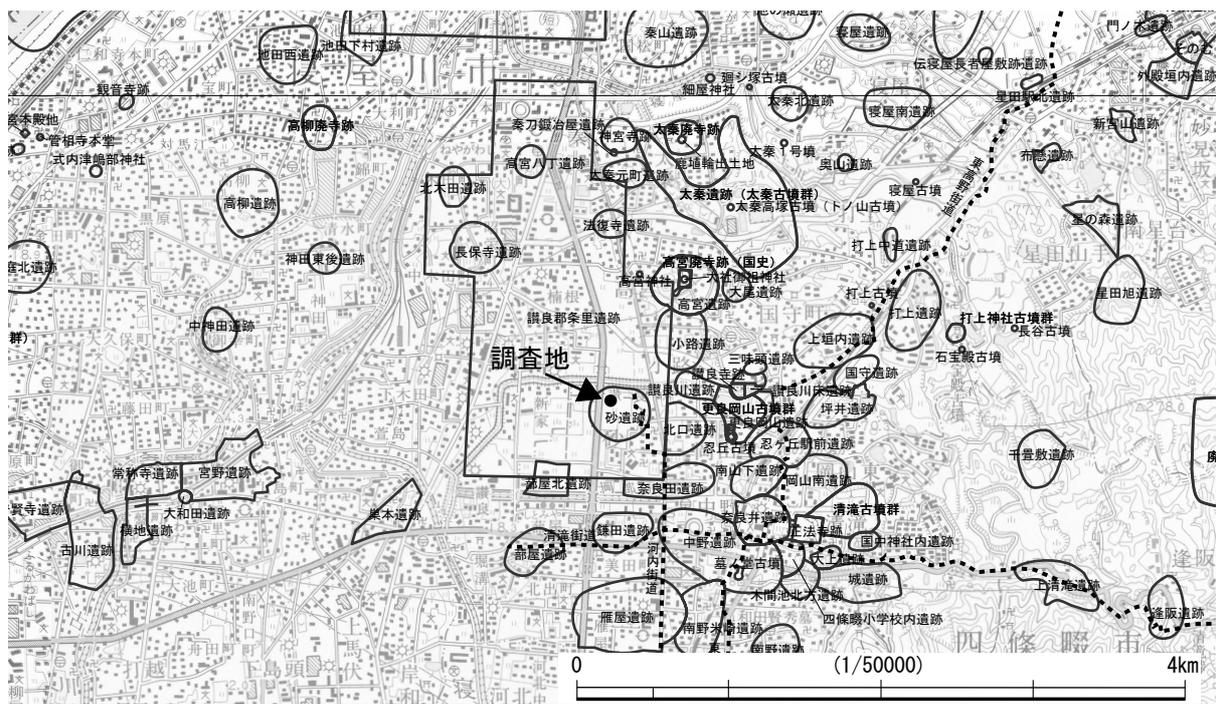


図92 調査地位置図

表9 調査区西壁地層断面模式図層名表

1		現耕土
2	2. 5GY8/1	灰白 中砂 細砂シルト混じり
3	7. 5Y6/2	灰オリーブ 中砂～細砂シルトやや混じる 細礫やや入る 上半Fe沈着
4	7. 5Y6/2	灰オリーブ 中砂～細砂シルトやや混じる 細礫やや入る 上半Fe沈着
5	2. 5GY6/1	オリーブ灰 中砂 細砂シルトやや入る
6	7. 5Y7/1	灰白 中砂～粗砂 下層のシルトブロック φ 2～3 cm入る
6		中砂～細砂シルト
7	5GY6/1	オリーブ灰 細砂シルト 中砂粒入る シルトブロック φ 1～2 cm均等に入る
8	5Y6/2	灰オリーブ 細砂シルト 中砂～粗砂粒 シルトブロック φ 1～2 cm均等に入る
9	2. 5Y5/2	暗灰黄 シルト 中砂～粗砂粒入る
10	10Y6/2	オリーブ灰 中砂混じり 細砂シルト シルトブロック入る
11	10Y5/2	オリーブ灰 中砂～極粗砂 細砂シルト ブロック土
12	2. 5Y5/2	暗灰黄 細砂シルト 中砂混じる
13	7. 5Y5/2	灰オリーブ 細砂シルト 中砂混じり シルトブロック入る
14	7. 5Y6/1	灰白 中砂～粗砂 ブロック土
15	5Y3/1	オリーブ黒 粗砂シルト
16	2. 5Y5/2	暗灰黄 細砂シルト 中砂混じる
17	7. 5Y6/2	灰オリーブ 中砂～細砂シルトやや混じる 細礫やや入る 上半Fe沈着
18	2. 5GY6/1	オリーブ灰 細砂 中砂 細砂 中砂～極粗砂
19	2. 5Y5/2	暗灰黄 細砂シルト
20	2. 5Y5/2	暗灰黄 細砂 中砂混じる
21	2. 5Y5/2	暗灰黄 細砂 中砂混じる
22	10YR5/1	褐灰 細砂シルト 中砂混じり
23	10YR6/1	褐灰 細砂
24	2. 5Y4/2	暗灰黄 シルト 中砂～粗砂粒入る 上層より中砂～粗砂粒多く入る やや暗色化強い
25	2. 5Y4/2	暗灰黄 中砂～粗砂 シルトブロック
26	2. 5Y3/2	黒褐 シルト 中砂粒若干入る (シルト均一質) 暗色化
27	2. 5Y5/4	黄褐 シルト 中砂粒若干入る
28	10YR3/3	暗褐 シルト 中砂粒若干入る
29	2. 5Y7/3	浅黄 下部 細砂～上部 中砂～粗砂 粗粒化 ラミナやや見える 根にFe沈着
30	10YR4/3	にぶい黄褐 シルト 中砂粒若干入る
31	2. 5Y7/1	灰白 中砂 ラミナ有り
32	10YR3/2	黒褐 細砂シルト 中砂～粗砂粒多く入る
33	10Y6/1	灰 細砂シルト 中砂～粗砂粒多く入る
34	2. 5Y5/1	黄灰 細砂シルト 中砂～粗砂粒多く入る
35	2. 5Y5/1	黄灰 中砂～細砂 極粗砂～粗砂
36	10GY6/1	緑灰 細砂 粗砂～極粗砂 細砂
37	10GY6/1	緑灰 細砂 粗砂～極粗砂 細砂
38	10GY6/1	緑灰 細砂 粗砂～極粗砂 細砂

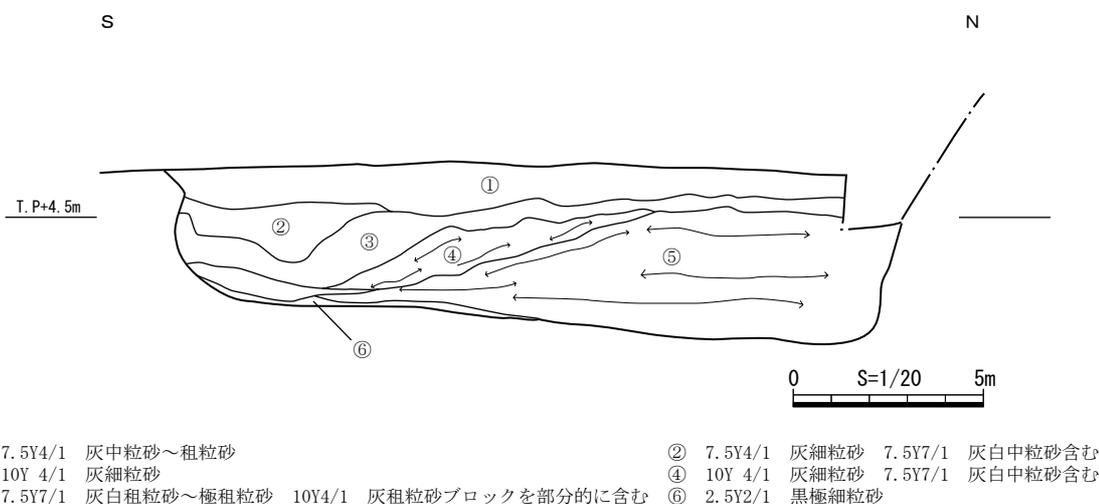


図93 1 流路断面図 (第2面)

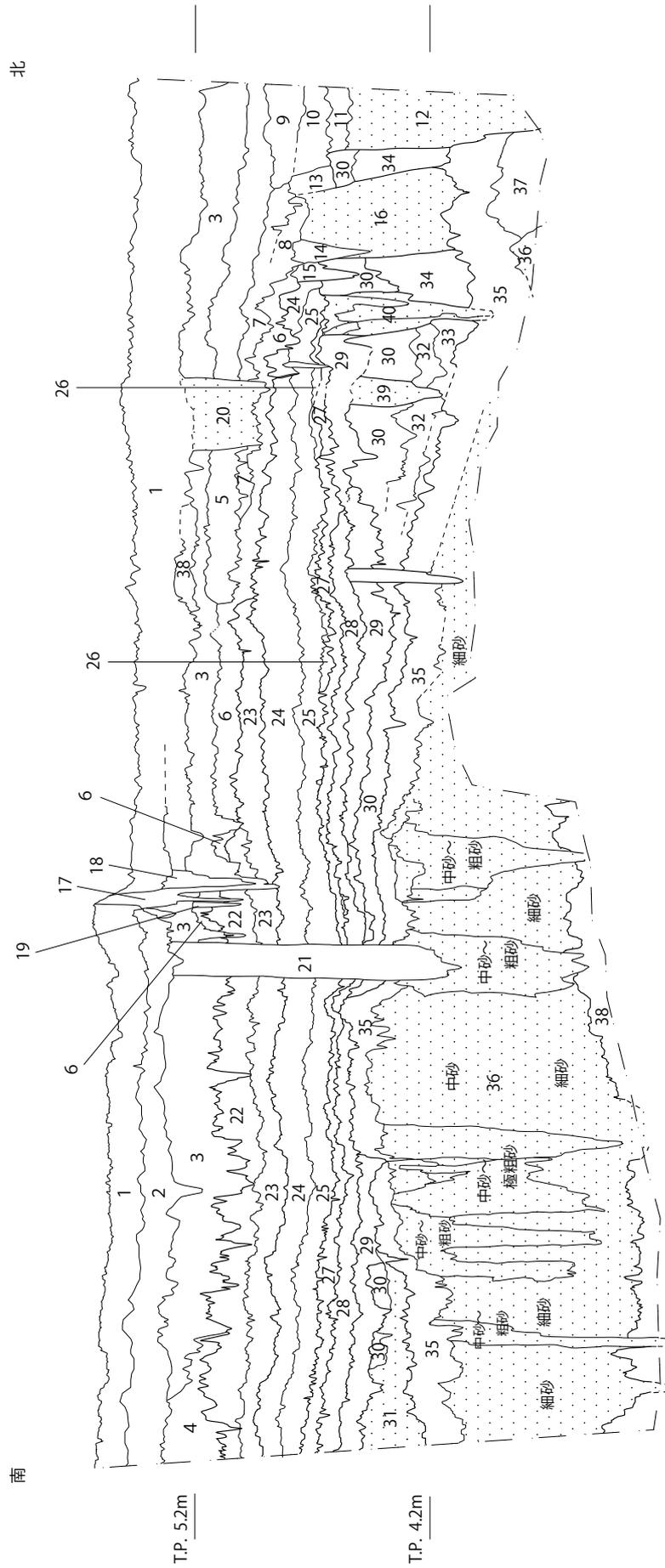


图94 調查区西壁地層断面模式图

4 調査成果

(1) 基本層序

調査においては、現耕作土及び、明らかに近世と考えられる1層を重機により掘削し、2層から人力により掘削し各層の上面で遺構検出を行っている。その為、本章では第2面より記述となっており現耕作土下で、計6面の遺構面を調査している。遺構面と層の関係は、それぞれ第1面が1層の上面、第2面が2層の上面としている。

1層は、大きく2層に分層できる。上層は灰オリーブ中砂から細砂シルト細礫を含む。下層は、オリーブ灰細砂シルトで中砂粒と直径約1～2cmのシルトブロックが均質に混じる。いずれも砂っぽい土質である。近世の作土である。層中からは、瓦器椀(図95-2)・青磁椀(図95-3)・須恵器 杯蓋(図95-4)など、耕作に伴い混入した遺物が出土している。

2層は調査区南半で2層に、北半では3層に分層できる。上層は灰オリーブ細砂シルトで中砂～粗砂粒と径約1～2cmのシルトブロックが均質に混じる。1層と同じく砂っぽい土質である。近世作土である。中層はやや色調が暗く暗灰黄シルト中砂～粗砂粒混じる。下層は暗灰黄シルト中砂～粗砂粒混じる。中層より中砂～粗砂粒を多く含み、やや暗色が強い。中・下層は中世作土と考えられる。

3層は、シルトブロックを含む中砂～粗砂の薄層で部分的にしか認められなかったが、奈良時代から古墳時代の遺物が出土している。

第4層は、黒灰シルトで中砂粒が若干混じる。第4面の流路から弥生時代後期の土器が出土していることから弥生時代後期を下限とする層準である。

5層は、黄褐シルトで中砂粒が若干混じる土壌層である。6層は、暗褐シルトで中砂粒が若干混じる土壌層である。7層は、にぶい黄褐シルトで中砂粒が若干混じる。層中から縄文時代晩期の土器片が出土している。8層は、黒褐細砂シルトで中砂～粗砂粒を多く含む土壌層である。

9層は、層上部が上層からの影響を受けてやや土壌化が見られるものの、全体にラミナの見られる細砂～中砂の自然堆積砂層である。層中からは、小片で磨耗しているが縄文時代中期から晩期の土器片が出土している。(図95-10・11・12・13)

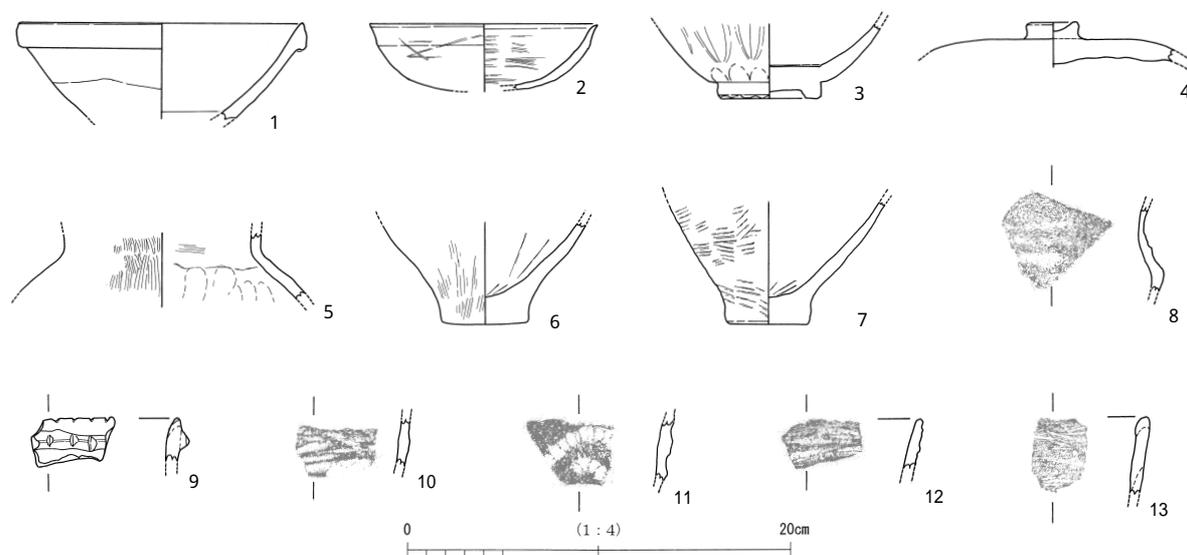


図95 出土遺物

(2) 遺構・遺物

第2面

第2面では、主に東西方向の耕作に伴う小溝と、調査区北端で1流路を検出している。

1流路は調査区端で検出しているため幅等の規模は不明であるが、深さは0.6～1mを測る。埋土は、水平方向のラミナと、それを削って堆積した斜め方向のラミナが見られる中砂から極粗砂である。埋土中からは、須恵器の甕底部片が1点出土しているのみである。流路は砂で埋没した後、周囲より低くなった部分にのみ盛土を行って平らな水田面を造っている。

また、耕作に伴う小溝内からは白磁椀(図95-1)が出土している。

第3面

第3面では、北東から南西へ延びる5流路とピット3基を検出している。

5流路は、検出延長約11.5m、幅約1.2m深さは約50cm前後を測る。溝底の高さは、北東端でT.P.約4.19m、南西端でT.P.約4.05mである。埋土の上部は褐灰細砂、下部には白色中砂～極粗砂が堆積している。上・下層ともラミナが明瞭に見られる。5流路の北肩からは弥生時代後期の甕底部片(図95-7)が1点出土している他、同じく甕底部片や長頸壺の頸部片が出土している。(図95-5・6)

ピットはいずれも直径約20cm前後の円形で、深さ8cm前後である。遺物は出土していない。

第4面

第4面では、10溝とピット3基を検出している。10溝は検出延長約10m、幅約55cm、深さは約80cmである。溝底の高さは、北東端でT.P.約4.42m、南西端でT.P.約4.58mを測る。埋土は、オリーブ黒細砂シルトで極細砂～中砂粒が多く混じる。遺物は出土していない。

ピットは、いずれも円形の掘方で直径20～30cm、深さは10cm前後を測る。埋土は単層で

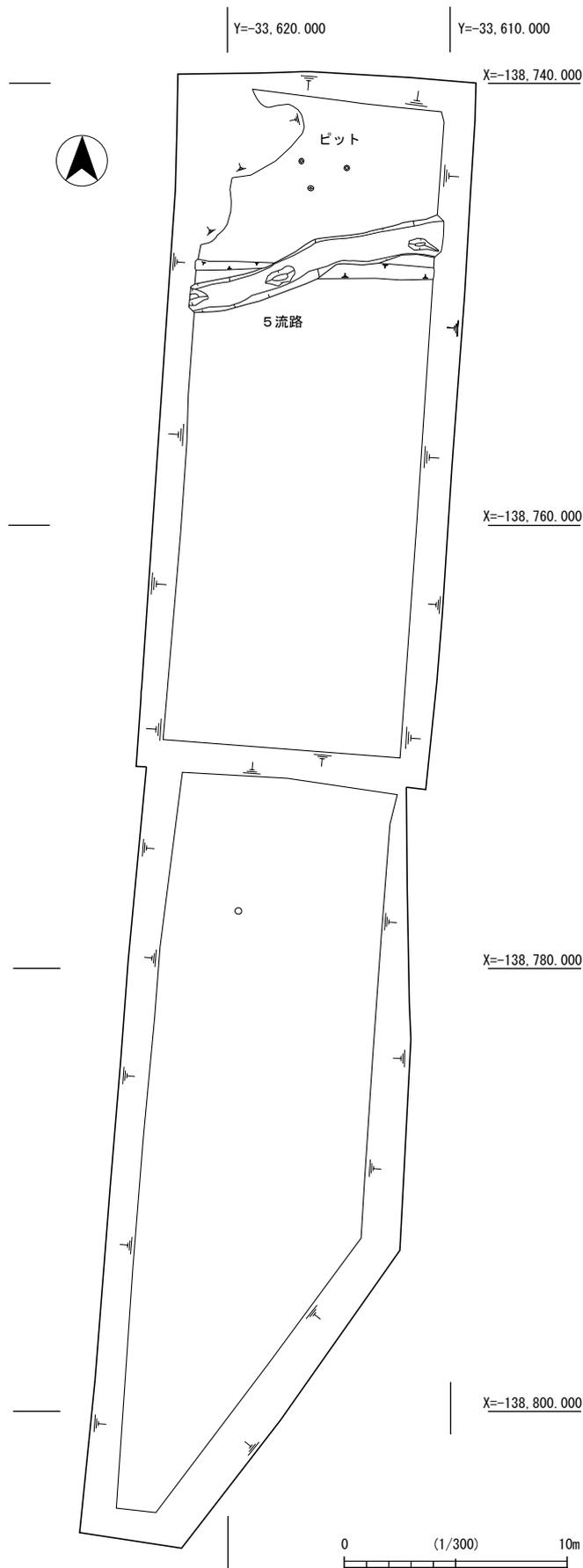
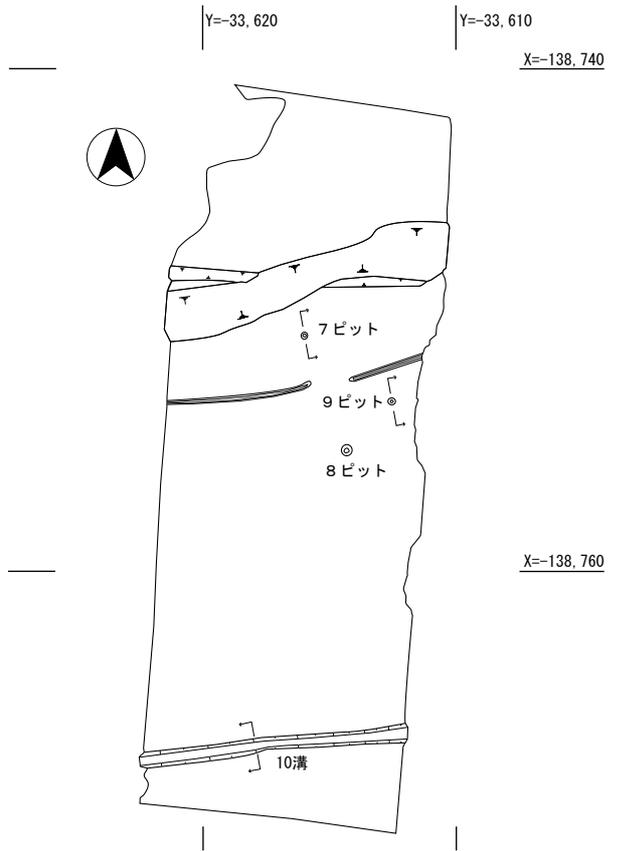
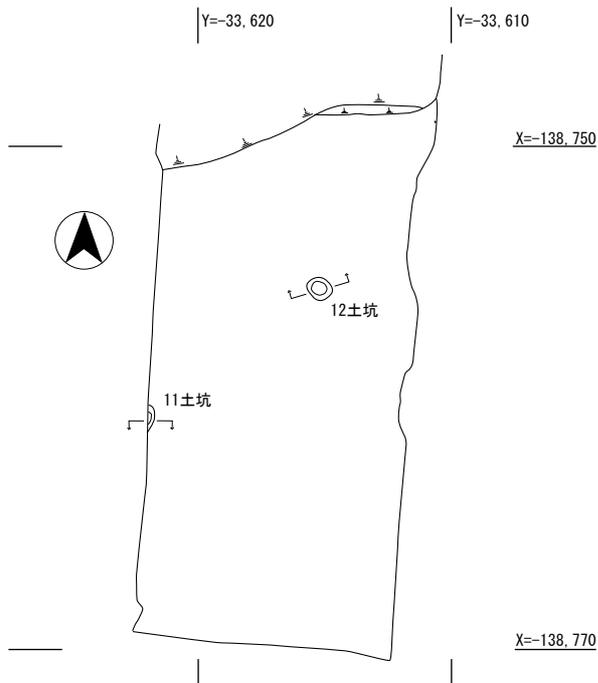
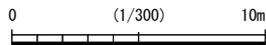


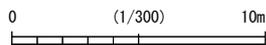
図96 第3面 平面図



第4面



第5面



砂遺跡
S N
T. P+4.5m 7ピット



①5Y5/1 灰中砂～粗砂シルト混じり

S N
T. P+4.5m 9ピット



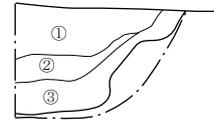
①5Y3/2 灰オリーブシルト細砂少し混じる

S N
T. P+4.5m 10溝



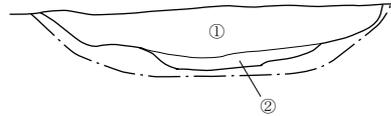
①5Y2/2 オリーブ黒細砂シルト極細砂粒～中砂粒多く入る
②5Y4/3 オリーブ褐細砂シルト中砂粒若干入る

W E
T. P+4.5m 11土坑



①10YR2/2 黒褐中砂混じりシルト中砂ブロック入る
②10YR3/2 黒褐細砂シルト中砂粒若干入る
③10YR4/1 褐灰細砂シルト中砂混じり中砂のブロック入る

E W
T. P+4.5m 12土坑



①10YR3/2 黒褐細砂シルトブロック(φ2～3cm)と中砂ブロックのブロック層
②N4/ 灰中砂(ラミナ見られず)シルトブロック入る

W E
T. P+4.5m 13土坑



①10YR3/1 黒褐極粗粒砂～細粒砂
2. 5Y4/4 オリーブ黒のブロック(φ0.5～2.0cm)を層中に均一に含む

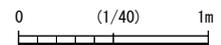


図97 第4・5面 平面図・断面図

細砂～粗砂のシルト混じりである。遺物は出土していない。

第5面

第5面では、土坑2基を検出している。12土坑の平面形は円形を呈し、直径約90cm、深さは16cmを測る。断面形は浅い皿形である。埋土は2層に分層でき、上層は直径2～3cmの黒褐細砂シルトブロックと、同じく直径2～3cmの中砂のブロックからなる。下層は灰中砂でシルトブロックが混じりでラミナは見られない。また、埋土中から遺物は出土していない。11土坑は、調査区の東端で検出したため、規模と平面形は不明であるが、平面形は円形と考えられる。深さは約30cmで、埋土は3層に分層される。上層は黒褐中砂混じりシルトで中砂のブロックが入る。中層は、黒褐細砂シルトで中砂粒が若干混じる。下層は、灰褐細砂シルトで中砂粒混じり、中砂のブロックが混じる。遺物は出土していない。

第6面

この面では浅い凹み状の13土坑と流路と落ち込みを検出している。流路内からは縄文時代晩期の鉢片片が出土している（図95-8）他、落ち込みからは同じく縄文時代晩期の深鉢が出土している（図95-9）。

5 まとめ

第1面～2面では、耕作に伴う溝が検出されており、近世～中世段階では耕作域として利用されていたと考えられる。第3面以前では、出土土器や遺構などから居住域ではないものの、人間活動の及ぶ場所であったと考えられる。調査区の東では四条畷北高校の建設に伴って、大阪府教育委員会による発掘調査が行われており、古代～縄文時代晩期の土器を含む流路が検出されている。本調査でもこの流路の延長を確認すべく各遺構面で精査を行ったが検出できなかった。従って流路は、本調査区の南側へ蛇行して西へ伸びると考えられよう。また、本調査区では特に縄文時代晩期から後期にかけての遺物が、6・7・8層から小片ではあるが多く出土している。前述の大阪府教育委員会による発掘調査では、縄文時代晩期の遺構面が確認されており、これらの層の何れかが相当するのではないかと考えられる。

第8章 むすび

当地は古代河内国の、讃良郡と茨田郡との境目付近にあたっている。主な集落は、生駒西麓から枚方丘陵西麓にかけて発達する扇状地の上に連なっていた。讃良郡にあった5つの古代郷（和名抄）は、南から下記のように現地比定されている。（日本歴史地名大系 28 平凡社 1986）

山家郷：（大東市）中垣内・野崎、（四條畷市）田原・竜間・南野東部

甲可郷：（大東市）北条、（四條畷市）南野

枚岡郷：（四條畷市）中野・岡山・砂・蔀屋

高宮郷：（寝屋川市）小路・高宮

石井郷：（寝屋川市）堀溝・木田 （4 p 図2参照）

この内、石井郷の位置はまだ疑問符つきになっているが、或いは西に広がる沖積低地への出郷であったかもしれない。最北の高宮郷の北側には茨田郡の幡多郷（同じく寝屋川市秦・太秦）が想定されている。寝屋川が平地に出てくる付近である。

太秦古墳群の地は、北へ下れば茨田郡幡多郷になり、南に下れば讃良郡枚岡郷に出てくるという丘陵のトップの小さな分水嶺にあたる。この分水嶺を南東にたどると終末期古墳の史跡・石宝殿古墳に至るが、このあたりが後の讃良・茨田両郡の境界にあたると考えられる。なお、交野郡の領域もすぐ東にあるが、境界は定かではない。

本書の讃良郡条里遺跡06-1で報告している668流路は、南東から北西に流下する小河川で、弥生時代後期にまでさかのぼることが確認された。大ざっぱにみれば縄文時代以来、扇状地を形成してきた流路の一部が、ある時期からかんがい用に利用され、その維持・管理の強化が流路幅の固定化を生み、更なる安定化のために信仰の世界まで動員され、多量の墨書人面土器の使用に至ったということではなかろうか。この流路の水源はまだ不明であるが、太秦遺跡あたりの丘陵地からの集水だけではおそらく不足で、生駒山地北端部からの集水もあったと想定すれば、讃良寺跡の南の讃良川にまで遡及していたことになる。だとすればその維持・管理の主体は郷単独ではあり得ず、郡規模で考えることになる。

太秦遺跡の各古墳の周溝や、弥生時代の大きな溝の埋土には、黒色のバンドが一般的に存在する。この黒色バンドは、火山灰系の黒ボク土を連想させるほど一見真っ黒の場合が多い。大量に含まれていた有機物の腐食によって黒色化したものと考えられる。古墳の周溝にあつてはこの黒色バンドの中から埴輪・須恵器が検出されており、「二次崩壊土」「土壌化層」などと表現されてきた。いつ、このバンドが形成されたのかは分かっていない。しかし当センターが行った周辺での調査データから可能性の一つを示すことはできる。データは下記の通りである。

- 1 太秦遺跡03-1で、奈良時代に属する1720井戸および2100井戸の埋土最上部に、黒色バンド（10YR3/1）がある。（1）
- 2 大尾遺跡03-1で、1区の7谷内に、腐植土を含む褐灰色ないし黒灰色のシルト層（中世遺物包含層）が厚く堆積し、13世紀の瓦器などを含む。（2）
- 3 高宮遺跡04-1で、奈良時代の道路状遺構の上位に黒褐色（10YR2/2）の細砂層が堆積し、これと同色・同質の層が、鎌倉時代後半とされる9溜池状遺構によって切られている。（3）
- 4 寝屋東遺跡02で、1B区の開析谷内に、「有機物を多く含んだシルトもしくは粘土層からなる黒

色化の顕著な層（④層）」があり、13世紀代の瓦器碗が出土している。（4）

5 寝屋東遺跡03で、本線地区1谷内に、中世とされるオリーブ黒色細砂のバンドがある。花粉分析によれば、集落のあった飛鳥期から中世の当該バンドにいたるまでに木本花粉の出現頻度が総体的に下がっており、とくにアカガシ亜属・シイ属といった森林樹木が減って、カヤツリグサ科・キク科ヨモギ属といった明るく開けた場所に多い草本花粉が増えている。（5）

これらによると、奈良時代以降、鎌倉時代頃までの間に、丘陵・段丘上の谷内やくぼ地の各所に黒色バンドをつくるような有機物の集積が顕著であったとすることができる。その原因はおそらく森林樹木の伐開であろう。第二京阪道路の丘陵上では平安時代以降の集落・居館などはまだ見つかっていないのだが、その活動の痕跡を上記の有機物の集積に、間接的には見ることができる。もちろん中世後半以降も樹木の伐開はあったであろうが、周辺での中世後半以降の土壌は、一般に明るい褐色系が多い。したがって古代末から中世前半にかけての時期に、伐開のピークがあったとすることはできる。

太秦古墳群では、有機物の集積が古墳の切り崩しを伴っていたことが明らかである。伐開後の土地利用方法については、単に穀類の生産だけでなく、豆・根菜類のほか、飛鳥-奈良時代の寝屋東遺跡で花粉が検出されたシソ科・サンショウ科など薬草関係についても視野に入れておきたい。

引用文献（いずれも当センター刊行）

- (1)「太秦遺跡・太秦古墳群」Ⅱ 2006年 図103
- (2)「大尾遺跡」Ⅱ 2005年 図20
- (3)「太秦遺跡・太秦古墳群大尾遺跡 高宮遺跡」 2005年 図43
- (4)「寝屋東遺跡」Ⅰ 2004年 第4図および24p
- (5)「寝屋東遺跡」Ⅱ 2005年 図7および表1

報告書抄録

ふりがな	ねやひがしいせき うずまさいせき・うずまさこふんぐん だいびいせき さらくんじょうりいせき すないせき							
書名	寝屋東遺跡 太秦遺跡・太秦古墳群 大尾遺跡 讃良郡条里遺跡 砂遺跡							
副書名	一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第176集							
編著者名	藤永正明、大樂康宏、櫻井久之、市本芳三、井上智博、佐伯博光、山根航、六辻彩香							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL:072-299-8791							
発行年月日	2008年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ねやひがし 寝屋東遺跡05-1	大阪府寝屋川市 寝屋地内	27215	24	34° 46' 17"	135° 39' 30"	2005年 5月10日～ 6月7日	528㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設
うずまさ 太秦遺跡・ 太秦古墳群05-1	大阪府寝屋川市 うずまさたかつか 太秦高塚地内	27215	3	34° 45' 25"	135° 38' 41"	2005年 4月6日～ 5月27日	900㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設
太秦遺跡・ 太秦古墳群05-3	同上	27215	3	34° 45' 31"	135° 38' 46"	2006年 1月16日～ 3月25日	1,425㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設
太秦遺跡・ 太秦古墳群06-1	同上	27215	3	34° 45' 30"	135° 38' 45"	2006年 7月5日～ 8月7日	250㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設
太秦遺跡・ 太秦古墳群06-2	同上	27215	3	34° 45' 29"	135° 38' 47"	2006年 11月14日～ 2007年 2月28日	1,100㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設
太秦遺跡・ 太秦古墳群06-3	大阪府寝屋川市 うちあけしんまち 打上新町地内	27215	3	34° 45' 27"	135° 38' 47"	2007年 3月22日～ 7月19日	335㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設
太秦遺跡・ 太秦古墳群07-1	大阪府寝屋川市 太秦高塚地内	27215	3	34° 45' 27"	135° 38' 45"	2007年 8月20日～ 9月21日	520㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設
だいび 大尾遺跡05-1	大阪府寝屋川市 高宮あさひ丘地 内	27215	59	34° 45' 18"	135° 38' 29"	2005年 7月14日～ 7月29日	226㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設
さらくんじょうり 讃良郡条里遺跡 06-1-1	大阪府寝屋川市 高宮地内	27215	36	34° 45' 11"	135° 38' 15"	2006年 10月2日～ 1月9日	626㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設
すな 砂遺跡06-1	大阪府四條畷市 すな 砂地内	27229	6	34° 44' 52"	135° 37' 58"	2006年 6月2日～ 8月9日	780㎡	一般国道1号バイパス (大阪北道路)・ 第二京阪道路建設

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寝屋東遺跡	集落	古墳～中世	掘立柱建物	須恵器・土製品	
太秦遺跡・太秦古墳群	散布地古墳	弥生～奈良	竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・方墳の周溝	弥生土器・土師器・須恵器	
大尾遺跡	集落	弥生～中世	耕作溝・落込み	弥生土器・土師器・須恵器	
砂遺跡	集落	縄文～中世	流路・溝・ピット	瓦器・土師器・須恵器・弥生土器・縄文土器	
讃良郡条里遺跡	条里	奈良～室町	流路・溝	土師器・須恵器・縄文土器・木製品・石器	※流路内より人面墨書土器が多量に出土

要 約	寝屋東遺跡	飛鳥時代の掘立柱建物が1棟、室町時代に属すると思われる区画溝を検出した。開析谷からは飛鳥時代の須恵器・土師器が出土した。
	太秦遺跡	05-1で弥生中期の周溝墓、木棺痕跡、竪穴住居、および古代の竪穴住居、掘立柱建物を検出した。05-3では弥生中期の大溝、方墳の周溝を検出した。06-1では古代の東西溝を検出。06-2では方墳の周溝、古代～中世の溝群を検出。06-3では方墳の周溝を検出した。07-1では弥生中期の大溝、竪穴住居および、方墳の周溝を検出した。
	大尾遺跡	平成14年度の調査成果から、弥生時代中期の方形周溝墓が検出されると予想されていたが、水流によって形成された小流路（ガリー）が検出されたのみであった。
	砂遺跡	流路・溝・ピットを検出した。第4面で検出した流路では、埋土内から弥生時代後期の遺物が出土する。また、他の時期に比べ縄文時代晩期～後期にかけての遺物が多く出土した。
	讃良郡条里遺跡	弥生時代後期から平安時代にかけての流路の変遷過程が明らかになった。このうち、古墳時代初頭の流路からは土師器や木製品、奈良時代後半～平安時代初頭の流路からは人面墨書土器などが出土した。また、縄文時代の層準では炭化物集中部分が確認され、その近くから前期後半の北白川下層Ⅲ式土器が出土した。

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第176集

寝屋東遺跡、太秦遺跡・太秦古墳群
大尾遺跡、讃良郡条里遺跡、砂遺跡

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2008年3月31日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社明新社
奈良市南京終町3丁目464番地